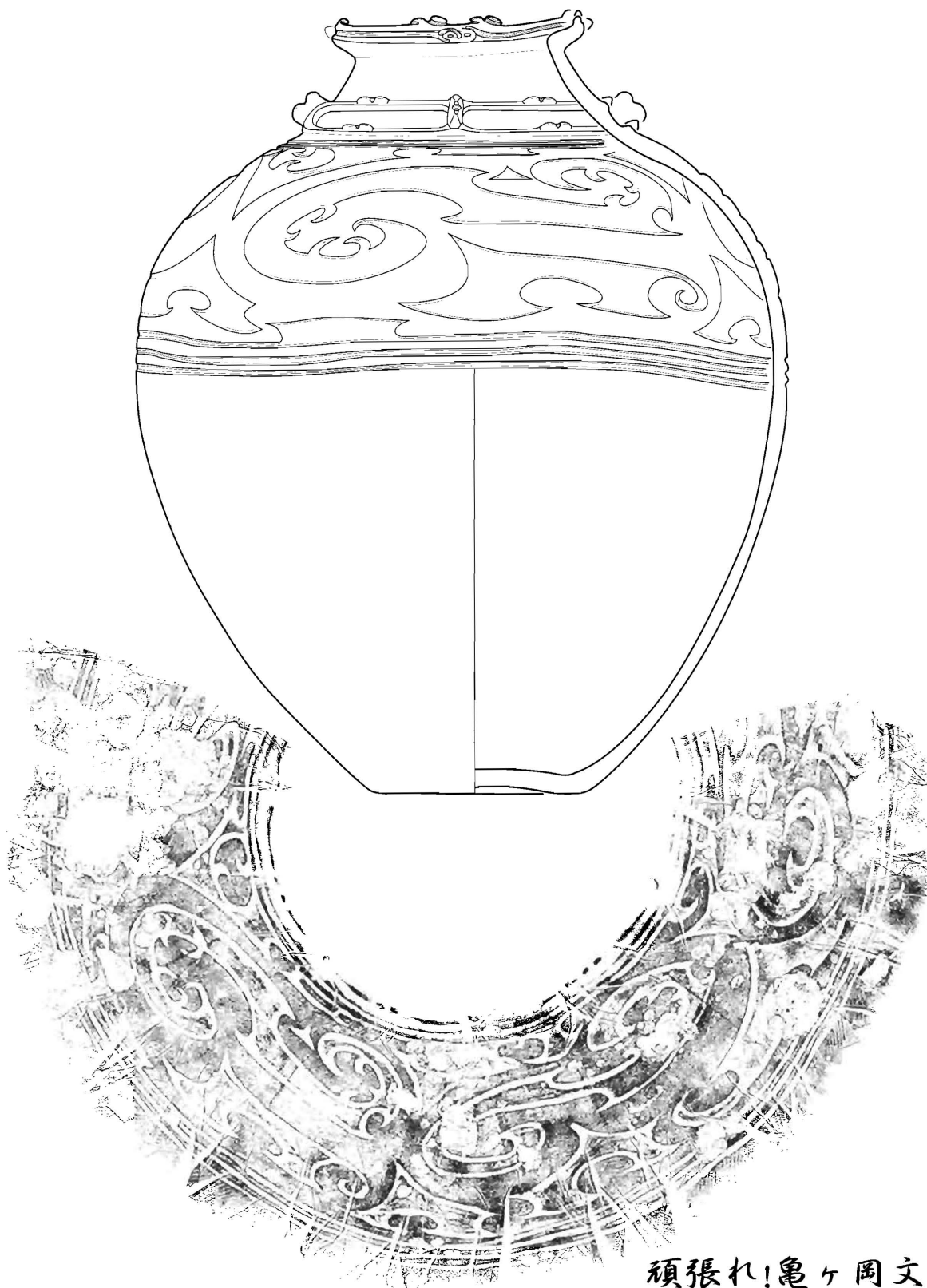


亀ヶ岡文化遺物実測図集(3)



頑張れ!亀ヶ岡文化

弘前大学人文学部附属 亀ヶ岡文化研究センター

(弘前大学人文学部 日本考古学研究室研究報告5)

亀ヶ岡文化遺物実測図集(3)

弘前大学人文学部附属 亀ヶ岡文化研究センター
(弘前大学人文学部 日本考古学研究室研究報告5)

序 文

本年度（平成18年度）は、亀ヶ岡文化研究センターが設立されて2年目の年であった。同センターの活動の一環として、8月には日本考古学ゼミナールが中心になって、青森県三戸郡三戸町杉沢遺跡を発掘調査することができた。これによって、亀ヶ岡文化研究センターの研究資料と良好な展示資料を収集することができた。考古学実習として参加した学生は、発掘調査が初体験のものばかりで、土器や石器が出土するたびに喜びの声をあげていた。この資料は、現在、発掘に参加した2年生・3年生が中心になって、整理・復元・図化を進めており、報告書の刊行は来年度を目標としている。

初夏（6月17日）には、青森県考古学会を弘前大学人文学部305講義室で開催し、亀ヶ岡文化研究センターの展示室を公開した。参加者は約100名で、研究発表には、弘前大学大学院人文社会科学研究所の学生も参加した。秋（10月10日～11月10日）には、亀ヶ岡文化研究センターの展示室で、第2回目のミニ特別展「森吉山麓の亀ヶ岡文化」を行い、会期中に、野村崇先生の講演会『北海道の亀ヶ岡文化』をおこなった。ミニ特別展「森吉山麓の亀ヶ岡文化」の入場者は約1,300人であった。

こうした中で、日本考古学ゼミナールの目標である「亀ヶ岡文化の遺物を一つでも余計に拓本や実測図をとって公開する」という地道な研究活動も継続的に行って来た。これらの実測図・拓本図は、考古学ゼミナールの学生が中心になって作成したものである。本書はその成果で、日本考古学研究室研究報告としては第5冊目にあたる。収録した亀ヶ岡文化の遺物は、青森県十和田市明戸遺跡・外ヶ浜町宇鉄遺跡・階上町滝端遺跡の土器が中心であるが、その他のものとして秋田県北秋田市桂の沢遺跡の遮光器土偶などを含めた。

とくに明戸遺跡の土器群の実測図作成については、平成12年度以来、考古学ゼミナールの学生が継続的に取り組んできたが、まだ整理は完了していない。しかし、実測図が250を越すにいたったので、十和田市教育委員会の大久保学氏の協力を得て、公表することにした。

本書『亀ヶ岡文化遺物実測図集(3)』を作成するにあたって、ご指導・ご助言をいただいた関係機関・個人の方々は、次の通りである（敬称略、順不同）。記して感謝の意を表したい。

村越 潔・関根達人、藤原二郎、瀬川 滋、青森県立郷土館（福田友之・相馬信吉・斎藤 岳）、青森県埋蔵文化財調査センター（工藤 大）、秋田県埋蔵文化財センター北調査課（小林 克・武藤祐浩・山田祐子）、北秋田市教育委員会（木村正彦・細田昌史）、十和田市教育委員会（山崎 武・大久保学）・十和田市郷土館、外ヶ浜町育委員会（駒田 透）、東北大学文学部考古学研究室（須藤 隆）、階上町教育委員会（森 淳）、野辺地町立歴史民俗資料館（駒井智弘）、宮城県教育委員会（菊地逸夫）、宮城県多賀城跡調査研究所（小井川和夫）、東北歴史博物館（丹羽 茂）、弘前市教育委員会（宮川慎一郎、佐藤一憲）。

平成19年2月

弘前大学 人文学部 日本考古学研究室

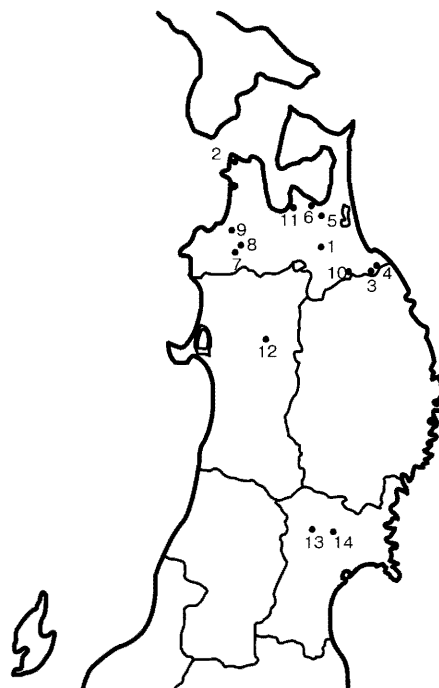
弘前大学人文学部附属 亀ヶ岡文化研究センター

藤沼 邦彦

凡 例

1. 弘前大学人文学部日本考古学ゼミナールでは、弘前大学が亀ヶ岡文化の遺跡や遺物に恵まれている地域に立地するという立場を利用して、亀ヶ岡文化の研究を大きな課題として取り上げている。したがって、一昨年秋に設立した人文学部附属亀ヶ岡文化研究センターとも連携しながら活動をしている。本書は、日本考古学ゼミナールで作成した実測図・拓本・文様展開模式図の集成であるが、亀ヶ岡文化研究センターの活動の成果でもある。
2. 本書の実測図の作成には、弘前大学大学院人文社会科学研究科学生（横山寛剛・秋山真吾・澤田恭平）と日本考古学ゼミナールの4年生（磯前和己・山田敏子）が中心となり、それに3年生（赤坂朋美・佐藤信人・須藤真由美・槻木孝則・丸川優多・宮本明日香）、2年生（五十嵐 愛・大和田麻未・櫻田智恵・佐藤夏子・立花晃一・富浦由佳・中村祐宇樹・長谷川 礼・米谷圭太・若松 徹）が参加した。また人文社会科学研究科修了生（蔦川貴祥・小向 良）、学部卒業生（久末恵輔・木下梨恵）が作成した図面も含まれている。藤沼も拓本や文様展開図の作成にかかわった。編集は藤沼邦彦・秋山真吾で行い、関根達人先生の指導を得た。
3. 遺物の実測図の縮尺は、3分の1を原則としたが、東北大学文学部で所蔵する石刀の拓本・実測図は2分の1で示した。
4. 亀ヶ岡式土器の文様について、その構成・単位・描く手順などを考えるために、文様の展開拓本や展開模式図をできるだけ作成した。この拓本や模式図の縮尺は不同である。
5. 土器の実測図を作成するには、(株)スカイサーベイのマイブンスコープのⅠ型とⅡ型を活用した。
6. 本書の刊行に際し、平成18年度の弘前大学人文学部長の裁量経費の大部分と弘前大学学長重点研究「亀ヶ岡文化の研究とそれに基づく展示活動（ミニ博物館活動）の運営・研究」費の一部をあてた。

- 1 明戸遺跡
- 2 宇鉄遺跡
- 3 滝端遺跡
- 4 寺下遺跡
- 5 千曳遺跡
- 6 陣場川原遺跡
- 7 薬師遺跡
- 8 湯ノ沢遺跡
- 9 大曲Ⅲ号遺跡
- 10 青鹿長根遺跡
- 11 宮田遺跡
- 12 桂の沢遺跡
- 13 天王寺遺跡
- 14 北小松・西岩田遺跡



目 次

I. 青森県十和田市明戸遺跡出土の亀ヶ岡式土器について……………	1 頁
本文	
土器の実測図・拓本・文様模式図など	
土器の観察表	
II. 青森県外ヶ浜町宇鉄遺跡出土の亀ヶ岡式土器と石刀について……………	117 頁
本文	
土器・石刀の実測図・拓本・文様模式図など	
土器・石刀の観察表	
III. 青森県階上町滝端遺跡・寺下遺跡出土の亀ヶ岡式土器について……………	139 頁
本文	
土器の実測図・拓本・文様模式図など	
土器の観察表	
IV. 東北地方各地の亀ヶ岡文化の遺物について……………	154 頁
① 青森県上北郡東北町千曳遺跡出土の台付鉢・壺について	
② 青森県上北郡野辺地町陣馬川原遺跡出土の注口について	
③ 青森県弘前市薬師遺跡（薬師Ⅰ号・Ⅱ号）出土の浅鉢・壺・注口について	
④ 青森県弘前市湯ノ沢遺跡出土の鉢・浅鉢について	
⑤ 青森県鯿ヶ沢町大曲Ⅲ号遺跡出土の壺について	
⑥ 青森県三戸町青鹿長根遺跡出土の壺について	
⑦ 青森県青森市宮田遺跡出土の広口壺について	
⑧ 秋田県北秋田市桂の沢遺跡出土の大型遮光器土偶について	
⑨ 宮城県大崎市天王寺遺跡出土の徳利形壺について	
⑩ 宮城県大崎市北小松・西岩田遺跡出土の脚付鉢について	

I．青森県十和田市明戸遺跡出土の 亀ヶ岡式土器について

藤沼邦彦・小向 良・久末恵輔・澤田恭平・大久保学

I. 青森県十和田市明戸遺跡出土の亀ヶ岡式土器について

藤沼邦彦・小向 良・久末恵輔・澤田恭平・大久保学

○ はじめに

明戸遺跡は、奥入瀬川水系に位置する縄文時代前期～晩期の大きな遺跡である。1982・1983年の十和田市教育委員会の発掘調査によって、晩期の土坑墓や遺物包含層が検出され、大量の遺物が出土した。主要な遺構や遺物は、十和田市教育委員会によって報告されたが、大部分の土器は未整理のまま十和田市郷土館に保管され、一部は展示に利用されていた。出土品の内容は、青森県教育委員会の福田友之氏から知らされていたので、平成12年に初めてゼミを開講した弘前大学人文学部日本考古学研究室では、明戸遺跡出土の亀ヶ岡式土器を整理・研究することを課題の一つとして取り上げた。しかし、晩期の遺物は多数あり、誕生したばかりのゼミナールの教員と学生にとって、大きな壁のような存在であった。平成12年以来今日まで、多くの学生（小向良・久末恵輔・澤田恭平・磯前和己など）が、未発表資料の学術資料化に取り組んできたが、まだ全体像を把握していない。しかし、250点をこす土器について実測図・拓本図・文様展開模式図が作成されたので、十和田市教育委員会の大久保学氏の協力を得て、公表することにした。まとめるには、澤田と藤沼が中心となったが、秋山真吾・磯前和己などの多大な協力を得た。十和田市教育委員会の大久保学氏には、遺跡の状況などを担当してもらった。なお、実測図化のまだ終わっていない遺物も少量残っているので、これからも澤田を中心に作業を進め、土器の器種の組成比などを明らかにし、晩期土器の全体像の把握につとめるつもりである。

○ 明戸遺跡の状況（位置・立地など）

明戸遺跡は、青森県十和田市大字滝沢字明戸に所在し、高屋集落とよばれる集落の東に位置する縄文時代前期から晩期にかけての大きな遺跡である。町の中心部である市役所からはほぼ真南9.6kmの所にあり、奥入瀬川の支流後藤川と大沢と通称される小川が合流する間にはさまれた標高約100mの舌状台地上に立地する。

明戸遺跡の小字は明戸であるが、一帯の集落は高屋と呼ばれている。明戸という小字名はあまり知られていない。そのため、明戸遺跡はかつて集落名をとって「高屋遺跡」とよばれていた。青森県立郷土館の大高コレクションに含まれる高屋遺跡出土品や『日本原始美術1－縄文土器』にある高屋遺跡出土の大洞C1式の大型壺などは現在の明戸遺跡の出土品であろう。その後、小川（大沢）をはさんだ明戸遺跡の西側に、縄文土器を出す地点が確認され、小字が高屋であることから「高屋遺跡」と名付けられ、これまでの「高屋遺跡＝明戸遺跡」と混乱するようになった。平成10年の『青森県遺跡地図』では、明戸遺跡（大字滝沢字明戸）と高屋遺跡（大字滝沢字高屋）として別々の遺跡と掲載しているが、立地から考えて一つの遺跡としてまとめることもできそうである。

平成17年に遺跡周辺の分布調査をしたところ、開田工事された部分では遺物を見つけることができなかったが、畑地には広い範囲に縄文時代前期～晩期の遺物が散布していた。高屋集落の共同墓地では、土取りの断面に竪穴住居跡やフラスコ形貯蔵穴などの遺構が露出し、円筒下層式土器の破片が散布していた。地形図（9頁）では、明戸遺跡と高屋遺跡の範囲を示し、晩期の土器が濃密に散布する地点を明示した。

○ 明戸遺跡の調査の歴史

明戸遺跡が、遺跡として確認されたのは、1966年のことで、開田工事の際に数個の完形土器が出土したことが発端であるという。しかし、1964年発行の『日本原始美術1－縄文土器』に、高屋遺跡（明

戸遺跡のこと）出土の大型壺が掲載されているので、これ以前から出土品があったことが分かる（この大型壺については後述する）。また、出土した年代は不明であるが、青森県立郷土館に寄贈された「大高（風韻堂）コレクション」にも高屋遺跡（明戸遺跡のこと）出土品として、鯨歯形の石製垂飾品と後期の注口土器が含まれている（青森県立郷土館1996）。

1966年の開田工事の際に出土した数個の完形土器が、いつの時代のものであるかは不明であるが、その後の調査から考えて、縄文土器であったことは間違いなかろう。このときに発掘調査がなされたという。その後、遺跡の一部で、再び畑地の削平・整地が計画されたため、十和田市教育委員会は、1982年に予備調査を行い、1983年に本調査を実施した。

1)1966年の発掘調査

1966年に行われた開田工事の際に数個の完全な土器が出土したことを端緒として行われた発掘調査である。この調査によって、縄文時代早期～晩期の土器や石器、獣骨が出土し、竪穴住居跡も発見されたという（十和田市教育委員会1984）。早期のものは土器片1点である。しかし、発掘報告書は刊行されていないため、調査の内容は不明である。また調査後おこなわれた工事で、遺跡はかなり削平され、原地形はかなり変わったようである（青森県教育庁文化課1983）。

2)1982年の発掘調査

この調査地点は、1966年の開田工事から除外された畑地で、1966年の発掘調査区の西約20mにあたる。この地点を含めた畑地の削平・整地が計画されたため、十和田市教育委員会（調査担当、青森県教育庁文化課）が本調査に先立ち、予備調査を行ったもので、調査概報が刊行されている（青森県教育庁文化課1983。以下『調査概報』と表現）。以下は『調査概報』によって記述した。

遺構は縄文時代前期の土坑2基が検出された。また、前期・中期・晩期の遺物が多数出土したが、後期のものは少量であった。

晩期の土器は、すべての型式（大洞B式～大洞A'式）が出土したが、中心は大洞C1式と大洞C2式である。晩期のものとされる特徴的な石製品として、異形石器・独鈷石・岩偶・岩版・石刀・石剣・石棒が、土製品として遮光器土偶・動物形土製品（中空土製品）・土版・耳飾り・土器片円盤がある。そのほか、骨角製品（尖頭器の破片）や藍胎漆器らしい破片も晩期のものとされている。

3)1983年の発掘調査

十和田市教育委員会（調査担当、青森県教育委員会の福田友之）が行った本調査は、前年の予備調査区とその西側、あわせて450㎡を発掘対象面積としたものである。十和田市教育委員会から『明戸遺跡発掘調査報告書』（十和田市教育委員会1984。以下『調査報告書』と表現）が刊行されている。以下は『調査報告書』に基づく記述である。

調査区におけるグリット配置は9頁の通りである。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡15軒（前期3軒、中期11軒、時期不明1軒）、前期・中期・晩期の貯蔵穴などの土坑27基以上（前期18基、中期4基、晩期3基）、土坑墓24基以上（中期2基、晩期20基、時期不明2基）、埋甕炉1基（中期）、遺物包含層が検出された。土坑墓では、人骨やベンガラ、装身具などが検出されたものがある。また、遺物包含層・貯蔵穴・土坑墓などから、前期から晩期にかけての遺物が多数出土したが、後期のものは比較的少ない。

晩期の土器は、主として遺物包含層から出土した。大洞BC式から大洞A'式までであるが、量的に多いのは、大洞C1式と大洞C2式で、復元可能なものとほぼ完形のものをあわせると約150点あるという。しかし、『調査報告書』に載っている土器の実測図は23点のみである。晩期のものとされる特徴的な石製品として、岩版・刻線礫・板状石製品・石棒・石剣・石刀・軽石製品・球状石製品・石製装身具（小玉・十字形垂飾品）がある。また、晩期のものとされる特徴的な土製品として、袖珍土器（超小型土器）・土版・動物形土製品・匙形土製品・土製笛・土器片円盤・円盤状土製品・球状土製品・耳飾り・

土製玉などがある。

○ 明戸遺跡の基本層位

1983年の本調査における基本層位は、報告書によると第Ⅰ層～第Ⅸ層で、層は9枚であるが、第Ⅲ層は3枚に、第Ⅳ層は2枚に細分されるという。遺物包含層は、表土の第Ⅰ層を除くと、第Ⅱ層（晩期）・第Ⅲ層（晩期）・第Ⅳ層（晩期～中期）・第Ⅴ層（中期中～前期末）・第Ⅵ層上面（前期末）の5枚である。包含層の第Ⅱ層～第Ⅳ層から出土した土器の大部分は晩期の土器で、大洞 C1式と大洞 C2式が中心である。第Ⅵ層は中掘浮石層で、上面から前期末の土器が出土したが、それ以下は無遺物層である。晩期の土器群に層位による年代差（型式）があるのかどうかは、報告書の記載から読み取ることはできない。私たちゼミナールでの調査でも、まだ土器の全体像を把握できない状態にあるが、晩期の土器の中心は大洞 C1式～大洞 C2式である。実測図には土器の注記を参考のため添えた（注記がないものもある）。前期と中期の遺物は遺構から出土したものが多し。

○ 明戸遺跡出土の亀ヶ岡式土器の紹介

今回紹介する土器は冒頭でも述べた様に、1982・1983年に十和田市教育委員会が発掘調査し、十和田市郷土館で保管されていたものである。しかし、調査の残りがあり、まだ全体像を把握するに至っていないので、器種の組成などは詳しく検討することができない状態である。したがって以下に述べる器種・器形・文様についての分析は、実測図を作成した土器に限定されていることを述べておく。

・器種・器形分類

器種の分類は実測図を取ったもの256点に限定した。深鉢・鉢・浅鉢・皿・壺・注口・香炉形などである。注口と香炉形以外のものについては、頸部最小径・体部最大径、器高・口径を用いて分類した。破損によって値を計測できない土器に関しては、土器の断面や傾き、口縁部の形態といった法量以外の属性から、分類を行った。

注口は、体部に注口部が付くものである。

香炉形は、体部上半に透かし文様があるものである。

壺は、頸部（最小）径と体部最大径の比が、0.75以下となるものである。

深鉢は、器高と口径の比が、1.0以上となるものである。

鉢は、器高と口径の比が、0.5以上1.0未満となるものである。

浅鉢は、器高と口径の比が、0.3以上0.5未満となるものである。

皿は、器高と口径の比が、0.3未満となるものである。

以下に各器種の器形分類について述べる（10頁）。

①. 深鉢

深鉢は、口縁部の屈曲の有無・装飾の有無、台部の有無から以下の4つに大別した。

Ⅰ類（図1～6）

口縁部が屈曲し、沈線が施されるもの。頸部が形成され、無文のものが多いが、中には頸部に文様が施されるものもある（図1）。

Ⅱ類（図7・8）

口縁部が屈曲し、沈線が施されないもの。

Ⅲ類（図9～20）

口縁部が屈曲しないもの。中には口縁部内面が肥厚するものがある（図14）。

Ⅳ類（図21～23）

口縁部が屈曲し、沈線が施されるもの。台部を伴う。他の類型よりも装飾性が高く、頸部直下に突起が配置される。中には文様が施されるものもあり、台付鉢Ⅰ・Ⅱ類と似た特徴を持つ（図21・22）。

②. 鉢

鉢は、口縁部の屈曲の有無、頸部の幅、台部の有無によって以下の6つに大別した。

Ⅰ類（図24～75）

口縁部が屈曲し、やや幅が広い頸部を形成するもの。台部を伴う。頸部直下に突起が配置されるもの、体部に文様が施されるものが多い。台付浅鉢に似た特徴を持つものもある（図73・74）。

Ⅱ類（図76～99）

口縁部が屈曲し、幅が狭い頸部を形成するもの。台部を伴う。頸部直下に突起が配置されるものが多い。

Ⅲ類（図100）

口縁部が屈曲せず、丸く立ち上がるもの。台部を伴う。

Ⅳ類（図101～105）

口縁部が屈曲し、幅が広い頸部を形成するもの。

Ⅴ類（図106～129）

口縁部が屈曲し、幅が狭い頸部を形成するもの。

Ⅵ類（図130～144）

口縁部が屈曲せず、立ち上がるもの。口縁部に文様が施されるものがある（図134・135・143・144）。

③. 浅鉢

浅鉢は、口縁部の屈曲の有無や台部の有無によって以下の4つに大別した。

Ⅰ類（図145～161）

口縁部が屈曲せず、やや内湾気味になるもの。丸底気味で、底部に沈線が丸く施されるものが多い。口縁部が平縁で周囲に刻目がめぐるものが多い。

Ⅱ類（図162～165）

口縁部が屈曲せず、やや直線気味に外に開くもの。平底で、口縁部に突起や装飾的な彫り込みが施される。

Ⅲ類（図166～168）

口縁部が屈曲し、幅の狭い頸部を持つもの。

Ⅳ類（図98・99・169）

口縁部が屈曲し、幅の広い頸部を持つもの。台部を伴う。

なお、図98・99は、浅鉢（器高と口径の比が0.3以上0.5未満）であるが、内面・外面に炭化物が付着し、台部が二次過熱により赤変しているため、同じ特徴をもつ鉢のところに掲載した。

④. 皿

皿は、口縁部の屈曲の有無、台部の有無によって以下の3つに大別した。

Ⅰ類（図170～195）

口縁部が屈曲しないもの。体部に文様が施されるものがほとんどである。

Ⅱ類（図196）

口縁部が屈曲するもの。

Ⅲ類（図197～201）

台部を伴うもの。口縁部が屈曲するものと屈曲しないものがある。中には台部に透かしや文様が施されるものもある（図197・198）。浅鉢Ⅳ類に似た特徴を持つ。

⑤. 壺

壺は頸部や頸部以下の形態によって6つに大別した。図240・241は頸部が欠損しているが、体部の形からⅡ類とした。

Ⅰ類（図202～206・209）

頸部がハの字形になり、肩が張るもの。胴長となるものが多い。

Ⅱ類（図207・208・210～219・240・241）

頸部がハの字形になり、体部最大径が体部の中央にきて丸みを持つもの。

Ⅲ類（図220～223）

頸部から口縁部にかけて直立気味になり、肩が張るもの。

Ⅳ類（図224～235）

頸部が逆ハの字形になり、体部最大径が体部の中央にきて丸みを持つもの。

Ⅴ類（図236～239）

頸部が逆ハの字形になり、体部が下膨れになるもの。胴長となる。中には徳利形のものもある（図237・238）。

Ⅵ類（図242～244）

頸部が逆ハの字形になり、広口のもの。頸部の幅が短いものと長いものがある。

⑥. 注口

注口は口縁部が残存しているものが少ないため、体部の形態によって以下の3つに大別した。

Ⅰ類（図245～251）

体部が算盤珠形になるもの。

Ⅱ類（図252）

体部上半が直立気味になるもの。

Ⅲ類（図253・254）

体部が球状になるもの。

⑦. 香炉形

香炉形は、実測図化できたものが少なかったため、分類を行わなかった（図255・256）。香炉形は台部を伴い、隆帯部によって体部が上半・下半に区分される。体部上半には透かし文様が施され、下半には雲形文が施される。

○ 文様について（区画文・配置文の分類図を参照）

施文されている土器に関しては、文様の構成・単位・描く手順を考察するために、拓本図を作成し、それを基に可能な限り展開模式図を作成した。

分類は実測図化したもののうち、主に体部に施される雲形文を対象とした。分類は描く手順を示すため、区画文・配置文を基準に行った。区画文・配置文の定義及び分類基準は「亀ヶ岡式土器の文

様の描き方」(藤沼1989)、『弘前大学人文学部 日本考古学研究室研究報告1～4』(藤沼ほか2004・2005・2006)に則って行った。区画文・配置文は沈線で囲まれた磨消部が基本となるが、沈線あるいは彫り込み部として表現されるものもある。

台付皿の体部文様(図196)や、注口の体部下半の文様(図245～252)といった上下の沈線で文様帯が形成されていないものは扱わなかった。

今回実測図化した土器の文様は、いわゆる雲形文が文様の主体であるが、中には三叉文(図74)や羊歯状文(図105・135・143)、工字文(図196・223)、変形工字文(図144)も見られる。

〔区画文〕

区画文は上・下線に接続して文様帯を区画し、単位文様部を形成するものである。モチーフの違いによってⅠ～Ⅳに大別した。モチーフが点対称となるものが多い。

区画文Ⅰ：点対称の弧線の組み合わせによって構成されるもの。

区画文Ⅱ：横C字状のモチーフが点対称に組み合い、付加的な文様が施されるもの。

区画文Ⅲ：横S字状のモチーフに、付加的な文様が施されるもの。点対称的である。

区画文Ⅳ：弧線が点対称に組み合い、付加的な文様が施され、連続するもの。いわゆる羊歯状文である。

〔配置文〕

配置文は、文様帯内部に埋め込まれるか、あるいは文様帯の上・下線のいずれか一方に接続し、連続文様部を形成するものである。モチーフの違いによりⅠ～Ⅵに大別した。

配置文Ⅰ：区画文Ⅰに類似するモチーフによって構成されるもの。

配置文Ⅱ：四角形状のモチーフが文様帯の上・下線のいずれか一方に接続するもの。

配置文Ⅲ：横C字状のモチーフによって構成されるもの。

配置文Ⅳ：横S字状のモチーフによって構成されるもの。

配置文Ⅴ：三叉文が2個1対となって構成されるもの。

配置文Ⅵ：一状の文様が連続して施されるもの。点対称となるものもある。いわゆる工字文や変形工字文を含む。

その他

上の分類に該当しないものをその他とする。

○ 炭化物が付着している土器、赤彩されている土器

炭化物が付着している土器と、赤彩されている土器を視覚的にとらえるために、実測図を利用してその部分を示した(第88～94図)。図の青色は炭化物が付着している部分、赤色は赤彩の部分それぞれ示している。土器を用いて煮沸を行うと底部・台部は二次加熱によって再酸化し赤色に変化するが、その表現は示していない。炭化物痕跡が残るものは、付着していたものとして扱った。

炭化物は、ほとんどの深鉢・鉢の内面・外面に付着している。付着範囲は土器の法量を問わず口縁部から体部にかけて多くみられるが、底部付近には内面・外面ともに付着していないものが多い。中には、内面に2段にわたって帯状に付着しているものもみられる。これは、同じ土器を複数回煮沸に使用した可能性や、煮沸時に内容物の水分が蒸発し、水分量が変化したことが考えられる。

赤彩されるものの多くは、浅鉢・皿・壺・注口にみられる。とくに口縁部が装飾的であるもの、文様が施されるもの、器面がよく磨かれるものに多い。

この結果は外ヶ浜町今津遺跡(工藤2002、藤沼・関根ほか2005)や三沢市野口貝塚(秋山・澤田ほか2006)においても同様である。

なお、例外として鉢に赤彩がされているもの（図74・142）、壺に炭化物が付着しているもの（図220）がある。

○ まとめ

実測図化したものからみると、明戸遺跡出土土器の時期は晩期中葉である大洞 C1式～C2式を主体としていることが分かる。このことは1983年の報告書にも触れられており、器種・器形・文様から判断しても相違ないと考えられる。

今回、1982・1983年出土の明戸遺跡の土器に関して、そのすべてを調査することができなかったので、土器の組成比を数字で示すことは、次回に期したい。

すべての土器を調査・分析し、個体数の計上や土器組成を明らかにする必要がある。その上で、層位の検討を行うとともに、明戸遺跡出土土器の時期やセット関係をとらえることを今後の課題としたい。

○ 附・明戸遺跡出土の大型壺について（第86・87図）

『日本原始美術 1』（山内1964）に、十和田市大字滝沢字高屋遺跡出土として紹介された大型の壺である。大洞 C1式の大型壺として「口頸部上半部の外反した部分も寸がつまり、折返し口縁のようになり、口頸部下半も短く、胴部上半の延長のように内反している。」と簡単な説明文が付されている。高屋遺跡とあるが、『青森県遺跡地図』にある高屋遺跡ではなく、明戸遺跡（かつて高屋遺跡とよばれた）のことをさす。亀ヶ岡式土器における大型壺については、中村五郎氏の問題提起もあり、その存在が注目されている。この土器は、ほぼ完全な形を保っているが、土圧でひび割れしている部分があり、また表面に剥離した部分や穴が空いている部分が見られる。底部付近には黒ずんだ部分もある。体部上半の幅の広い文様帯に、横にのびたZ字状の配置文を3個配し、充填文を加えて、連続的な雲形文を構成している。典型的な大洞 C1式土器の壺といって良いであろう。すでにカラーの側面写真・文様展開写真を公表している（藤沼・小川2006）ので参考にしてほしい。

○ 明戸遺跡に関する主な文献・参考文献

1964年、山内清男『日本原始美術 1－縄文式土器』、講談社

1976年、十和田市史編纂委員会『十和田市史』、十和田市

1983年、青森県教育庁文化課『明戸遺跡発掘調査概報（昭和57年度）』、十和田市埋蔵文化財発掘調査報告書 2

1984年、十和田市教育委員会『明戸遺跡発掘調査報告書（昭和58年度）』、十和田市埋蔵文化財発掘調査報告書 3

1989年、藤沼邦彦「亀ヶ岡式土器の文様の描き方」『考古学論叢』Ⅱ

1990年、青森県埋蔵文化財調査センター『北の誇り・亀ヶ岡文化 縄文時代晩期編』、図説「ふるさと青森の歴史」シリーズ③、青森県文化財保護協会

1996年、青森県県立郷土館『縄文の玉手箱－風韻堂コレクション図録』

2002年、工藤竹久「縄文後期・晩期の煮炊き用小型土器」『海と考古学とロマン』、同刊行会事務局

2005年、藤沼邦彦・関根達人ほか『青森県東津軽郡平館村今津遺跡発掘調査報告書』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告 2

2006年、藤沼邦彦・小川忠博『ミニ特別展「亀ヶ岡文化の世界」の図録』、弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告 3、弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター

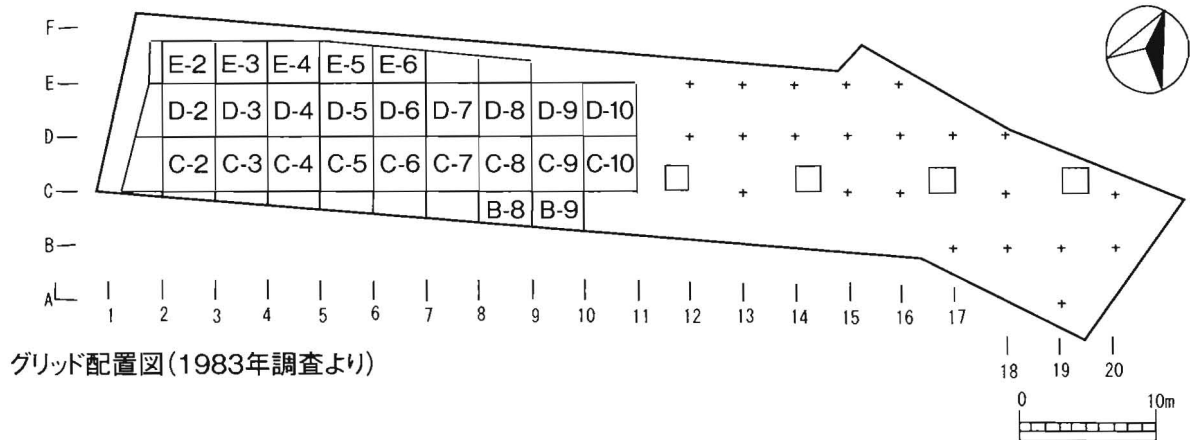
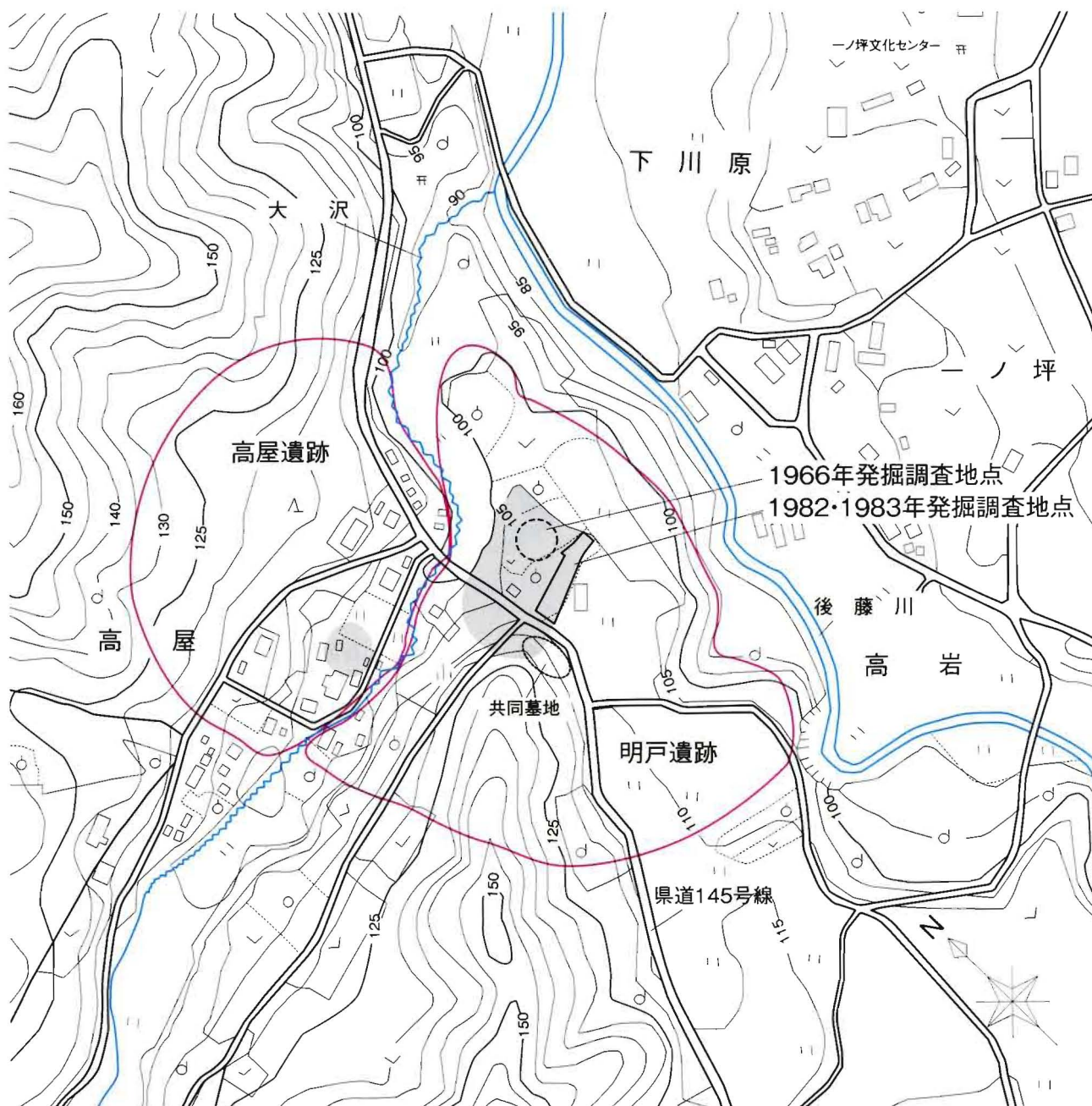
2006年、秋山真吾・澤田恭平ほか「三沢市野口貝塚の縄文晩期の土器（野口コレクション）について」『亀ヶ岡文化遺物実測図集(2)』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告 4



写真) 明戸遺跡周辺の航空写真 (1 : 5000)

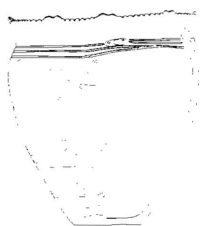
I	黒色土	表土
II	黒色土	晩期の土器出土
III	Ⅲa 黒褐色土 Ⅲb 暗褐色土 Ⅲc 暗褐色土	晩期の土器出土
IV	Ⅳa 暗褐色土 Ⅳb 暗褐色土	晩期～中期の土器出土
V	暗褐色土	中期初～前期末の土器出土 (前期末の土器出土)
VI	黄褐色土	中層浮石層
VII	黒褐色土	無遺物層
VIII	褐色土	無遺物層
IX	にぶい黄褐色土	無遺物層

左図) 遺跡基本層位・土色・出土土器



①. 深鉢分類模式図

I 類



II 類



III 類



IV 類



②. 鉢分類模式図

I 類



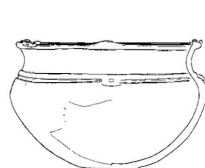
II 類



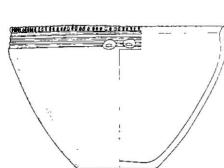
III 類



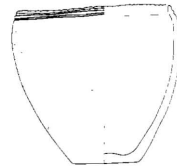
IV 類



V 類



VI 類

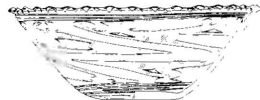


③. 浅鉢分類模式図

I 類



II 類



III 類



IV 類



④. 皿分類模式図

I 類



II 類



III 類

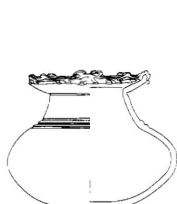


⑤. 壺分類模式図

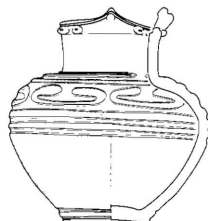
I 類



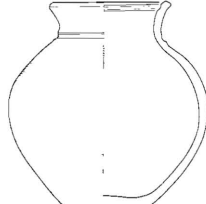
II 類



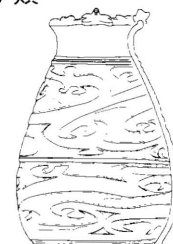
III 類



IV 類



V 類

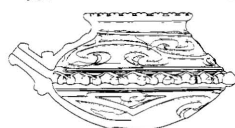


VI 類



⑥. 注口土器分類模式図

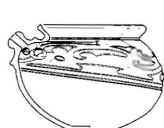
I 類



II 類




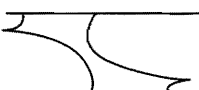

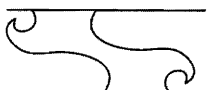

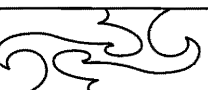
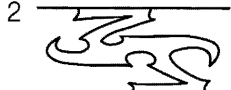
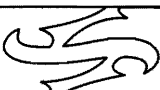
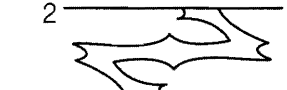
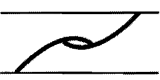


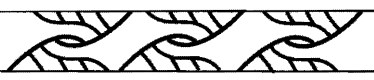
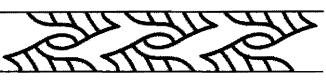



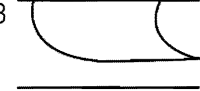
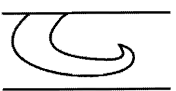
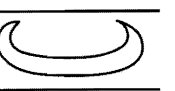



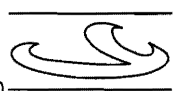


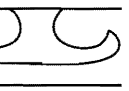

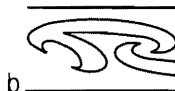

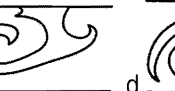


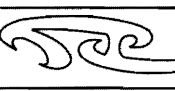

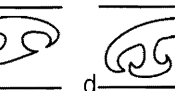

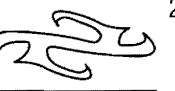








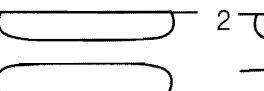


III 類

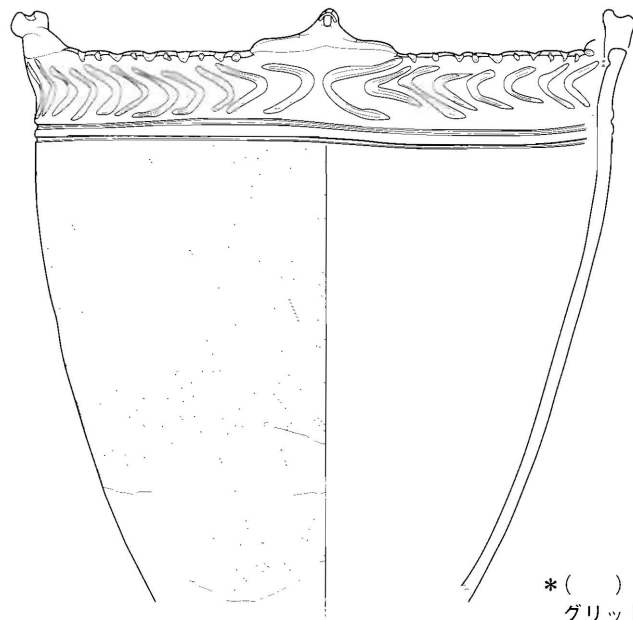


⑦. 香炉形



各器種の器形分類模式図

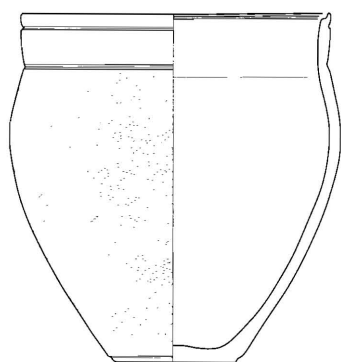
区画文・配置文の分類図	
区画文I	1  2  3  4  5 
区画文II	1  2 
区画文III	1  2 
区画文IV (羊歯状文)	 → 1  2   
配置文I	
配置文II	1  2  3 
配置文III	1  2  3  4  5      a  b  c  d  e  2個1対のモチーフが接続しないもの。 6 a  b  c  d  2個1対のモチーフが接続するもの。 7 a  b  c  d 
配置文IV	1 a  b  2  3  4 
配置文V (三叉文)	
配置文VI (工字文・変形工字文)	
その他	1  2 



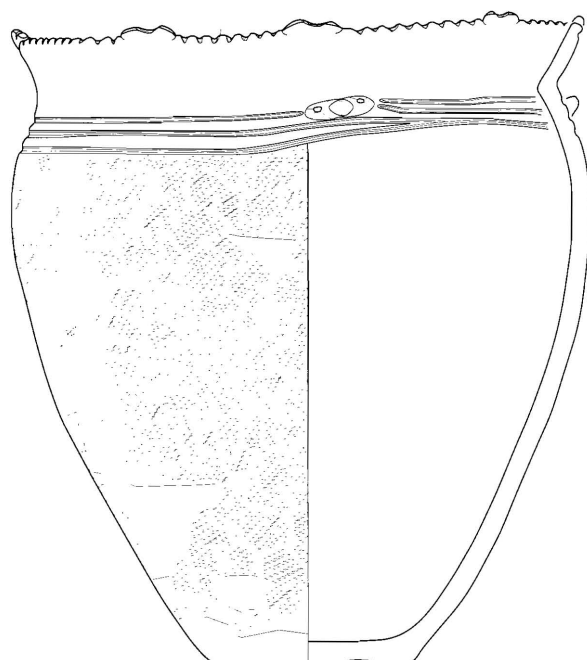
1. 拓本

1 (未注記・未注記・未注記)

* () の記述は、調査年・出土
グリッド・出土層位の順で示す。
欠損によって土器に注記のないも
の、注記後その部分が欠損してし
まったものは未注記とした。



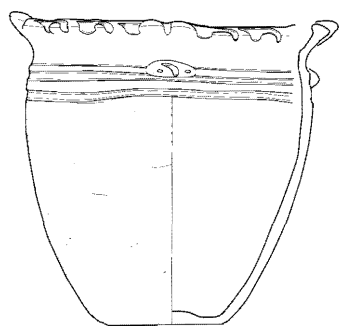
2 ('83・未注記・未注記)



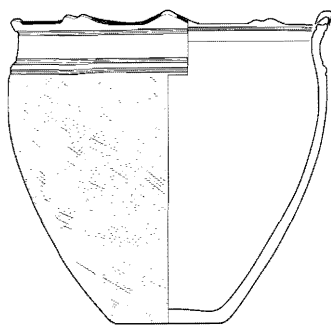
3 ('82・C-5・Ⅱ)

0 10cm

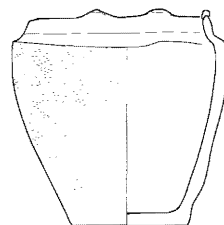
第1図 明戸遺跡 深鉢Ⅰ類 (1～3)



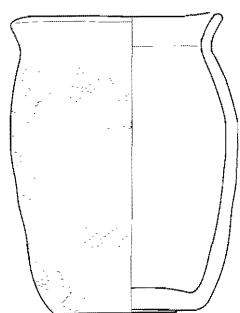
4 ('82・C-5・Ⅱ)



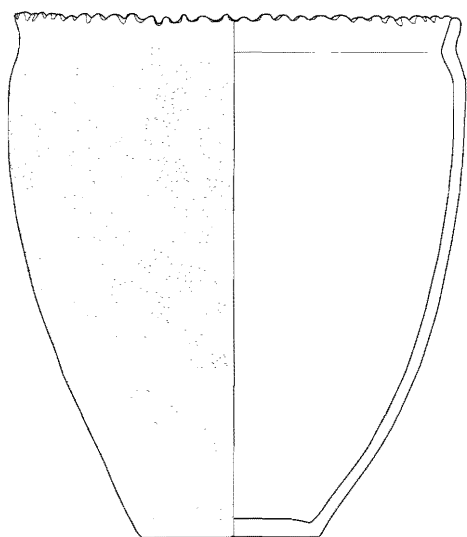
5 ('83・E-5・Ⅱ)



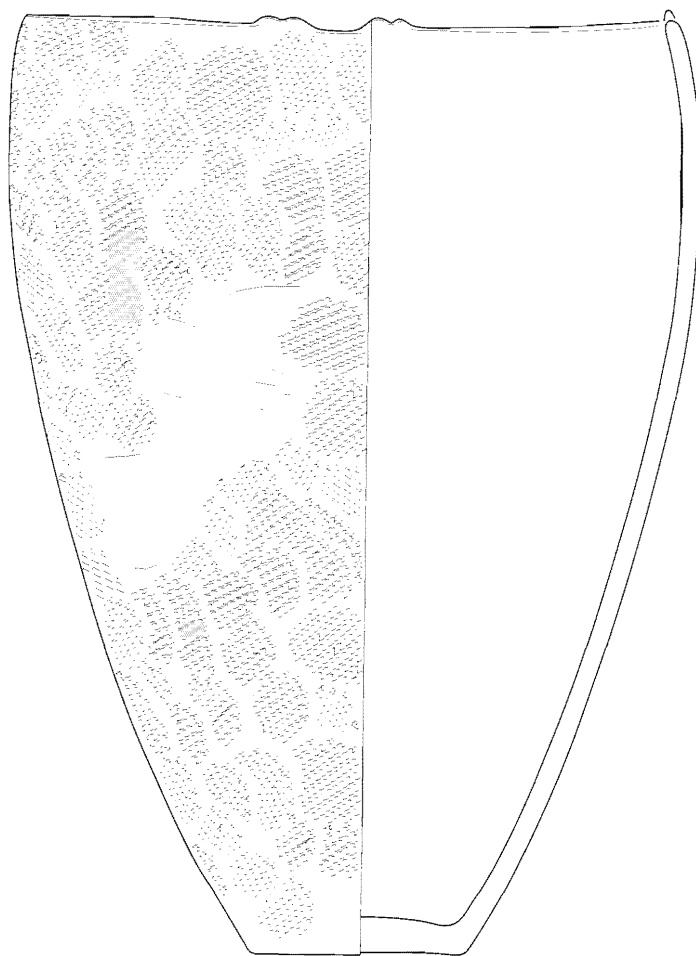
6 ('82・C-6・Ⅱ)



7 ('82・C-5・Ⅱ)



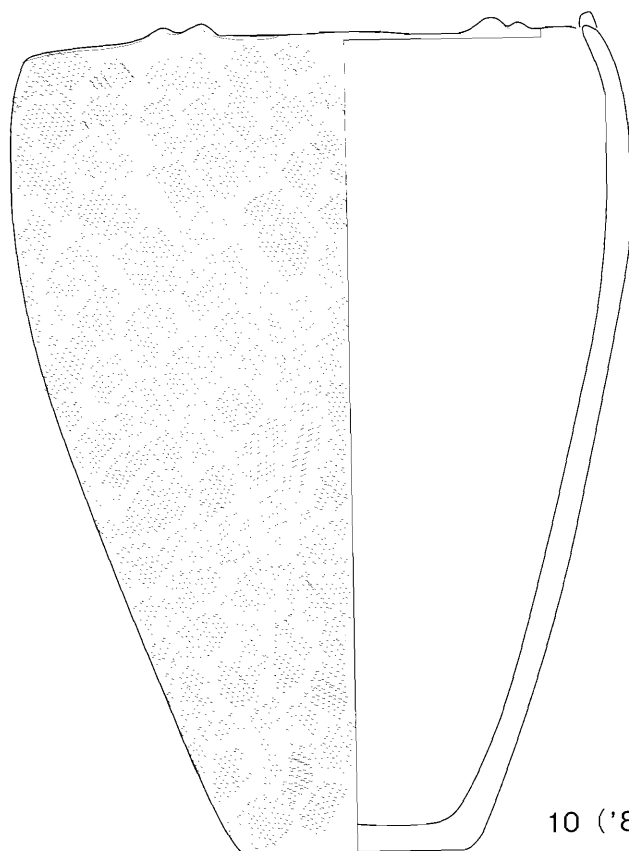
8 ('82・C-5・Ⅱ)



9 ('83・D-5・Ⅳ)

0 10cm

第2図 明戸遺跡 深鉢Ⅰ類(4~6)・Ⅱ類(7・8)・Ⅲ類(9)



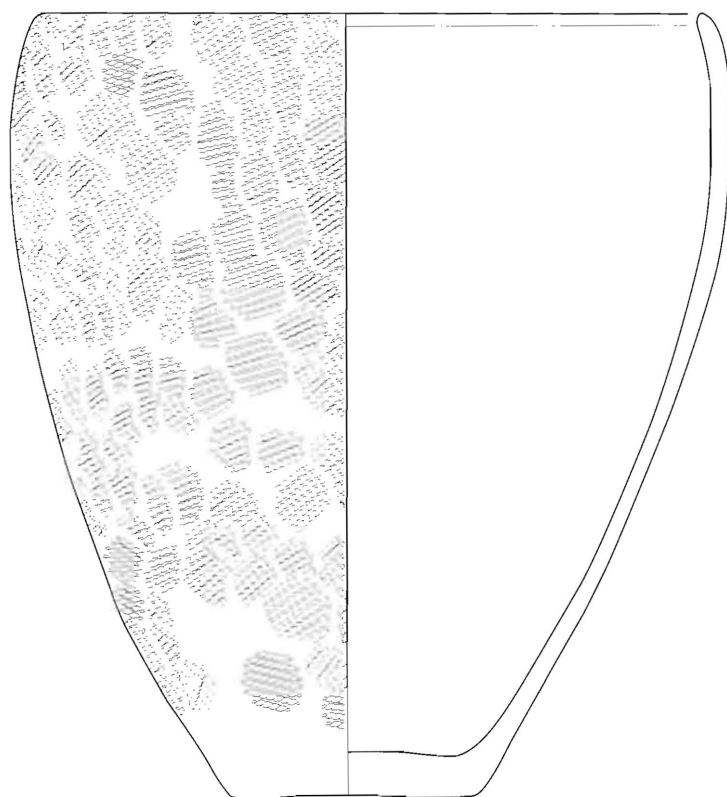
10 ('83・E-4・Ⅲ)



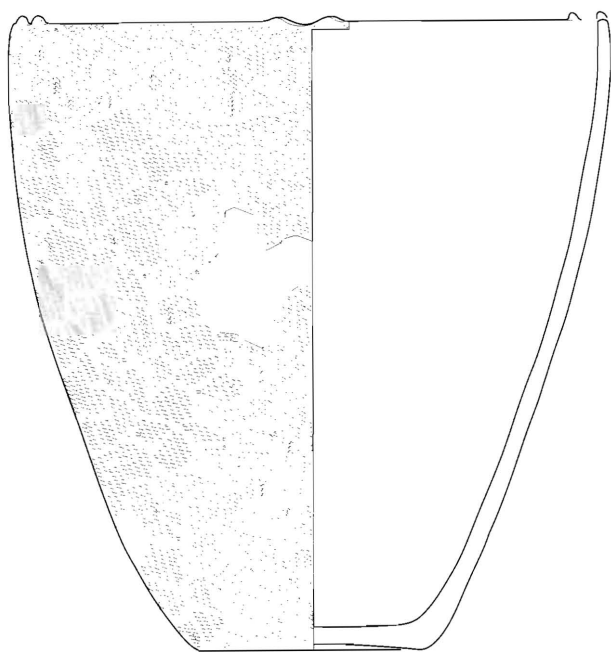
11 ('83・C-4と6・Ⅱ)

0 10cm

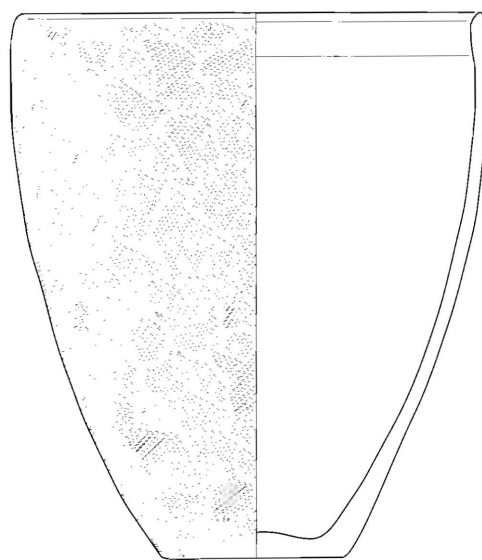
第3図 明戸遺跡 深鉢Ⅲ類 (10・11)



12 ('83・D-5・Ⅲ)



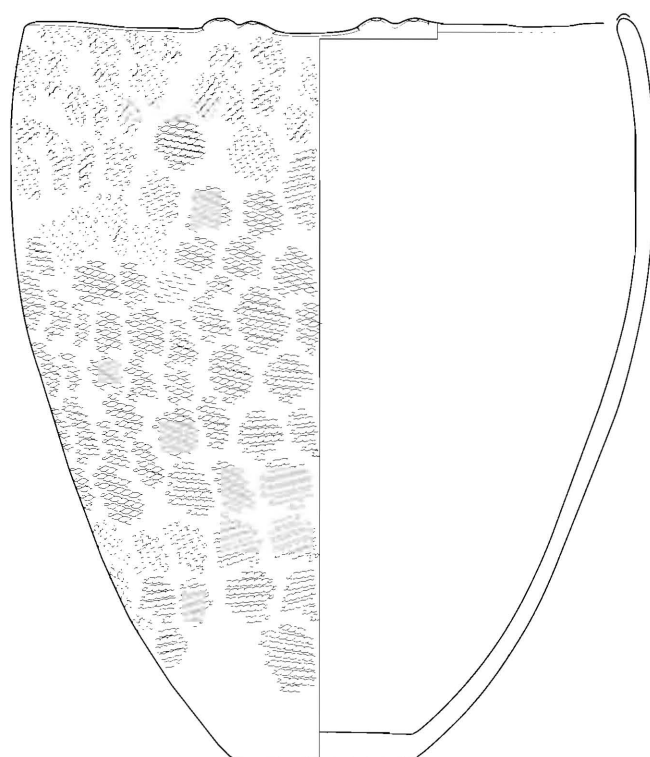
13 ('82・C-5・Ⅱ)



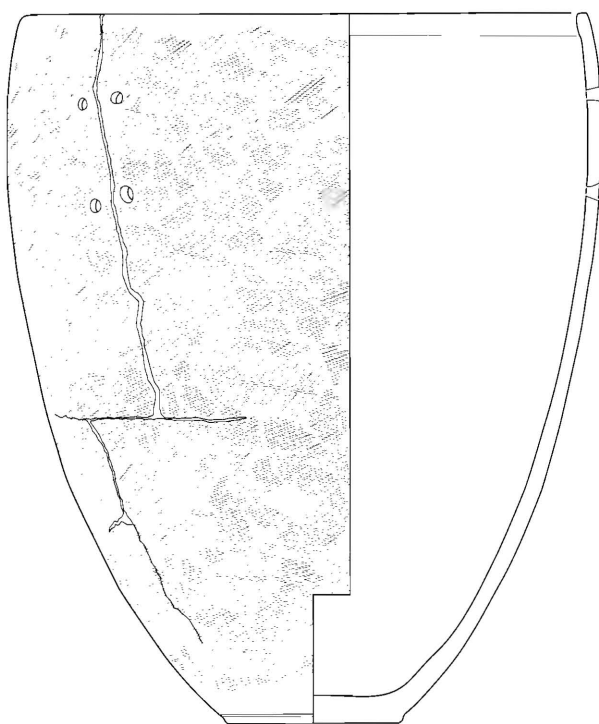
14 ('83・未注記・未注記)



第4図 明戸遺跡 深鉢Ⅲ類 (12～14)



15 ('82・C-5~6・Ⅱ)



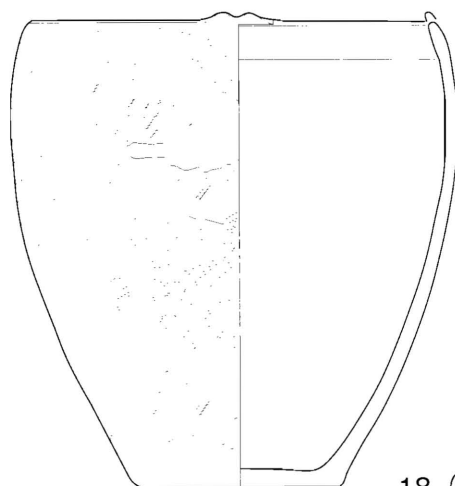
16 ('83・D-4・Ⅳ)



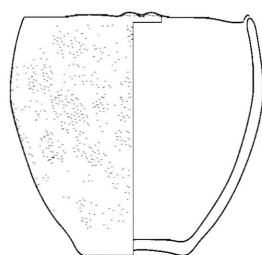
17 ('82・B-6・Ⅱ)

0 10cm

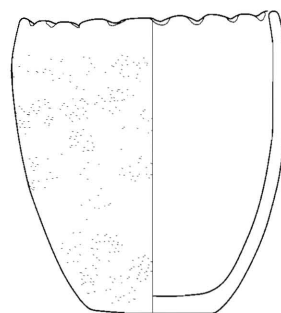
第5図 明戸遺跡 深鉢Ⅲ類 (15~17)



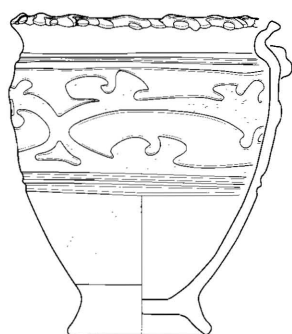
18 ('82・B-5・Ⅱ)



19 ('82・B-5・Ⅱ)



20 ('83・D-4・Ⅲa)



21 ('83・D-5・Ⅳ)

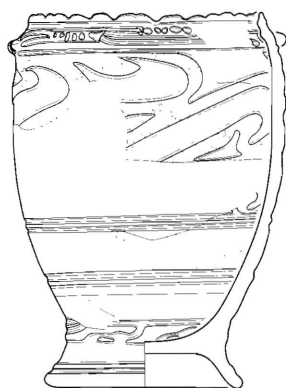


21. 拓本

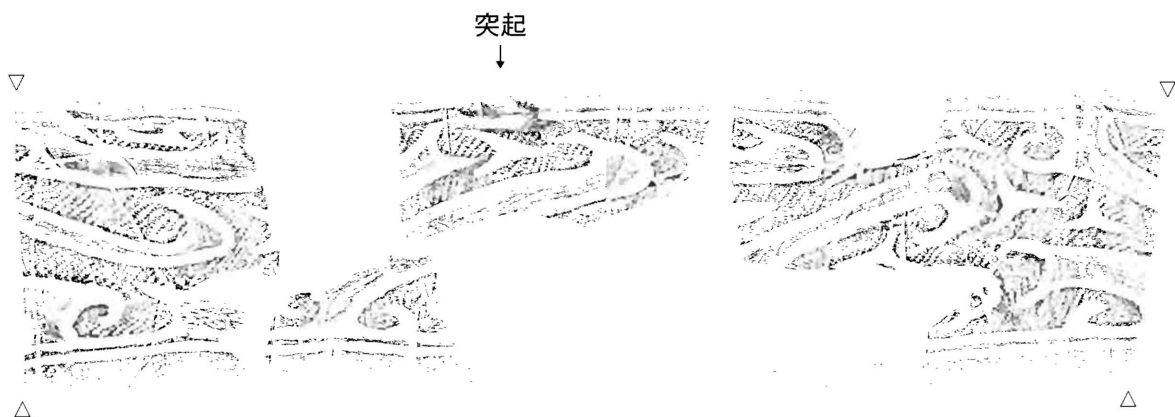
21. 展開図
(配置文Ⅲ7)

0 10cm

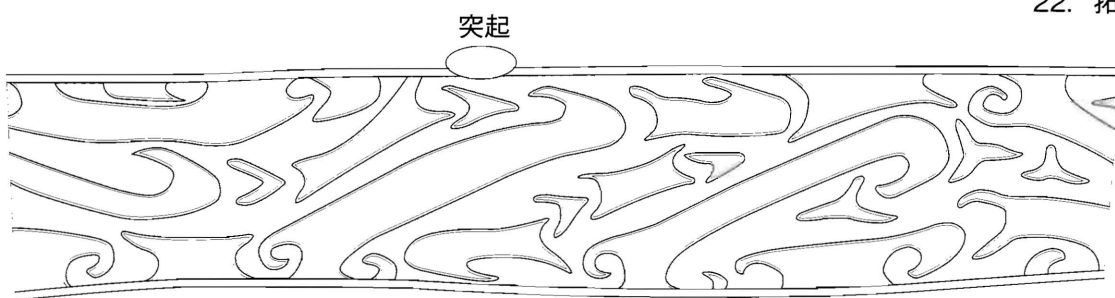
第6図 明戸遺跡 深鉢Ⅲ類 (18～20)・Ⅳ類 (21)



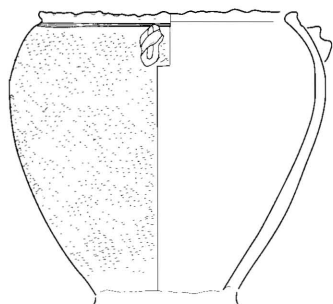
22 ('83・D-5・Ⅲ)



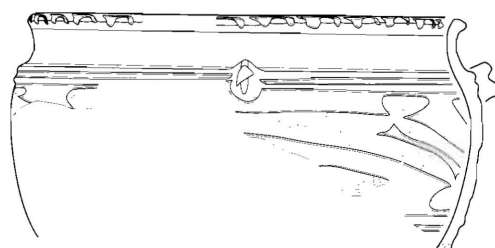
22. 拓本



22. 展開図
(配置文Ⅱ 2)



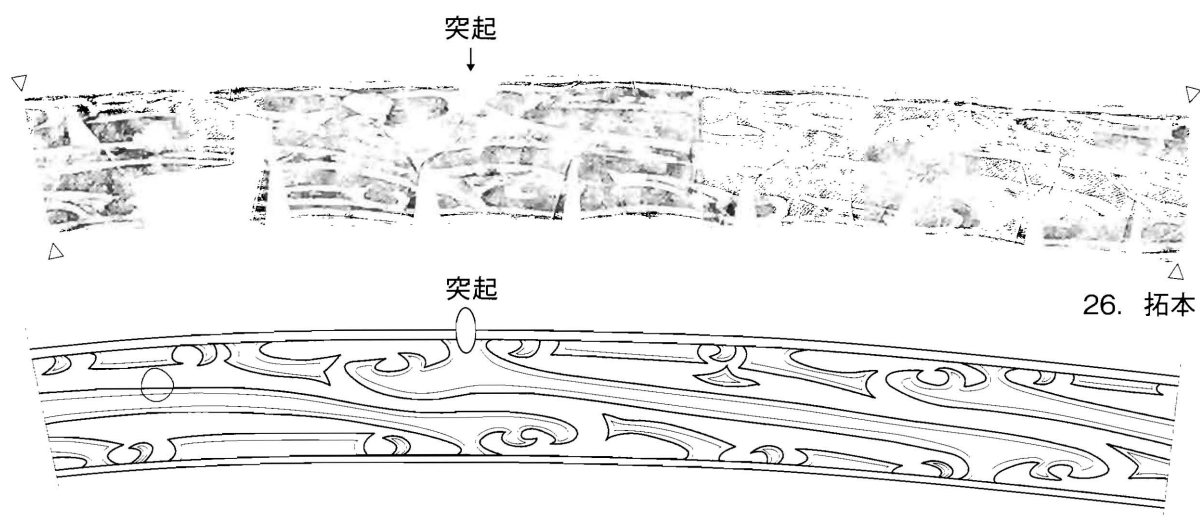
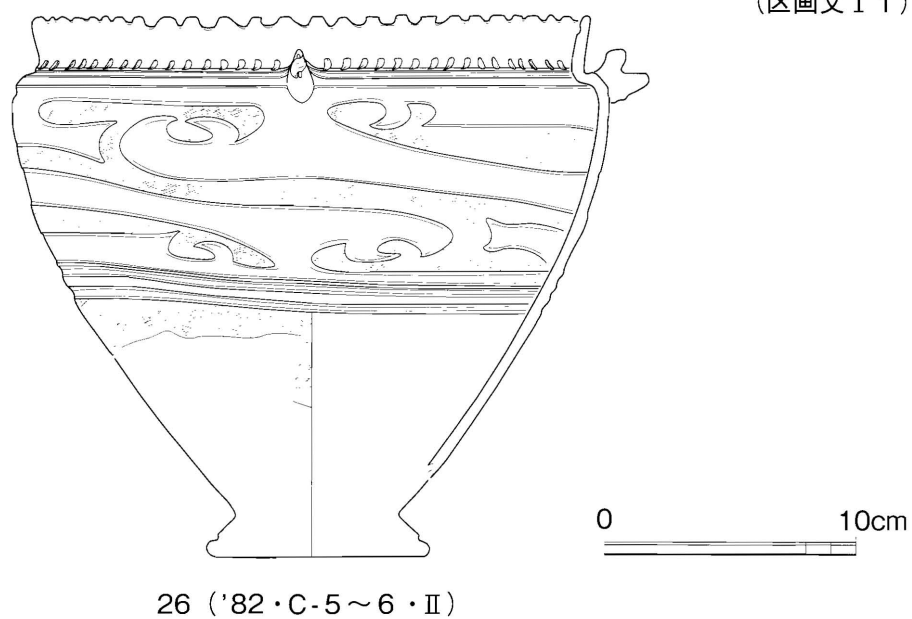
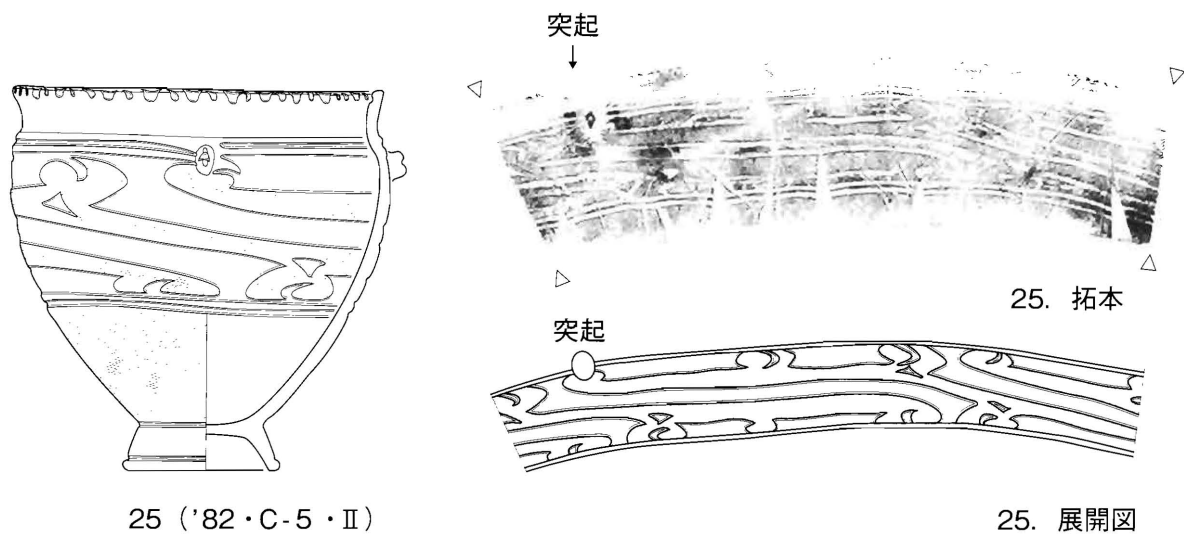
23 ('82・C-6・Ⅱ)



24 (未注記・未注記・未注記)

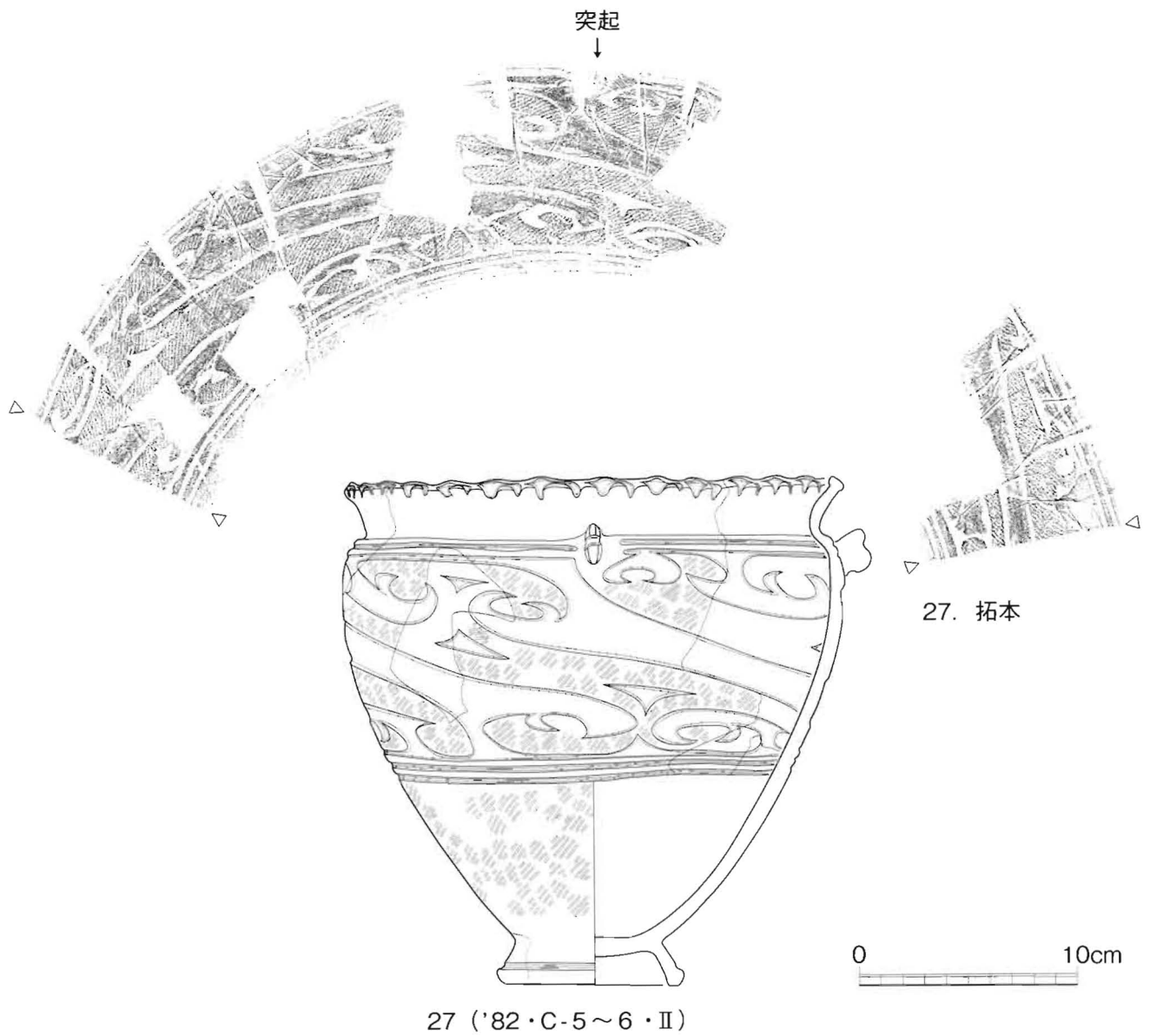


第7図 明戸遺跡 深鉢Ⅳ類 (22・23) ・鉢Ⅰ類 (24)

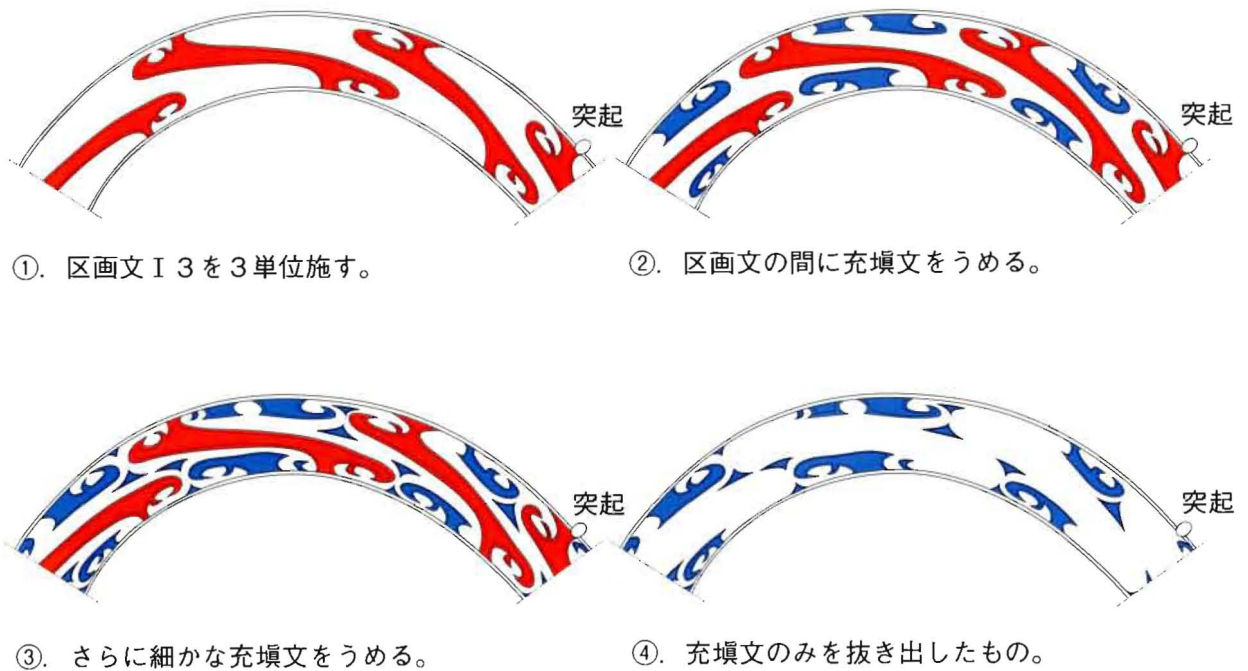


26. 展開図
(区画文 I 3)

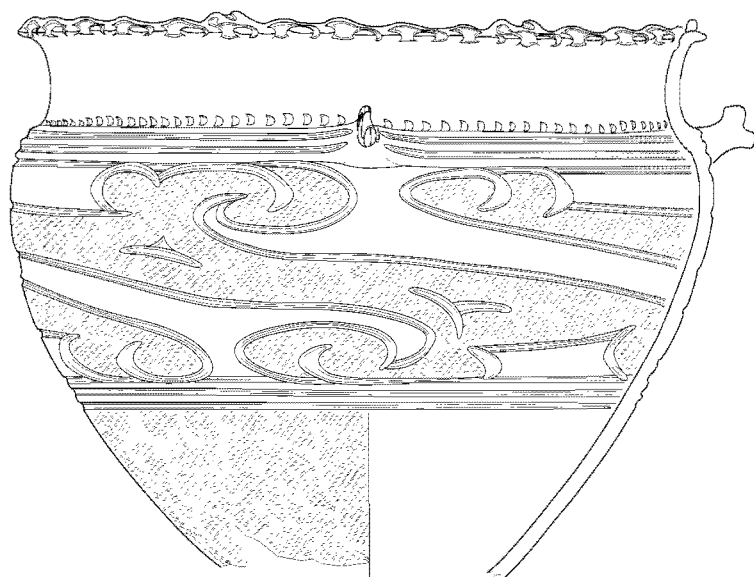
第8図 明戸遺跡 鉢I類 (25・26)



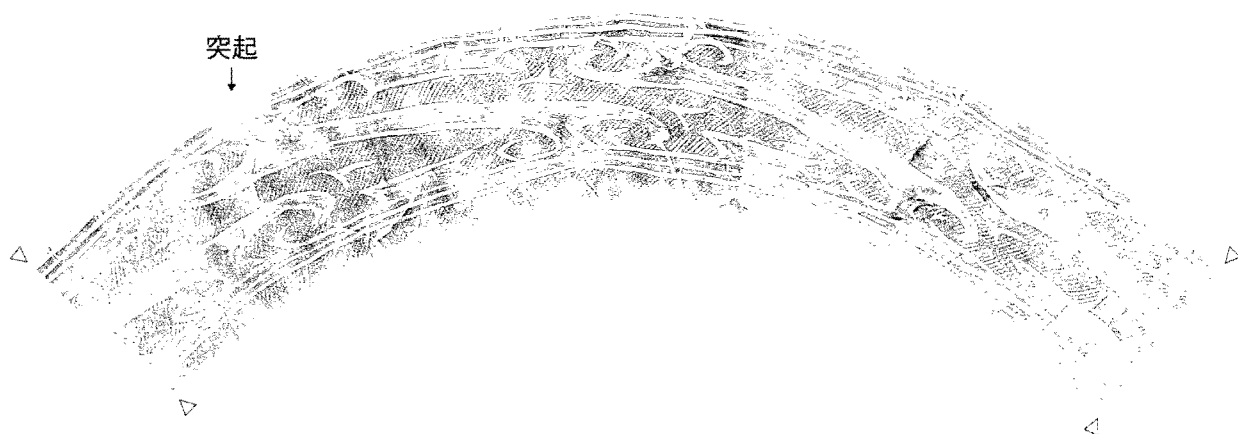
・27の文様の描き方



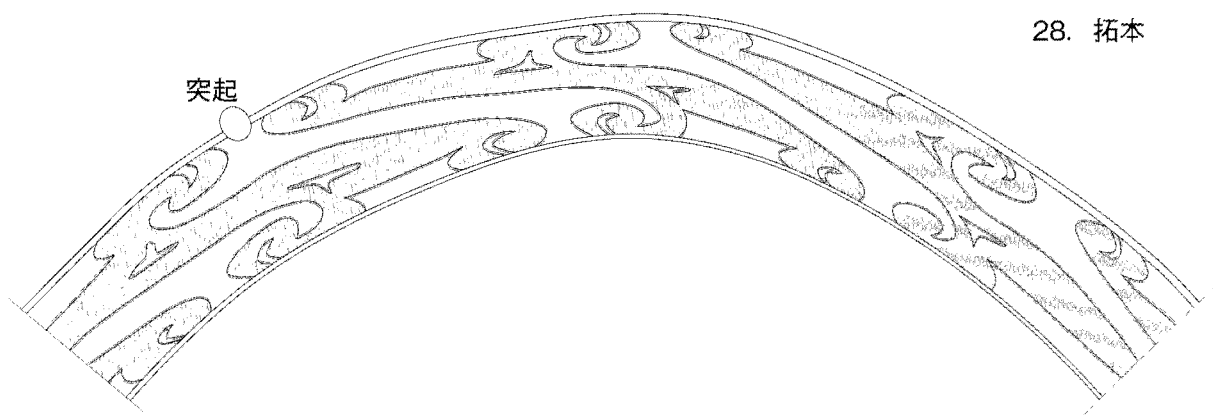
第9図 明戸遺跡 鉢I類 (27)



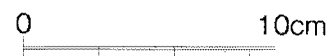
28 (未注記・未注記・未注記)



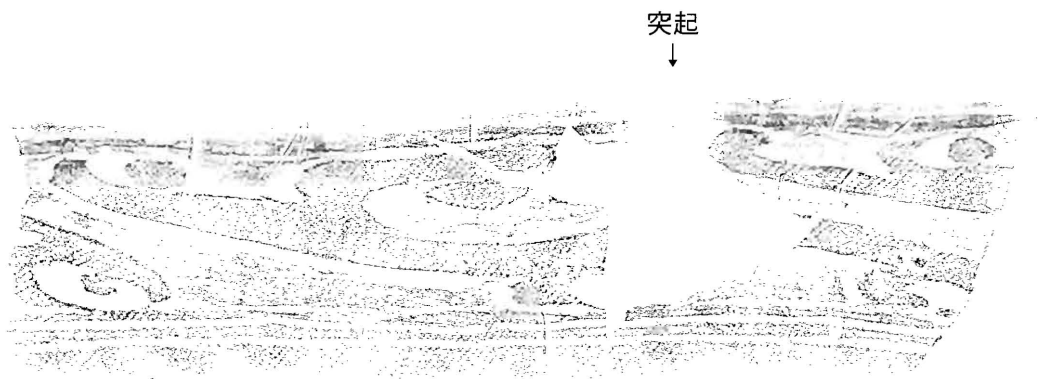
28. 拓本



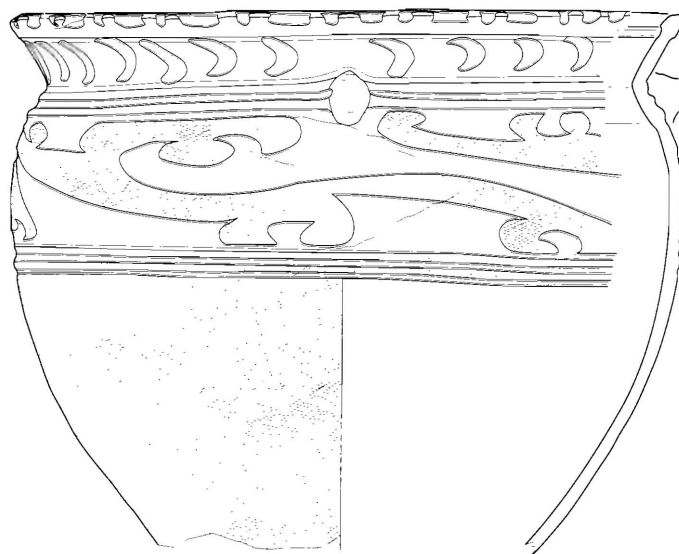
28. 展開図
(区画文 I 3)



第10図 明戸遺跡 鉢Ⅰ類 (28)



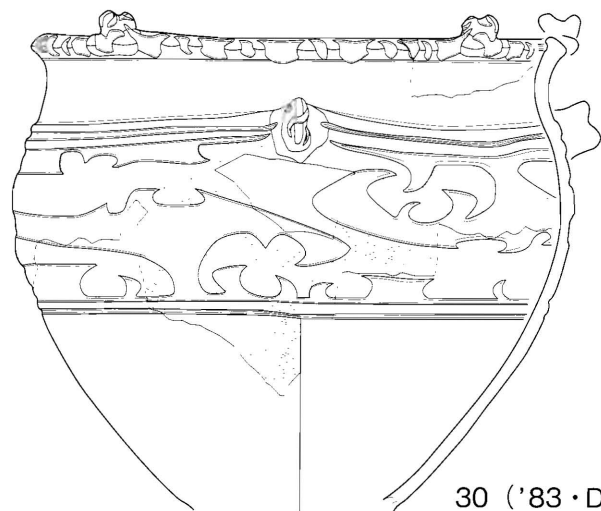
29. 拓本



29 (未注記・D-5・Ⅲc)

0 10cm

第11図 明戸遺跡 鉢Ⅰ類 (29)



30 ('83・D-4・Ⅳ)

突起



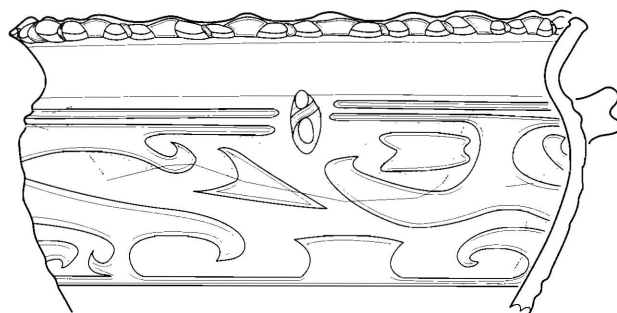
30. 拓本

突起



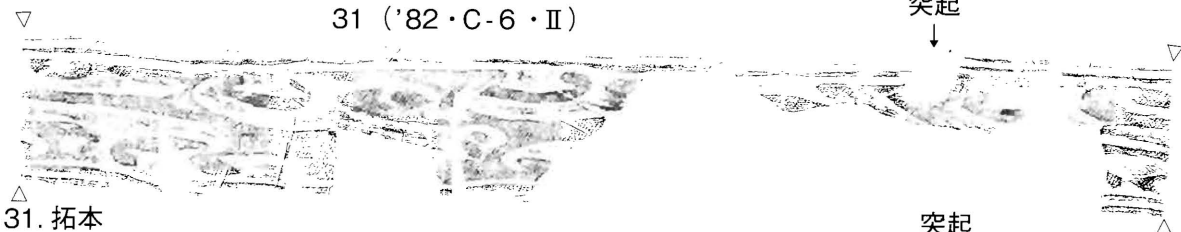
30. 展開図

(区画文Ⅰ3)



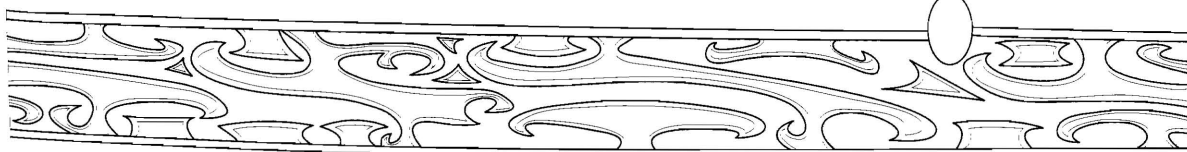
31 ('82・C-6・Ⅱ)

突起



31. 拓本

突起



31. 展開図

(区画文Ⅰ3)

0 10cm

第12図 明戸遺跡 鉢Ⅰ類 (30・31)



32 ('83・D-5・Ⅲ)



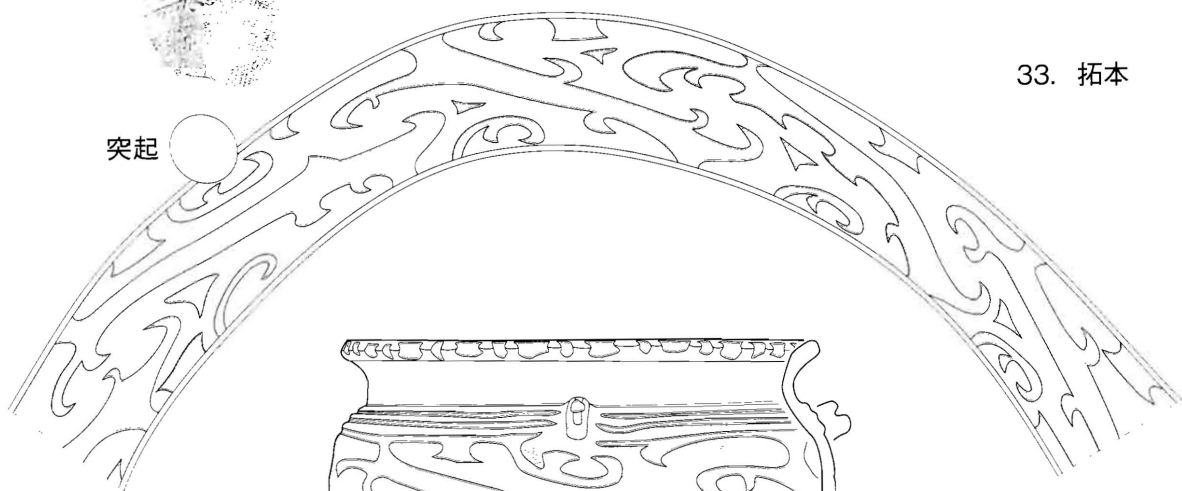
32. 拓本



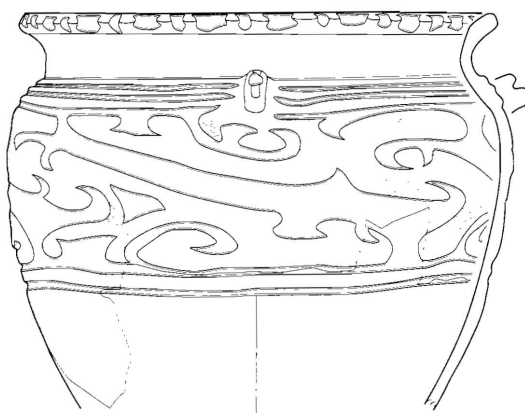
32. 展開図
(区画文Ⅰ 3)



33. 拓本



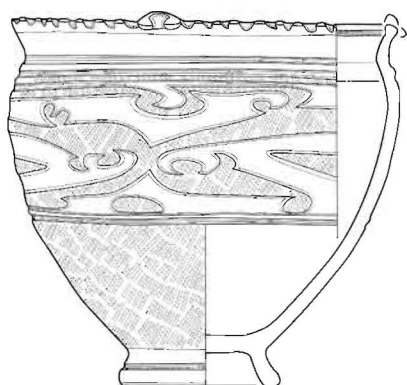
33. 展開図
(区画文Ⅰ 3)



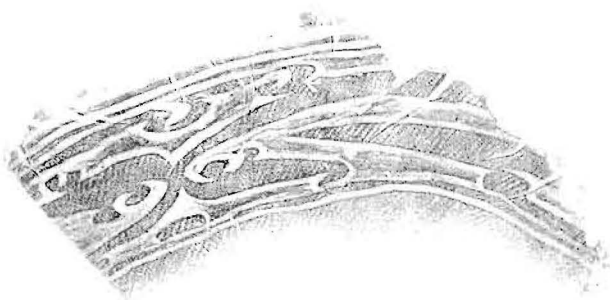
33 ('82・C-4・Ⅱ)

0 10cm

第13図 明戸遺跡 鉢Ⅰ類 (32・33)

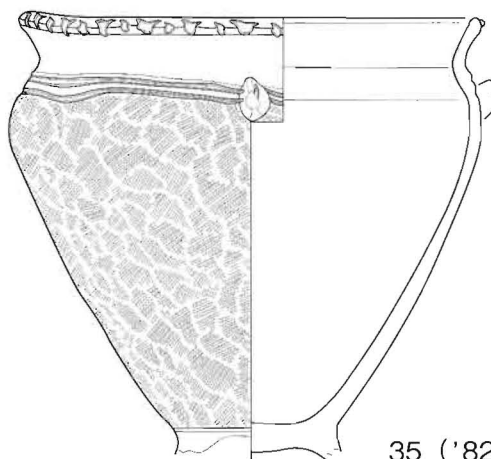


34 (未注記・未注記・未注記)



35. 拓本

区画文Ⅲ 1 が施されると
考えられる。



35 ('82・D-4・Ⅱ)

突起
↓

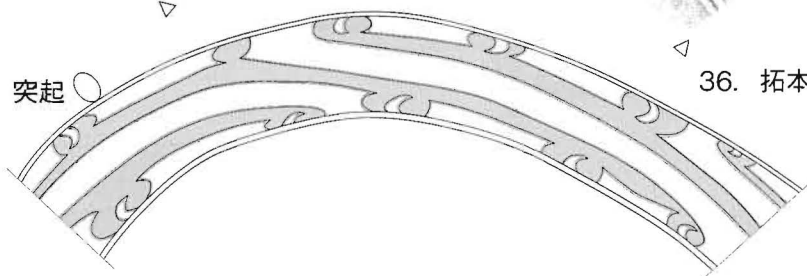


突起

36. 拓本



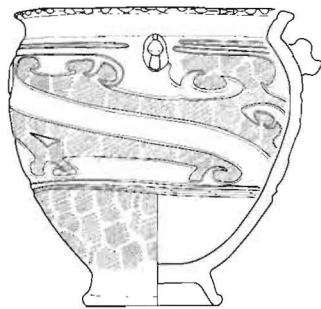
36 ('83・D-4・Ⅲ c)



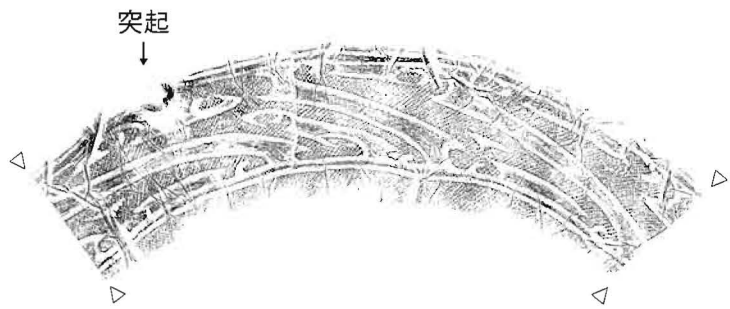
36. 展開図
(区画文Ⅰ 1)



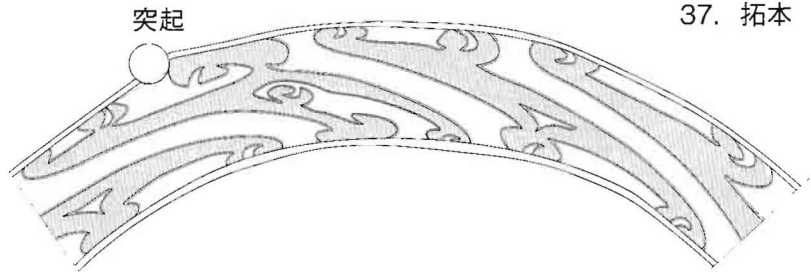
第14図 明戸遺跡 鉢Ⅰ類 (34~36)



37 ('83・E-5・Ⅲc)



37. 拓本



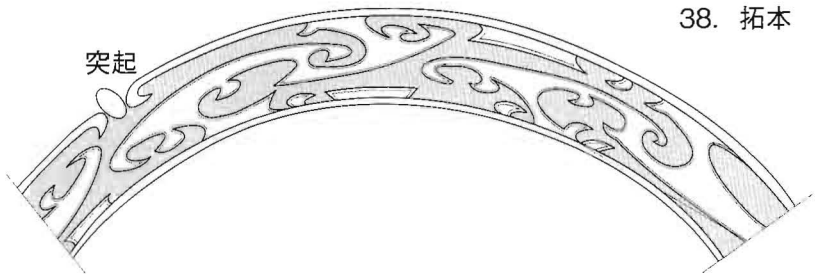
37. 展開図
(区画文Ⅰ1)



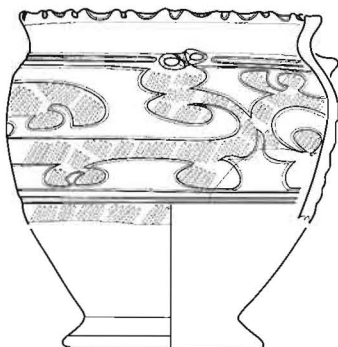
38 ('83・D-5・Ⅲc)



38. 拓本



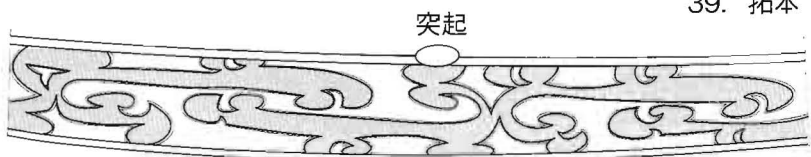
38. 展開図
(区画文Ⅱ1)



39 ('83・D-7・Ⅲc)



39. 拓本



39. 展開図
(区画文Ⅱ1)



第15図 明戸遺跡 鉢Ⅰ類 (37~39)

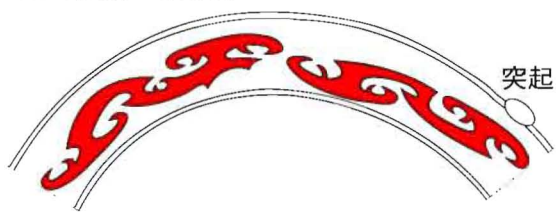


40 ('82・C-6・Ⅱ)

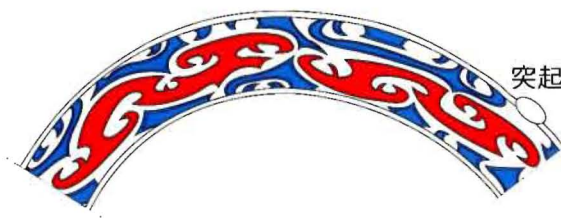


40. 拓本

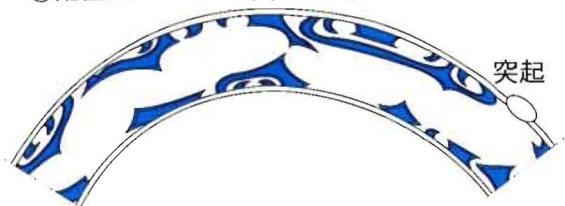
・40の文様の描き方



①配置文Ⅲ 7を2単位施す。

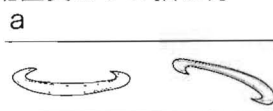


②充填文をうめる。

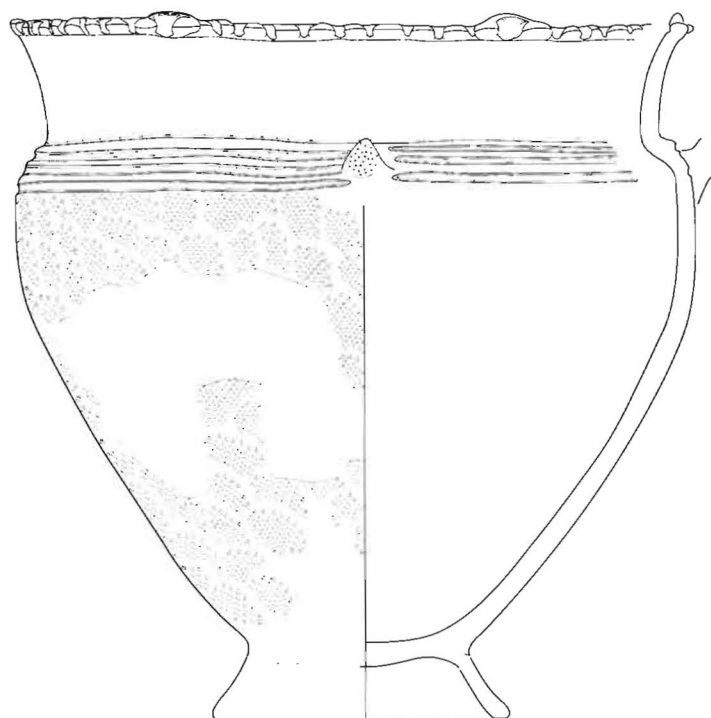


③充填文のみ抜き出したもの。

配置文Ⅲ 7の描き方



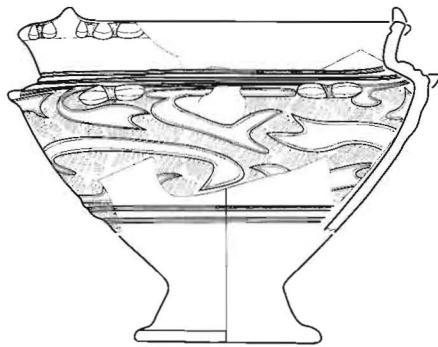
横C字状のモチーフaに
付加的要素を加えてbとなる。



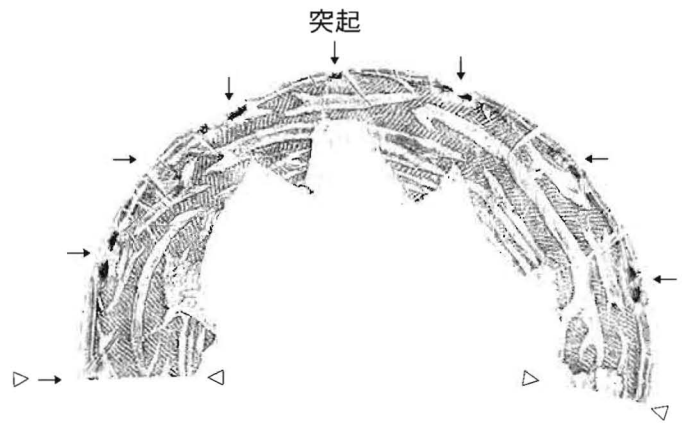
41 ('82・C-5～6・Ⅱ)

0 10cm

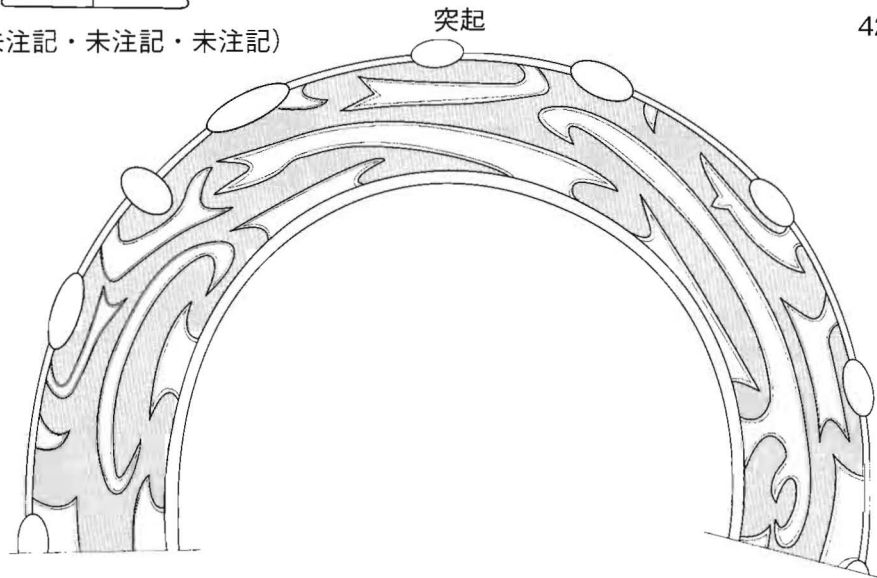
第16図 明戸遺跡 鉢Ⅰ類 (40・41)



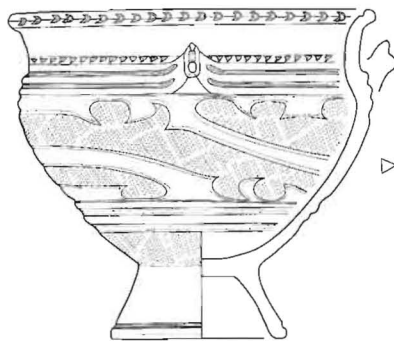
42 (未注記・未注記・未注記)



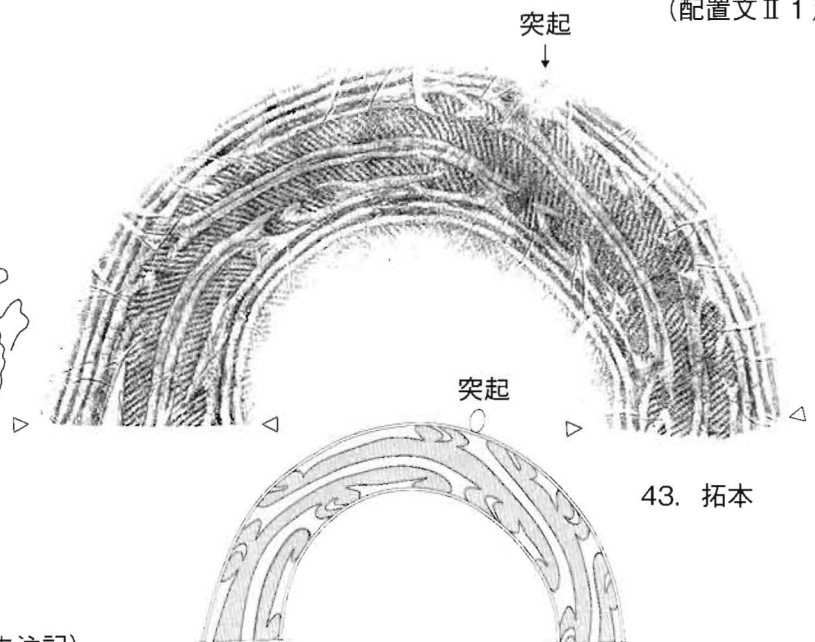
42. 拓本



42. 展開図
(配置文Ⅱ 1)



43 (未注記・未注記・未注記)



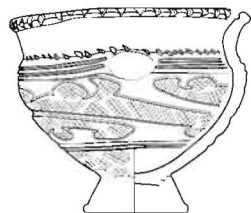
43. 拓本



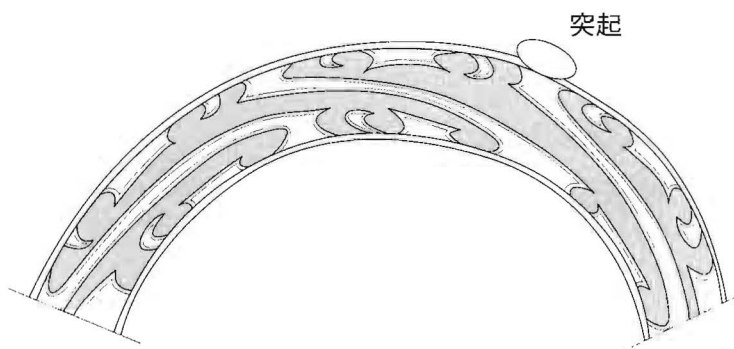
43. 展開図
(区画文Ⅰ 1)



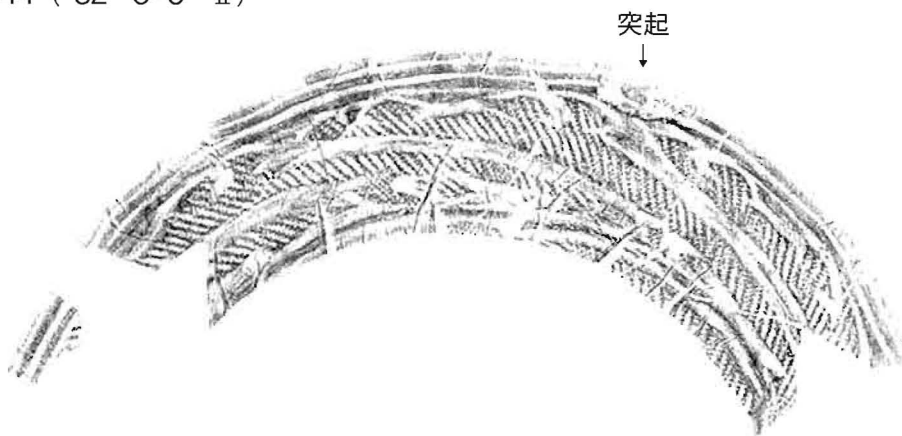
第17図 明戸遺跡 鉢Ⅰ類 (42・43)



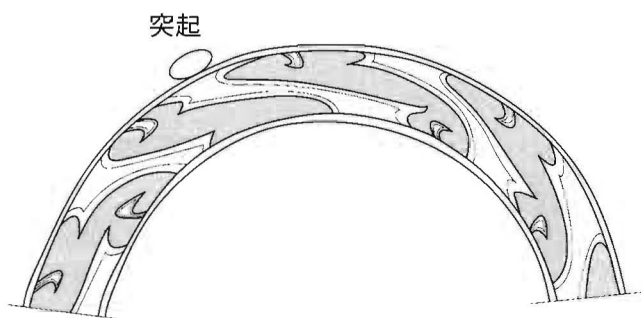
44 ('82・C-5・II)



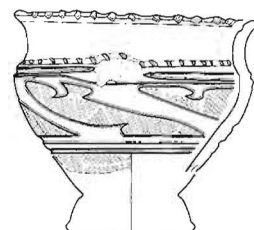
44. 展開図
(区画文 I 1)



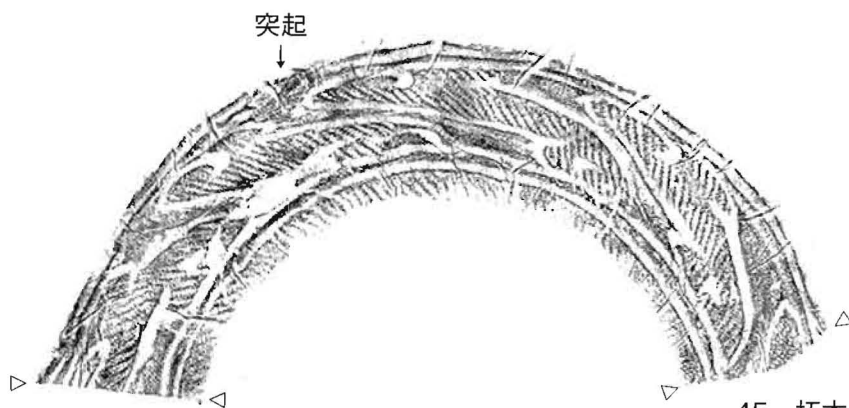
44. 拓本



45. 展開図
(区画文 I 1)



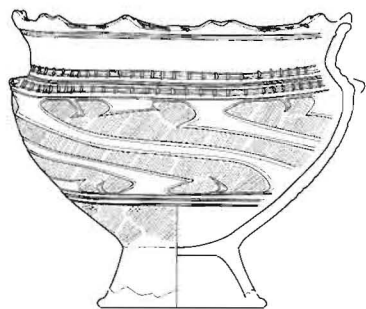
45 ('82・D-6・II)



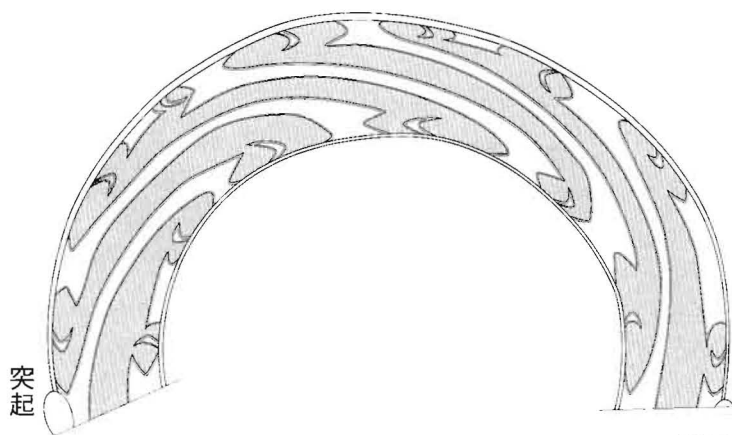
45. 拓本



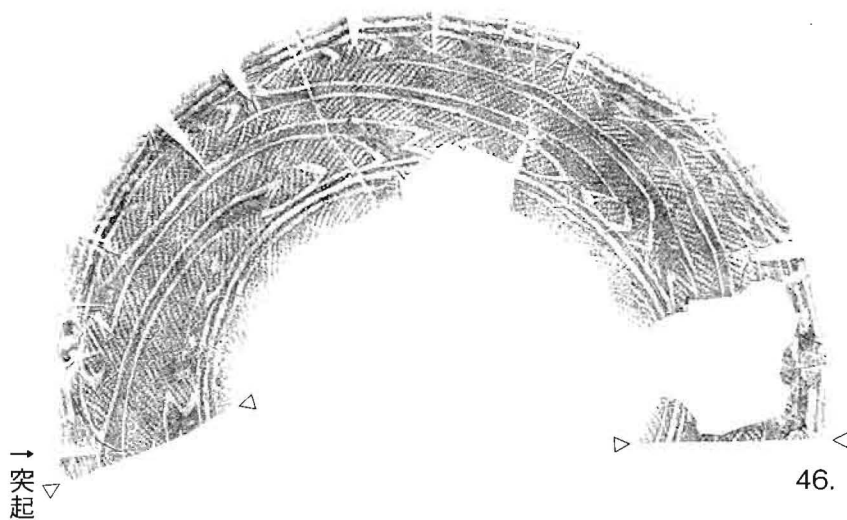
第18図 明戸遺跡 鉢Ⅰ類 (44・45)



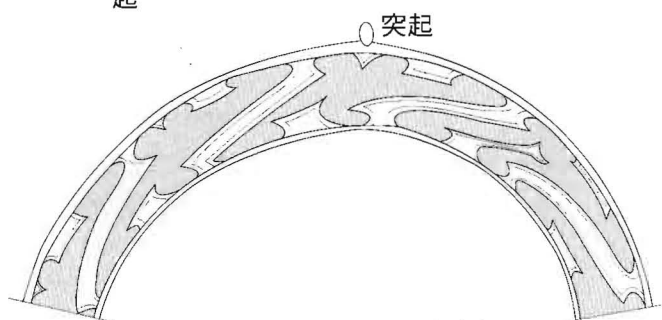
46 (未注記・未注記・未注記)



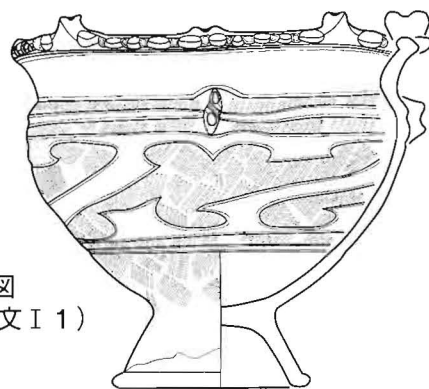
46. 展開図
(区画文 I 1)



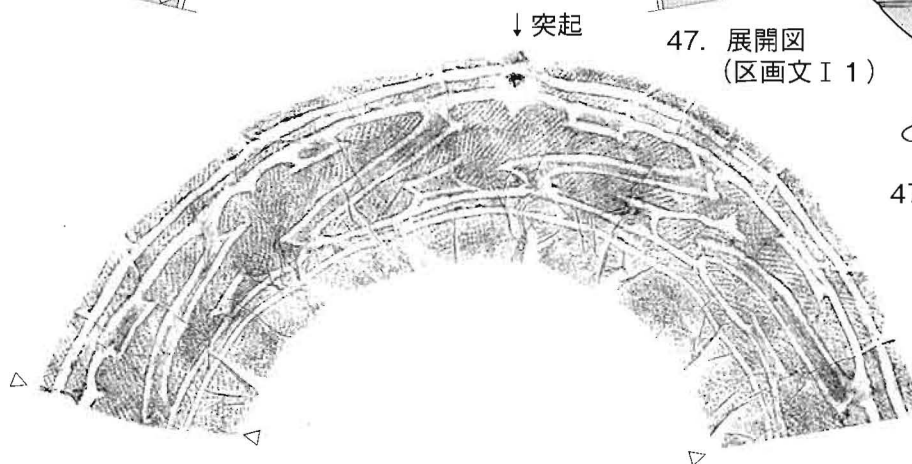
46. 拓本



47. 展開図
(区画文 I 1)



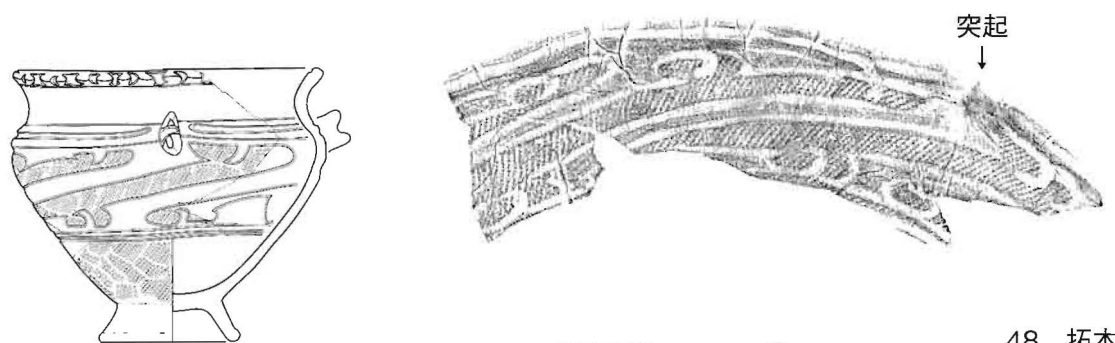
47 ('82・C-5・II)



47. 拓本

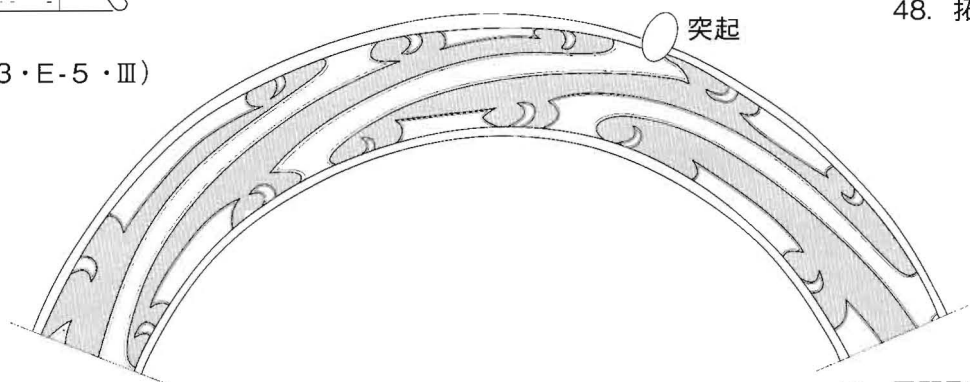


第19図 明戸遺跡 鉢I類 (46・47)

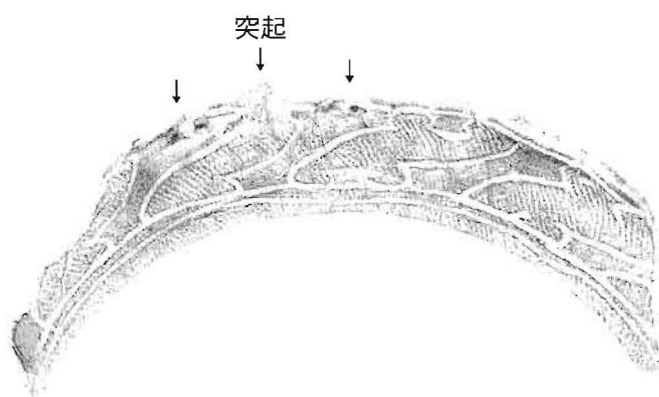


48 ('83・E-5・Ⅲ)

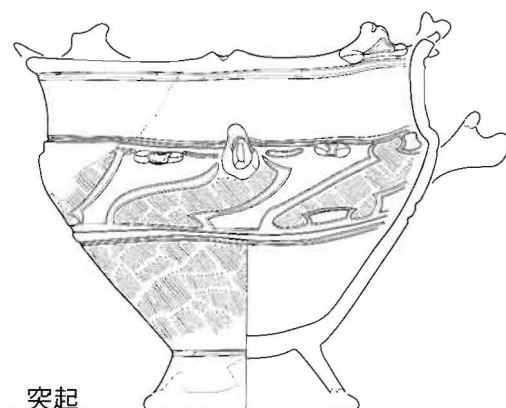
48. 拓本



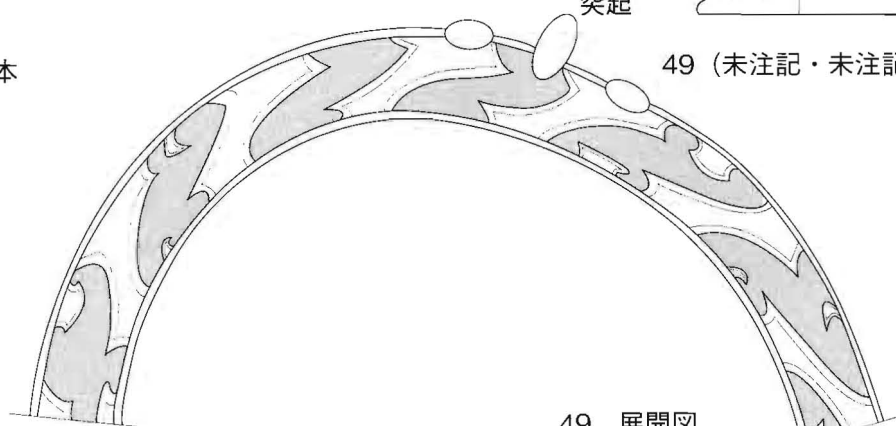
48. 展開図
(区画文Ⅰ 1)



49. 拓本



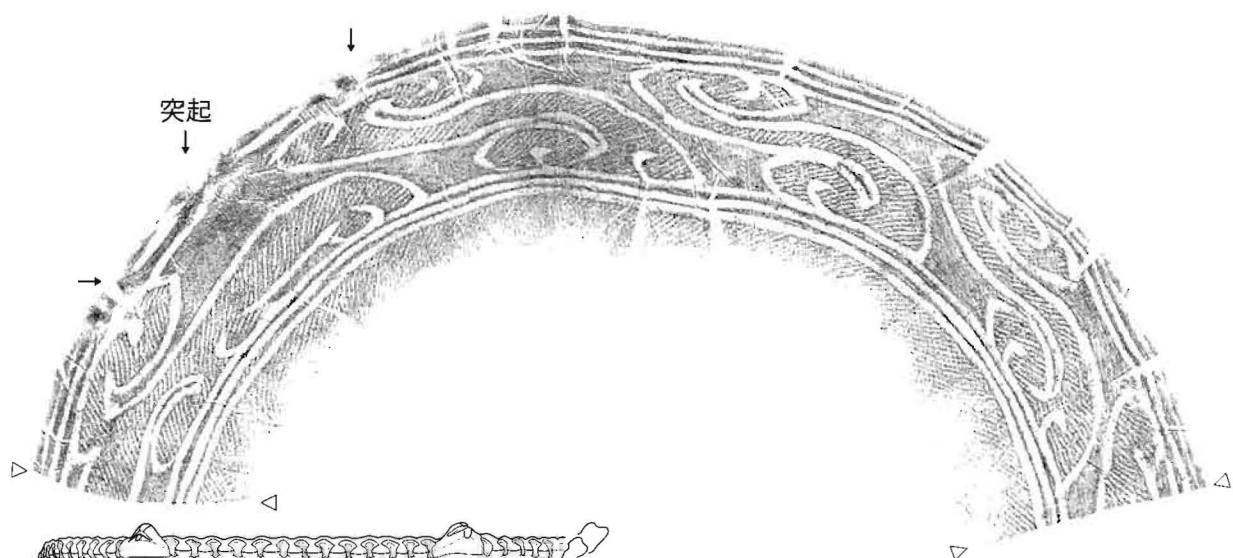
49 (未注記・未注記・未注記)



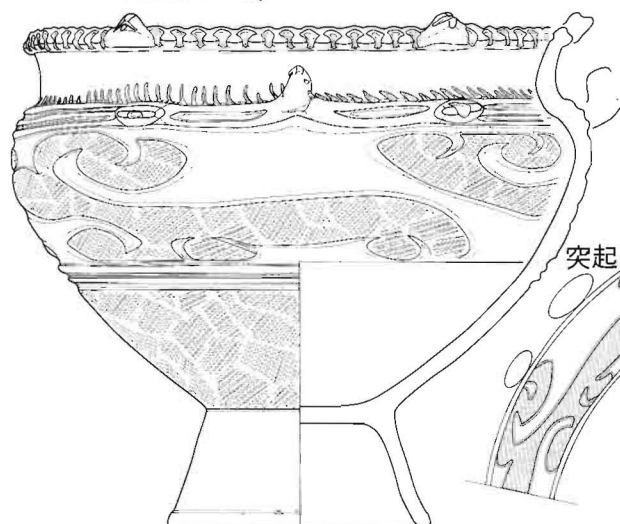
49. 展開図
(区画文Ⅰ 1)



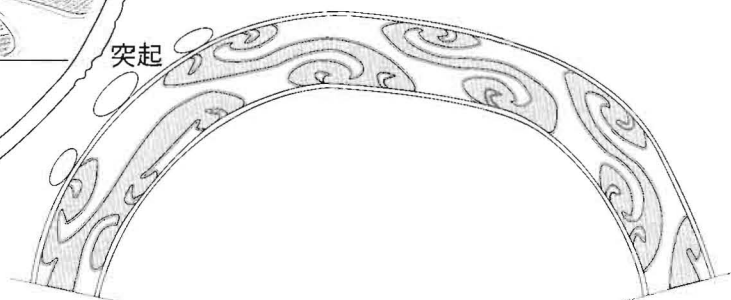
第20図 明戸遺跡 鉢Ⅰ類 (48・49)



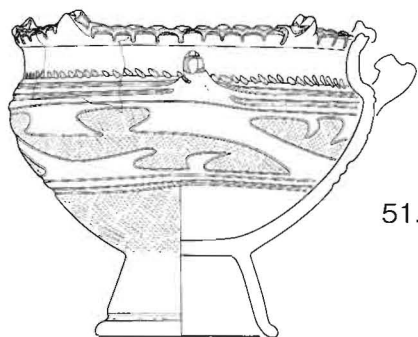
50. 拓本



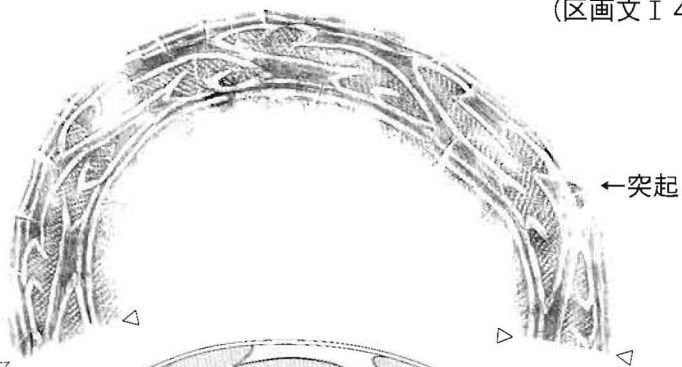
50 ('83・D-4・Ⅲc)



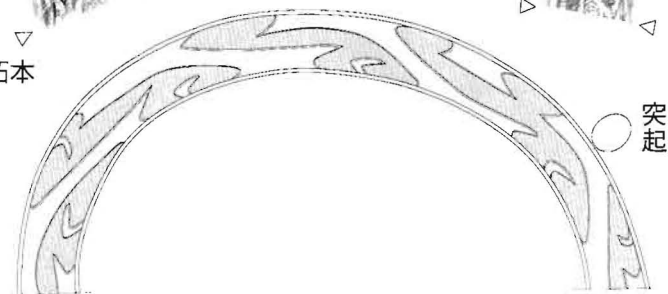
50. 展開図
(区画文Ⅰ4)



51 ('83・D-4・Ⅲa)



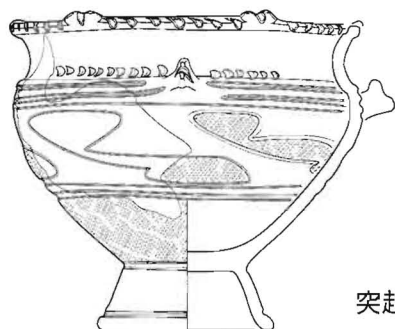
51. 拓本



51. 展開図
(区画文Ⅰ2)



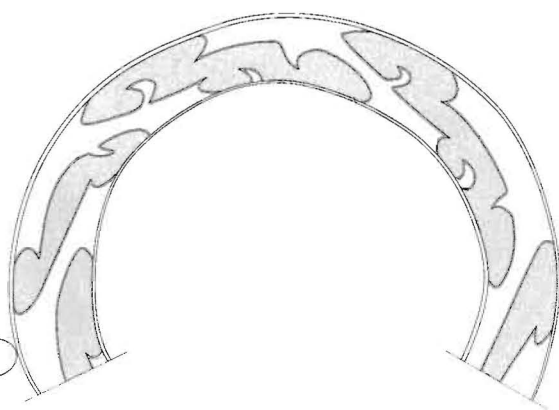
第21図 明戸遺跡 鉢Ⅰ類 (50・51)



52 ('82・C-5・II)

突起

突起



52. 展開図
(区画文 I 2)



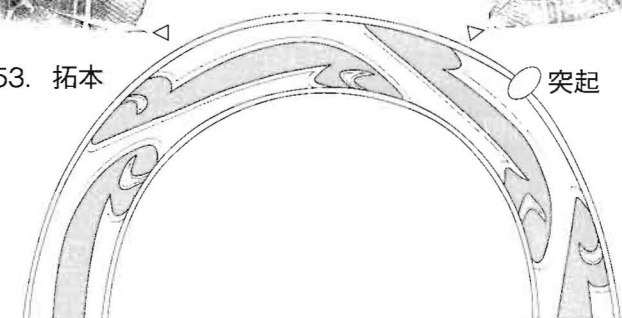
52. 拓本

突起

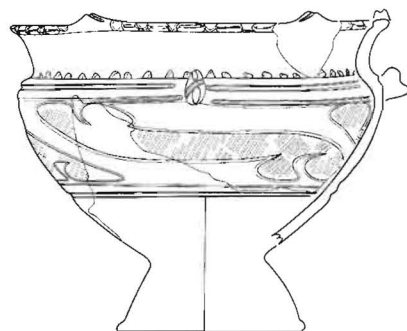


53. 拓本

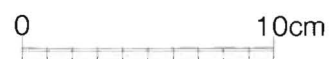
突起



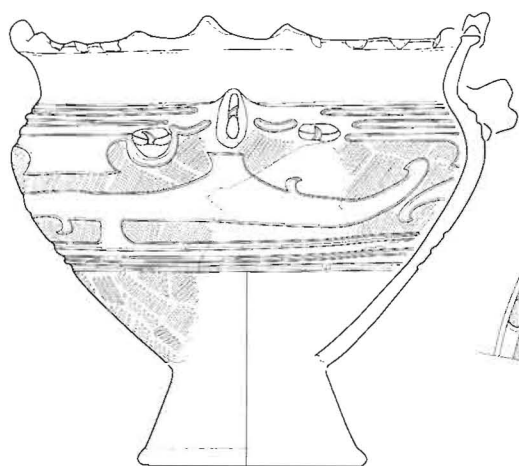
53. 展開図
(区画文 I 2)



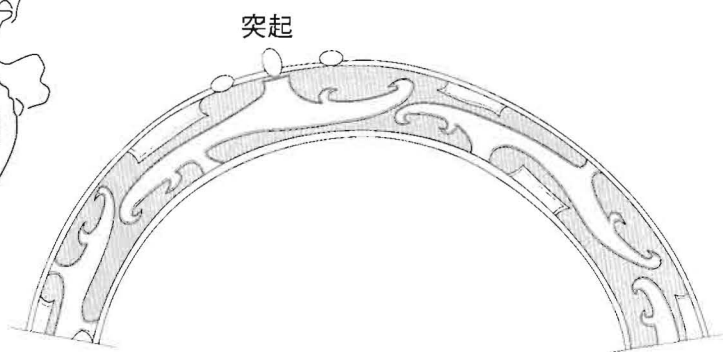
53 ('82・C-5・II)



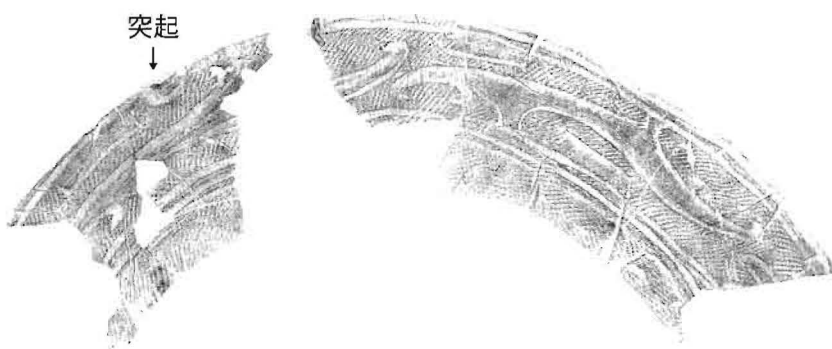
第22図 明戸遺跡 鉢 I 類 (52・53)



54 ('83・C-5・II)



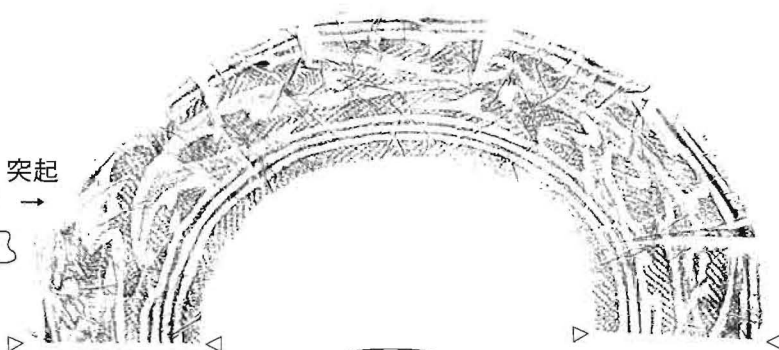
54. 展開図
(区画文 I 3)



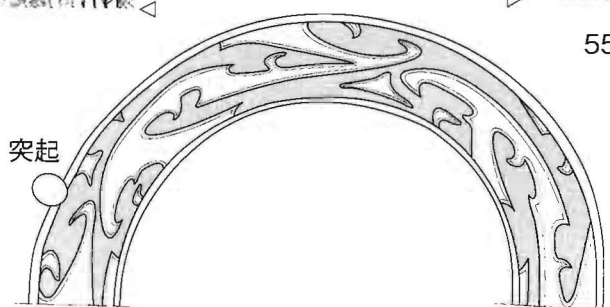
54. 拓本



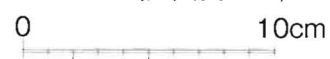
55 ('82・C-5・II)



55. 拓本



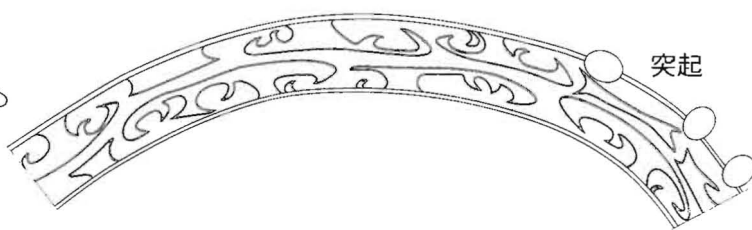
55. 展開図
(区画文 II 1)



第23図 明戸遺跡 鉢Ⅰ類 (54・55)



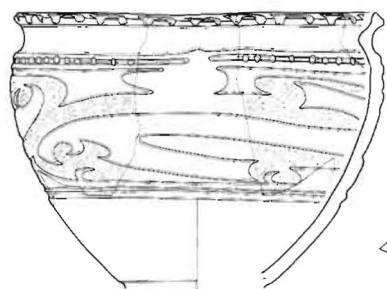
56 ('82・C-5・Ⅱ)



56. 展開図
(配置文Ⅲ 5)



56. 拓本



57 (未注記・D-6・Ⅲc)

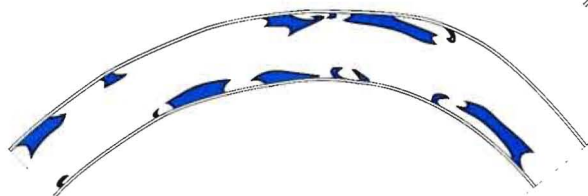


57. 拓本

・ 57 の文様の描き方



①配置文Ⅳ 1 を 2 単位施す。



③充填文のみを抜き出したもの。



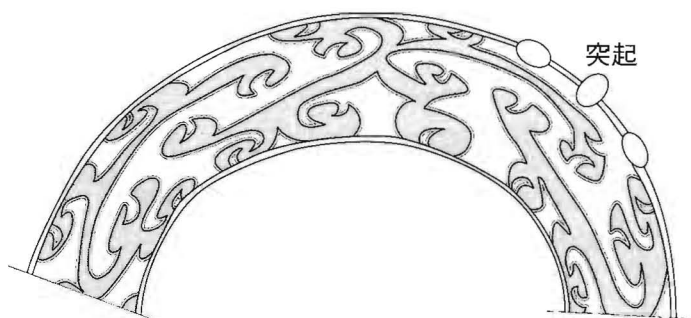
②充填文をうめる。

0 10cm

第24図 明戸遺跡 鉢Ⅰ類 (56・57)



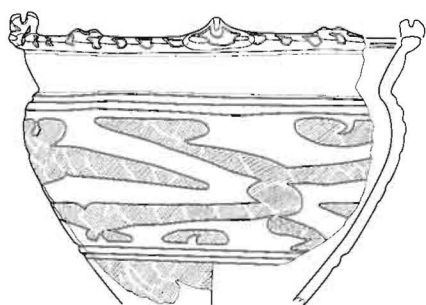
58 ('83・D-4~6・Ⅱ~Ⅲ)



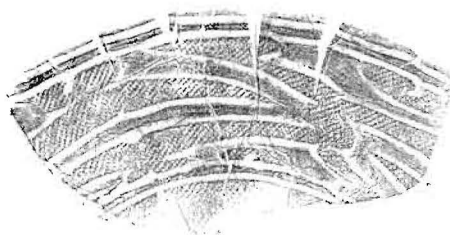
58. 展開図
(区画文Ⅱ 1)



58. 拓本



59 ('82・C-5・Ⅱ)



59. 拓本

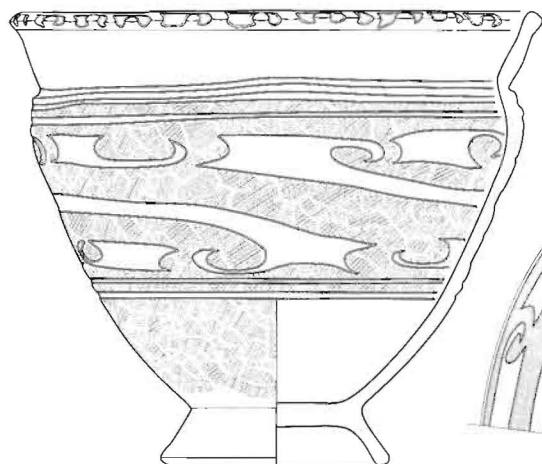


残存部より、区画文Ⅲ 2
が施されていると考え
られる。

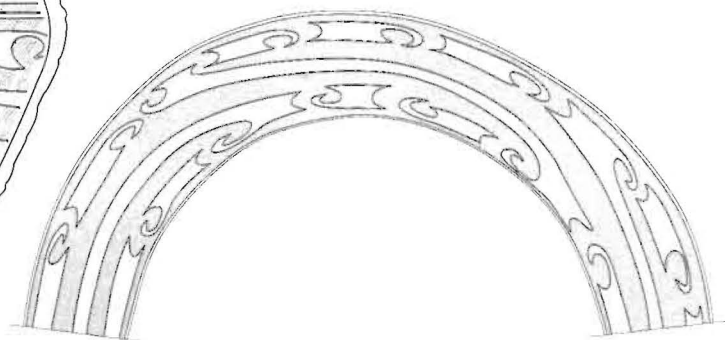
59. 展開図



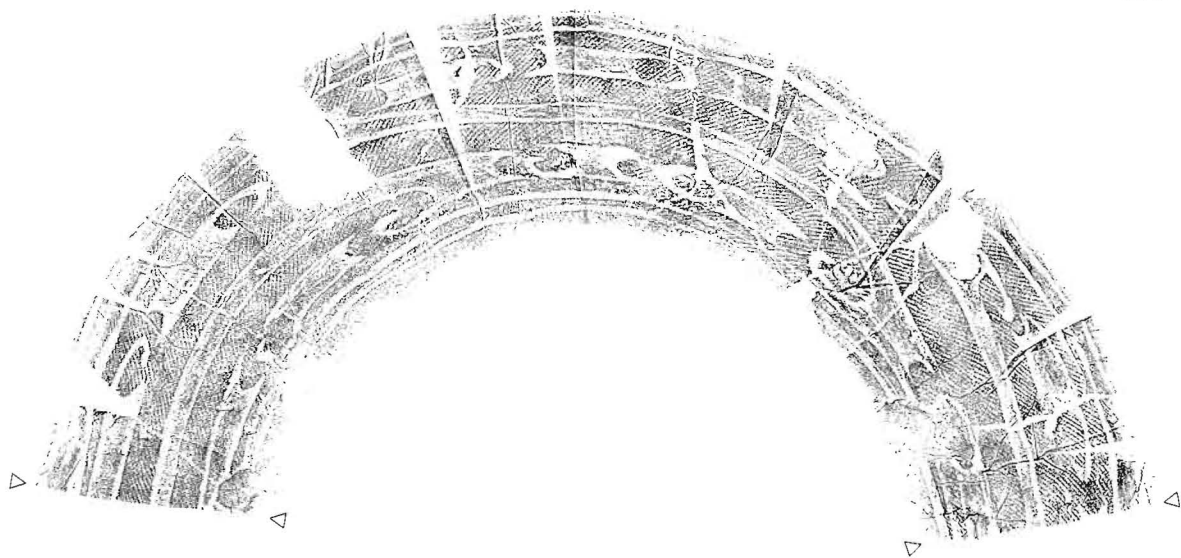
第25図 明戸遺跡 鉢Ⅰ類 (58・59)



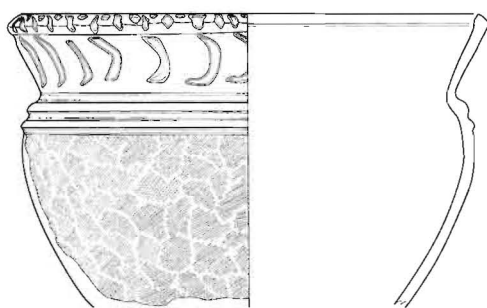
60 ('83・D-5・Ⅲ)



60. 展開図
(配置文Ⅰ)



60. 拓本



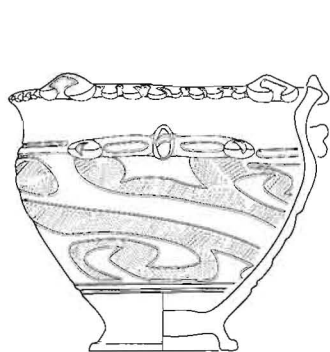
61 ('82・C-5・Ⅱ)



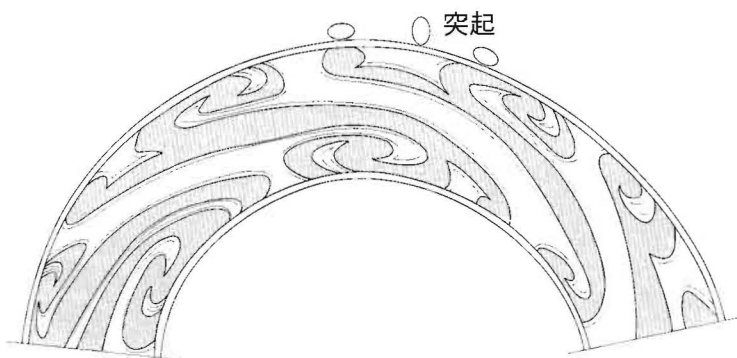
62 ('83・D-6・Ⅲc)



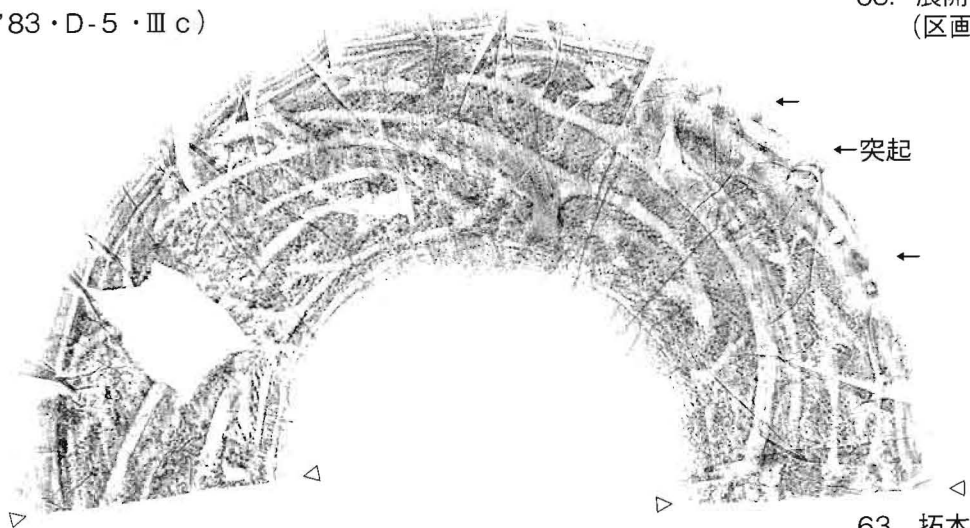
第26図 明戸遺跡 鉢Ⅰ類 (60~62)



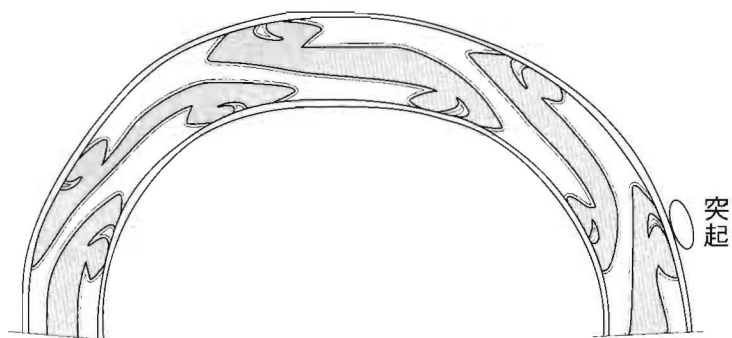
63 ('83・D-5・Ⅲc)



63. 展開図
(区画文Ⅰ3)



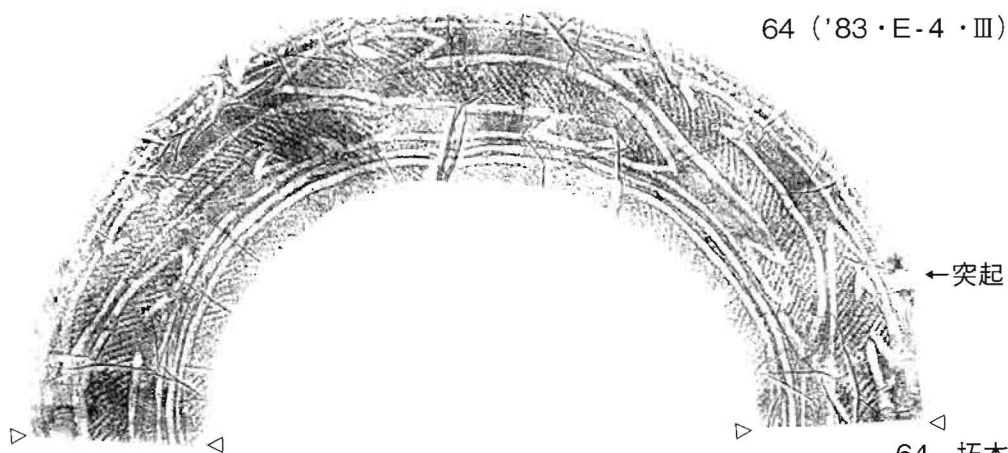
63. 拓本



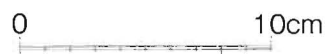
64. 展開図
(区画文Ⅰ2)



64 ('83・E-4・Ⅲ)



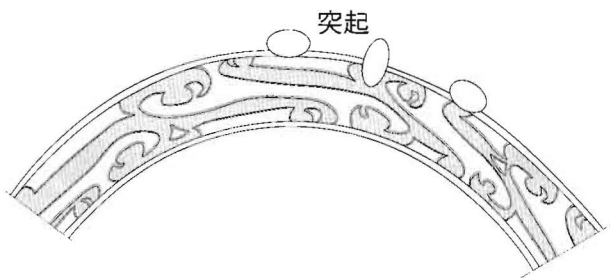
64. 拓本



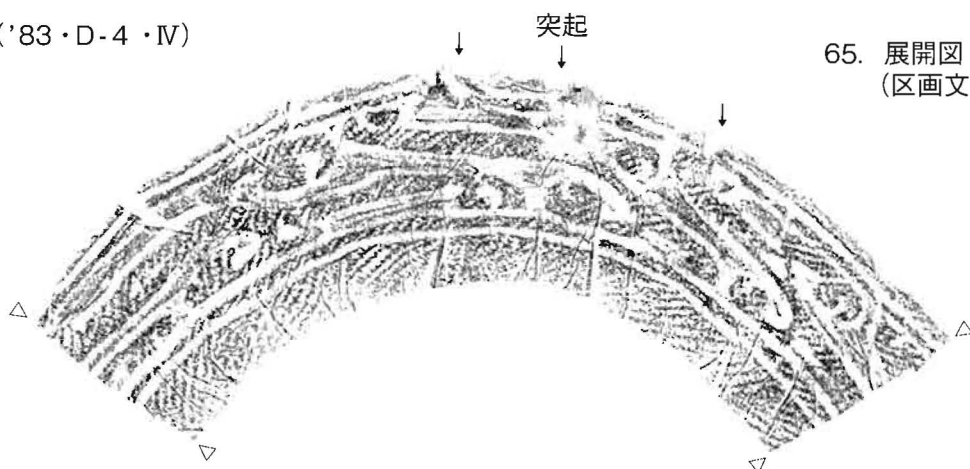
第27図 明戸遺跡 鉢Ⅰ類 (63・64)



65 ('83・D-4・Ⅳ)



65. 展開図
(区画文Ⅰ3)



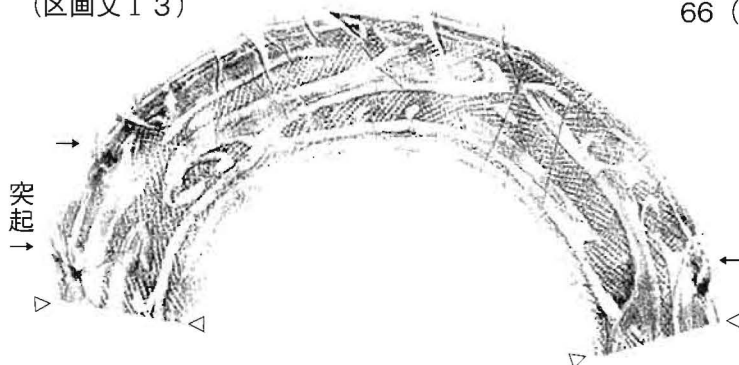
65. 拓本



66. 展開図
(区画文Ⅰ3)

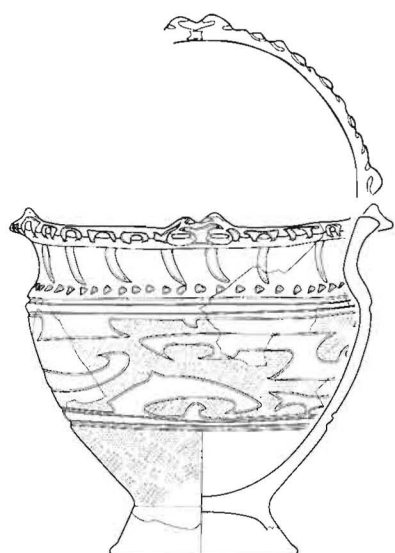


66 ('83・C-7・Ⅲb)

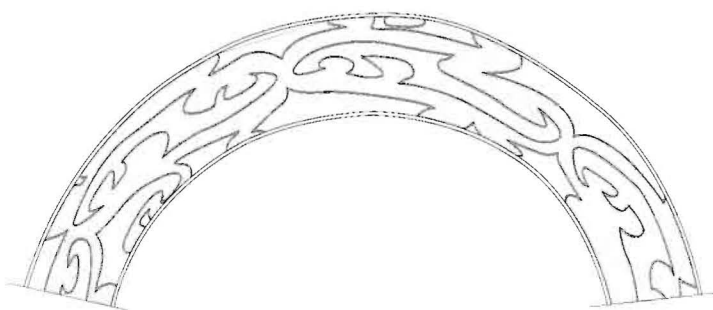


66. 拓本

0 10cm



67 (未注記・未注記・未注記)



67. 展開図
(配置文Ⅲ 7)



67. 拓本

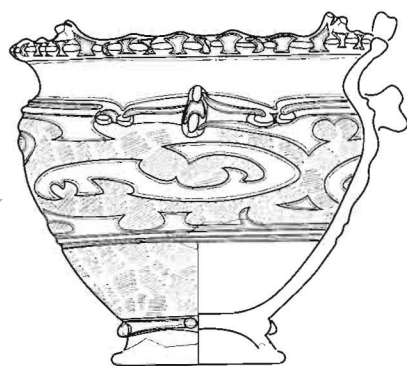


68. 展開図
(配置文Ⅲ 7)

突起→



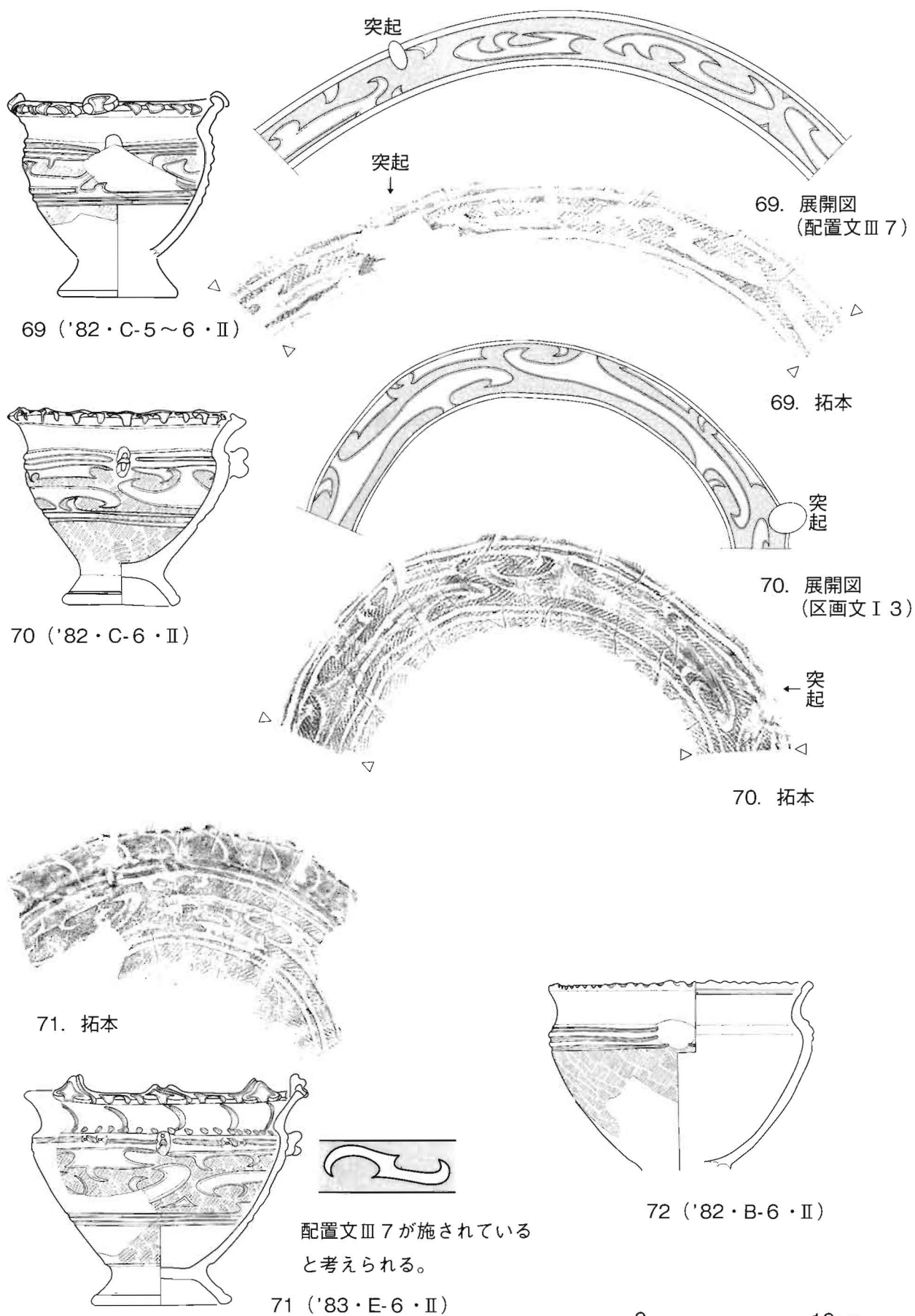
▽ 68. 拓本



68 ('82・B-5~6・Ⅱ)



第29図 明戸遺跡 鉢Ⅰ類 (67・68)

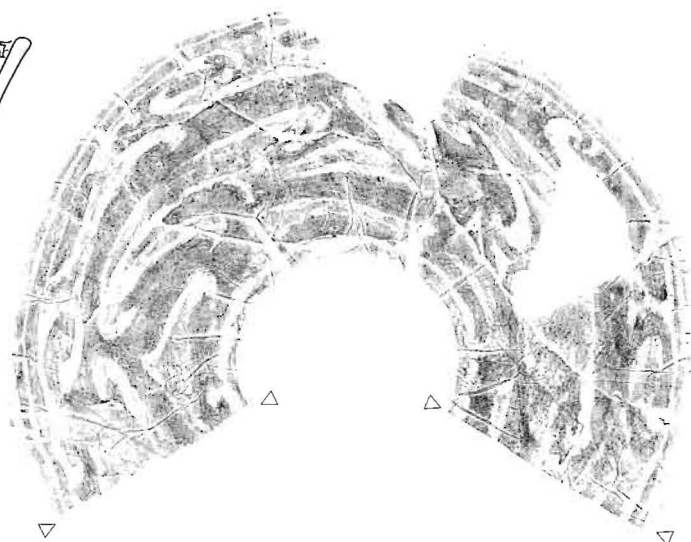


第30図 明戸遺跡 鉢Ⅰ類 (69~72)



73 ('82・C-5~6・Ⅱ)

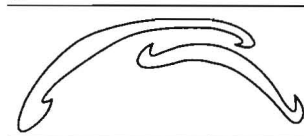
0 10cm



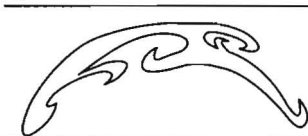
73. 拓本

・73の配置文

a

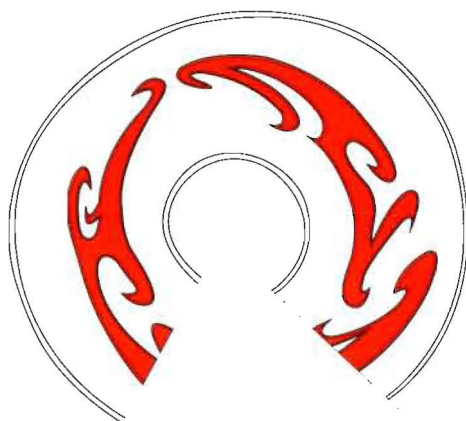


b

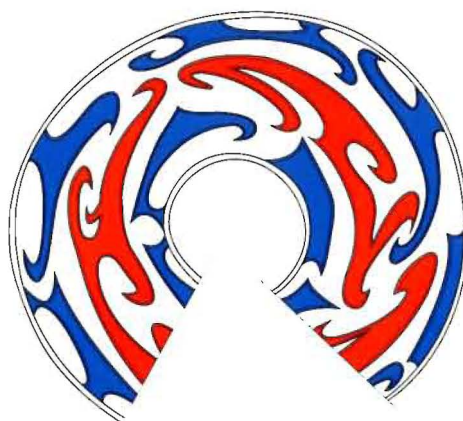


横C字状のモチーフaに
付加的要素を加えてbとなる。

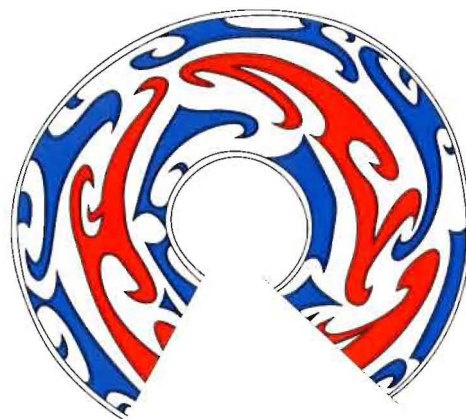
・73の文様の描き方



①配置文Ⅲ7を2単位施す。



②大型の充填文をうめる。

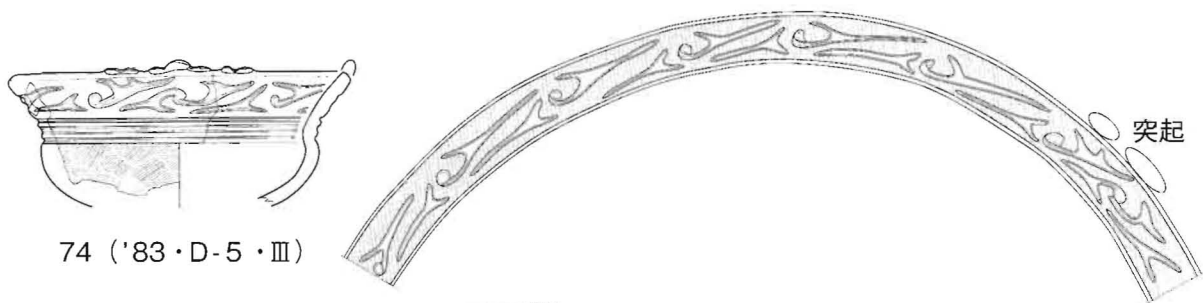


③細かな充填文をうめる。

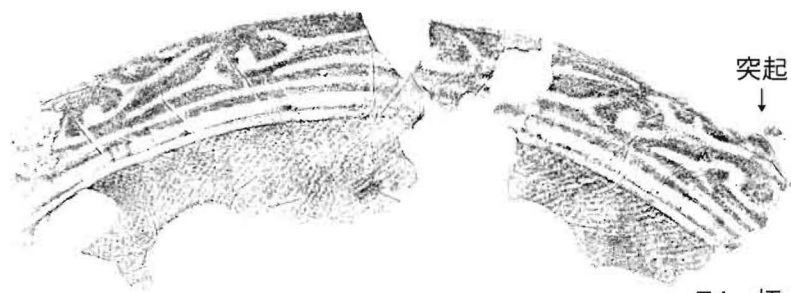


④充填文のみ抜き出したもの。

第31図 明戸遺跡 鉢Ⅰ類(73)

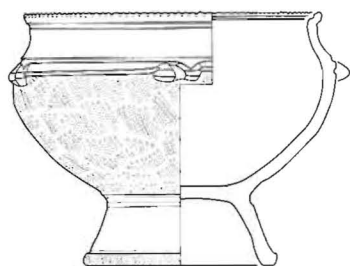


74 ('83・D-5・Ⅲ)

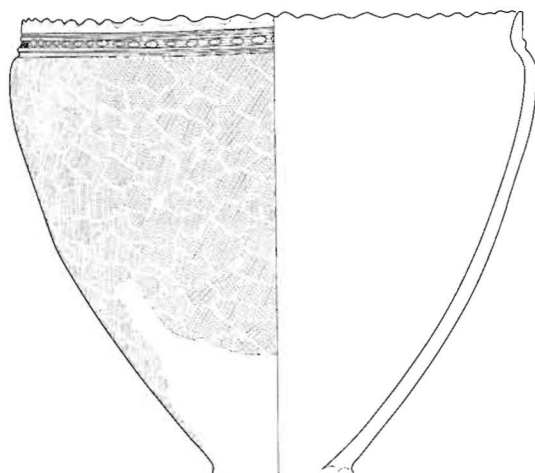


74. 展開図
(配置文V)

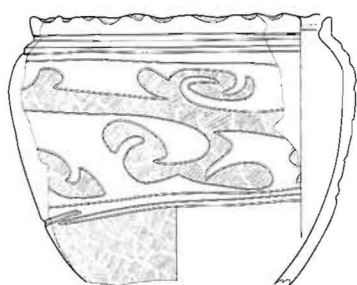
74. 拓本



75 ('83・D-5・Ⅱ)



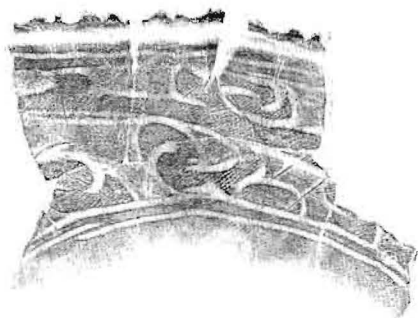
76 ('82・C-6・Ⅱ)



77 (未注記・C-4～6・未注記)



78 (未注記・未注記・未注記)

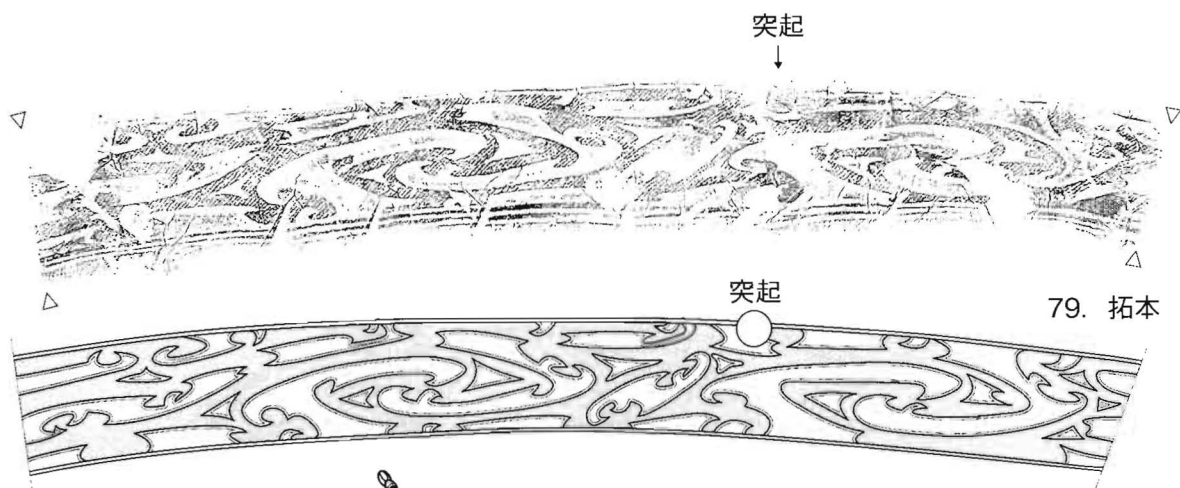


77. 拓本

・77の文様
区画文Ⅰ3が施される
と考えられる。

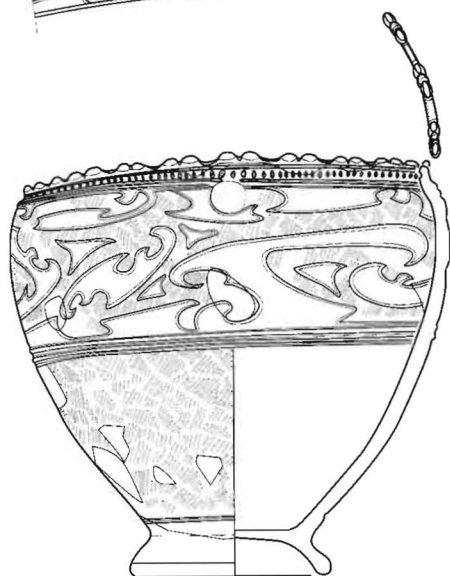


第32図 明戸遺跡 鉢Ⅰ類(74・75)・Ⅱ類(76～78)



79. 拓本

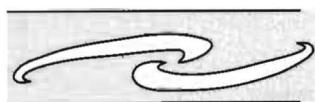
79. 展開図
(配置文Ⅲ 6)



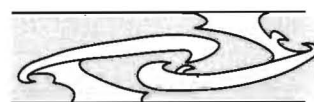
79 ('82・C-5・Ⅱ)

・79の配置文

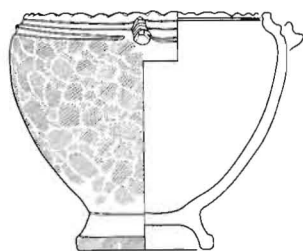
a



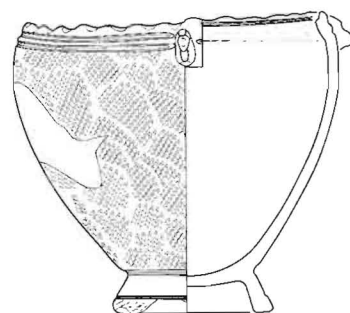
b



2単位1組となった横C字状の
モチーフによって描かれている。



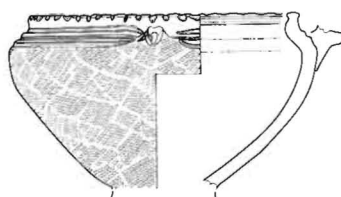
80 ('82・C-5・Ⅱ)



81 ('82・C-5・Ⅱ)



82 ('82・C-6・Ⅱ)



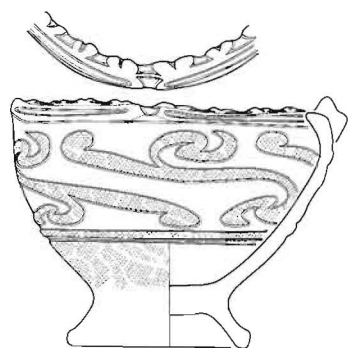
83 ('82・C-5・Ⅱ)



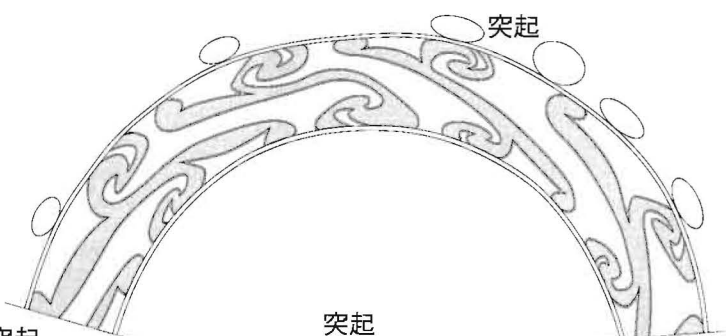
84 ('82・C-5・Ⅱ)



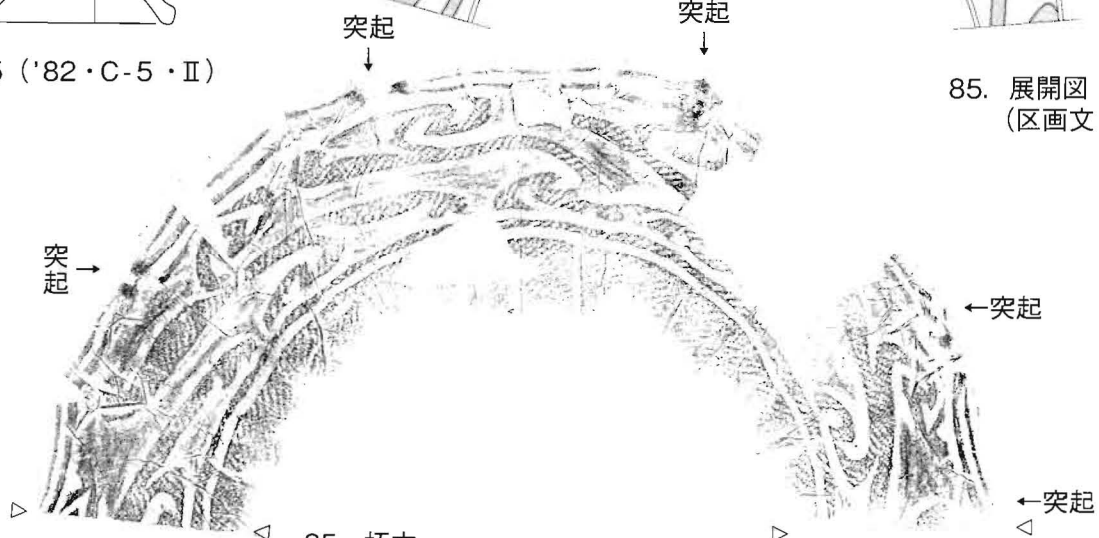
第33図 明戸遺跡 鉢Ⅱ類 (79~84)



85 ('82・C-5・Ⅱ)



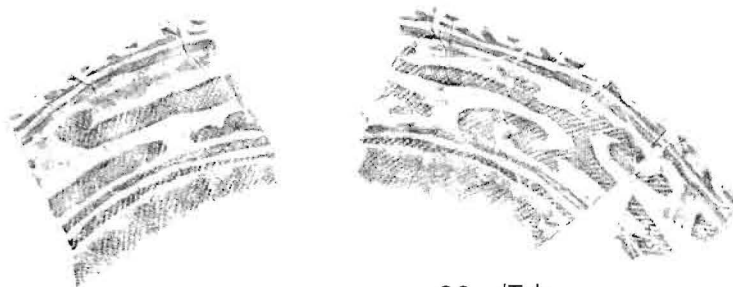
85. 展開図
(区画文Ⅰ3)



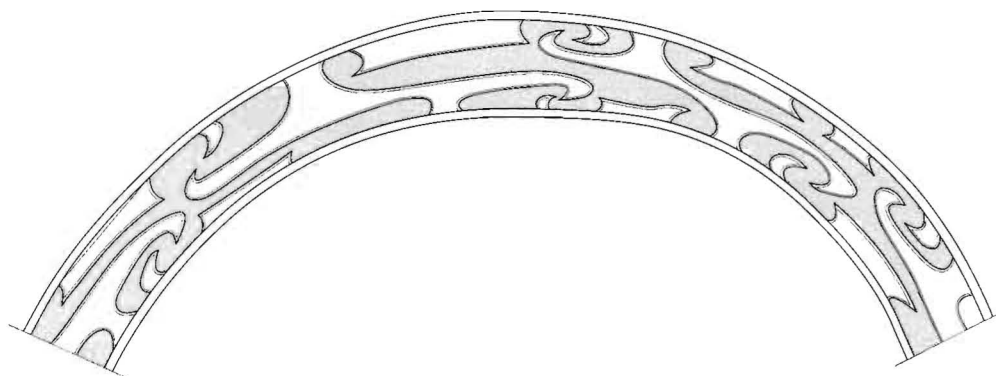
85. 拓本



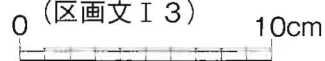
86 ('83・D-5・Ⅲc)



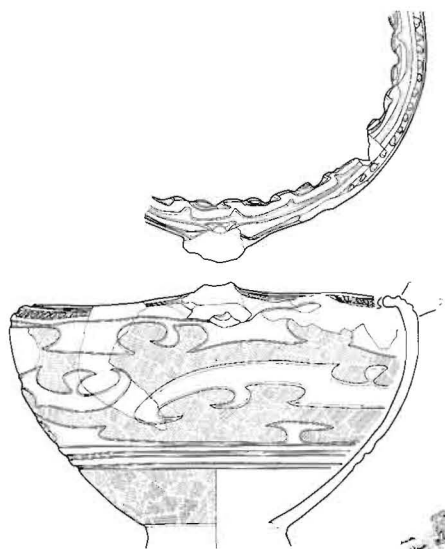
86. 拓本



86. 展開図
(区画文Ⅰ3)

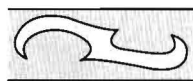


第34図 明戸遺跡 鉢Ⅱ類 (85・86)



・87の文様

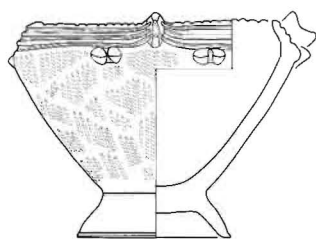
配置文Ⅲ 7が施されると考えられる。



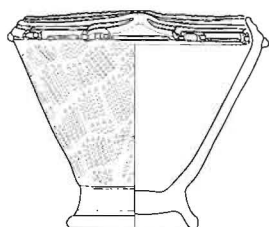
87 (未注記・C-4～6・未注記)



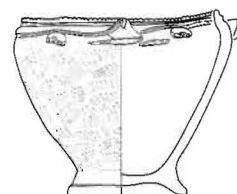
87. 拓本



88 ('83・D-5・Ⅲa)



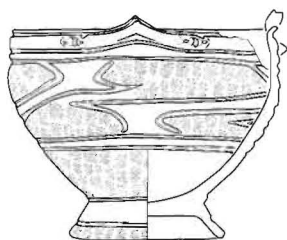
89 ('82・C-5・Ⅱ)



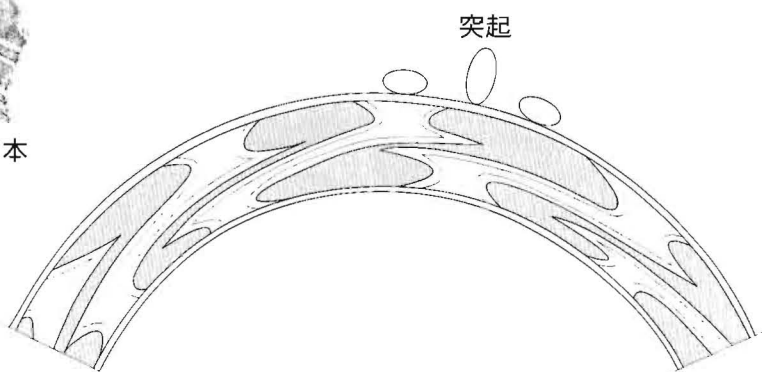
90 ('82・C-4・Ⅱ)



91. 拓本



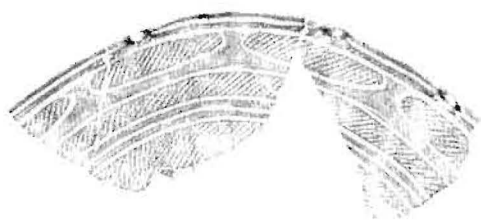
91 ('83・D-6・Ⅱ)



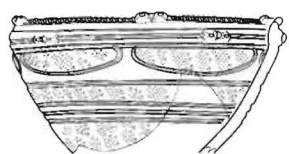
91. 展開図
(区画文Ⅰ 1)



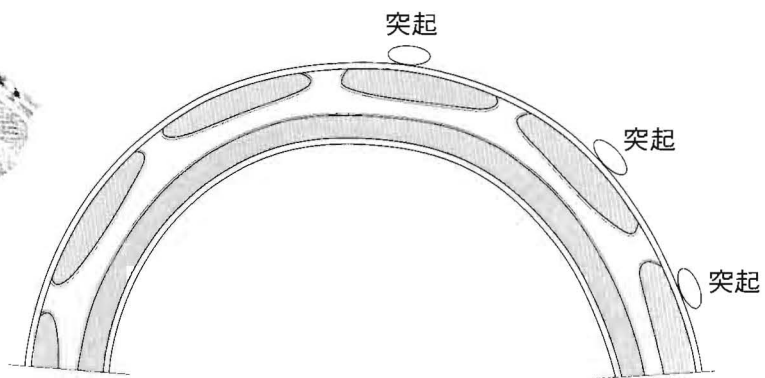
第35図 明戸遺跡 鉢Ⅱ類 (87～91)



92. 拓本



92 (未注記・D-5・Ⅱ)



92. 展開図
(その他)



93 ('83・D-4・Ⅲa)



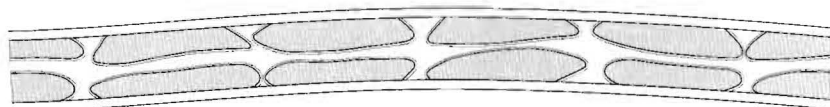
94 ('83・E-5・Ⅲ)



95 ('82・B-5・Ⅱ)



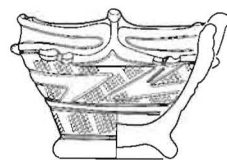
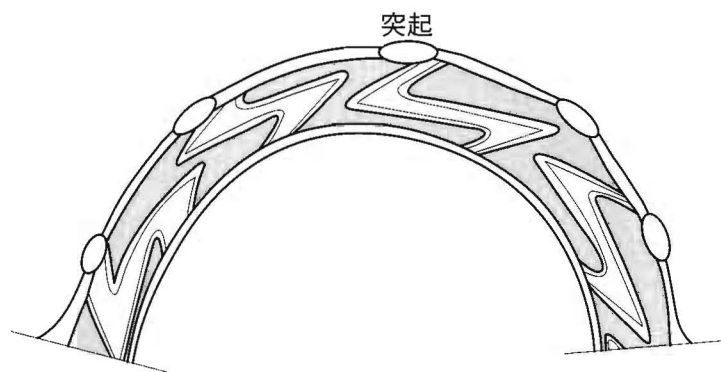
95. 拓本



95. 展開図
(その他)



第36図 明戸遺跡 鉢Ⅱ類 (92~95)

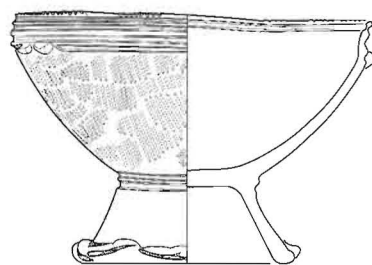


96 ('82・B-6・未注記)

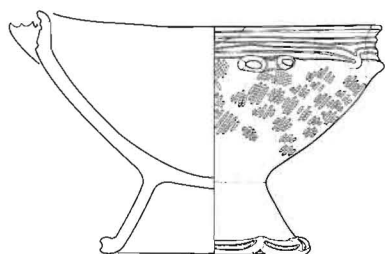
96. 展開図
(区画文 I 5)



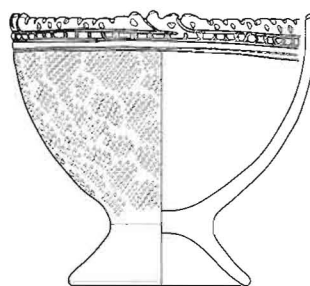
97 ('83・D-4・Ⅲ)



98 ('83・E-4・Ⅲ)



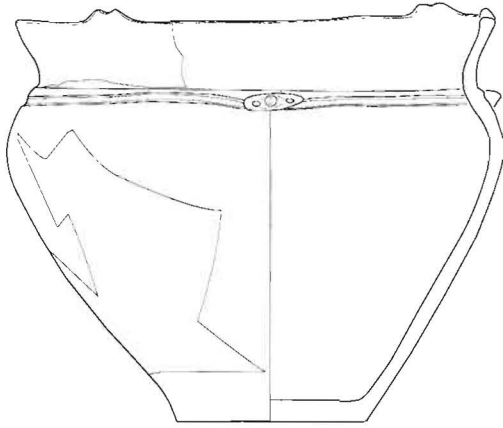
99 ('83・D-5・Ⅲ)



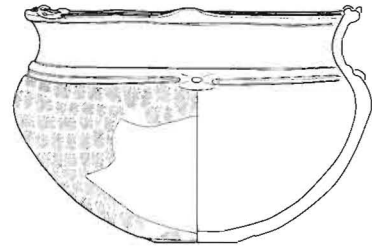
100 ('83・C-9・Ⅳ)



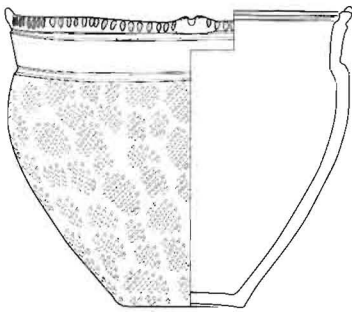
第37図 明戸遺跡 鉢Ⅱ類 (96・97)・Ⅲ類 (100)、浅鉢Ⅳ類 (98・99)



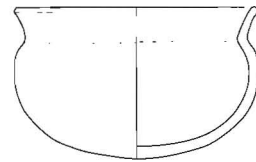
101 ('82・C-5・Ⅱ)



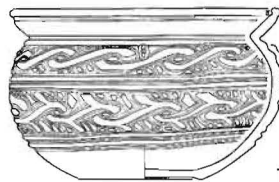
102 ('82・C-4・Ⅱ)



103 ('83・D-4・Ⅲa)



104 (未注記・未注記・未注記)

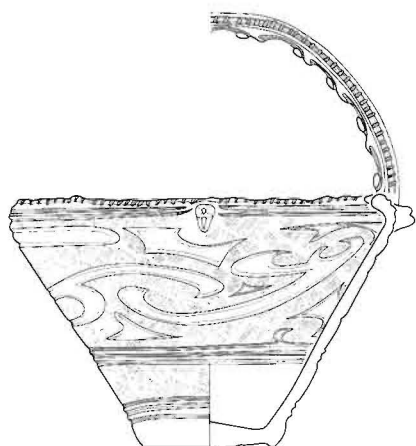


105. 拓本
(区画文Ⅳ)

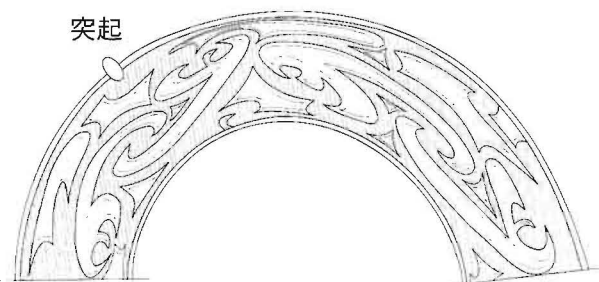
105 ('82・C-6・Ⅱ)



第38図 明戸遺跡 鉢Ⅳ類 (101~105)



突起

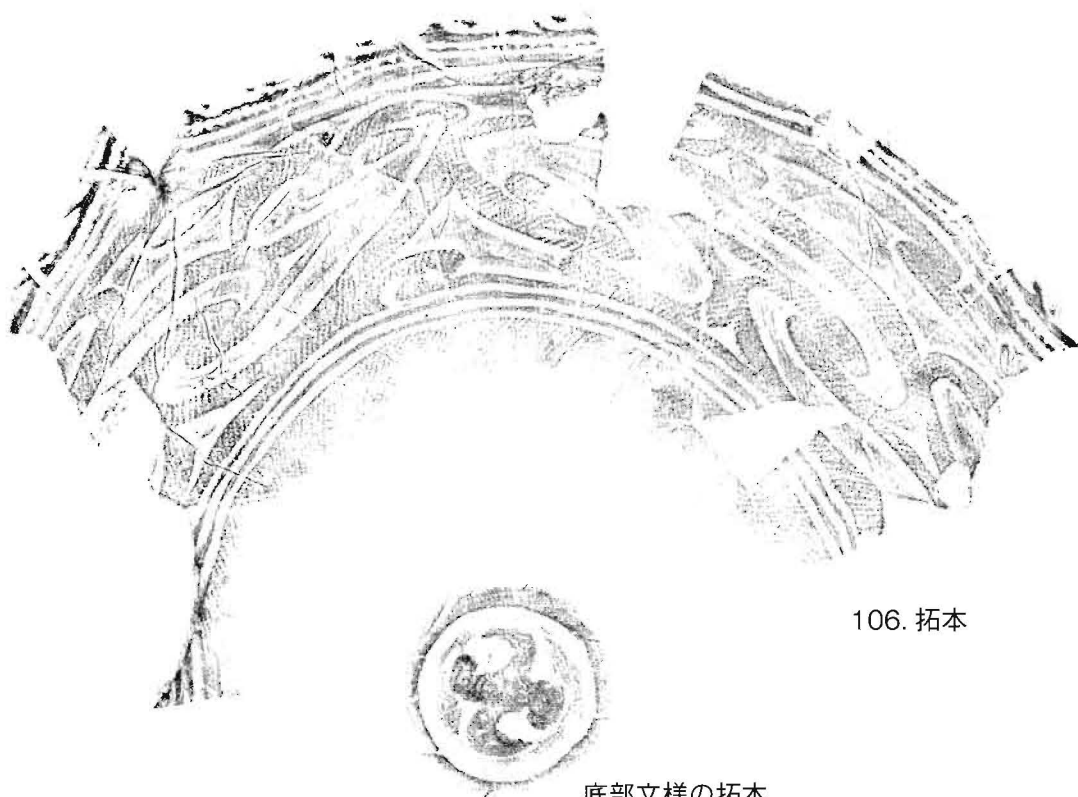


106 ('83・D-5～6・Ⅲ)

106. 展開図
(配置文Ⅲ 6)



底部文様

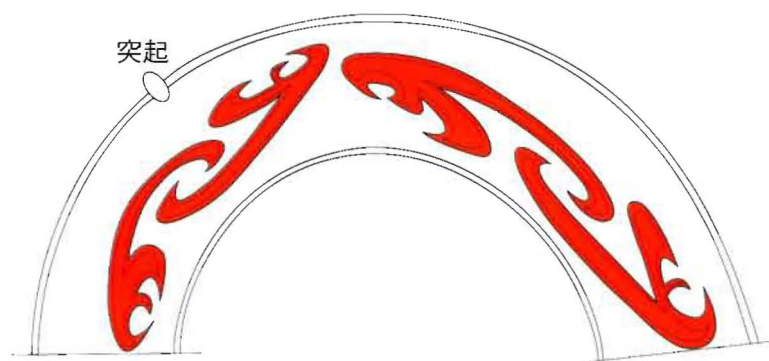


106. 拓本

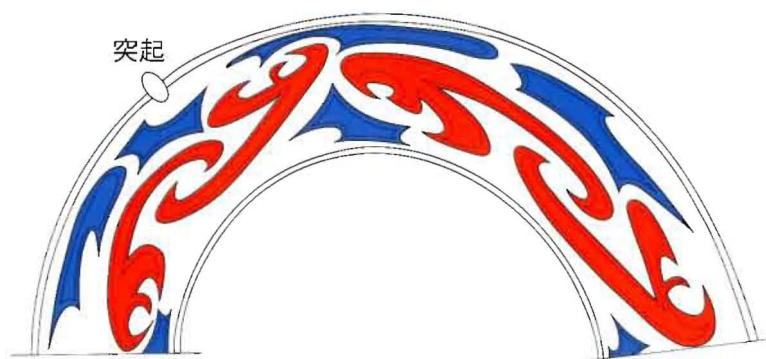
底部文様の拓本

0 10cm

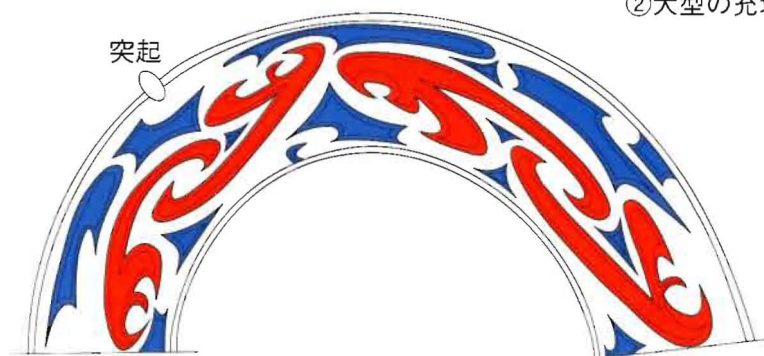
第39図 明戸遺跡 鉢Ⅴ類 (106)



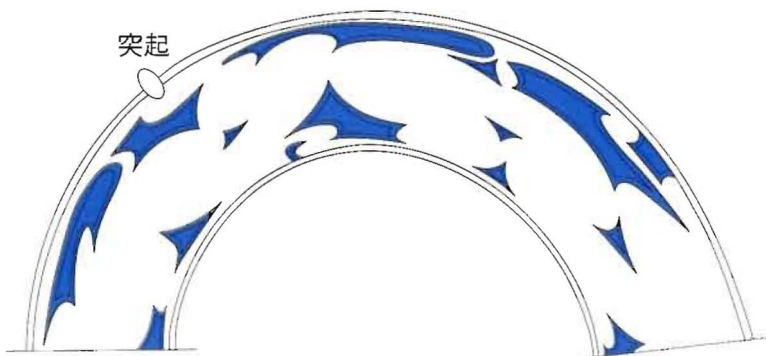
①配置文Ⅲ 6 を2単位施す。



②大型の充填文をうめる。

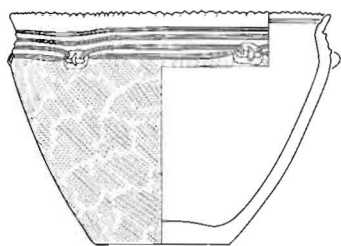


③細かな充填文をうめる。

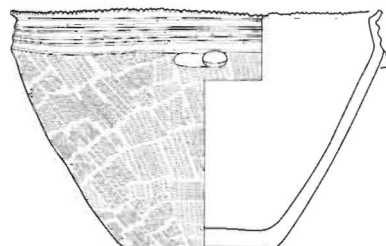


④充填文のみを抜き出したもの。

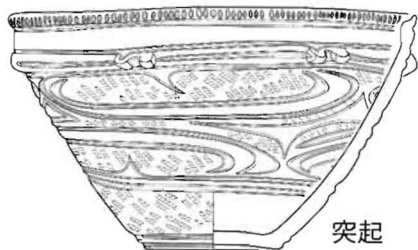
第40図 明戸遺跡 (106の文様の描き方)



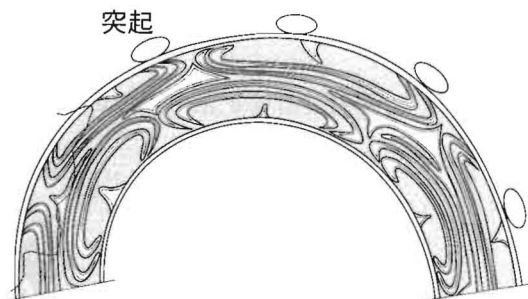
107 ('83・D-4・Ⅱ)



108 (未注記・未注記・未注記)

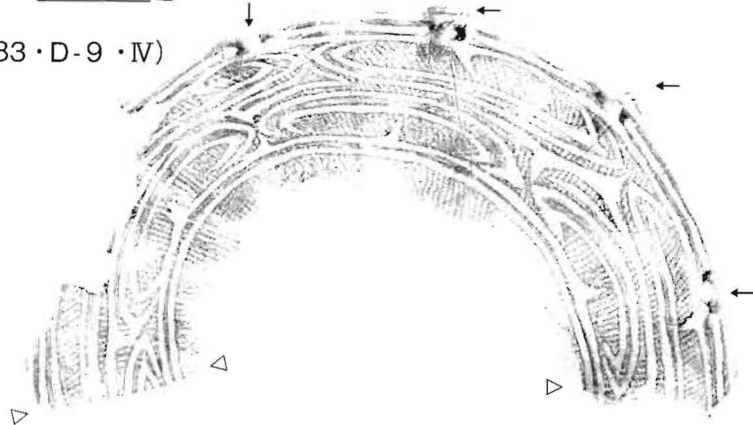


109 ('83・D-9・Ⅳ)

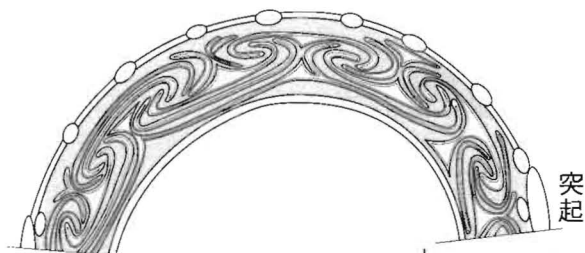


突起

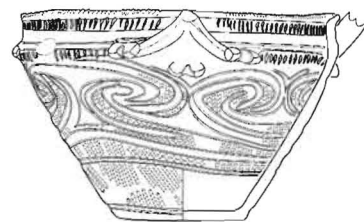
109. 展開図
(配置文Ⅲ 6)



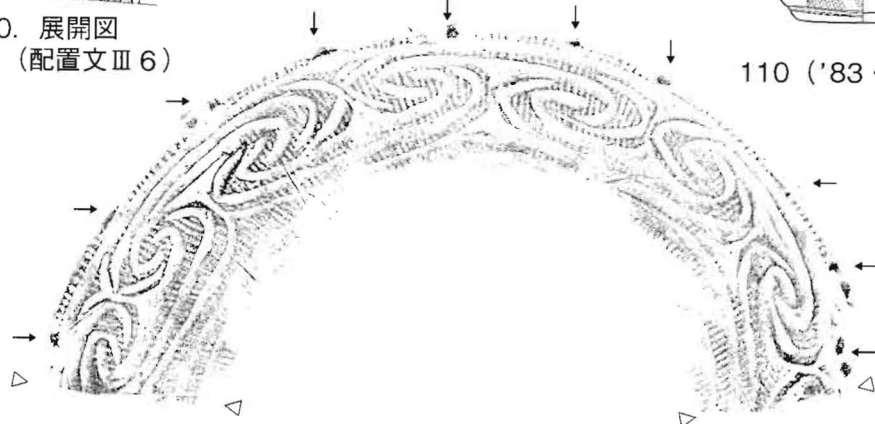
109. 拓本



110. 展開図
(配置文Ⅲ 6)



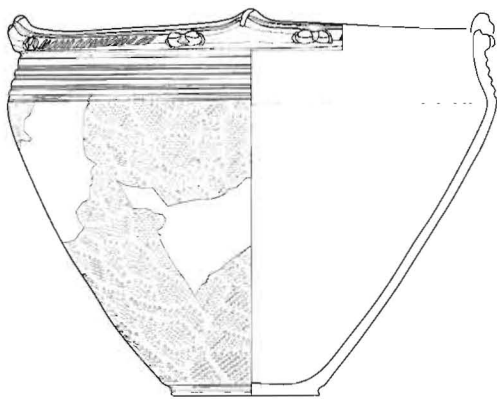
110 ('83・D-9・Ⅳ)



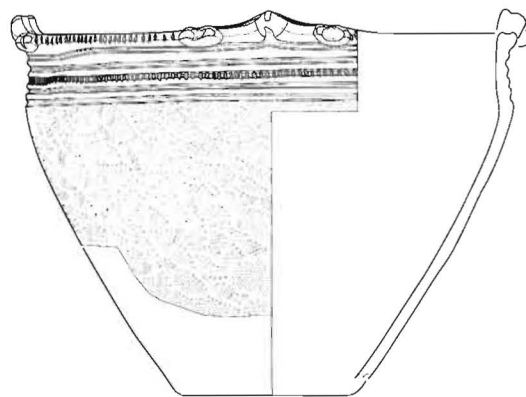
110. 拓本

0 10cm

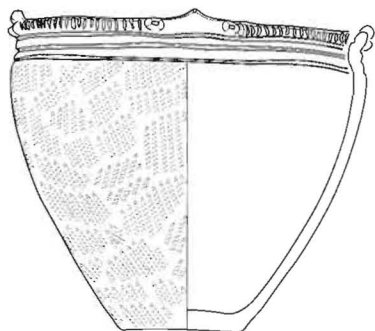
第41図 明戸遺跡 鉢Ⅴ類 (107~110)



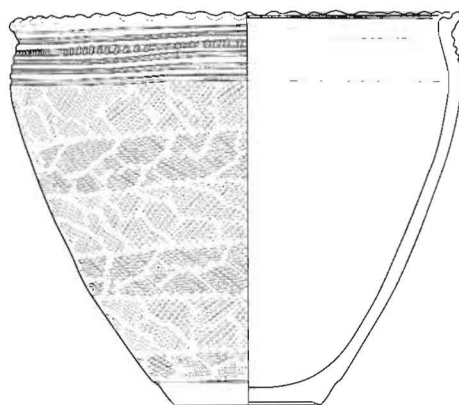
111 ('82・B-6・Ⅱ)



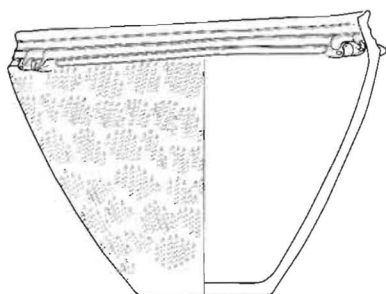
112 ('83・C-5～6・Ⅱ)



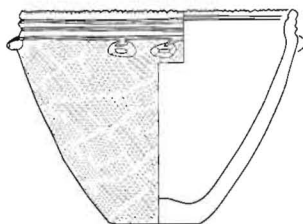
113 ('83・C-10・Ⅱ)



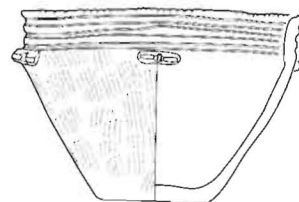
114 ('82・C-6・Ⅱ)



115 ('82・B-5・Ⅱ)



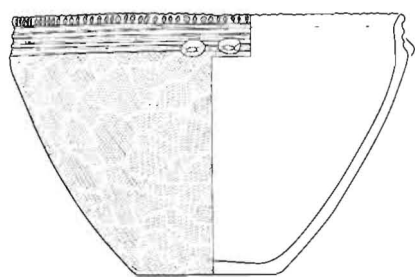
116 ('83・E-4・Ⅲb)



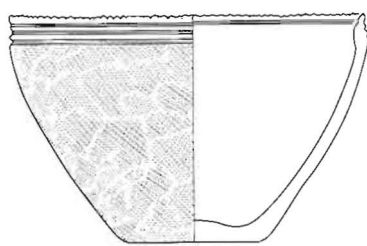
117 ('83・E-5・Ⅲc)



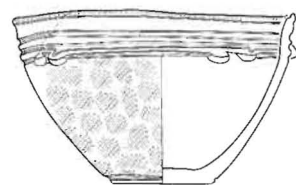
第42図 明戸遺跡 鉢Ⅴ類 (111～117)



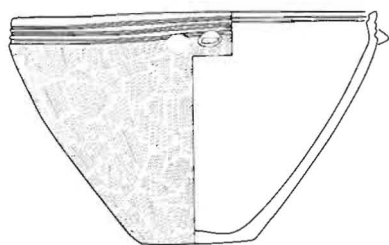
118 ('82・B-6・Ⅱ)



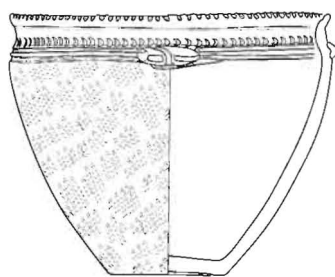
119 ('83・E-4・未注記)



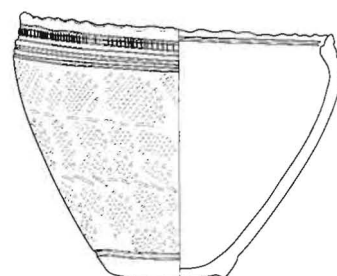
120 ('83・D-5・Ⅲa)



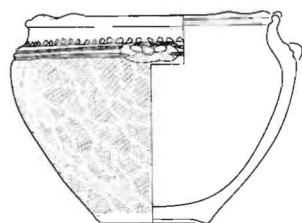
121 ('83・E-4・Ⅱ)



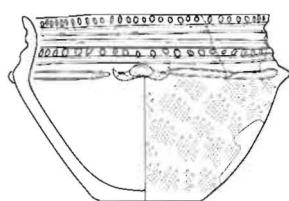
122 ('83・E-4・Ⅲ)



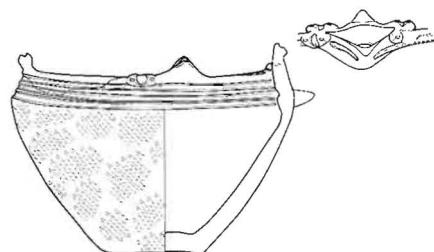
123 ('82・C-6・Ⅱ)



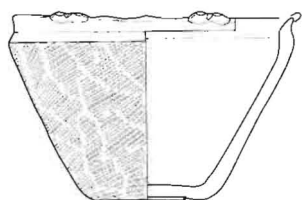
124 ('83・E-4・Ⅲ)



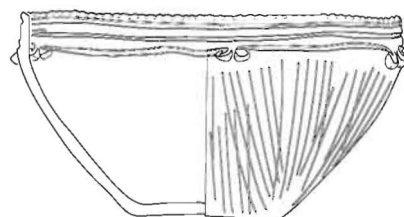
125 ('83・D-5・Ⅲa)



126 ('83・D-5・Ⅲa)



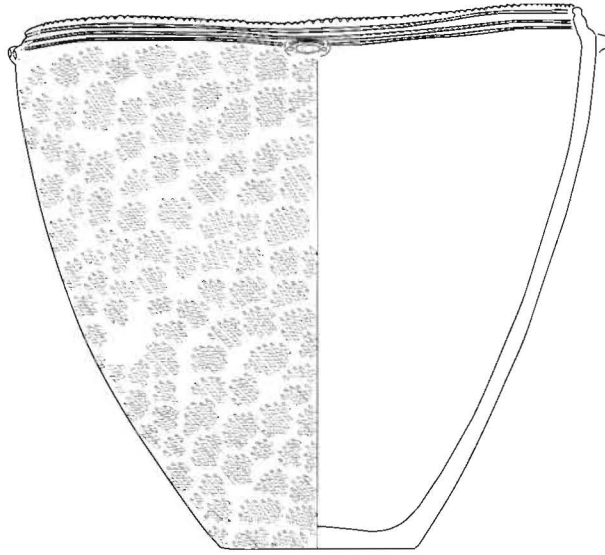
127 ('83・E-5・Ⅳ)



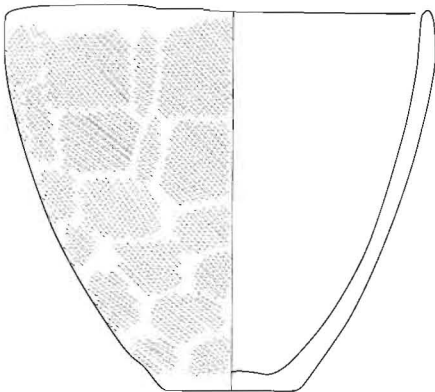
128 ('82・C-5・Ⅱ)

0 10cm

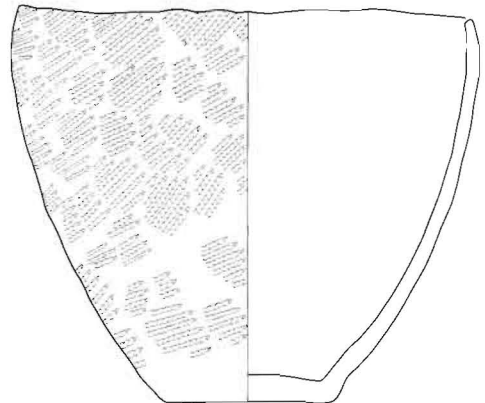
第43図 明戸遺跡 鉢V類 (118~128)



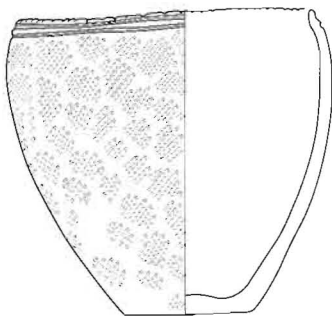
129 ('83・E-5・未注記)



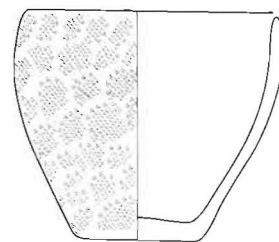
130 ('83・E-4・Ⅲb)



131 ('83・E-4・Ⅲ)



132 ('83・D-4・Ⅲb)



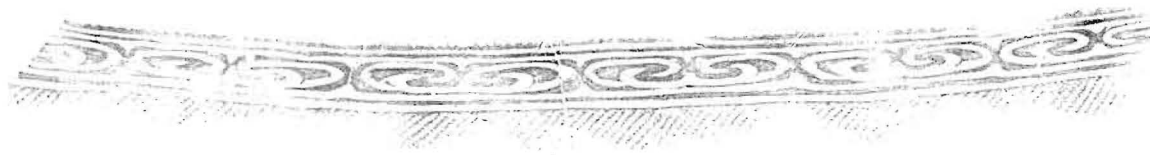
133 ('82・C-4・Ⅱ)

0 10cm

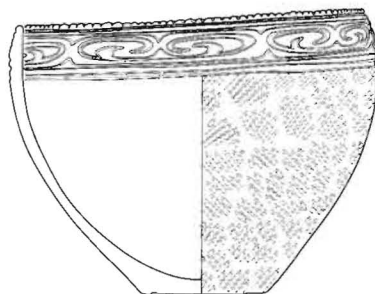
第44図 明戸遺跡 鉢Ⅴ類 (129) ・Ⅵ類 (130~133)



134. 展開図
(配置文Ⅲ 5)



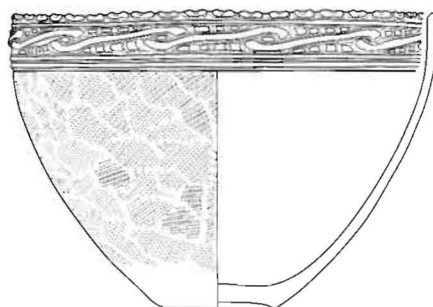
134. 拓本



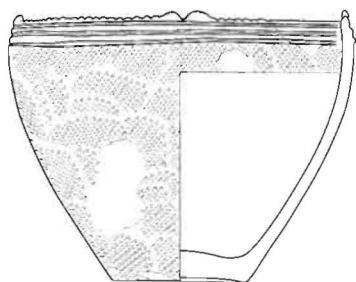
134 ('83・D-4・Ⅳ)



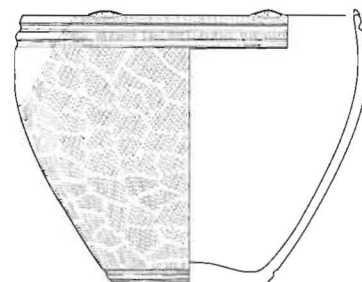
135. 拓本
(区画文Ⅳ)



135 ('82・C-9・Ⅱ)



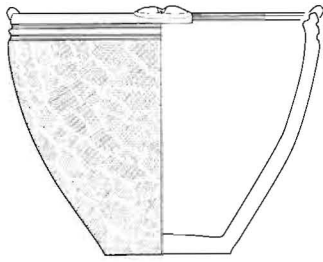
136 ('82・C-5・Ⅱ)



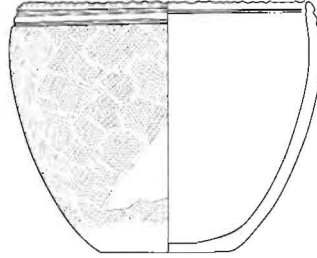
137 ('83・D-5・Ⅲc)



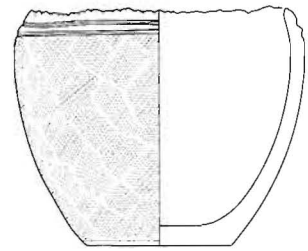
第45図 明戸遺跡 鉢Ⅵ類 (134~137)



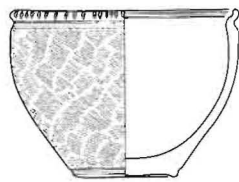
138 ('83・E-4・Ⅲ)



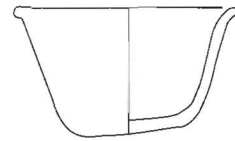
139 ('83・D-4・Ⅳ)



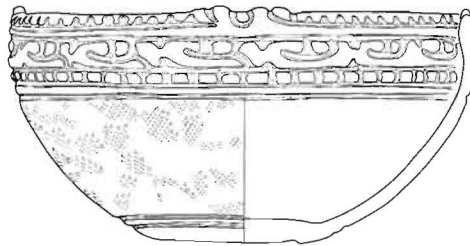
140 ('82・C-4・Ⅱ)



141 ('83・D-5・Ⅱ)



142 ('83・D-7・Ⅲc)

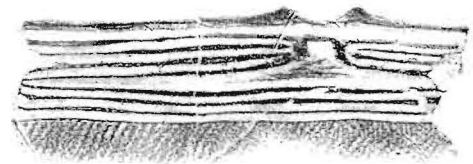


143. 拓本

143 ('83・C-9・Ⅳ)



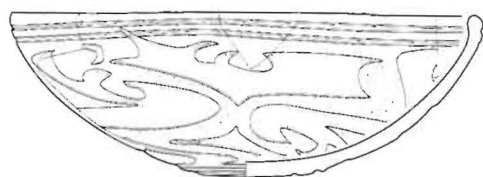
144 ('82・C-6・Ⅱ)



144. 拓本
(配置文Ⅵ)



第46図 明戸遺跡 鉢Ⅵ類 (138~144)



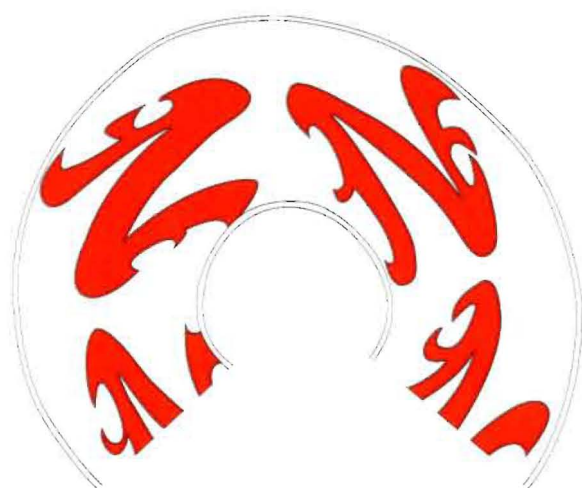
145 ('82・C-5・Ⅱ)

0 10cm



・145の文様の描き方

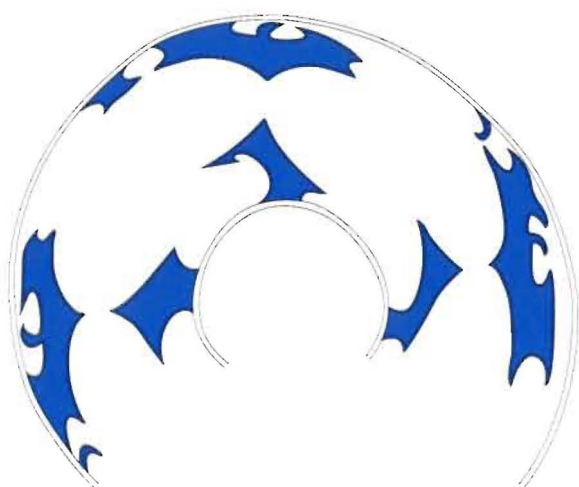
145. 拓本



①配置文Ⅳ4を3単位施す。

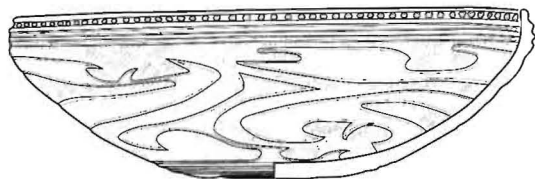


②充填文をうめる。



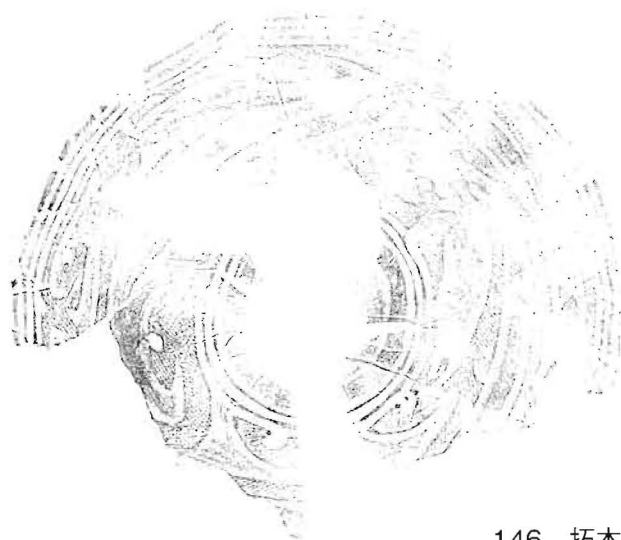
③充填文のみを抜き出したもの。

第47図 明戸遺跡 浅鉢Ⅰ類 (145)



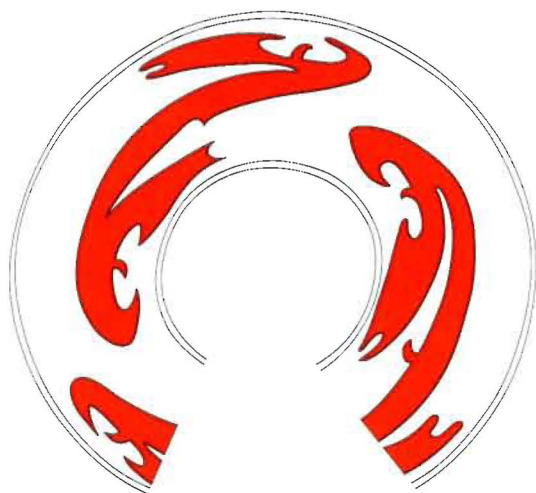
146 ('82・B-5～6・Ⅱ)

0 10cm

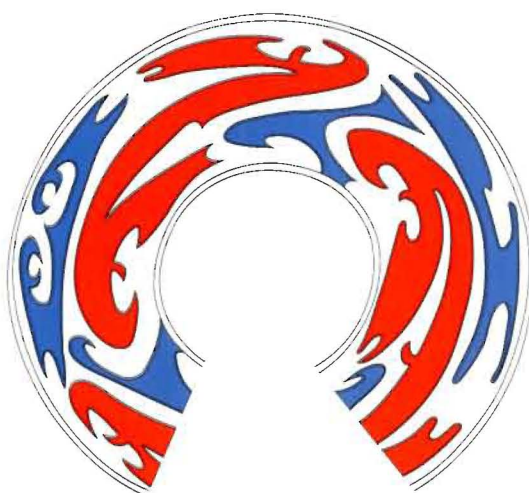


146. 拓本

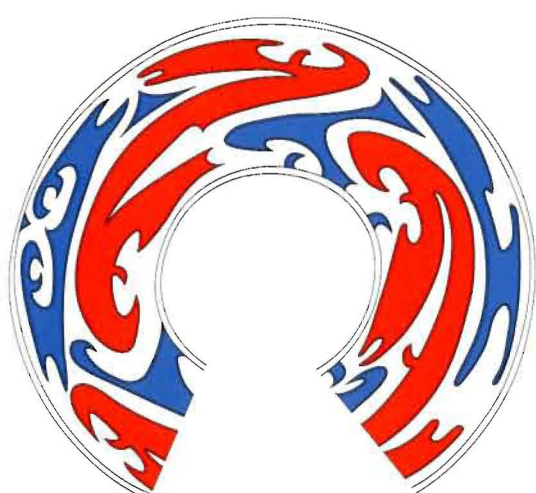
・ 146 の文様の描き方



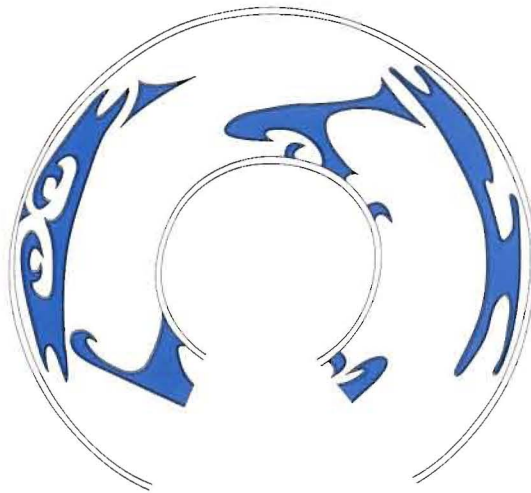
①配置文Ⅳ 1 を 3 単位施す。



②大型の充填文をうめる。

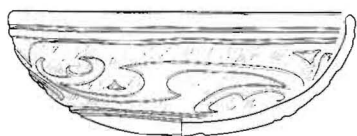


③細かな充填文をうめる。



④充填文のみを抜き出したもの。

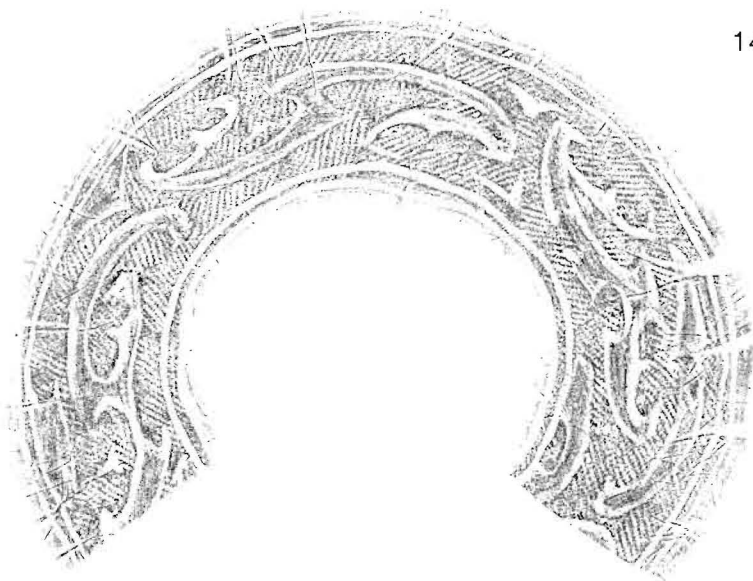
第48図 明戸遺跡 浅鉢Ⅰ類 (146)



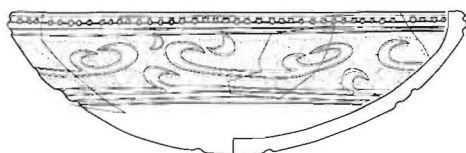
147 ('82・C-6・Ⅱ)



147. 展開図
(配置文Ⅲ 7)



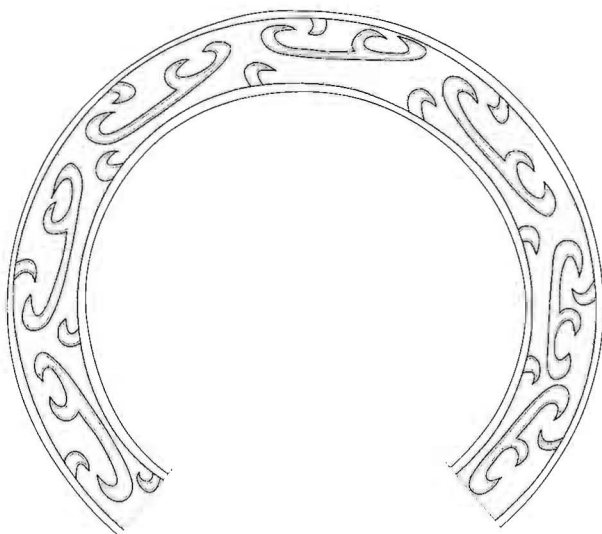
147. 拓本



148 ('83・C-6・Ⅱ)



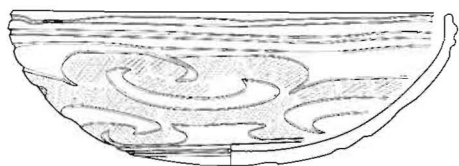
148. 拓本



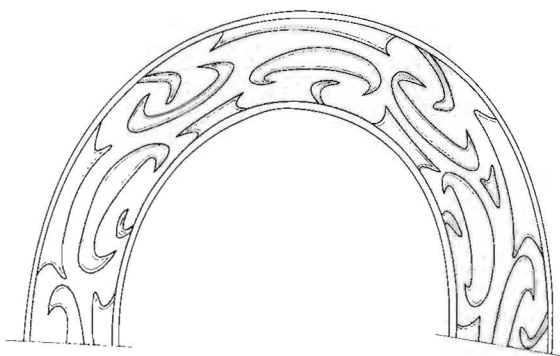
148. 展開図
(配置文Ⅲ 4)

0 10cm

第49図 明戸遺跡 浅鉢Ⅰ類 (147・148)



149 ('82・C-5・Ⅱ)



149. 展開図
(配置文Ⅲ 2)



149. 拓本



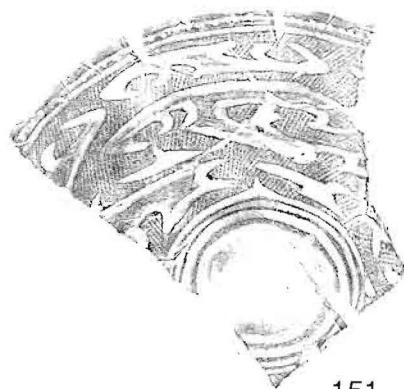
150 (未注記・C-4～6・未注記)



151 ('83・D-6・Ⅲ)



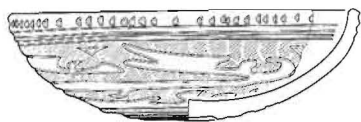
150. 拓本



151. 拓本



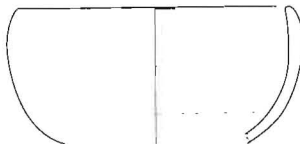
第50図 明戸遺跡 浅鉢Ⅰ類 (149～151)



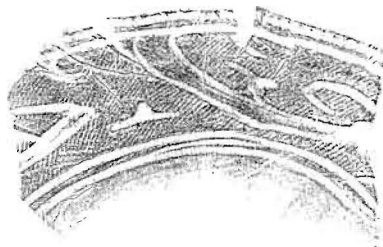
152 ('83・D-6・Ⅲ)



152. 拓本



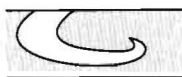
153 (未注記・未注記・未注記)



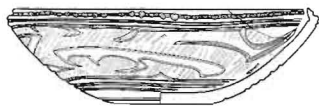
154. 拓本



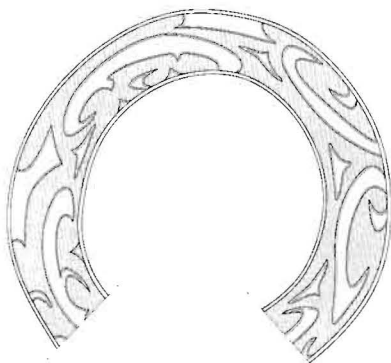
154 ('83・E-6・Ⅲ)



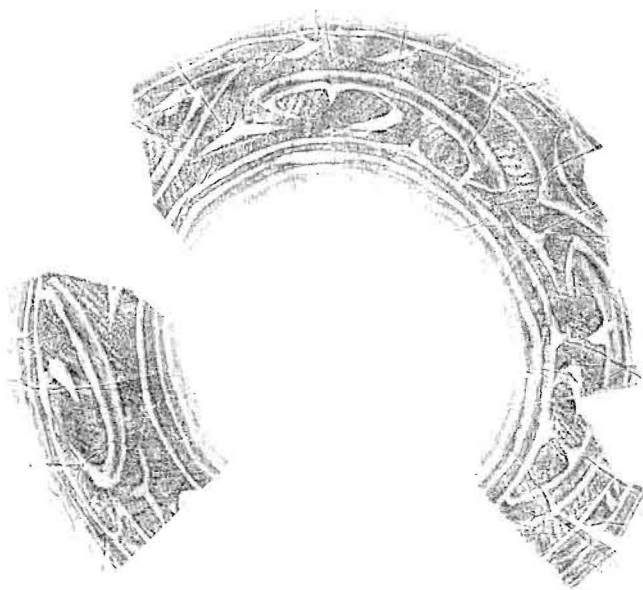
・154 の配置文
配置文Ⅲ 1 が施されると考えられる。



155 ('82・C-5～6・Ⅱ)



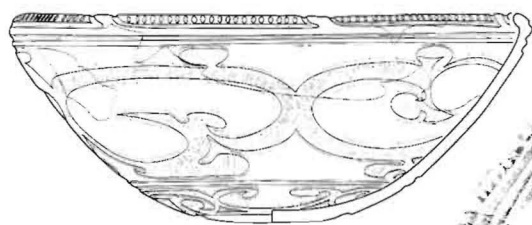
155. 展開図
(配置文Ⅲ 1)



155. 拓本

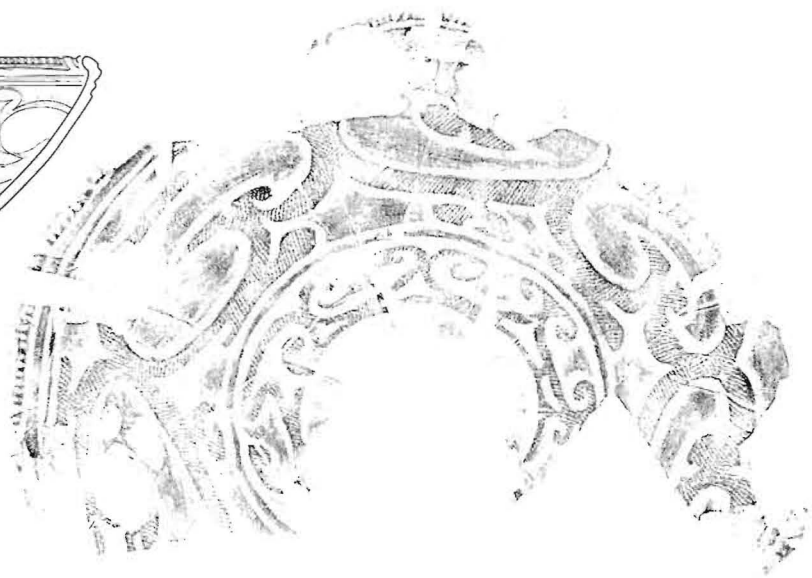


第51図 明戸遺跡 浅鉢Ⅰ類 (152～155)



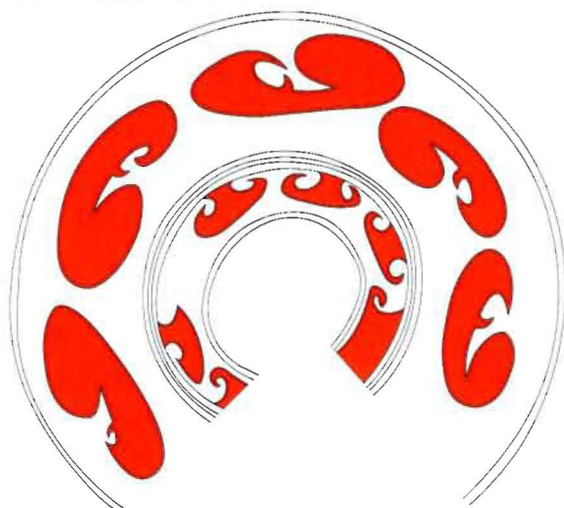
156 ('83・D-5・Ⅱ)

0 10cm

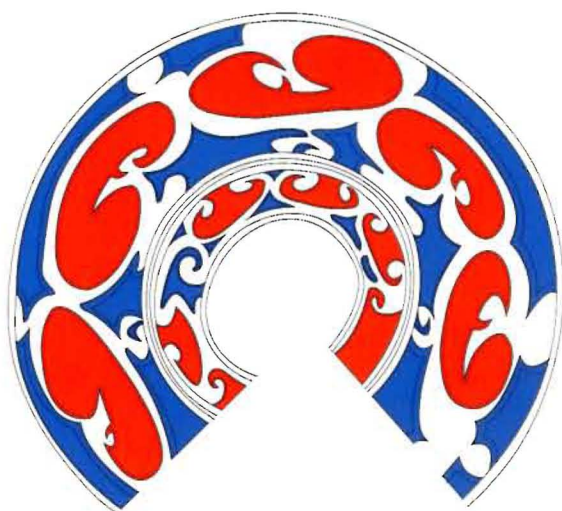


・ 156 の文様の描き方

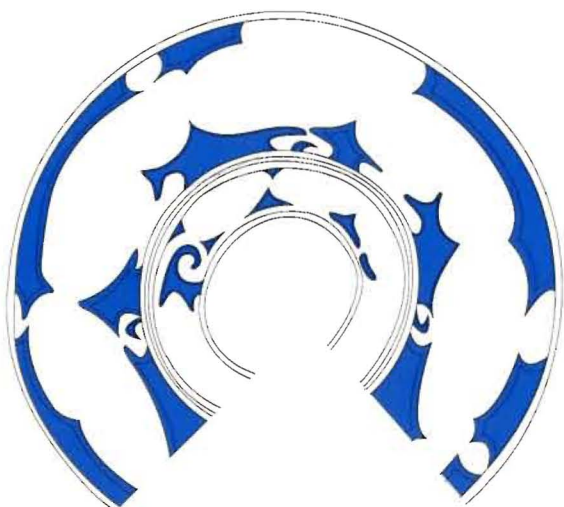
156. 拓本



① 1 段目に配置文Ⅲ 5 を 5 単位、
2 段目に 5 単位施す。

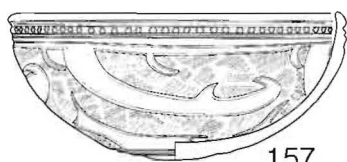


② 充填文をうめる。

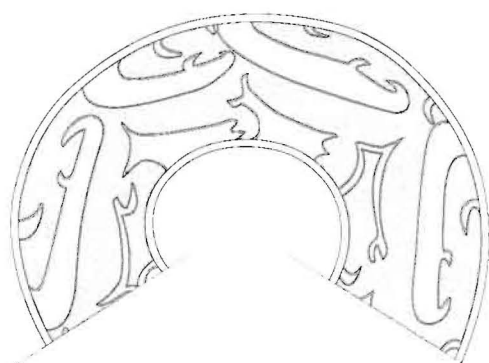


③ 充填文のみ抜き出したもの。

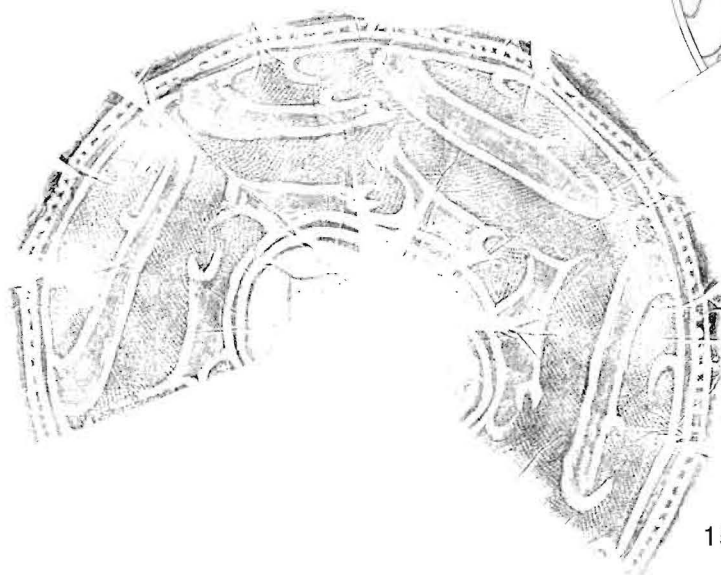
第52図 明戸遺跡 浅鉢Ⅰ類 (156)



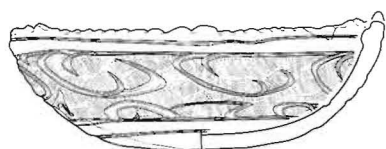
157
('82・B-6・Ⅱ)



157. 展開図
(配置文Ⅲ 1)



157. 拓本



158 ('83・D-4・Ⅲc)



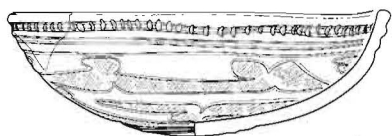
158. 展開図
(配置文Ⅲ 3)



158. 拓本

0 10cm

第53図 明戸遺跡 浅鉢Ⅰ類 (157・158)



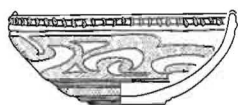
159 ('82・C-5~6・II)



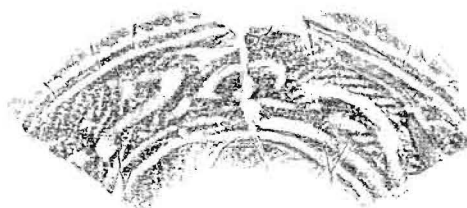
159. 展開図
(配置文IV3)



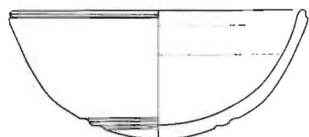
159. 拓本



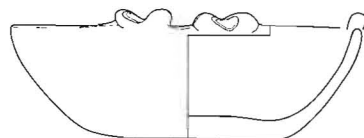
160 ('82・C-6・II)



160. 拓本



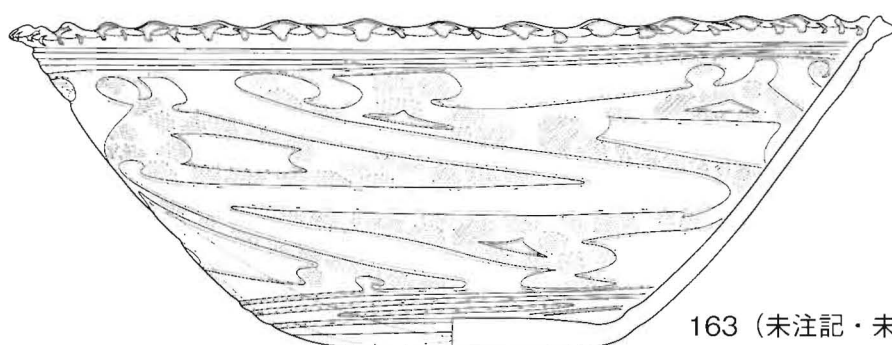
161 (未注記・D-5・未注記)



162 ('83・D-5・IIIc)



第54図 明戸遺跡 浅鉢I類 (159~161) ・II類 (162)



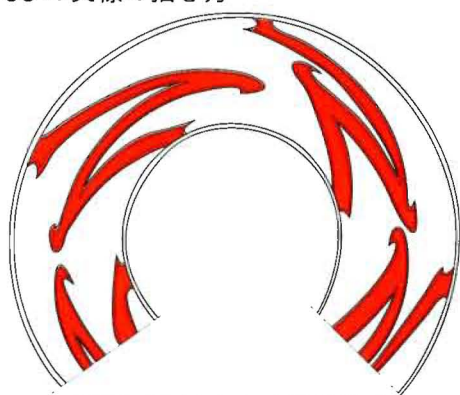
163 (未注記・未注記・未注記)

0 10cm

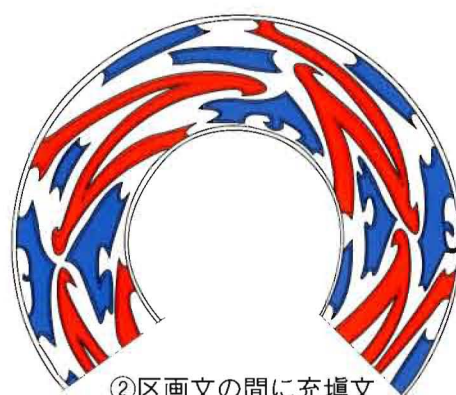


163. 拓本

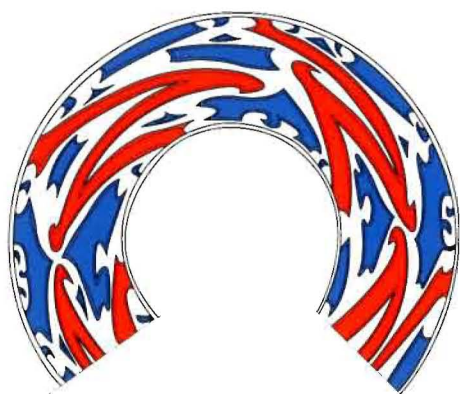
・163の文様の描き方



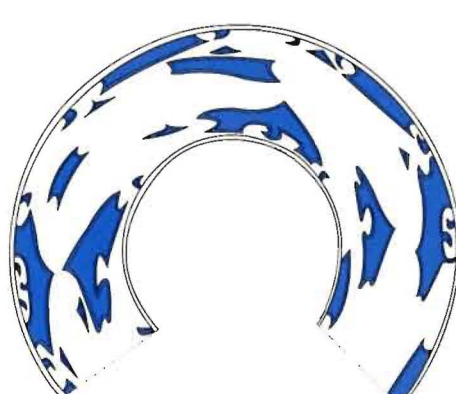
①区画文Ⅲ 1を3単位施す。



②区画文の間に充填文をうめる。

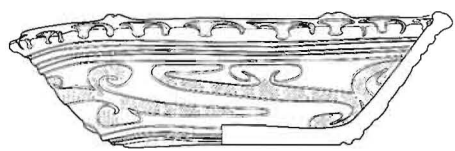


③さらに細かい充填文をうめる。



④充填文のみを抜き出したもの。

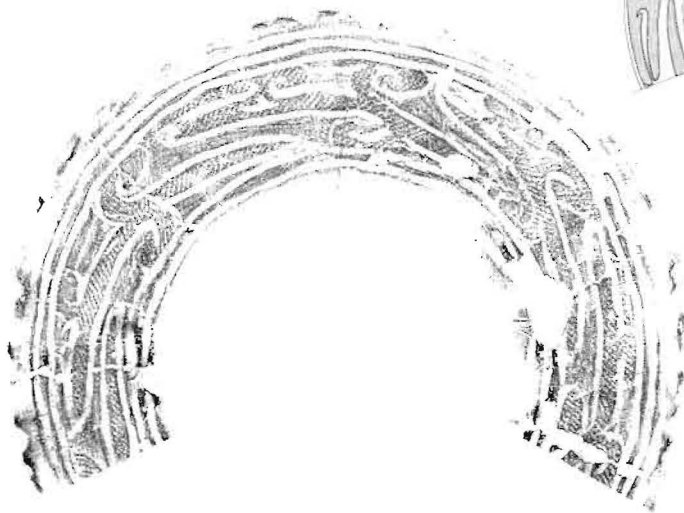
第55図 明戸遺跡 浅鉢Ⅱ類 (163)



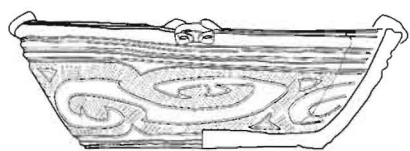
164 ('83・E-6・II)



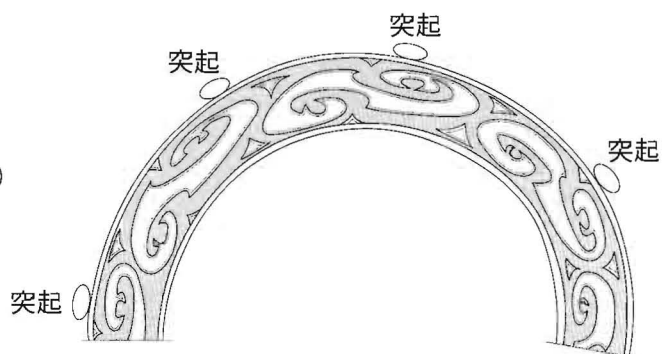
164. 展開図
(区画文 I 3)



164. 拓本



165 ('82・C-5・II)



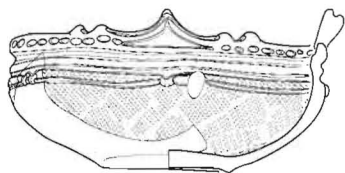
165. 展開図
(配置文 III 7)



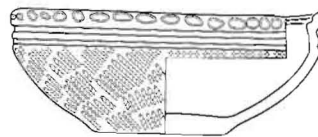
165. 拓本



第56図 明戸遺跡 浅鉢Ⅱ類 (164・165)

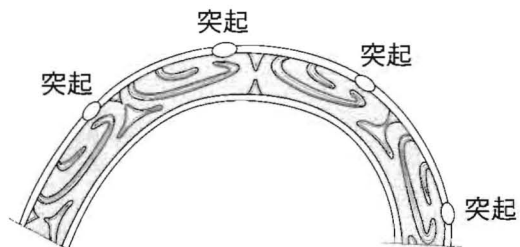
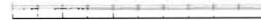


166 ('82・C-14・Ⅱ)

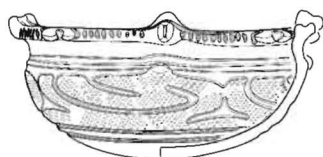


167 ('82・C-14・Ⅱ)

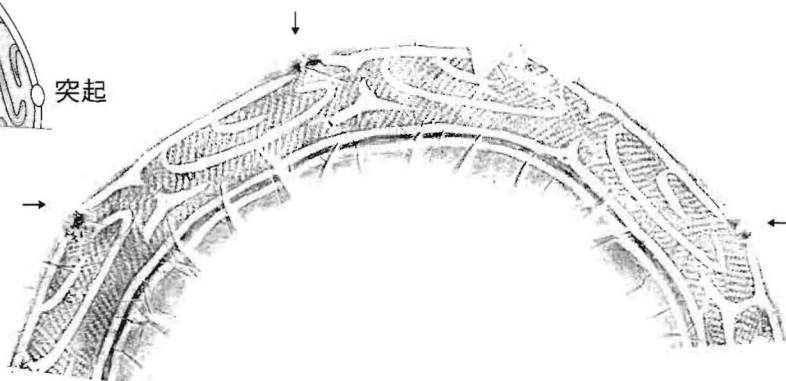
0 10cm



168. 展開図
(配置文Ⅲ 3)



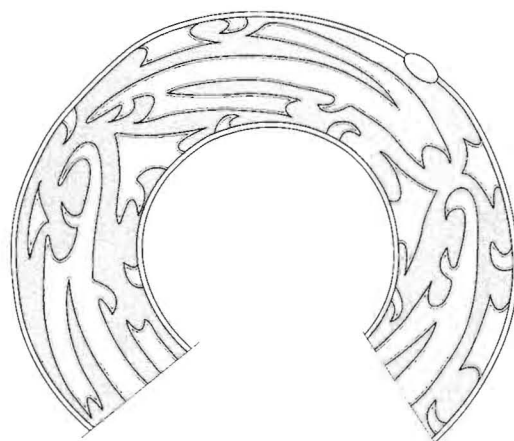
168 ('83・E-5・Ⅲ)



168. 拓本



169 ('82・C-5・Ⅱ)



169. 展開図
(配置文Ⅳ 1)



・台部の文様

・配置文Ⅳ 1 の描き方

a



横S字状のモチーフ a に

b

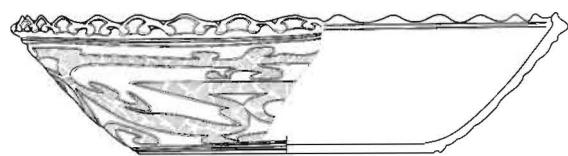


付加的要素を加え、
b の配置文となる。

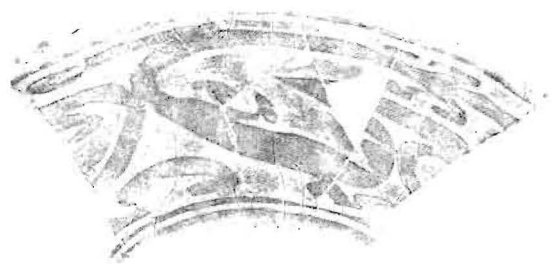


169. 拓本

第57図 明戸遺跡 浅鉢Ⅲ類 (166~168) ・Ⅳ類 (169)



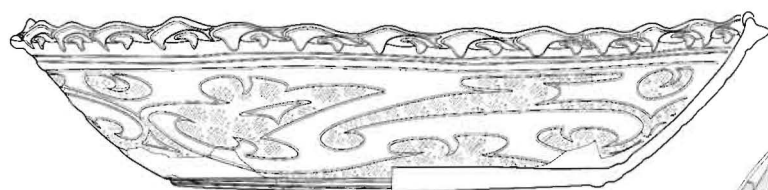
170 ('83・D-7・Ⅲ)



170. 拓本



170. 展開図
(配置文Ⅲ 5)



171 ('83・D-5・Ⅲ)



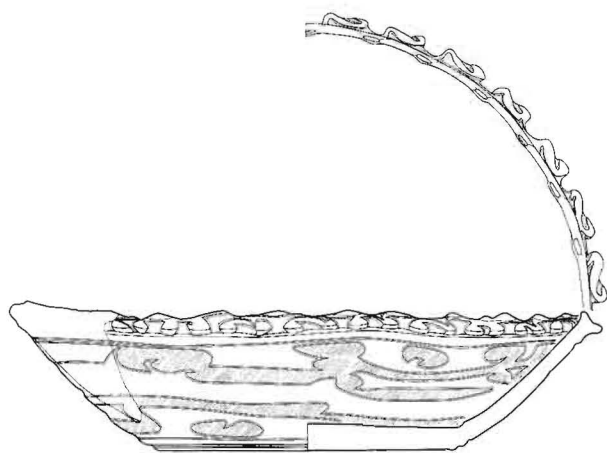
171. 展開図
(区画文Ⅱ 2)



171. 拓本



第58図 明戸遺跡 皿Ⅰ類 (170・171)



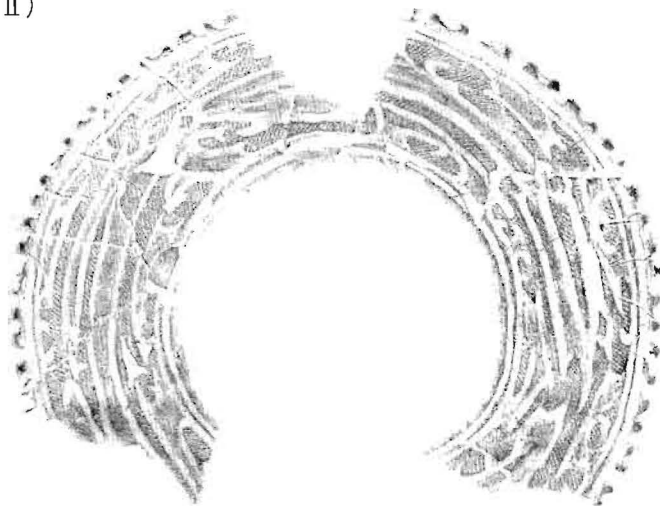
172 ('82・C-6・II)



172. 展開図
(配置文Ⅳ 3)



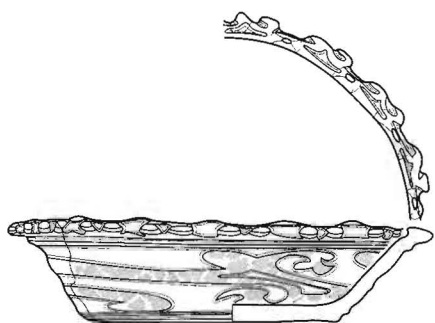
173. 拓本



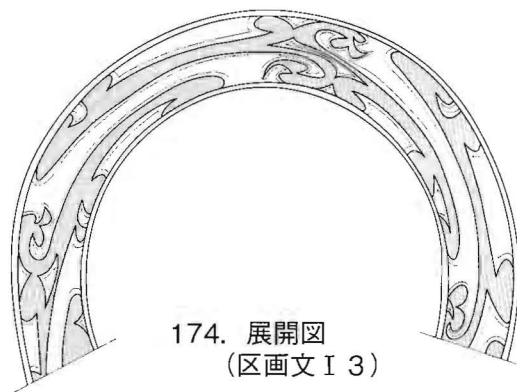
172. 拓本



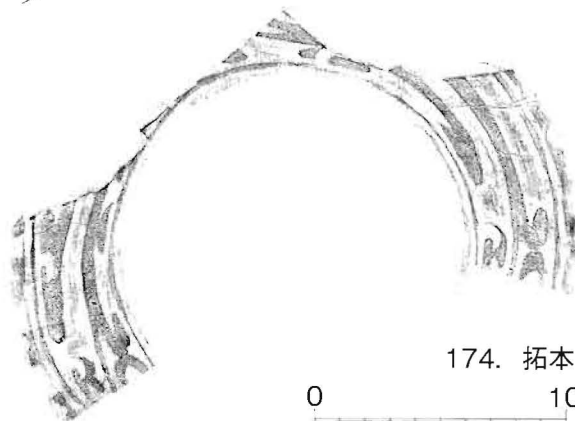
173 (未注記・未注記・未注記)



174 ('83・D-6・Ⅳ)



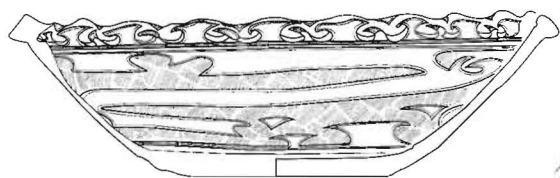
174. 展開図
(区画文Ⅰ 3)



174. 拓本



第59図 明戸遺跡 皿Ⅰ類 (172~174)



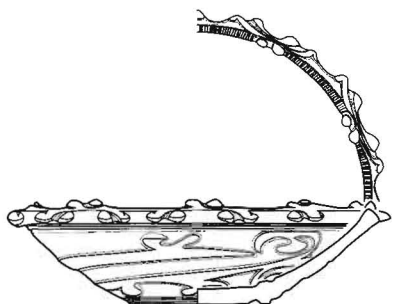
175 ('82・C-6・Ⅱ、'83・C-7・Ⅲa)



175. 拓本



175. 展開図
(配置文Ⅳ1)



176 ('82・C-5~6・Ⅱ)



176. 展開図
(区画文Ⅲ1)



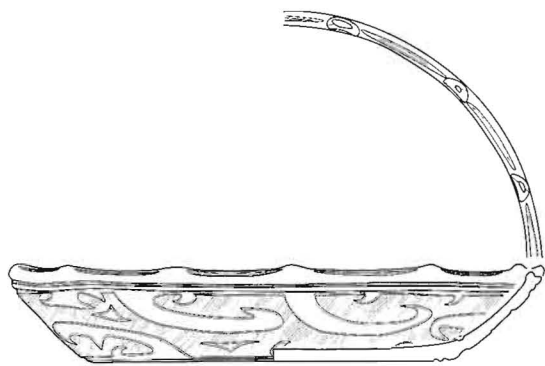
176. 拓本



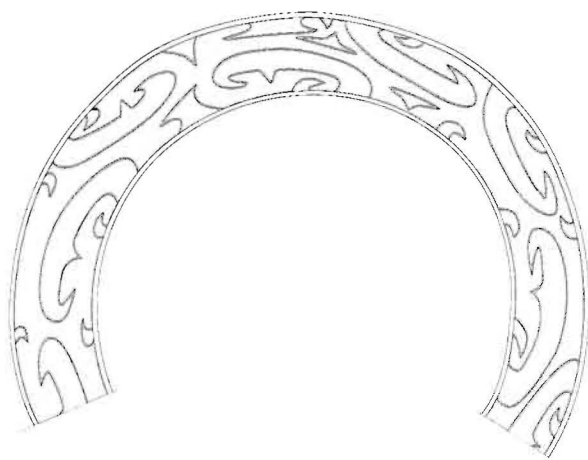
177 ('83・D-6・Ⅲb)



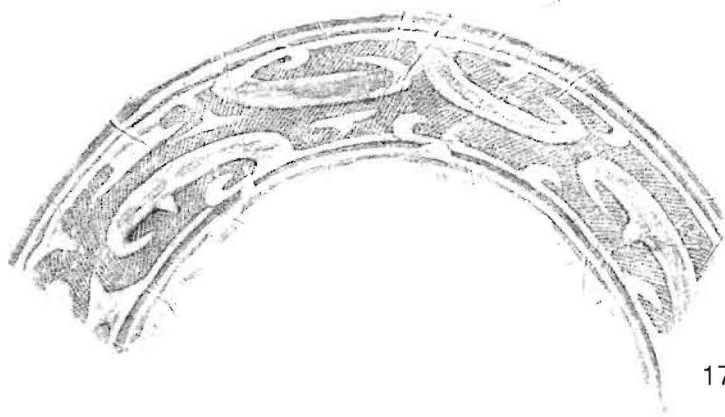
第60図 明戸遺跡 皿Ⅰ類 (175~177)



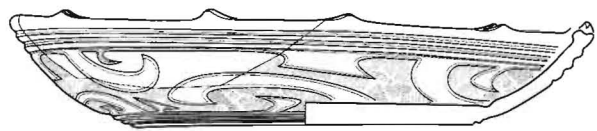
178 ('82・C-6・Ⅱ)



178. 展開図
(配置文Ⅲ 1)



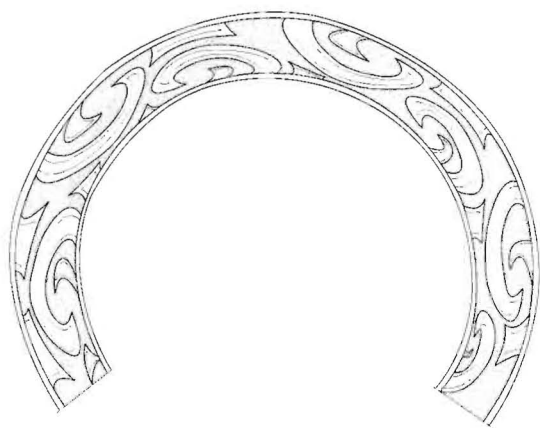
178. 拓本



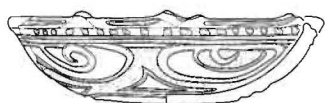
179 (未注記・未注記・未注記)



179. 拓本



179. 展開図
(配置文Ⅲ 1)



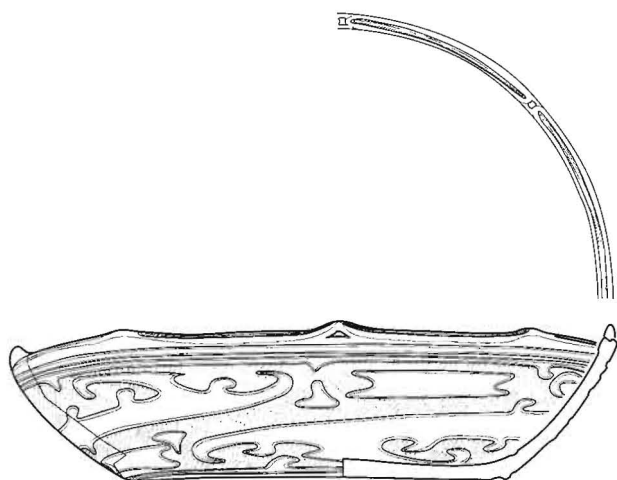
180 (未注記・D-5・Ⅱ)



180. 拓本



第61図 明戸遺跡 皿Ⅰ類 (178~180)



181 ('82・C-4と6・Ⅱ)



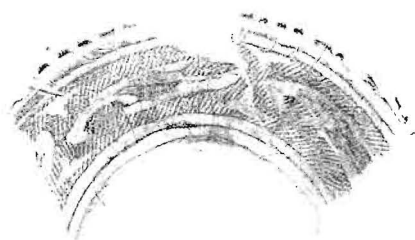
181. 展開図
(配置文Ⅳ 1)



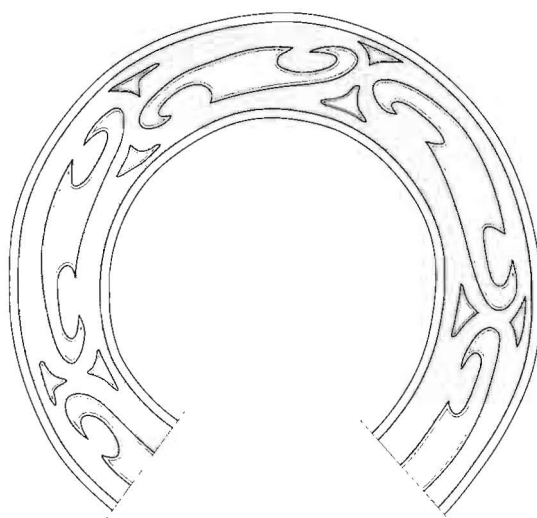
181. 拓本



182 (未注記・未注記・未注記)



182. 拓本



182. 展開図
(配置文Ⅲ 7)





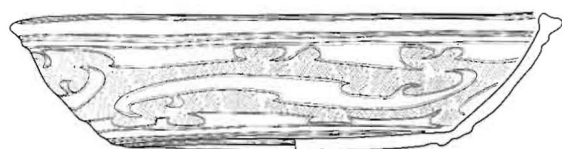
183 ('82・C-5~6・Ⅱ)



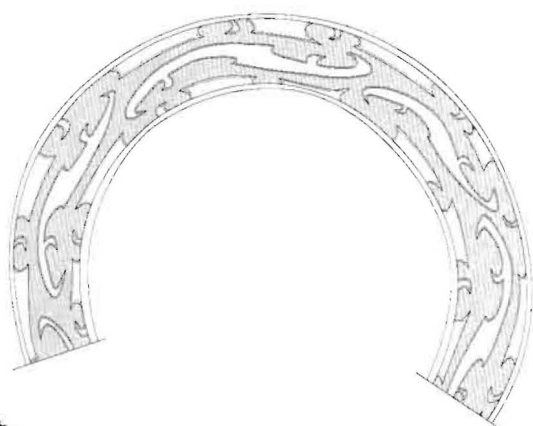
183. 拓本



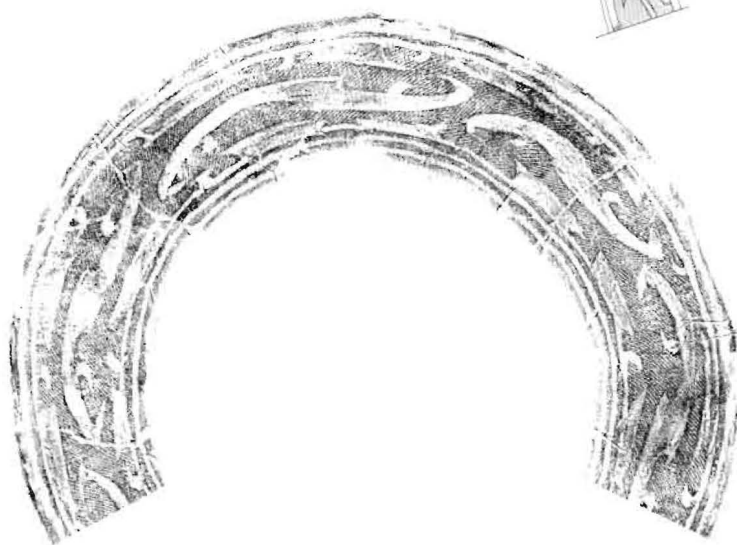
183. 展開図
(配置文Ⅱ 3)



184 ('82・C-5・Ⅱ)



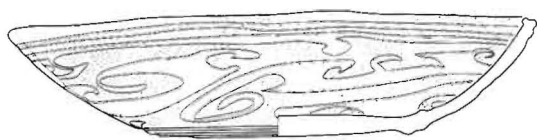
184. 展開図
(配置文Ⅲ 7)



184. 拓本



第63図 明戸遺跡 皿Ⅰ類 (183・184)



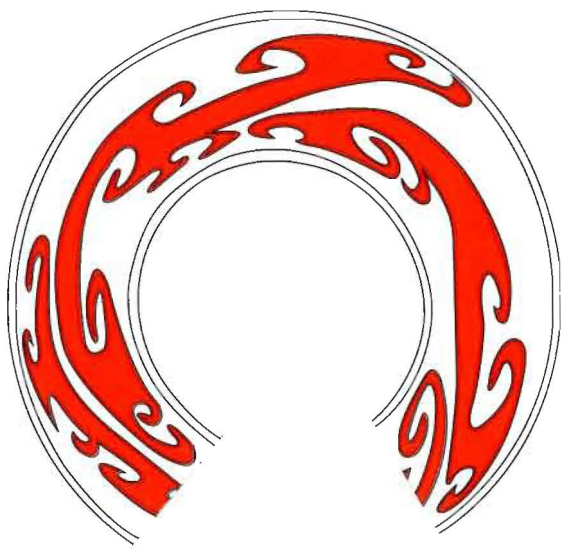
185 ('82・C-4・Ⅱ)

0 10cm

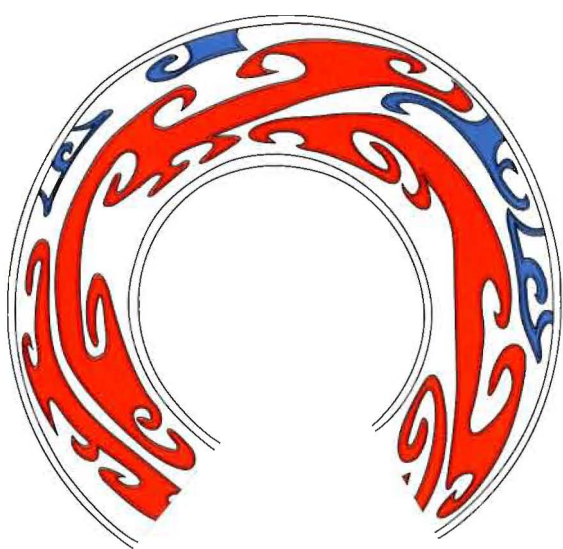


185. 拓本

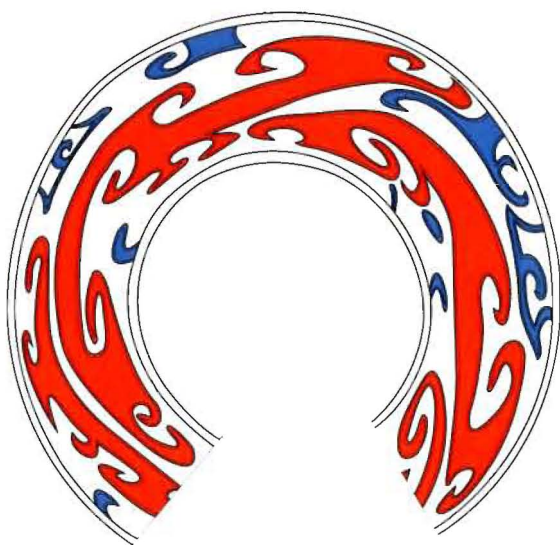
・185の文様の描き方



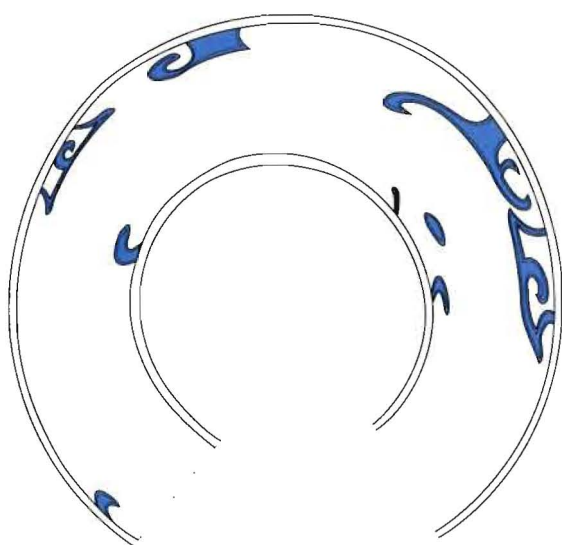
①配置文Ⅲ 7を3単位施す。



②充填文をうめる。



③さらに細かな充填文をうめる。

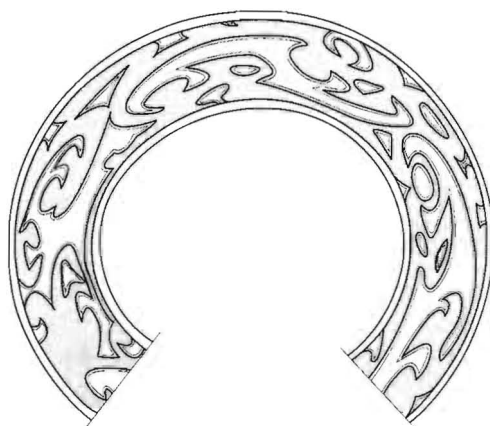


④充填文のみを抜き出したもの。

第64図 明戸遺跡 皿Ⅰ類 (185)



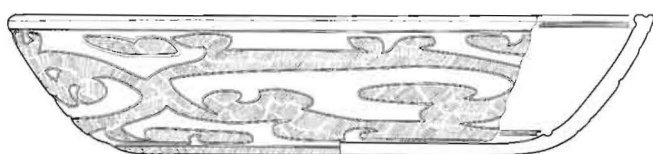
186 ('82・C-5・Ⅱ)



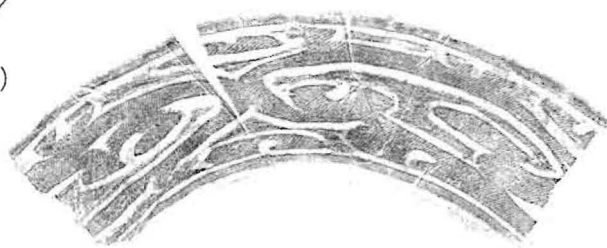
186. 展開図
(配置文Ⅲ 7)



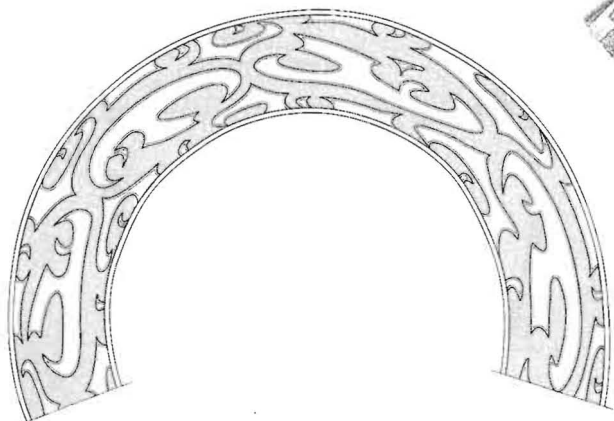
186. 拓本



187 ('83・D-5・Ⅲ c)



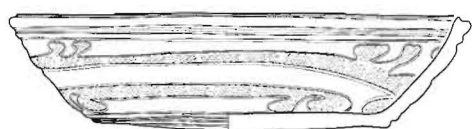
187. 拓本



187. 展開図
(配置文Ⅲ 5)



第65図 明戸遺跡 皿Ⅰ類 (186・187)



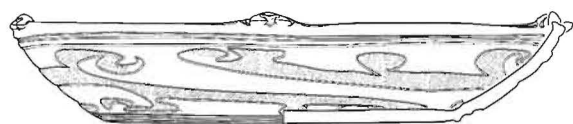
188 ('83・E-5・IV)



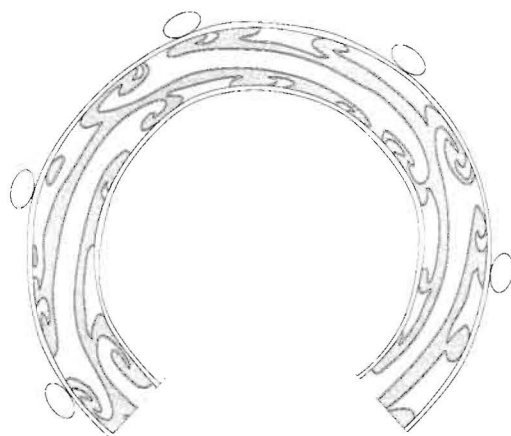
188. 展開図
(区画文 I 1)



188. 拓本



189 ('82・D-4・Ⅲc)



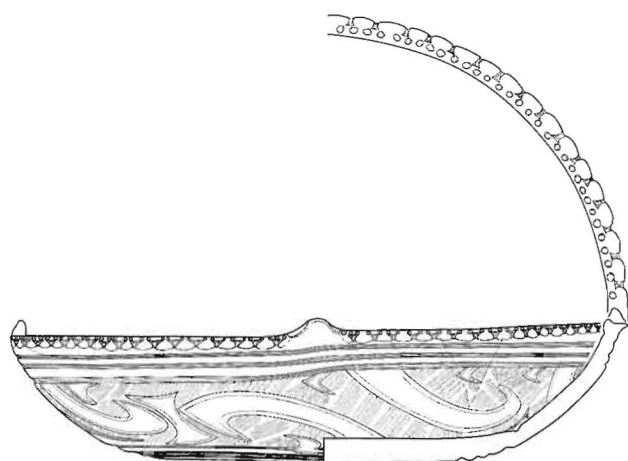
189. 展開図
(区画文 I 3)



189. 拓本



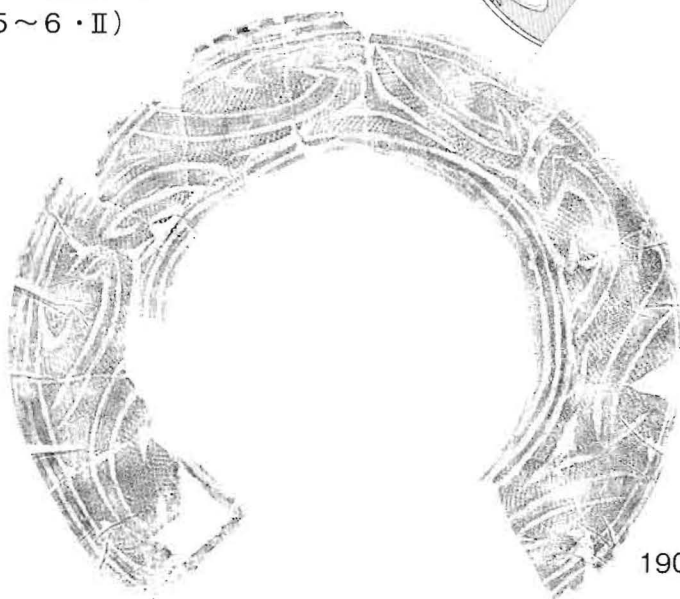
第66図 明戸遺跡 皿Ⅰ類 (188・189)



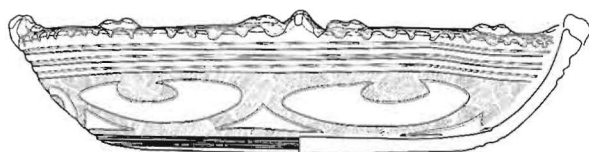
190 ('82・B-5~6・Ⅱ)



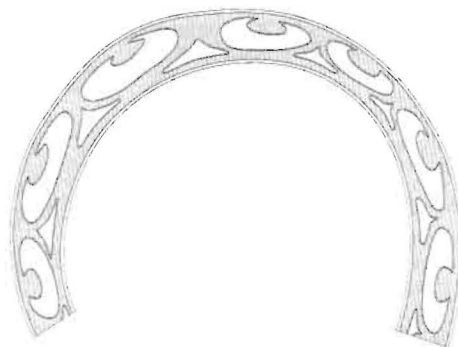
190. 展開図
(配置文Ⅲ 1)



190. 拓本



191 (未注記・未注記・未注記)



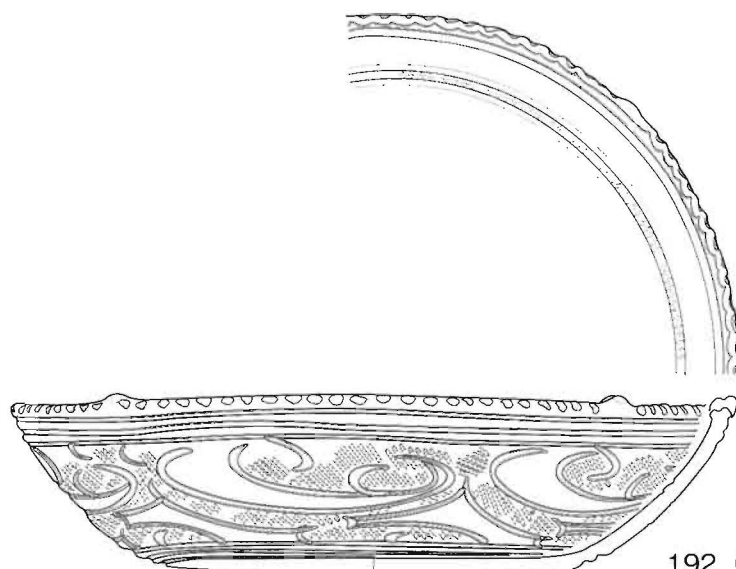
191. 展開図
(配置文Ⅲ 2)



191. 拓本

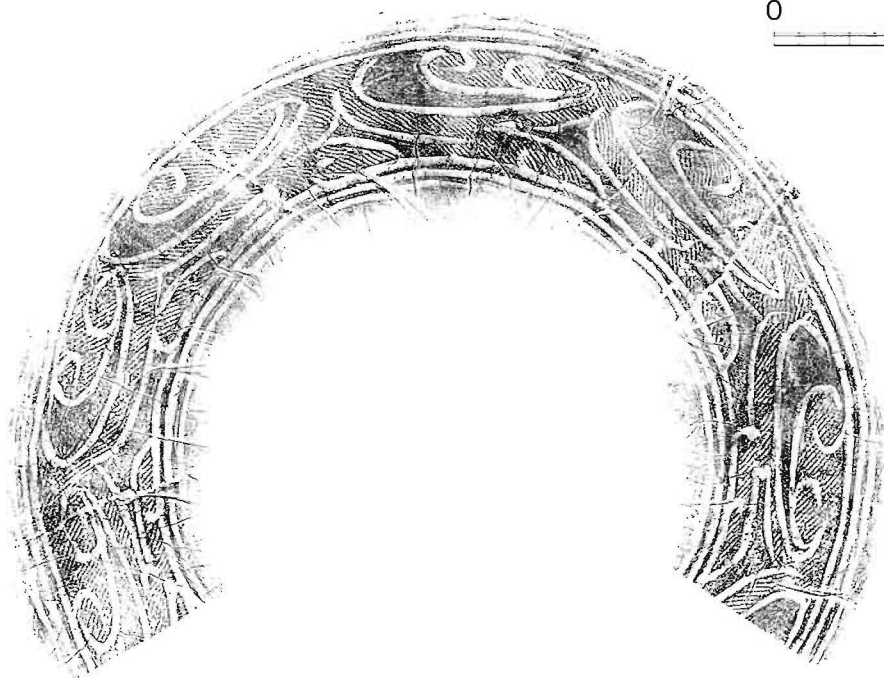


第67図 明戸遺跡 皿Ⅰ類 (190・191)



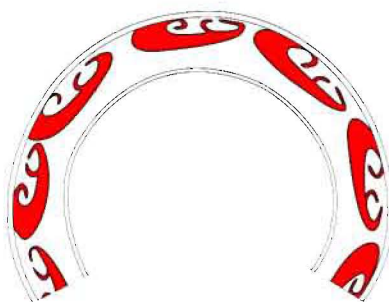
192 ('83・E-5・Ⅲ)

0 10cm

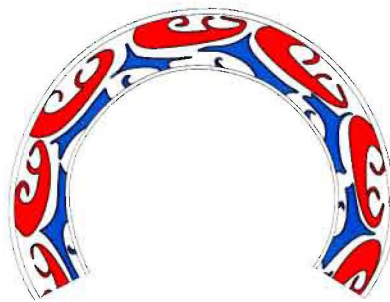


192. 拓本

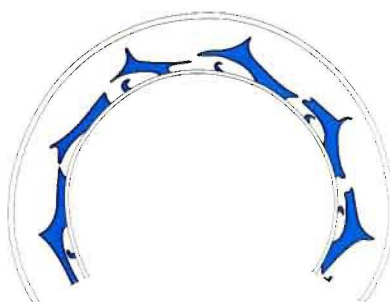
・192の文様の描き方



①配置文Ⅲ 1を6単位
施す。

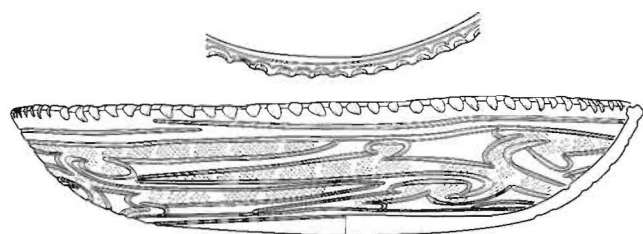


②充填文をうめる。



③充填文のみを抜き出した
もの。

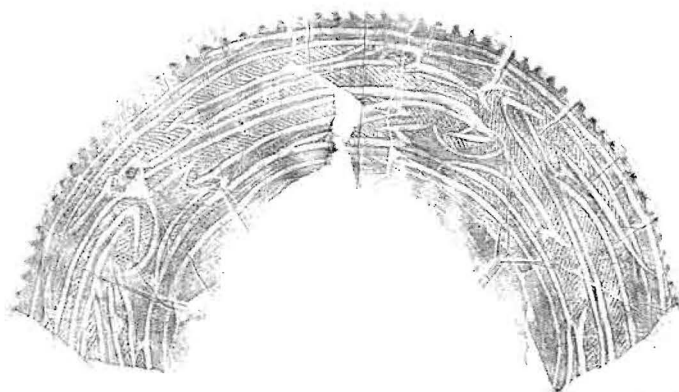
第68図 明戸遺跡 皿Ⅰ類 (192)



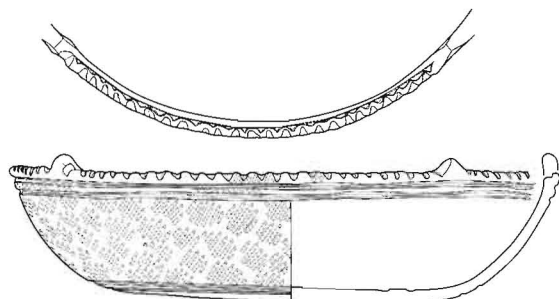
193 ('83・D-4~5・II)



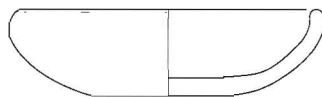
193. 展開図
(区画文Ⅲ 1)



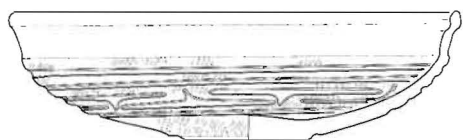
193. 拓本



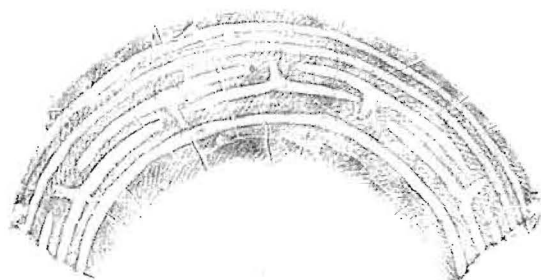
194 ('83・D-5~6・III)



195 ('83・D-5・IV)



196 ('82・C-11・II)



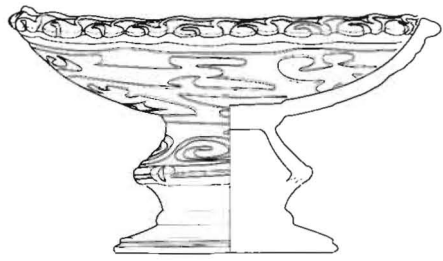
196. 拓本



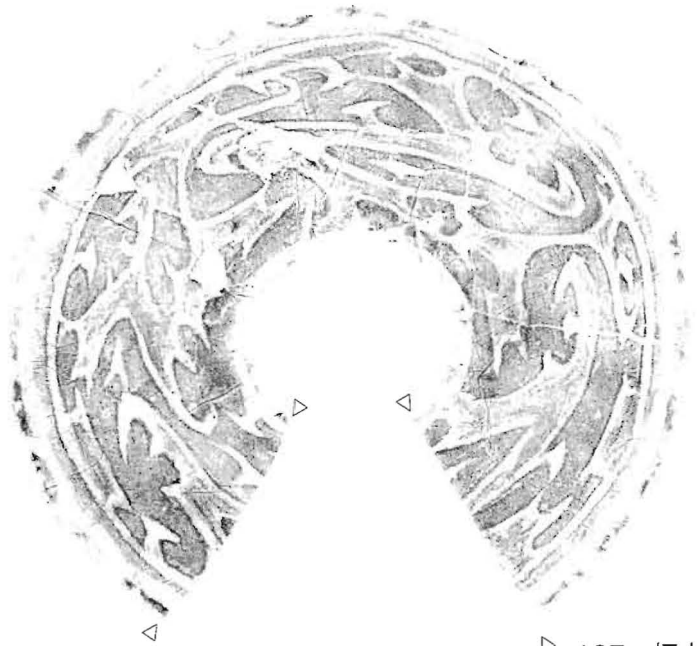
196. 展開図 (配置文Ⅳ)



第69図 明戸遺跡 皿Ⅰ類 (193~195) ・Ⅱ類 (196)

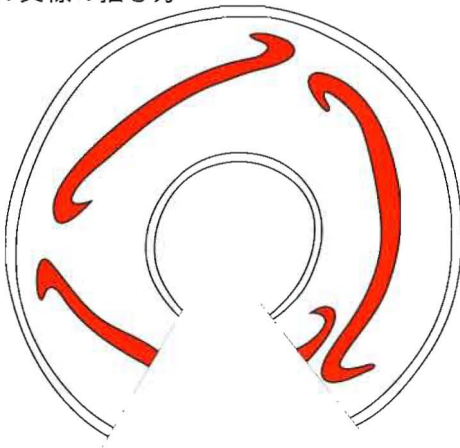


197 ('83・C-7・Ⅲa)



▷ 197. 拓本

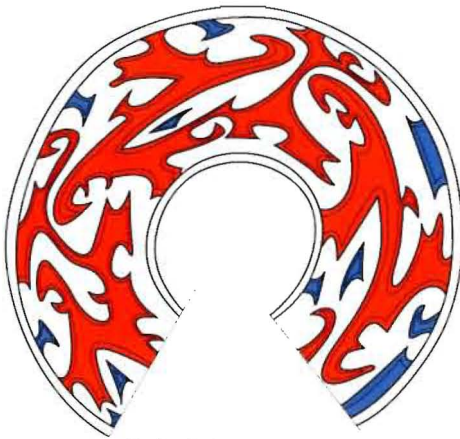
・ 197の文様の描き方



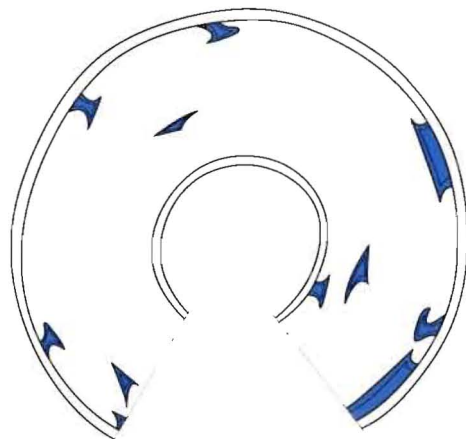
①横S字状の文様を施す。



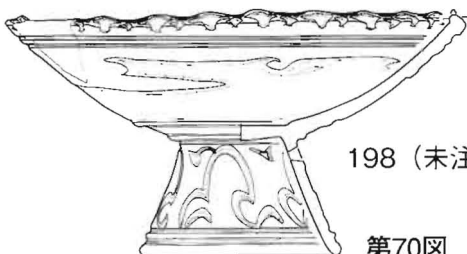
②付加的要素を加え、区画文Ⅱ 1 が3単位完成する



③充填文をうめる。



④充填文のみ抜き出したもの。



198 (未注記・未注記・未注記)

0 10cm

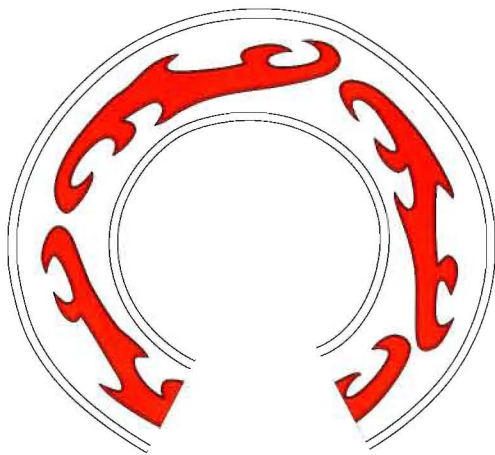
第70図 明戸遺跡 皿Ⅲ類 (197・198)



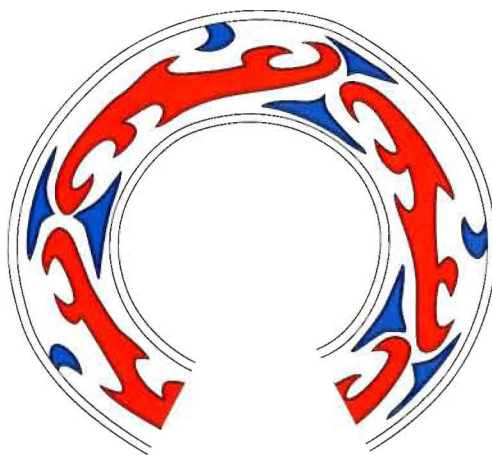
199 ('83・D-6・Ⅲb)



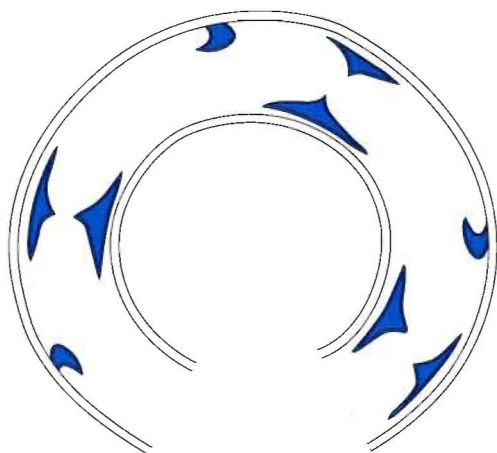
199. 拓本



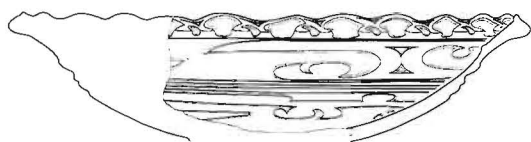
①配置文Ⅲ 7 を 3 単位施す。



②充填文をうめる。



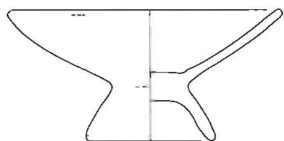
③充填文のみを抜き出したもの。



200 ('82・C-5・Ⅱ)



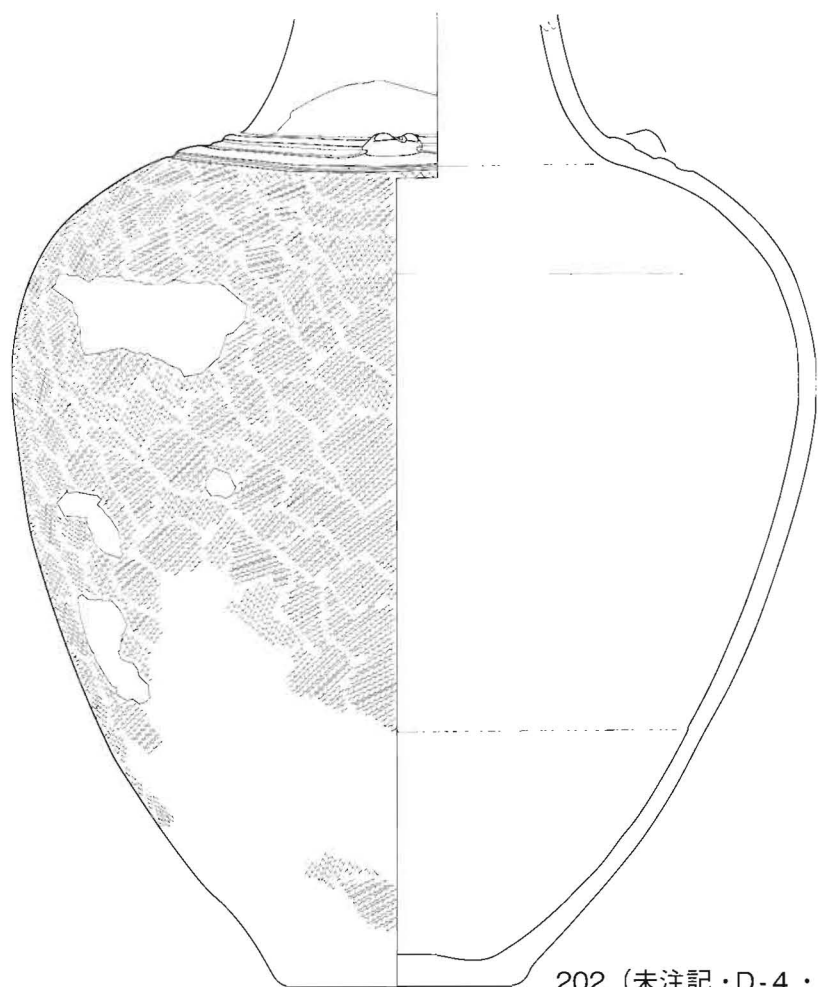
200. 拓本



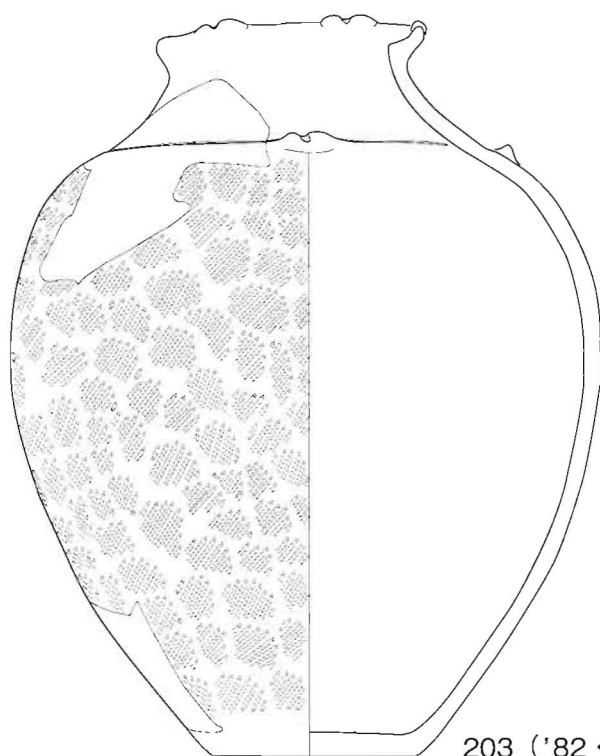
201 ('83・E-6・Ⅲ)



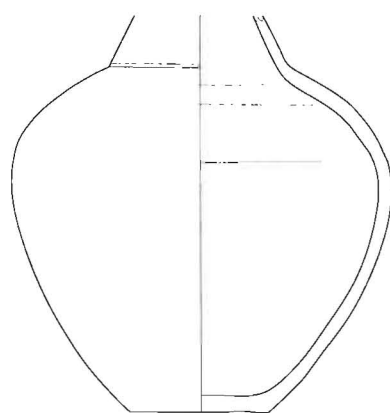
第71図 明戸遺跡 皿Ⅲ類 (199~201)



202 (未注記・D-4・未注記)



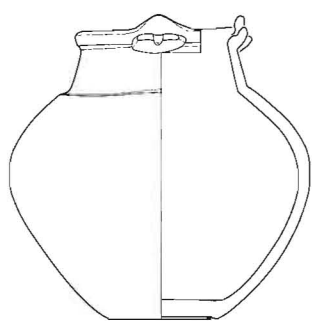
203 ('82・B-5~6・II)



204 ('83・E-4・III)

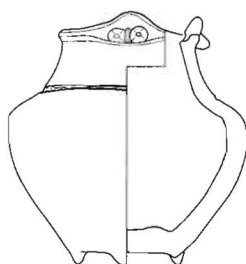


第72図 明戸遺跡 壺I類 (202~204)



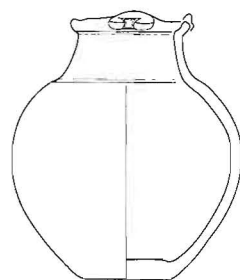
205

('83・D-4・Ⅲ a)



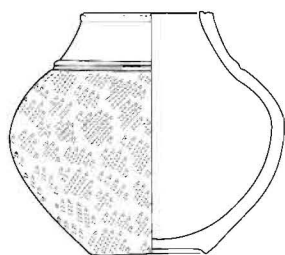
206

('83・E-4・Ⅲ)



207

('83・D-4・Ⅲ b)



208

('82・C-6・Ⅱ)



209

('83・E-4・Ⅳ)



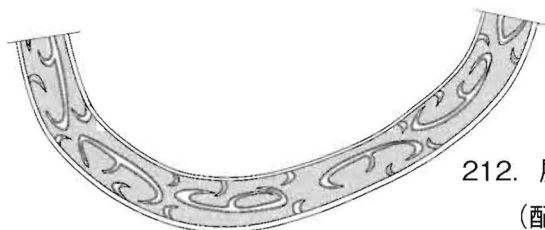
210

('82・C-6・Ⅱ)



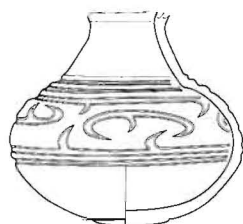
211

('82・B-6・Ⅱ)



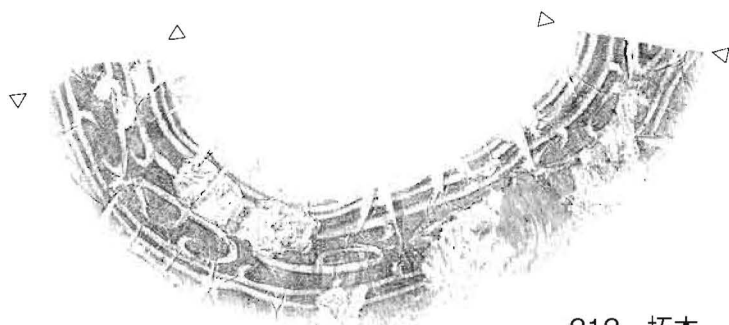
212. 展開図

(配置文Ⅲ 4)



212

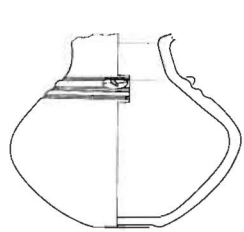
(未注記・未注記・未注記)



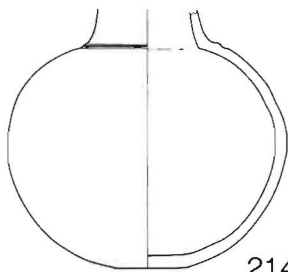
212. 拓本



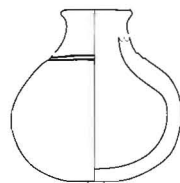
第73図 明戸遺跡 壺Ⅰ類 (205・206・209) ・Ⅱ類 (207・208・210~212)



213
('83・D-6・Ⅲ)



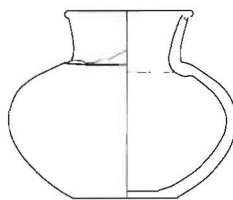
214
('82・C-5・Ⅱ)



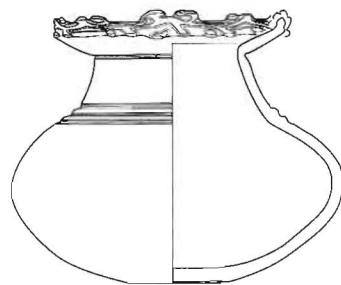
215
('82・C-5・Ⅲ)



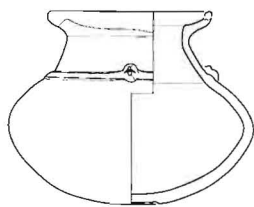
216
('82・B-6・未注記)



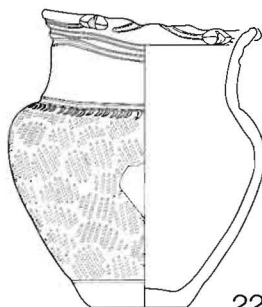
217
('82・C-5・Ⅱ)



218
('82・B-5・Ⅱ)

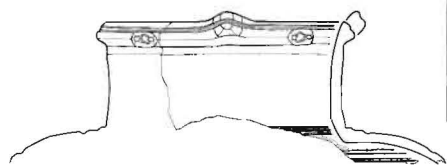


219
('83・D-5・Ⅲ c)

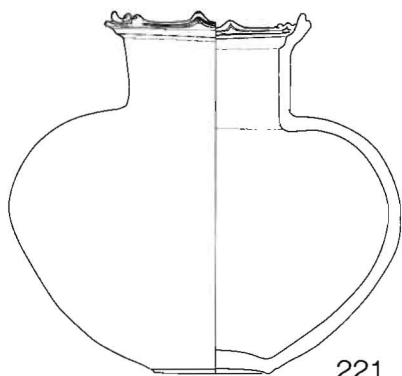


220
('82・C-5・Ⅱ)

222. 拓本



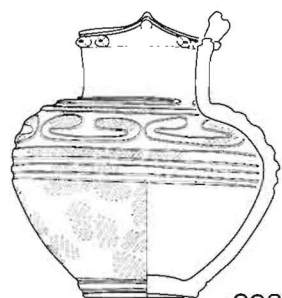
222
('82・C-5・Ⅱ)



221
('83・D-4・Ⅲ)

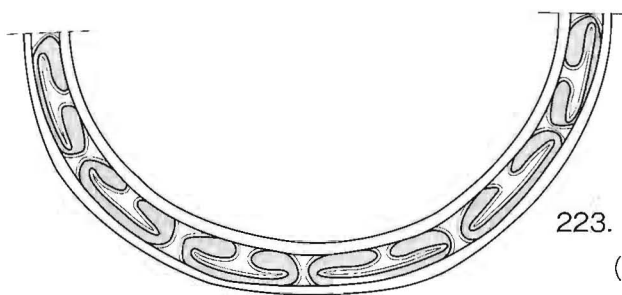


第74図 明戸遺跡 壺Ⅱ類 (213~219) ・Ⅲ類 (220~222)



223

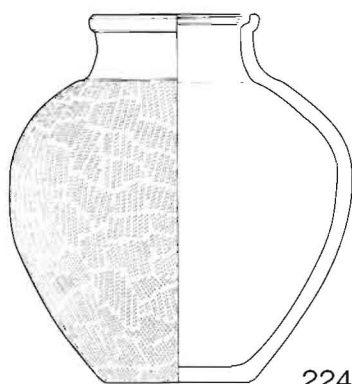
('82・C-5・II)



223. 展開図
(配置文Ⅳ)

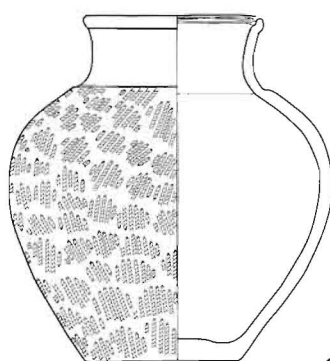


223. 拓本



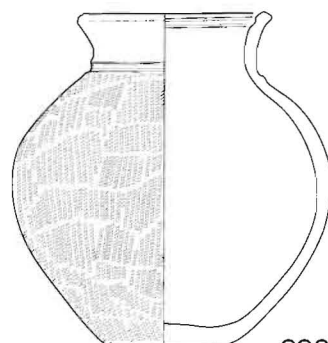
224

('83・D-4・Ⅲ a)



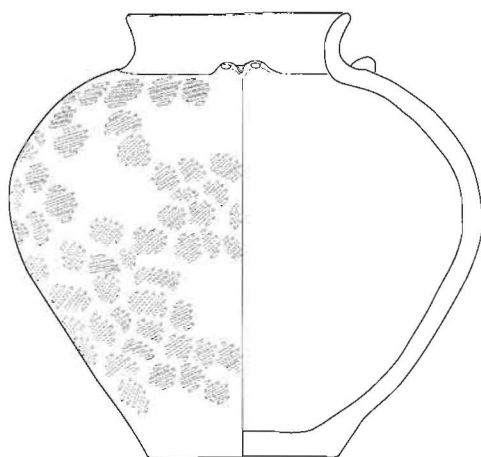
225

('83・B-4・II)

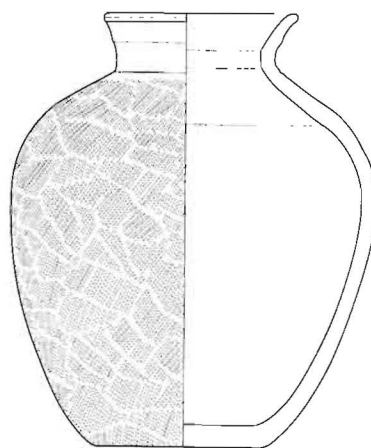


226

('83・D-4・Ⅲ a)



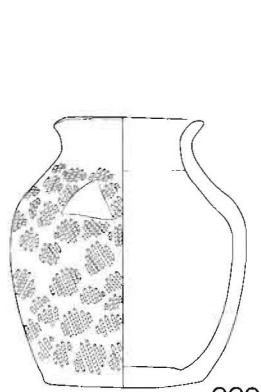
227 ('83・D-4・IV)



228 ('83・D-5・Ⅲ c)

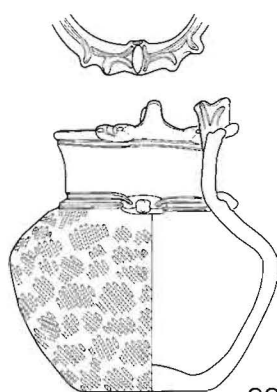


第75図 明戸遺跡 壺Ⅲ類 (223) ・Ⅳ類 (224~228)



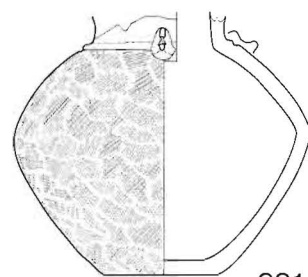
229

('83・C-5・Ⅱ)



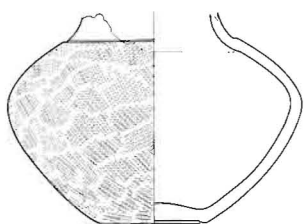
230

('83・D-4・Ⅲ b)



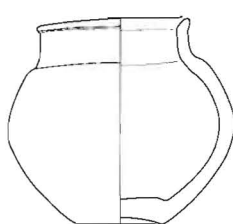
231

('83・E-4・未注記)



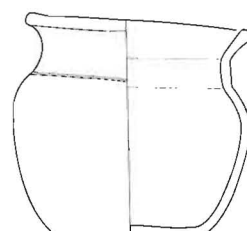
232

(未注記・未注記・未注記)



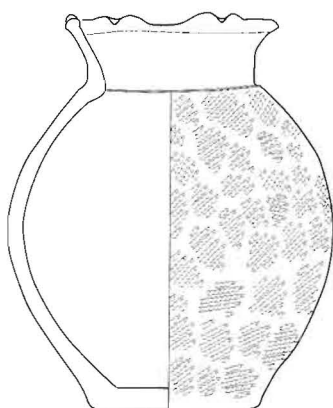
233

('83・E-4・Ⅲ)



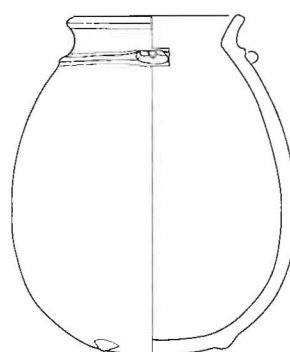
234

('83・D-5・Ⅲ c)



235

('82・C-5・Ⅱ)



236

('82・C-5・Ⅱ)



237

(未注記・未注記・未注記)



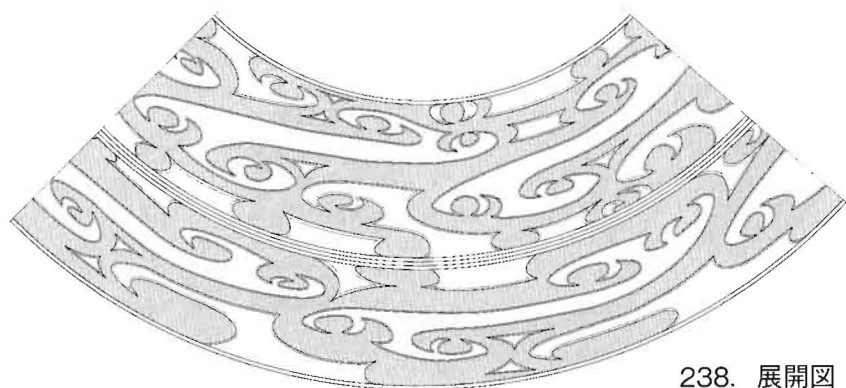
237. 拓本



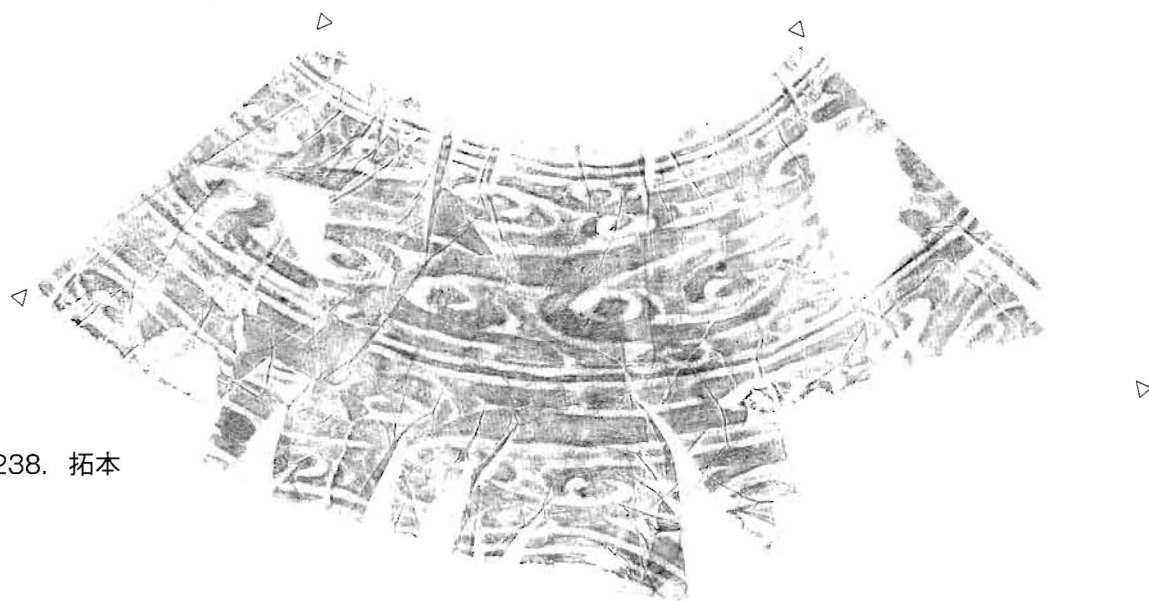
第76図 明戸遺跡 壺Ⅳ類 (229~235) ・Ⅴ類 (236・237)



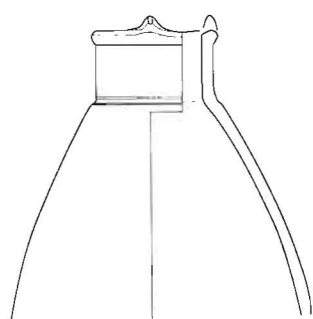
238 ('82・C-5・II)



238. 展開図
(配置文Ⅳ1)

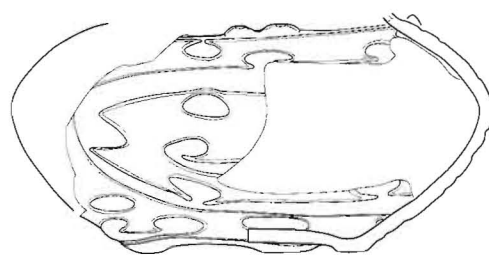
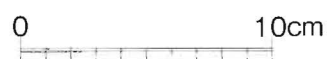


238. 拓本

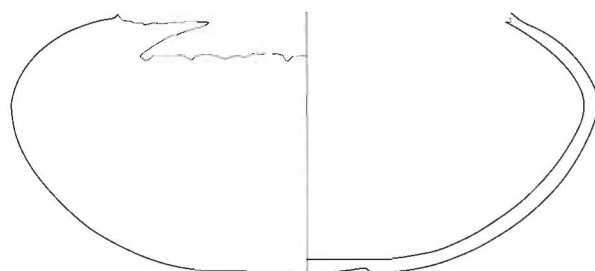


239

(未注記・未注記・未注記)

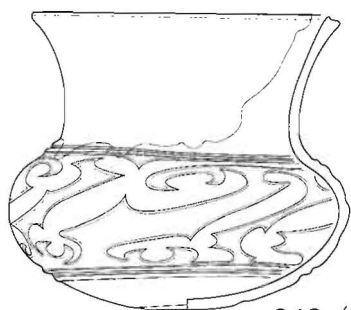


240 (未注記・未注記・未注記)

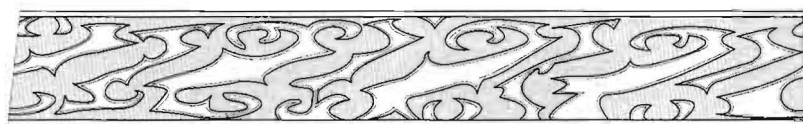


241 ('82・C-6・II)

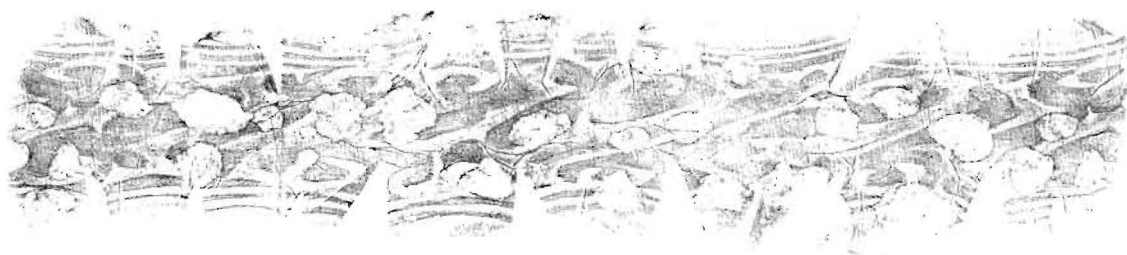
第77図 明戸遺跡 壺Ⅱ類 (240・241) ・Ⅴ類 (238・239)



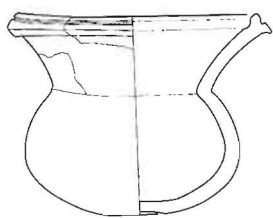
242 ('83・D-4・Ⅲ)



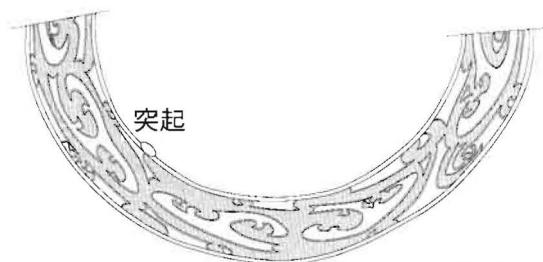
242. 展開図
(配置文Ⅳ 2)



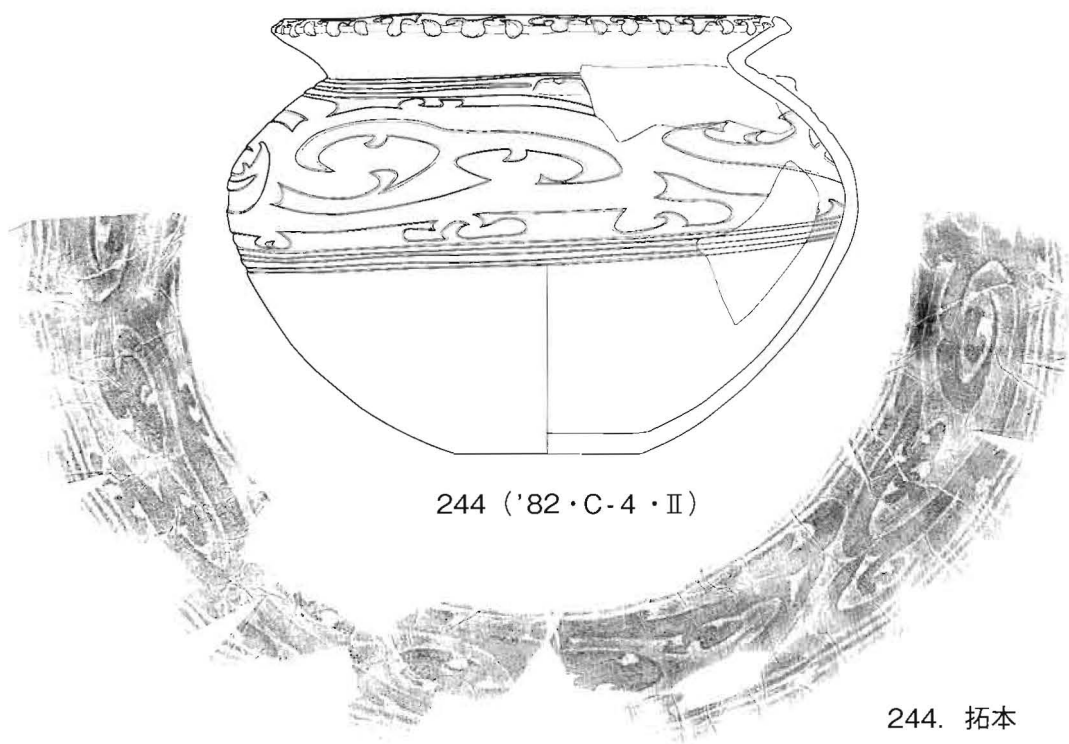
242. 拓本



243 ('82・C-6・Ⅱ)



244. 展開図
(配置文Ⅲ 5)



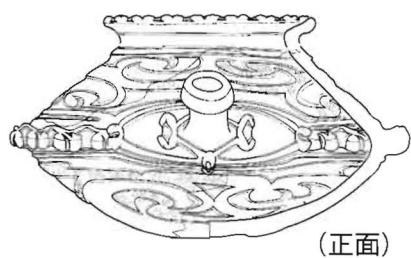
244 ('82・C-4・Ⅱ)

244. 拓本

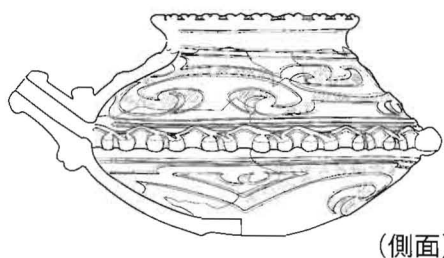


第78図 明戸遺跡 壺Ⅵ類 (242~244)

245 ('82・C-5・Ⅱ)



(正面)

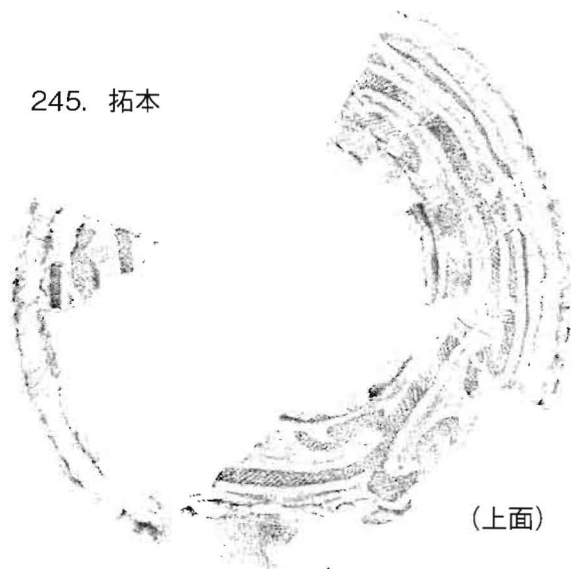


(側面)



(底面)

245. 拓本



(上面)

245. 展開図



(上面)

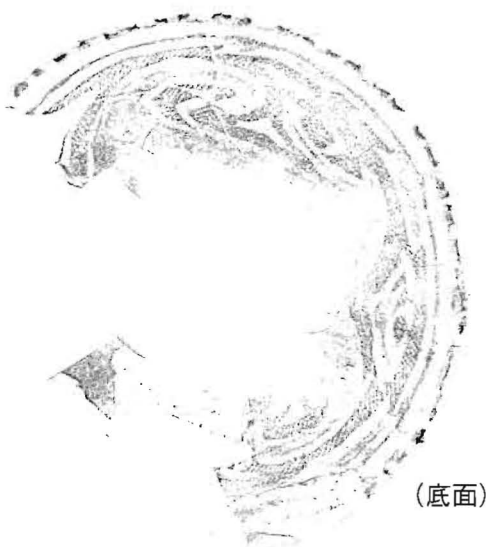
↑
注口部

(配置文Ⅲ 5)



(底面)

↑
注口部



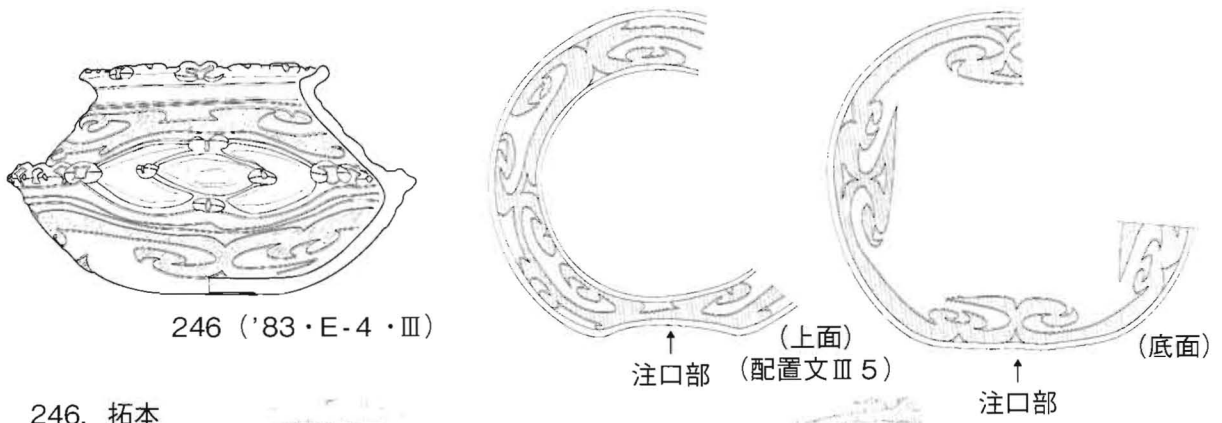
(底面)

↑
注口部

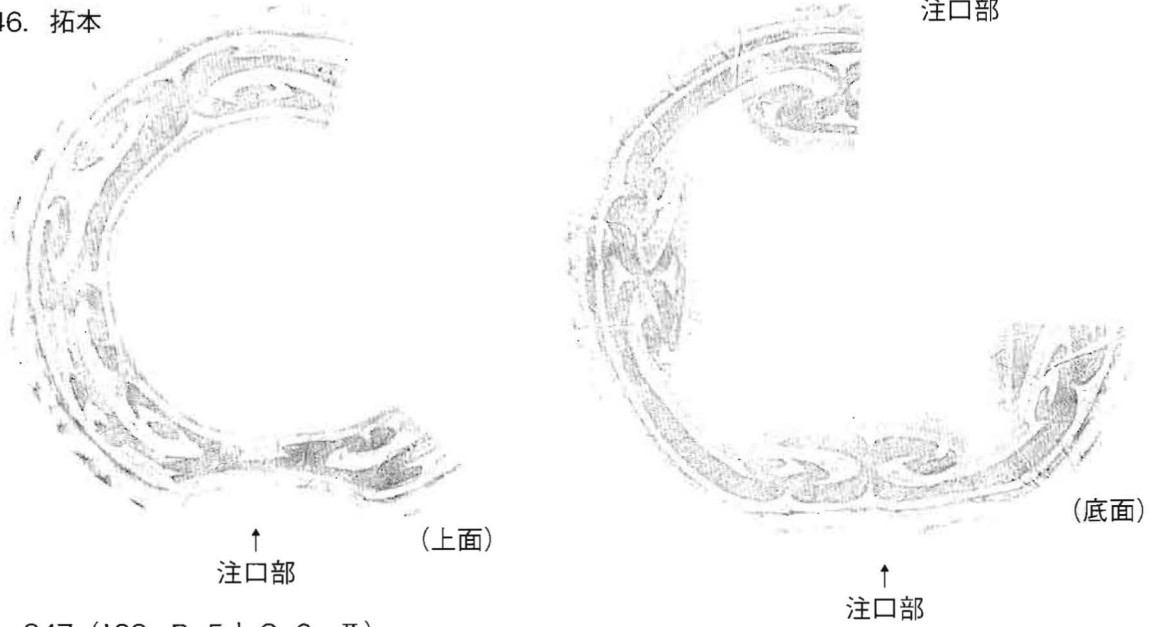
0 10cm

第79図 明戸遺跡 注口Ⅰ類 (245)

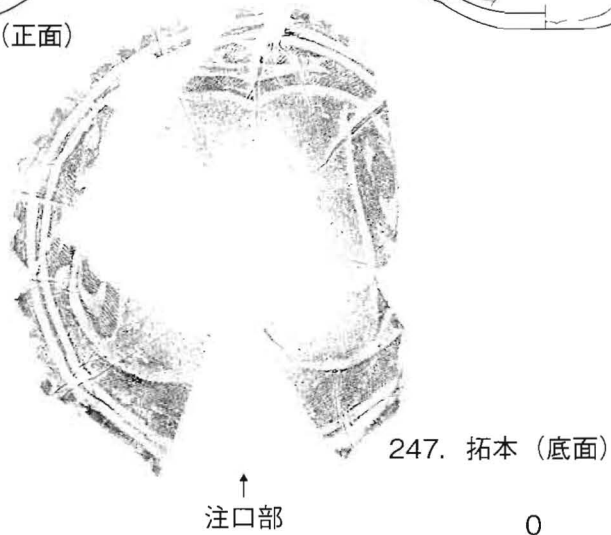
246. 展開図



246. 拓本



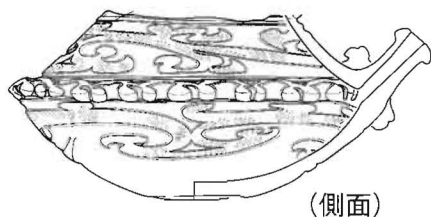
247 ('82・B-5とC-6・Ⅱ)



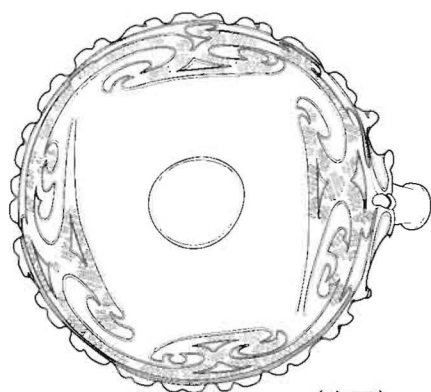
0 10cm

第80図 明戸遺跡 注口Ⅰ類 (246・247)

248 ('83・B-7・II)

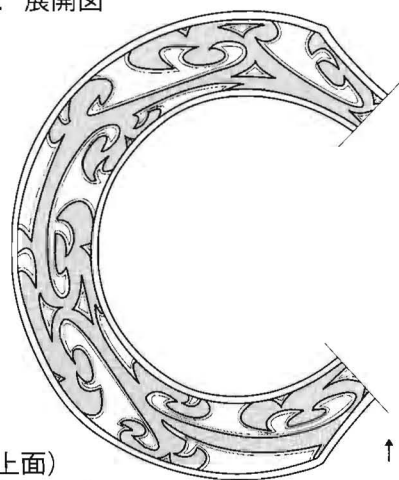


(側面)



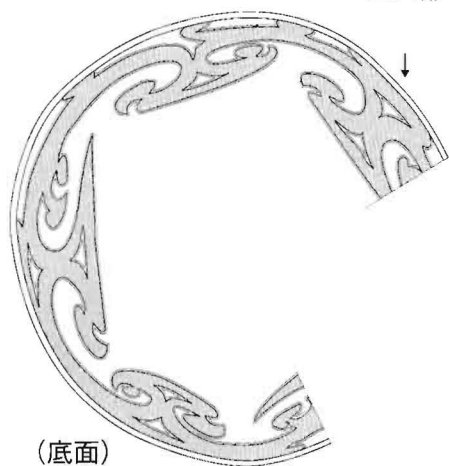
(底面)

248. 展開図



(上面)
(配置文Ⅲ 5)

↑
注口部



(底面)

↓
注口部

248. 拓本



↑ (上面)
注口部



(底面)

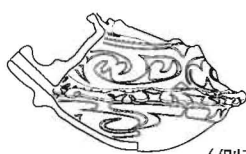
0 10cm

第81図 明戸遺跡 注口Ⅰ類 (248)

249 ('82・B-6・Ⅱ)

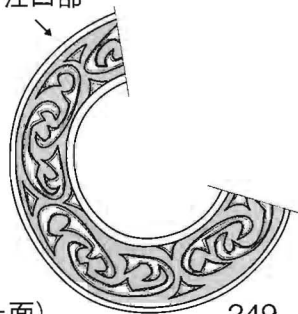


(正面)



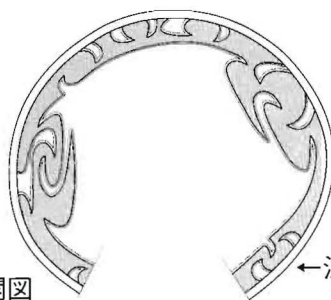
(側面)

注口部



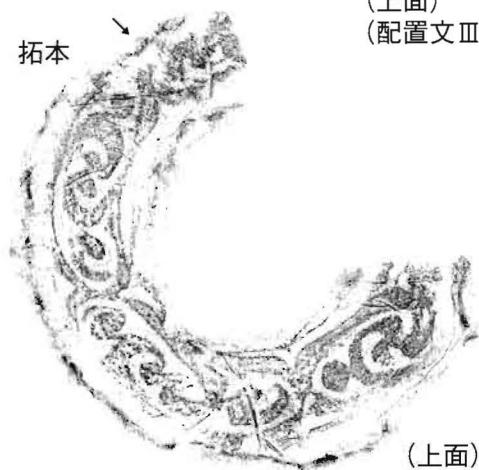
(上面)
(配置文Ⅲ 6)

249. 展開図



←注口部
(底面)

249. 拓本

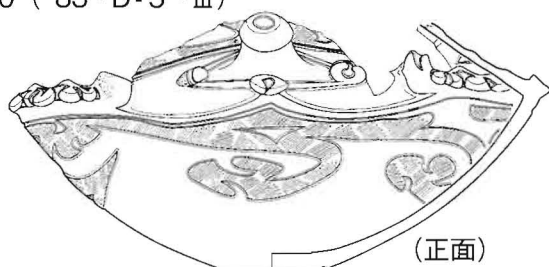


(上面)

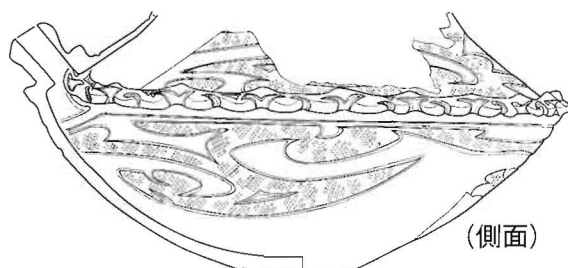


←注口部
(底面)

250 ('83・D-5・Ⅲ)



(正面)

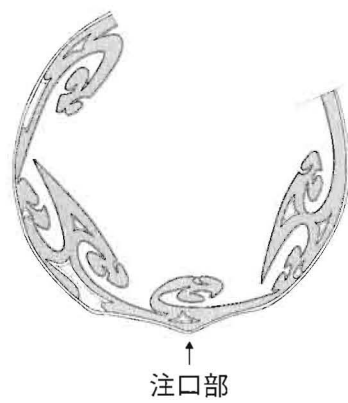


(側面)



250. 拓本 (底面)

↑注口部



注口部

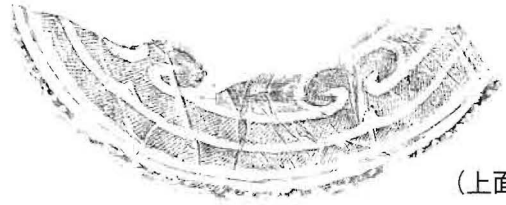
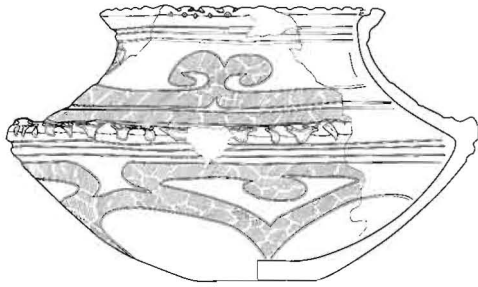
250. 展開図 (底面)

0 10cm

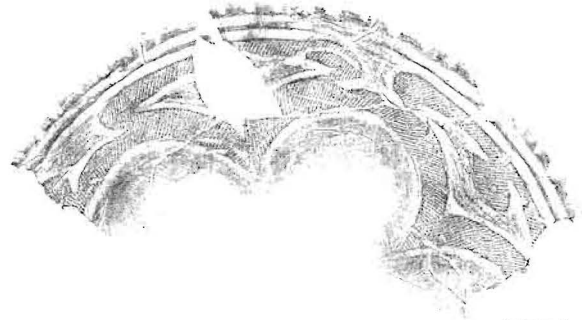
第82図 明戸遺跡 注口Ⅰ類 (249・250)

251. 拓本

251 ('82・C-5・Ⅱ)

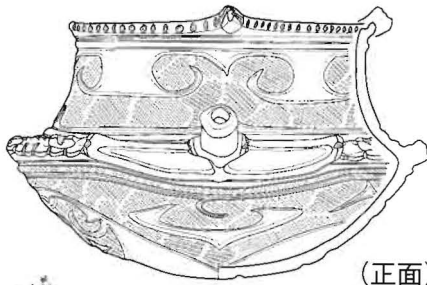


(上面)

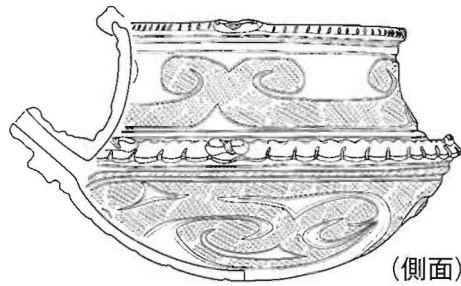


(底面)

252 (未注記・未注記・未注記)



(正面)



(側面)



(上面)

↑
注口部



(底面)

252. 展開図



(上面)
(配置文Ⅲ 5)

↑
注口部

注口部

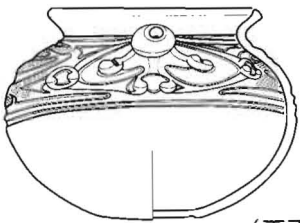


(底面)

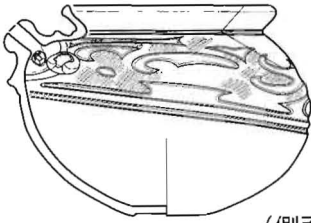
0 10cm

第83図 明戸遺跡 注口Ⅰ類(251)・Ⅱ類(252)

253 ('83・D-6・Ⅲc)



(正面)

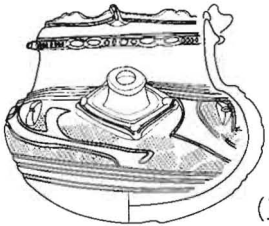


(側面)

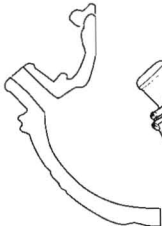


253. 拓本

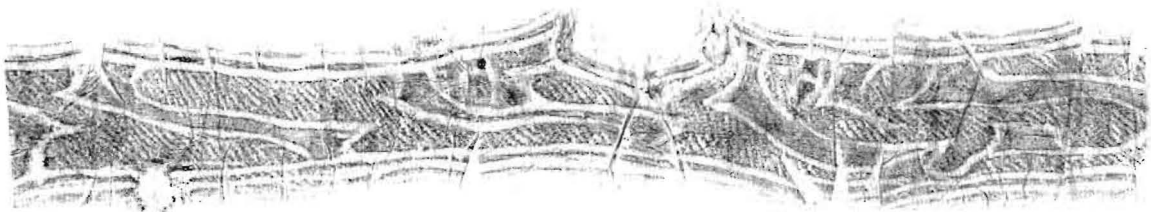
254 ('83・E-4・Ⅲ)



(正面)



(側面)



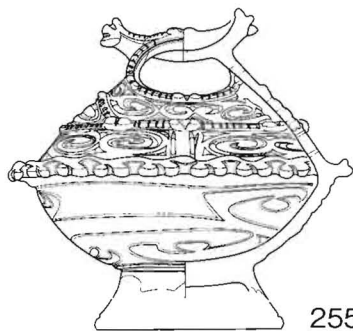
254. 拓本



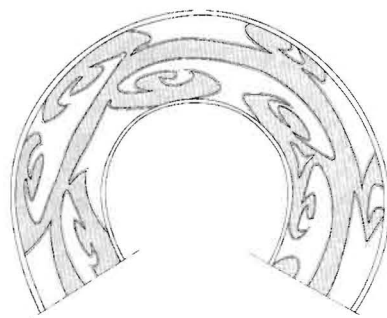
254. 展開図
(区画文Ⅰ 1)

0 10cm

第84図 明戸遺跡 注口Ⅲ類 (253・254)

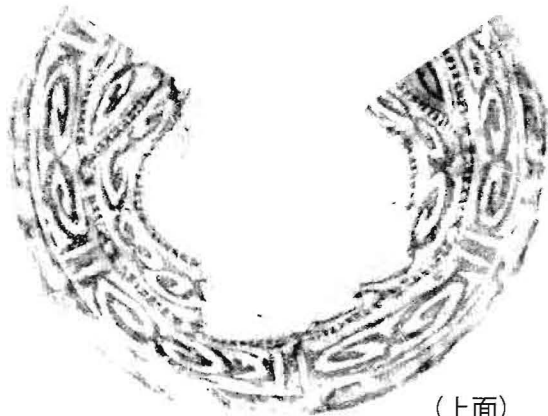


255 ('82・B-6・Ⅱ)



255. 展開図（底面）
（配置文Ⅲ 5）

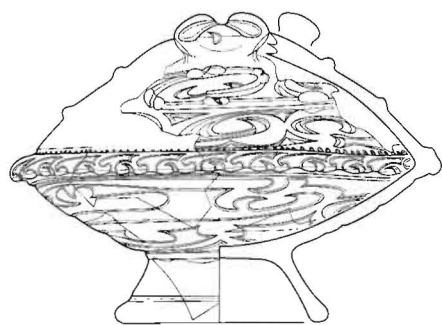
255. 拓本



（上面）



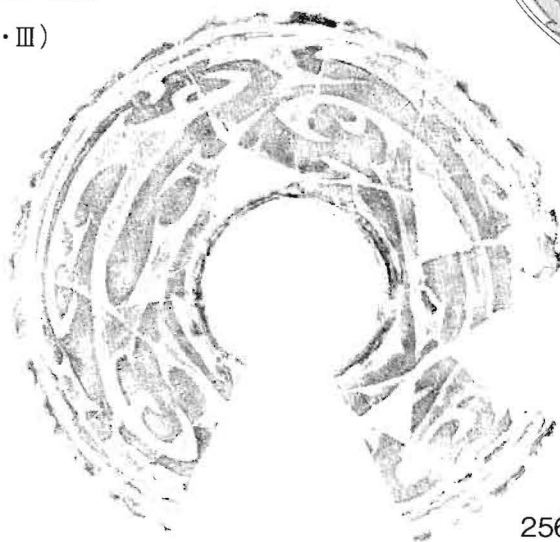
（底面）



256 ('83・D-5・Ⅲ)



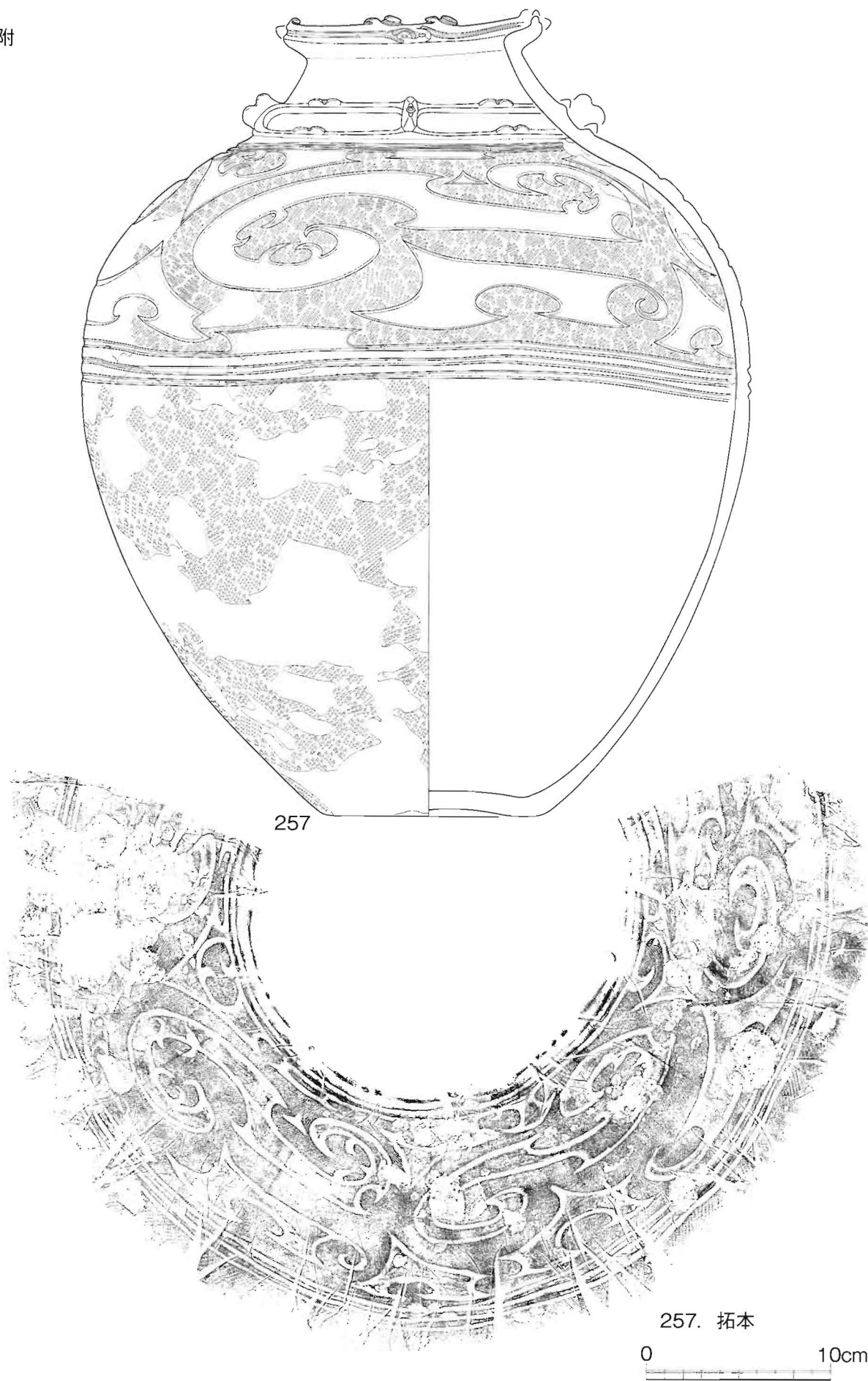
256. 展開図（底面）
（配置文Ⅳ 1）



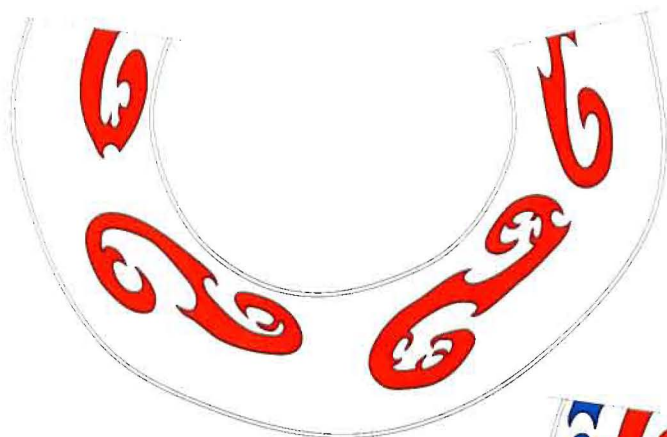
256. 拓本（底面）



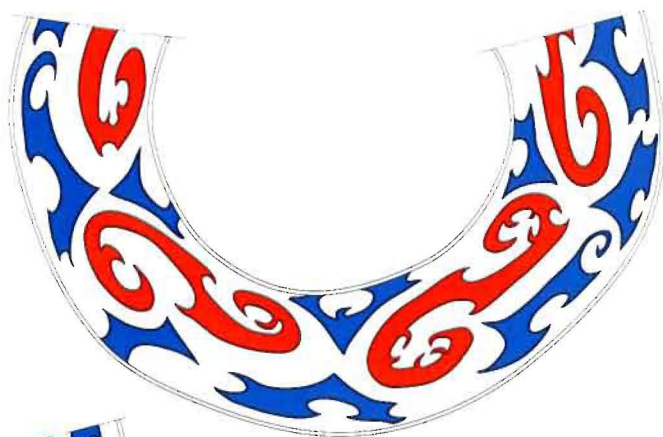
第85図 明戸遺跡 香炉形（255・256）



第86図 明戸遺跡 大型壺 (257)



①配置文Ⅲ 7 を3単位施す。



②大型の充填文をうめる。

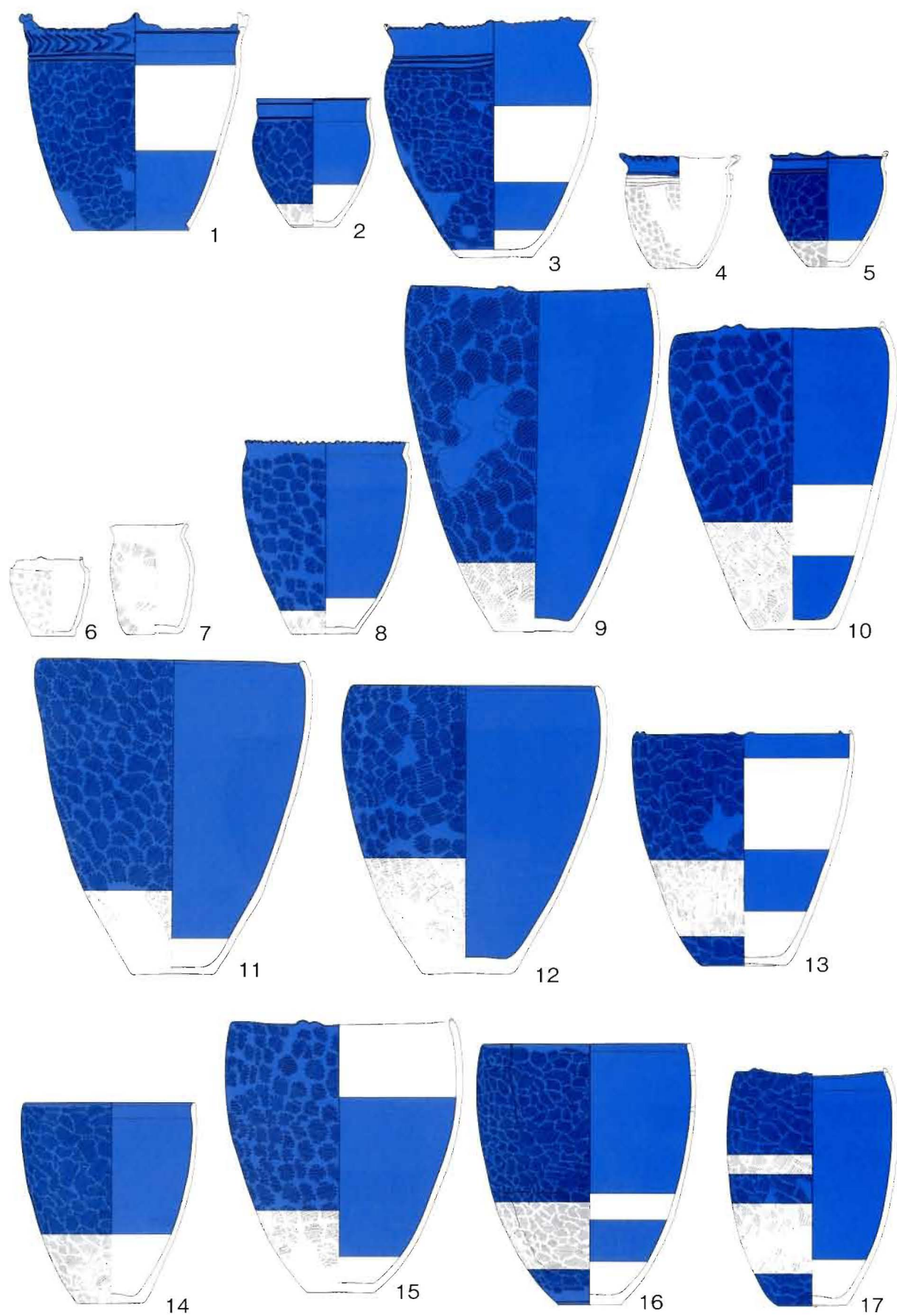


③細かな充填文をうめる。



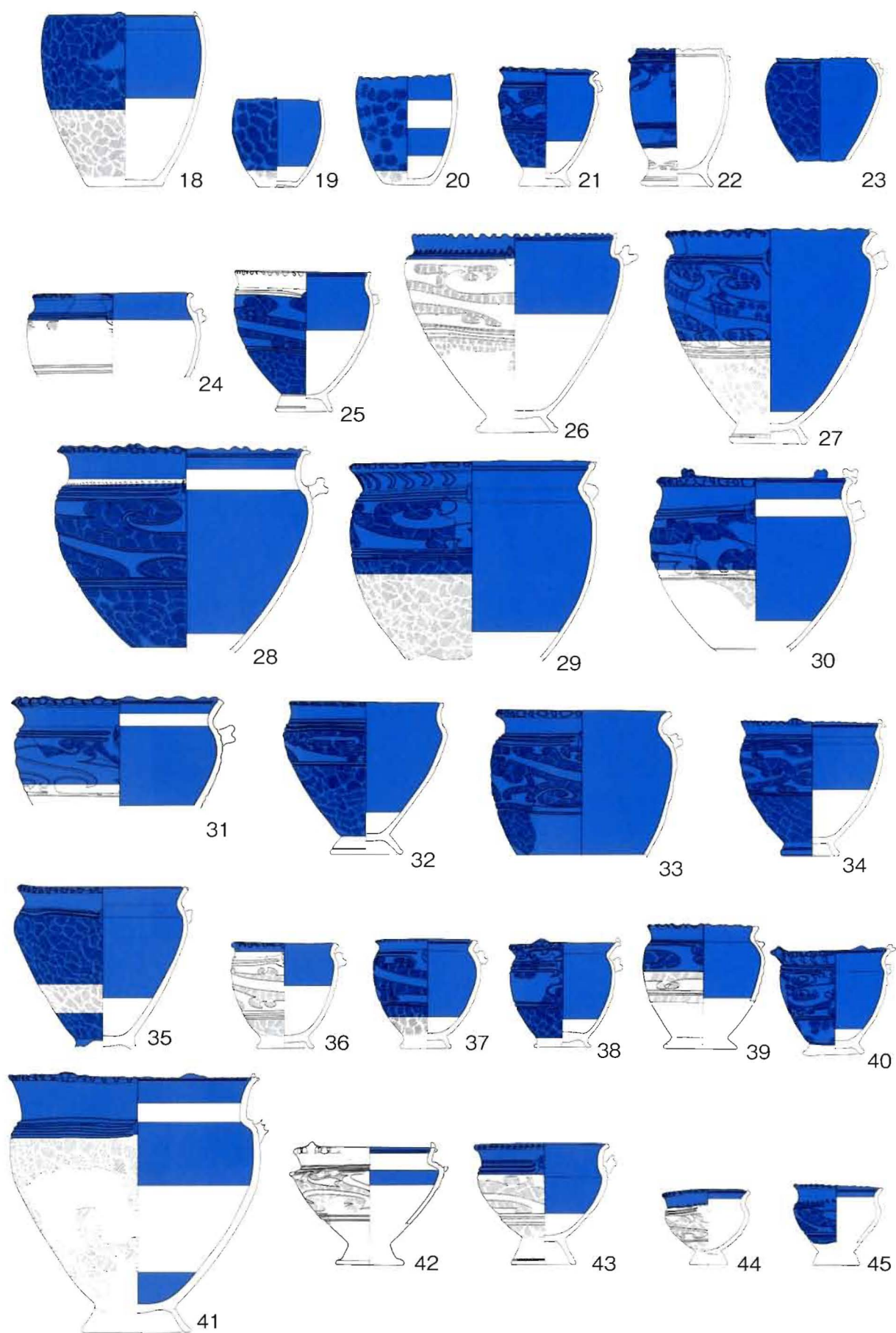
④充填文のみを抜き出したもの。

第87図 明戸遺跡（257の文様の描き方）



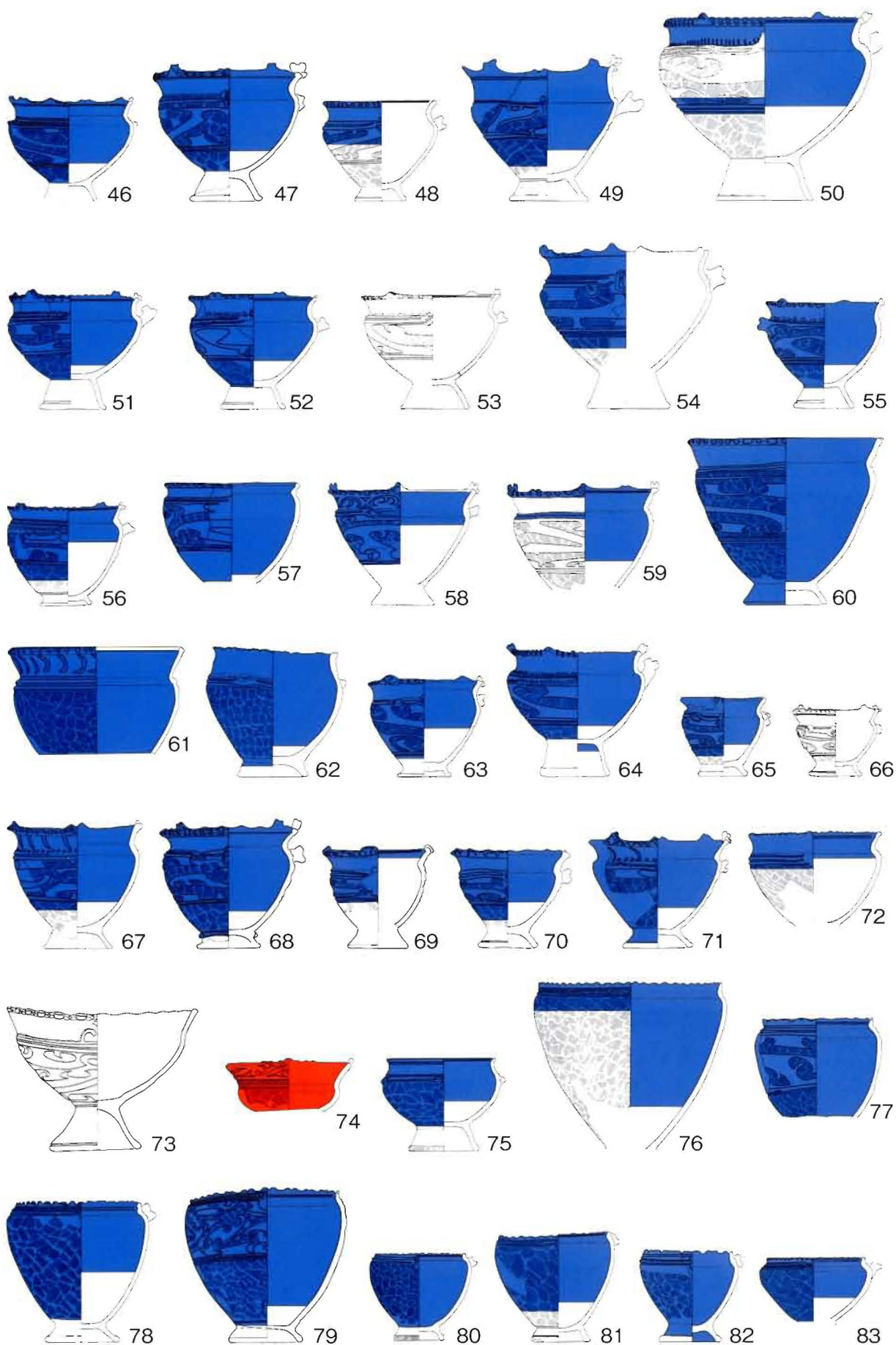
第88図 明戸遺跡 集成図(1)

0 10cm



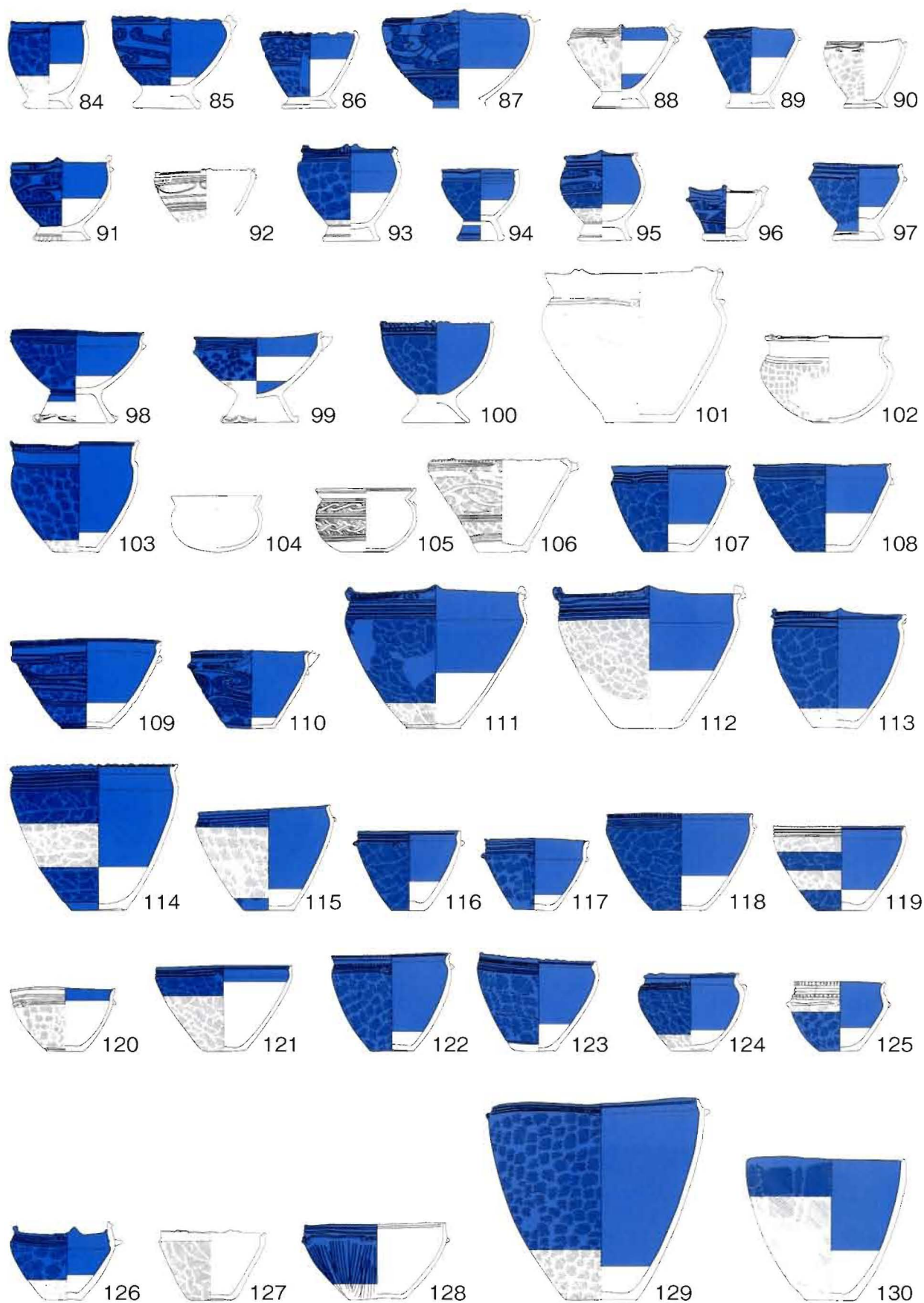
第89図 明戸遺跡 集成図(2)

0 10cm



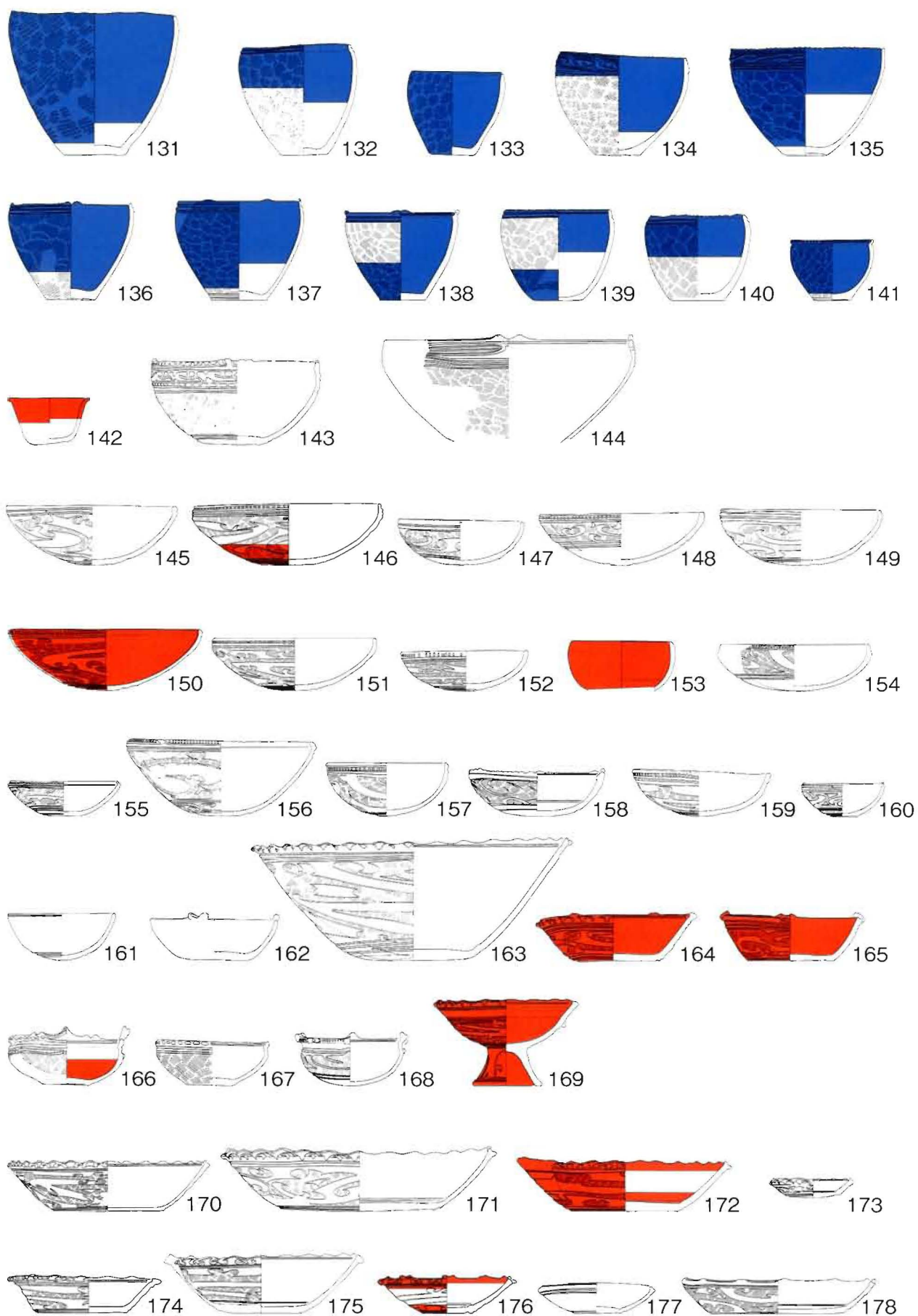
第90図 明戸遺跡 集成図(3)

0 10cm



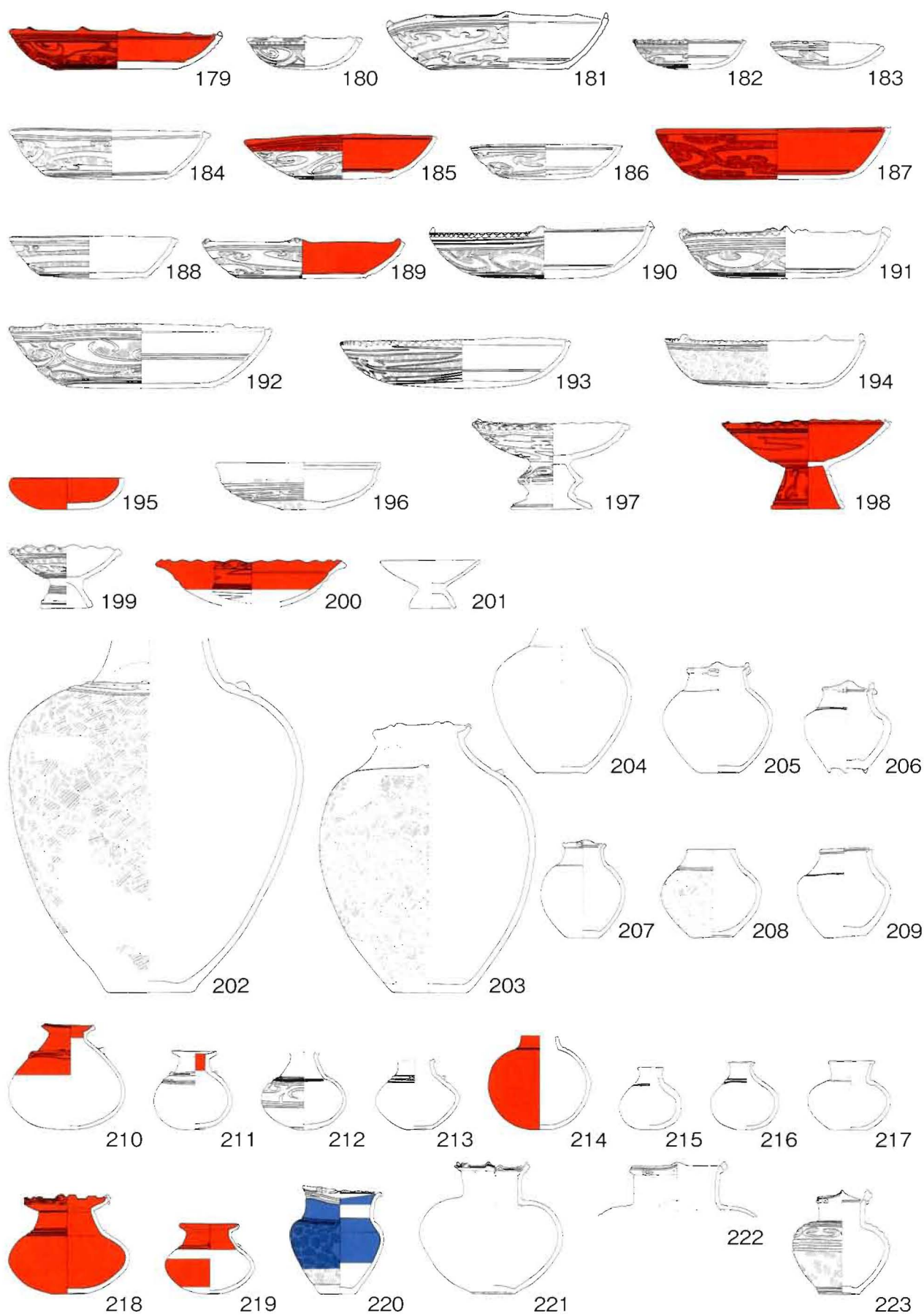
第91図 明戸遺跡 集成図(4)

0 10cm



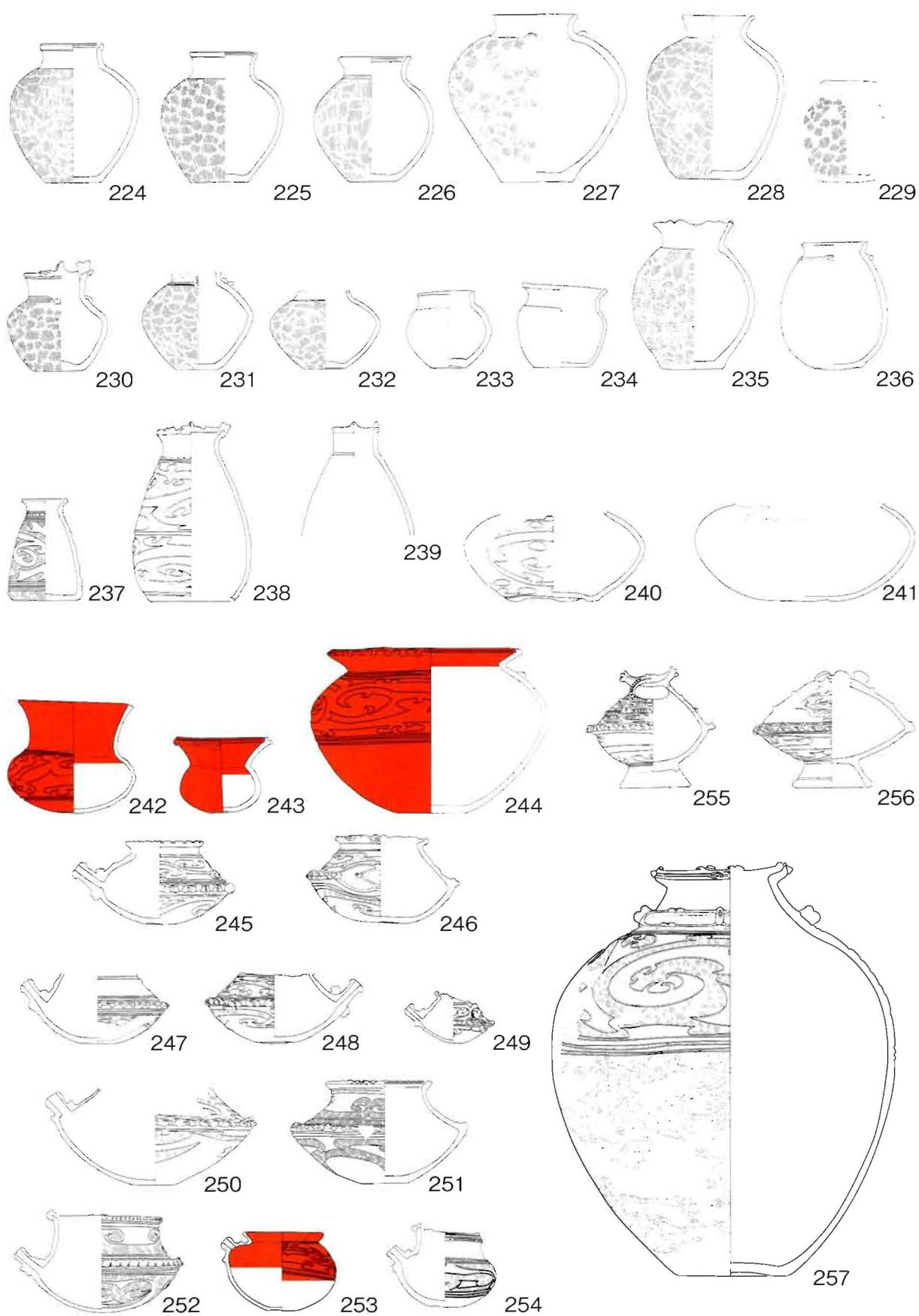
第92図 明戸遺跡 集成図(5)

0 10cm



第93図 明戸遺跡 集成図(6)

0 10cm



第94図 明戸遺跡 集成図(7)

番号	概 報 報告書の ページ数	器 形	特 徴	地 文	炭 化 物	赤 彩	器高 (cm)	器幅 (cm)
深鉢								
1	② -127p	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、頸部にくの字状の文様が連続して施される。突起が4個配置される。内面に沈線が1条めぐる。報告書の写真では底部があるが、剥落している。	縄文RL	有	無	(22.2)	24.1
2	未掲載	I	口縁部内面に沈線が1条めぐる。底部近くに段差があり、その部分が磨かれる。	縄文LR	有	無	14.0	13.3
3	① -21p	I	小波状口縁である。口唇に突起が配置される（7個残存）。頸部と体部の境に突起が1個配置される。	縄文LR	有	無	25.9	23.2
4	① -21p	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が4個配置される。頸部と体部の境に突起が1個配置される。	縄文LR	有	無	12.7	12.3
5	② -125p	I	口唇に山形突起と二又の突起が交互に3個ずつ残存し、その間に短沈線がめぐる。口縁部内面に沈線が1条めぐる。	縄文RL	有	無	12.6	12.8
6	① -21p ② -65p	I	口唇に突起が2個配置される。肩部に段があり、口縁がやや内傾する。	縄文LR	－	無	8.7	8.7
7	① -21p ② -65p	II	口縁部が屈曲するが沈線などで区別されない。外面が全体的に磨減している。	縄文LR	－	無	12.0	6.2
8	① -21p	II	小波状口縁である。口縁部がやや屈曲する。	縄文LR	有	無	21.1	18.5
9	② -127p	III	口唇に二又の突起が2個配置される。	縄文LR	有	無	37.7	27.7
10	② -127p	III	口唇に二又の突起が2個配置される。	縄文RL	有	無	33.0	25.0
11	未掲載	III	底部近くが磨減している。	縄文LR	有	無	34.5	30.2
12	② -127p	III	底部近くが磨減している。	縄文LR	有	無	31.5	28.9
13	① -21p	III	口唇に二又の突起が5個配置される。	縦縄文LR	有	無	25.6	24.2
14	未掲載	III	口縁部内面が肥厚している。	縄文LR	有	無	22.0	19.1
15	① -21p	III	口唇に二又の突起が2個配置される。	縄文LR	有	無	29.9	25.8
16	② -127p	III	折り返し口縁。体部に2個一対の補修孔が2箇所ある。	縄文LR結節	有	無	28.6	23.9
17	未掲載	III	上面から見て楕円形に歪んでいる。口唇に二又の突起が3個配置される。	縄文LR	有	無	26.1	18.7
18	未掲載	III	口唇に二又の突起が配置される（1個残存）。	縄文LR	有	無	19.1	18.0
19	① -21p	III	口唇に二又の突起が2個配置される。	縄文LR	有	無	9.8	10.2
20	未掲載	III	小波状口縁である。	縄文RL	有	無	11.9	11.0
21	② -125p	IV	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。頸部と体部の境に突起が1個配置される。体部に配置文が3単位施される。	縄文LR	有	無	12.9	10.9
22	② -125p	IV	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。口縁部の沈線間に刺突と沈線による文様が施される。その直下に突起が1個配置される。口縁部内面に沈線が1条めぐる。体部に配置文が3単位、体部と台部の境に羊歯状文が10単位施される。	縄文LR	有	無	15.0	11.0
23	未掲載	IV	小波状口縁である。その直下に突起が1個配置される。	縄文LR	有	無	(11.2)	12.7
鉢								
24	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。頸部と体部の境に突起が1個配置される。体部文様は区画文と考えられる。	縄文LR	有	無	(9.2)	19.0
25	① -23p	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。口縁部内面に沈線が1条めぐる。頸部と体部の境に突起が1個配置される。体部に区画文が2単位施される。	縄文LR	有	無	15.4	15.3
26	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。口縁部内面に沈線が1条めぐる。頸部と体部の境に刺突がめぐり、その直下に突起が1個配置される。体部に区画文が2単位施される。	縄文LR	有	無	〈21.8〉	24.0
27	② -64p	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。口縁部内面に沈線が1条めぐる。頸部と体部の境に突起が1個配置される。体部に区画文が3単位施される。	縄文LR	有	無	23.5	23.2
28	② -127p	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が配置される（2個残存）。口縁部内面に沈線が1条めぐる。頸部と体部の境に刺突がめぐり、その直下に突起が1個配置される。体部に区画文が3単位施される。	縄文LR	有	無	(22.0)	28.2

注) ①：「明戸遺跡発掘調査概報」 ②：「明戸遺跡発掘調査報告書」
（ ）は残存、〈 〉は推定径。

明戸遺跡観察表（1）

番号	概 報 報告書の ページ数	器 形	特 徴	地 文	炭 化 物	赤 彩	器高 (cm)	器幅 (cm)
鉢								
29	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。口縁部内面に沈線が1条めぐる。頸部に文様がめぐる。頸部と体部の境に突起が1個配置されるが破損している。体部に区画文が2単位残存する。口径の約3分の1残存。	縄文LR	有	無	(21.6)	〈27.0〉
30	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が配置される(3個残存)。口縁部内面に沈線が1条めぐる。頸部と体部の境に突起が1個配置される。体部に区画文が2単位施される。	縄文LR	有	無	(14.4)	22.6
31	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。頸部と体部の境に突起が1個配置される。体部に区画文が3単位施され、うち1単位形が他と異なっている。	縄文LR	有	無	(12.2)	23.2
32	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。頸部と体部の境の沈線内に刺突がめぐる。体部に区画文が3単位施される。頸部直下の破損部には突起が配置される可能性がある。口径の約2分の1残存。	縄文LR	有	無	16.7	〈18.1〉
33	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。頸部と体部の境に突起が1個配置される。体部に区画文が4単位施される。	縄文LR	有	無	(16.0)	20.4
34	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が配置される(1個残存)。口縁部内面に沈線が1条めぐる。頸部直下の破損部には突起が配置される可能性がある。口径の約2分の1残存。	縄文LR	有	無	15.1	〈15.7〉
35	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。頸部と体部の境に突起が1個配置される。	縄文LR	有	無	(17.8)	19.0
36	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。頸部と体部の境に突起が1個配置される。体部に区画文が2単位施される。	縄文LR	有	無	11.9	11.8
37	② -125p	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。頸部と体部の境に突起が1個配置される。体部に区画文が3単位施される。	縄文LR	有	無	12.0	11.8
38	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が4個配置される。頸部に文様が7単位施される。頸部と体部の境に突起が1個配置される。体部に区画文が2単位施される。	縄文LR	有	無	11.9	12.3
39	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。頸部と体部の境に突起が1個配置されるが破損している。体部に区画文が2単位施される。	縄文LR	有	無	(8.7)	13.3
40	① -23p	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が4個配置される。頸部に文様が施される。頸部と体部の境に突起が1個配置される。体部に配置文が2単位施される。	縄文LR	有	無	12.0	13.0
41	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が6個配置される。口縁部内面に沈線が1条めぐる。頸部と体部の境に突起が1個配置されるが破損している。	縄文LR	有	無	〈28.0〉	27.2
42	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が配置される(2個残存)。口縁部内面に沈線が1条めぐる。頸部と体部の境に突起(7個残存)が配置される。体部に配置文が3単位施され、それぞれ形が変化している。	縄文LR	有	無	(13.0)	16.4
43	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。口縁部内面に沈線が1条めぐる。頸部と体部の境に刺突がめぐり、その直下に突起が1個配置される。体部に区画文が3単位施される。	縄文RL	有	無	13.3	14.7
44	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。口縁部内面に沈線が1条めぐる。頸部と体部の境に刺突がめぐり、その直下に突起が1個配置されるが剥離している。体部に区画文が3単位施される。	縄文RL	有	無	〈8.3〉	9.6
45	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。内面に沈線が1条めぐる。頸部と体部の境に刺突がめぐり、その直下に突起が1個配置されるが剥離している。体部に区画文が4単位施される。	縄文RL	有	無	〈8.7〉	9.8
46	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、山形突起と、二又の突起が交互に5個ずつ配置される。頸部と体部の境の沈線内に刺突がめぐり、その直下に突起が配置される(1個残存)。体部に区画文が5単位施される。頸部直下の破損部には突起が配置される可能性がある。	縄文LR	有	無	(11.0)	13.9
47	① -23p	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が配置される(4個残存)。頸部と体部の境に突起が1個配置される。体部に区画文が4単位施される。	縄文LR	有	無	15.1	16.4

明戸遺跡観察表(2)

番号	概 報告書の ページ数	器 形	特 徴	地 文	炭 化 物	赤 彩	器高 (cm)	器幅 (cm)
鉢								
48	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。口縁部内面に沈線が1条めぐる。頸部と体部の境に突起が1個配置される。体部に区画文が3単位施される。	縄文LR	有	無	11.0	〈12.7〉
49	未掲載	I	口唇に突起が配置される（2個残存）。頸部と体部の境に大型の突起が1個、その両脇に突起が1個ずつ配置される。体部に区画文が6単位施される。	縄文RL	有	無	〈14.2〉	〈17.0〉
50	②-127p	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が5個配置される。口縁部内面に沈線が1条めぐる。頸部と体部の境に大型の突起が1個、その両脇に突起が1個ずつ配置される。体部に区画文が4単位施される。	縄文LR	有	無	20.7	23.3
51	②-125p	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が配置される（5個残存）。口縁部内面に沈線が1条めぐる。頸部と体部の境に刺突がめぐり、その直下に突起が1個配置される。体部に区画文が4単位施される。	縄文RL	有	無	13.3	14.7
52	①-23p	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起（5個残存）が配置される。口縁部内面に沈線が1条めぐる。頸部と体部の境に刺突がめぐり、その直下に突起が1個配置される。体部に区画文が4単位施される。	縄文LR	有	無	13.3	14.1
53	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が配置される（4個残存）。口縁部内面に沈線が1条めぐる。頸部と体部の境に刺突がめぐり、その直下に突起が1個配置される。体部に区画文が3単位施される。	縄文LR		無	〈12.5〉	15.2
54	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が配置される（4個残存）。口縁部内面に沈線が1条めぐる。頸部と体部の境に大型の突起が1個、その両脇に突起が1個ずつ配置される。体部に区画文が3単位施される。	縄文LR	有	無	〈17.2〉	18.9
55	①-23p	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が配置される（5個残存）。口縁部内面に沈線が1条めぐる。頸部と体部の境に刺突めぐり、その直下に突起が1個配置される。体部に区画文が2単位施される。	縄文LR	有	無	12.0	13.0
56	①-23p	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が4個配置される。口縁部内面に沈線が1条めぐる。頸部と体部の境に突起が3個配置される。体部に配置文が6単位施される。	縄文LR	有	無	11.5	12.6
57	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。頸部と体部の境の沈線内に刺突がめぐる。体部に配置文が2単位施される。頸部直下の破損部には突起が配置される可能性がある。	縄文LR	有	無	〈10.9〉	15.0
58	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が4個配置される。頸部に文様が9単位めぐる。頸部と体部の境に大型の突起が1個、その両脇に突起が1個ずつ配置される。体部に区画文が2単位施される。	縄文LR	有	無	〈12.7〉	16.6
59	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が配置される（4個残存）。口縁部内面に沈線が1条めぐる。体部に区画文が3単位施される。頸部直下の破損部には突起が配置される可能性がある。口径の約3分の1残存。	縄文LR	有	無	〈11.0〉	〈16.7〉
60	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。体部に配置文が2単位施される。頸部直下の破損部には突起が配置される可能性がある。	縄文LR	有	無	18.2	21.5
61	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。頸部に文様が施される。頸部直下の破損部には突起が配置される可能性がある。口径の約3分の1残存。	縄文LR	有	無	〈11.8〉	19.3
62	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。頸部と体部の境に突起が1個配置される。	縄文LR	有	無	14.4	15.0
63	②-125p	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が4個配置される。頸部と体部の境に小さな突起を両脇に持つ大型の突起が配置される。体部に区画文が4単位施される。	縄文LR	有	無	11.1	12.6
64	②-125p	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が配置される（2個残存）。口縁部内面に沈線が1条めぐる。頸部と体部の境に刺突が2条めぐり、その直下に小さな突起を両脇に持つ大型の突起が配置される。体部に区画文が4単位施される。	縄文RL	有	無	14.7	15.3

明戸遺跡観察表（3）

番号	概 報 報告書の ページ数	器 形	特 徴	地 文	炭 化 物	赤 彩	器高 (cm)	器幅 (cm)
鉢								
65	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起と体部の境に小さな突起を両脇に持つ大型の突起が突起が配置される。体部に区画文が3単位施される。	縄文LR	有	無	8.7	9.4
66	② -125p	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が4個配置される。突起と体部の境に小さな突起を両脇に持つ大型の突起が配置される。体部に配置文が2単位施される。	縄文LR	－	無	7.9	9.5
67	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が配置される(3個残存)。頸部に文様が施され、その直下に刺突がめぐり、体部に配置文が3単位施される。	縄文LR	有	無	(13.3)	14.9
68	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が2個配置される。突起と体部の境に小さな突起を両脇に持つ大型の突起が配置される。体部に配置文が3単位施される。体部と台部の境に突起が4個配置される。	縄文LR	有	無	〈13.3〉	15.1
69	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が4個配置される。口縁部内面に沈線が1条めぐり、突起と体部の境に突起が1個配置されるが剥離している。体部に配置文が3単位施される。	縄文LR	有	無	〈10.8〉	11.6
70	① -23p	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、口縁部内面に沈線が1条めぐり、突起と体部の境に突起が1個配置される。体部に区画文が2単位施される。	縄文LR	有	無	10.7	13.1
71	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が配置される(4個残存)。頸部に文様が施される。突起と体部の境に小さな突起を両脇に持つ大型の突起が配置される。口径の約3分の1残存。	縄文LR	有	無	12.5	(15.6)
72	未掲載	I	小波状口縁である。口縁部内面に沈線が1条。突起と体部の境に突起が1個配置されるが剥離している。	縄文LR	有	無	(10.3)	14.5
73	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、頸部に文様が施される。体部に配置文が2単位施される。外面が磨滅しており文様が見えにくい。	無文	－	無	15.0	(20.9)
74	未掲載	I	口唇に突起(2個残存)が配置される。頸部に2個1対の文様が8単位施される。口径の約2分の1残存。	縄文LR	無	有	(5.4)	13.8
75	未掲載	I	小波状口縁である。口縁部内面に沈線が1条めぐり、突起と体部の境に突起が5個配置される。	縄文RL	有	無	10.2	12.9
76	未掲載	II	小波状口縁である。口縁部の沈線内に刺突がめぐり、	縄文LR	有	無	(8.5)	21.3
77	未掲載	II	小波状口縁である。口縁部内面に沈線が1条めぐり、頸部直下の破損部には突起が配置される可能性がある。口径の約4分の1残存。	縄文LR	有	無	(10.8)	(14.0)
78	未掲載	II	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、口縁部の沈線内に刺突がめぐり、突起が1個配置される。口縁部内面に沈線が1条めぐり、	縄文LR	有	無	〈5.4〉	15.6
79	① -23p	II	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、口縁部の沈線間に刺突がめぐり、その直下に突起が1個配置されるが剥離している。口縁部内面に沈線が1条めぐり、体部に2個1対の配置文が2単位施される。	縄文LR	有	無	〈17.0〉	17.7
80	① -23p ② -64p	II	小波状口縁である。口縁部に突起が1個配置される。口縁部内面に沈線が1条めぐり、	縄文LR	有	無	9.6	11.2
81	① -23p ② -64p	II	小波状口縁である。口縁部に突起が1個配置される。口縁部内面に沈線が2条めぐり、	縄文LR	有	無	11.7	13.1
82	未掲載	II	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、口縁部に突起が1個配置される。	縄文LR	－	無	10.1	10.8
83	未掲載	II	小波状口縁である。口縁部に突起が1個配置される。口縁部内面に沈線が1条めぐり、	縄文LR	有	無	(7.0)	12.3
84	① -23p ② -64p	II	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、口縁部に突起が1個配置される。口縁部内面に沈線が1条めぐり、	縄文LR	有	無	9.3	8.7
85	① -23p	II	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、口縁部に大型の突起が1個、突起が3個配置される。体部に区画文が4単位施される。	縄文LR	有	無	10.1	13.1

明戸遺跡観察表（4）

番号	概 報 報告書の ページ数	器 形	特 徴	地 文	炭 化 物	赤 彩	器高 (cm)	器幅 (cm)
鉢								
86	未掲載	Ⅱ	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。体部に区画文が3単位施される。頸部直下の破損部には突起が配置される可能性がある。口径の約3分の1残存。	縄文LR	有	無	8.3	〈10.7〉
87	未掲載	Ⅱ	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。口縁部の沈線内に刺突がめぐる。突起が1個配置されるが破損している。体部に配置文が2単位残存する。口径の約3分の1残存。	縄文LR	有	無	(10.2)	〈16.4〉
88	② -125p	Ⅱ	小波状口縁である。口縁部に突起が1個配置され、沈線直下に突起(4個残存)が配置される。	縄文LR	有	無	9.0	11.5
89	① -23p ② -64p	Ⅱ	小波状口縁である。口縁部に突起が1個、沈線直下に突起が8個配置される。	縄文RL	有	無	8.8	10.0
90	未掲載	Ⅱ	小波状口縁である。口縁部に突起が1個、沈線直下に突起が2個配置される。	縄文RL	有	無	7.5	8.8
91	未掲載	Ⅱ	口唇に山形突起が1個、その直下に突起が配置される(2個残存)。体部に区画文が4単位施される。口径の約3分の1残存。	縄文LR	有	無	9.0	10.9
92	未掲載	Ⅱ	小波状口縁である。口唇に突起が3個、その直下に突起が配置される(2個残存)。体部に横に連続する文様が施される。	縄文LR	－	無	(5.7)	11.0
93	未掲載	Ⅱ	口唇に刻み目がめぐり、突起が5個配置される。口縁部内面に沈線が1条めぐる。	縄文RL	有	無	10.5	11.2
94	② -125p	Ⅱ	口縁部内面に沈線が1条めぐる。口唇に突起が配置されている可能性がある。	縄文RL	有	無	7.8	8.4
95	未掲載	Ⅱ	口唇に山形突起が1個、突起が5個配置される。口縁部内面に沈線が1条めぐる。体部に横に連続する文様が施される。	縄文RL	有	無	9.8	9.2
96	未掲載	Ⅱ	口唇に大型の突起が1個、突起が4個配置される。頸部と体部の境に突起が5個配置される。体部に区画文が4単位施される。	縄文RL	有	無	6.0	8.0
97	未掲載	Ⅱ	小波状口縁である。口縁部内面に沈線が1条めぐる。体部と頸部の境に突起が4個配置される。	縄文RL	有	無	8.3	10.1
浅鉢								
98	② -125p	Ⅳ	小波状口縁である。口縁部内面に沈線が1条めぐる。体部と頸部の境に突起が外面に4個配置される。台部に突起が8配置される。	縦縄文RL	有	無	10.0	14.4
99	未掲載	Ⅳ	頸部と体部の境に大型の突起が1個、突起(4個残存)が配置される。台部に突起が8個配置される。	縦縄文RL	有	無	9.2	(13.8)
鉢								
100	② -125p	Ⅲ	小波状口縁である。口唇に突起が4個配置される。口縁部の沈線間に列点がめぐる。	縄文LR	有	無	11.0	12.3
101	① -21p	Ⅳ	口唇に二又の突起が配置される(2個残存)。頸部と体部の境に突起が1個配置される。	無文	－	無	16.8	20.0
102	① -21p	Ⅳ	口唇部に山形突起と二又の突起が交互に3個ずつ配置される。突起間に沈線が1条めぐる。頸部と体部の境に突起が1個配置される。	縄文LR	－	無	9.4	14.4
103	未掲載	Ⅳ	口唇に突起が4個配置され、その間に刻み目がめぐる。口縁部内面に沈線が1条めぐる。	縄文LR	有	無	12.1	13.7
104	未掲載	Ⅳ	頸部と体部の境に段差がある。丸底。	無文	無	無	6.1	9.8
105	② -124p	Ⅳ	口唇に沈線が1条めぐる。口縁部内面に沈線が1条めぐる。頸部と体部の境に突起が1個配置される。文様帯が2段あり、羊歯状文が施される。上段は11単位残存、下段は8単位残存する。	無文	無	無	6.9	10.9
106	② -124p	Ⅴ	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。口唇の沈線内に刻み目がめぐり、その直下に突起が1個配置される。体部に2個1対の配置文が2単位施される。底部外面にノの字状と三角形状の文様によってX字状の隆帯部が形成される。口径の約4分の3残存。	縄文LR	有	無	10.0	15.4
107	未掲載	Ⅴ	小波状口縁である。口縁部に沈線がめぐり、突起が6個配置される。口縁部内面に沈線が1条めぐる。	縄文RL	有	無	9.4	12.8
108	未掲載	Ⅴ	小波状口縁である。口縁部に沈線がめぐり、その直下に突起が配置される(1個残存)。	縄文RL	有	無	9.6	15.0

明戸遺跡観察表 (5)

番号	概 報 報告書の ページ数	器 形	特 徴	地 文	炭 化 物	赤 彩	器高 (cm)	器幅 (cm)
鉢								
109	② -124p	V	口唇に刻み目がめぐる。口縁部直下に突起が5個配置され、突起の左側のみ沈線から伸びる三角形の影り込みが施される。口縁部内面に沈線が1条めぐる。体部に配置文が6単位施される。	縄文LR	有	無	9.8	16.3
110	未掲載	V	小波状口縁である。口縁部に刻み目がめぐり、その直下に大型の突起が1個、突起が9個配置される。	縄文RL	有	無	8.5	12.9
111	未掲載	V	口唇に小さな突起を両脇に持つ大型の突起が4個配置され、突起間に刻み目がめぐる。口縁部に沈線が5条めぐる。底部近くに沈線が1条めぐる。	縄文LR	有	無	15.5	19.7
112	未掲載	V	口唇に小さな突起を両脇に持つ大型の突起が4個配置され、突起間に刻み目がめぐる。口縁部に沈線が5条めぐり、沈線内に刻み目がめぐる。	縄文LR	有	無	(14.0)	19.8
113	未掲載	V	口唇に小さな突起を両脇に持つ大型の突起が4個配置され、突起間に刻み目がめぐる。口縁部内面に沈線が1条めぐる。	縄文RL	有	無	12.9	14.5
114	未掲載	V	小波状口縁である。口唇に沈線が1条めぐる。口縁部に沈線が5条めぐり、沈線内に10～12個を1組とした刺突がめぐる。底部近くに段差があり、その部分が磨かれる。	羽状縄文 LR RL	有	無	15.8	18.1
115	未掲載	V	口縁部に沈線がめぐり、突起が配置される（3個残存）。沈線の2条目が突起の上部に入り込んでいる。	縦縄文RL	有	無	11.0	14.8
116	未掲載	V	小波状口縁である。口縁部に沈線がめぐり、突起が4個配置される。口縁部内面に沈線が1条めぐる。	縄文RL	有	無	8.6	11.2
117	未掲載	V	小波状口縁である。口縁部に沈線がめぐり、突起が4個配置される。口縁部内面に沈線が1条めぐる。	縦縄文RL	有	無	7.8	11.3
118	未掲載	V	口唇に刻み目がめぐる。口縁部に沈線がめぐり、突起が配置される（1個残存）。	縦縄文RL	有	無	10.5	16.1
119	未掲載	V	小波状口縁である。内面に沈線が1条めぐる。	縄文RL	有	無	9.2	14.5
120	② -124p	V	口唇に刻み目がめぐる。口縁部に沈線がめぐり、突起が4個配置される。突起の左側のみ沈線からのびる三角形の影り込みが施される。底部近くに沈線が1条めぐる。	縄文LR	有	無	6.9	11.3
121	未掲載	V	口縁部に沈線がめぐり、突起が配置される（1個残存）。口縁部内面に沈線が1条めぐる。	縦縄文RL	有	無	9.4	14.8
122	未掲載	V	小波状口縁である。口縁部に刺突がめぐり、その直下に突起が1個配置される。口縁部内面に沈線が1条めぐる。	縄文RL	有	無	10.5	13.0
123	① -21p	V	小波状口縁である。口縁部に沈線がめぐり、沈線間に刻み目がめぐる。口縁部内面に沈線が1条めぐる。	縄文LR結節	有	無	10.7	13.2
124	未掲載	V	口唇に突起が配置される（2個残存）。口縁部に刺突がめぐり、その直下に突起が1個配置される。口縁部内面に沈線が1条めぐる。	縄文LR	有	無	8.5	11.5
125	② -124p	V	口唇に刻み目がめぐる。口縁部の沈線間に刺突がめぐり、その直下に突起が4個配置される。	縄文LR	有	無	7.6	10.6
126	② -124p	V	片口の鉢である。口唇に突起が4個配置される。突起間に沈線がめぐる。口縁部内面に沈線がめぐる。	縄文RL	有	無	7.8	11.5
127	未掲載	V	口唇に突起が配置される（2個残存）。	縄文LR	有	無	7.6	11.4
128	① -21p	V	小波状口縁である。口縁部に沈線がめぐり、突起が配置される（4個残存）。突起の左側のみ沈線からのびる三角形の影り込みが施される。	条痕	有	無	8.2	15.2
129	② -127p	V	小波状口縁である。口縁部に沈線がめぐり、突起が4個配置される。内面に沈線が1条めぐる。	縄文LR	有	無	21.7	23.2
130	未掲載	VI	平縁である。突起や沈線が施されない。	縄文RL	有	無	15.3	17.4
131	未掲載	VI	平縁である。突起や沈線が施されない。	縄文LR	有	無	15.7	18.9
132	② -124p	VI	小波状口縁である。口縁部に沈線がめぐる。	縄文LR	有	無	12.3	13.1
133	① -21p ② -64p	VI	平縁である。突起や沈線が施されない。	縄文RL	有	無	9.3	10.8
134	② -124p	VI	小波状口縁である。口縁部に配置文が6単位施される。	羽状縄文 LR RL	有	無	11.5	14.8

明戸遺跡観察表（6）

番号	概 報 報告書の ページ数	器 形	特 徴	地 文	炭 化 物	赤 彩	器高 (cm)	器幅 (cm)
鉢								
135	① -25p	Ⅵ	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。口縁部に羊歯状文が7単位残存する。	縄文LR	有	無	11.9	17.4
136	① -21p	Ⅵ	小波状口縁である。口唇に突起が4個配置される。	縄文LR	有	無	10.9	13.8
137	未掲載	Ⅵ	口唇に突起が配置される（2個残存）。底部近くに沈線が2条めぐる。	縄文LR	有	無	11.2	(14.1)
138	未掲載	Ⅵ	口唇に突起が配置される（3個残存）。口縁部内面に沈線が1条めぐる。	縄文LR	有	無	10.1	12.5
139	未掲載	Ⅵ	小波状口縁である。口縁部内面に沈線が1条めぐる。	縄文LR	有	無	10.2	12.6
140	① -21p	Ⅵ	小波状口縁である。口縁部に沈線がめぐる。	縄文LR	有	無	9.5	11.7
141	未掲載	Ⅵ	口唇に刻み目がめぐる。底部近くに沈線が1条めぐる。	縄文RL	有	無	6.7	9.2
142	未掲載	Ⅵ	口縁部が外反する。内面・外面に赤彩が見られる。	無文	無	有	5.1	9.1
143	② -124p	Ⅵ	口唇に突起が4個配置される。突起間に刺突と沈線による装飾がめぐる。口縁部に羊歯状文が施される。	縄文LR	－	無	9.5	18.7
144	① -25p	Ⅵ	口唇に沈線が1条めぐり、突起が配置される（1個残存）。口縁部に変形工字文が施される。口縁部内面に沈線が1条めぐる。補修孔が1個残存する。	縄文LR	－	無	(11.5)	(28.2)
浅鉢								
145	① -24p	I	体部に配置文が3単位施される。丸底。	縄文LR	無	無	6.6	18.9
146	未掲載	I	口縁部の沈線内に刺突がめぐる。体部に配置文が2単位施される。丸底。	縄文LR	無	有	6.8	21.0
147	① -24p	I	体部に配置文が3単位施される。丸底。	縄文LR	無	無	5.1	13.9
148	未掲載	I	口縁部の沈線内に刺突がめぐる。体部に配置文が7単位施される。丸底。	縄文LR	無	無	5.8	〈18.5〉
149	① -24p ② -65p	I	体部に配置文が6単位施される。丸底。	縄文LR	無	無	6.2	18.0
150	未掲載	I	口縁部に刺突がめぐる。体部に配置文が1単位残存する。丸底。口径の約3分の1残存。	縄文LR	無	有	6.7	〈21.5〉
151	未掲載	I	口縁部の沈線内に刺突がめぐる。体部に配置文が1単位残存する。丸底。口径の約3分の1残存。	縄文LR	無	無	5.8	〈18.3〉
152	未掲載	I	口縁部に刺突がめぐる。体部に配置文が1単位残存する。丸底。口径の約3分の1残存。	縄文LR	無	無	4.4	〈14.2〉
153	未掲載	I	内面・外面ともによく磨かれている。	無文	無	有	(5.5)	(12.0)
154	未掲載	I	口縁部の沈線内に刺突がめぐる。体部に配置文が1単位残存する。丸底。口径の約4分の1残存。	縄文LR	無	無	5.1	(17.0)
155	① -24p	I	口縁部の沈線内に刺突がめぐる。口縁部内面に沈線が1条めぐる。体部に配置文が4単位施される。	縄文LR	無	無	3.8	(12.3)
156	② -126p	I	口縁部に沈線と刺突による装飾が6組施される。文様帯は2段に分かれており、上段には配置文が5単位、下段には配置文が5単位施される。丸底。	縄文LR	無	無	8.2	21.0
157	① -24p ② -65p	I	口縁部の沈線間に刺突がめぐる。体部に配置文が4単位施される。丸底。	縄文LR	無	無	5.8	13.6
158	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が6個配置される。体部に配置文が11単位施される。丸底。	縄文LR	無	無	5.0	15.0
159	① -24p	I	口縁部の沈線内に刺突がめぐる。体部に配置文が2単位施される。丸底。	縄文LR	無	無	5.0	(15.3)
160	未掲載	I	口唇に突起が配置される（1個残存）。口縁部の沈線内に刺突がめぐる。体部に配置文が3単位残存する。口径の約2分の1残存。	縄文LR	無	無	3.7	9.1
161	未掲載	I	底部近くに沈線が1条めぐる。	無文	無	無	5.2	12.0
162	未掲載	Ⅱ	口唇に突起が2個配置される。	無文	無	無	5.2	14.1
163	② -126p	Ⅱ	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。口縁部内面に沈線が1条めぐる。体部に区画文が3単位施される。底部内面に段差がある。	縄文LR	無	無	13.1	35.5

明戸遺跡観察表（7）

番号	概 報告書の ページ数	器 形	特 徴	地 文	炭 化 物	赤 彩	器高 (cm)	器幅 (cm)
浅鉢								
164	未掲載	Ⅱ	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が4個配置される。口縁部内面に沈線が1条がめぐり、体部に区画文が4単位施される。	縄文LR	無	有	5.6	17.9
165	未掲載	Ⅱ	口唇に突起（2個残存）が配置される。体部に配置文が4単位施される。	縄文LR	無	有	5.2	15.5
166	① -23p ② -65p	Ⅲ	口唇に山形突起が1個、二又の突起が2個配置される。口縁部に刺突がめぐり、突起が配置される（4個残存）。	縄文RL	無	有	6.5	12.7
167	① -24p ② -65p	Ⅲ	口唇に楕円形の彫り込みがめぐり、口縁部内面に沈線が1条めぐり、	縄文RL	無	無	5.0	12.5
168	未掲載	Ⅲ	口唇部に突起が配置され（7個残存）、突起間に沈線・刻み目がめぐり、口縁部に沈線がめぐり、突起が4個配置される。体部に配置文が4単位施される。丸底。	縄文LR	無	無	6.0	12.2
169	① -25p	Ⅳ	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、体部に突起が1個配置され、配置文が2単位施される。台部に弧線による文様が4単位施される。口縁部が屈曲している。	縄文LR	無	有	9.6	16.0
皿								
170	未掲載	Ⅰ	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、口縁部内面に沈線が1条がめぐり、体部に配置文が4単位施される。口径の約4分の1残存。	縄文LR	無	無	7.9	〈32.0〉
171	未掲載	Ⅰ	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、体部に区画文が3単位施される。底部内面に沈線が1条めぐり、口径の約3分の2残存。	縄文LR	無	無	6.7	30.5
172	未掲載	Ⅰ	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、体部に配置文が2単位施される。底部内面に段差がある。	縄文LR	無	有	5.6	23.8
173	未掲載	Ⅰ	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、口縁部内面に沈線が1条めぐり、体部に配置文が4単位残存。底部内面に沈線が1条めぐり、	無文	無	無	2.2	9.3
174	未掲載	Ⅰ	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、口縁部内面に沈線が1条めぐり、体部に区画文が3単位施される。口径の約2分の1残存。	縄文LR	無	無	4.2	16.8
175	未掲載	Ⅰ	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、口縁部内面に沈線が1条めぐり、体部に配置文が2単位施される。底部内面に沈線が1条めぐり、口径の約2分の1残存。	縄文LR	無	無	〈6.5〉	〈22.0〉
176	未掲載	Ⅰ	口唇に3個1組の突起が9個配置され、突起間に刻み目がめぐり、体部に区画文が2単位施される。底部内面に沈線が2条めぐり、	無文	無	有	4.3	15.0
177	未掲載	Ⅰ	口唇に沈線が1条めぐり、底部近くに沈線が1条めぐり、	無文	無	無	3.4	13.0
178	未掲載	Ⅰ	口唇に突起が配置され（6個残存）、突起間に短沈線がめぐり、体部に配置文が7単位施される。底部内面に沈線が1条めぐり、	縄文LR	無	無	4.1	21.4
179	未掲載	Ⅰ	口唇に突起が配置され（2個残存）、突起間に沈線がめぐり、体部に配置文が7単位施される。底部内面に沈線が1条めぐり、	縄文LR	無	有	4.4	23.5
180	未掲載	Ⅰ	口唇に突起（3個残存）が配置される。口縁部に刺突がめぐり、体部に配置文が2単位残存する。口径の約2分の1残存。	縄文LR	無	無	3.7	(15.0)
181	未掲載	Ⅰ	口唇に突起が6個配置され、突起間に沈線が1条めぐり、体部に配置文が3単位施される。底部内面に沈線が1条めぐり、	縄文LR	無	無	6.2	24.1
182	未掲載	Ⅰ	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、口縁部内面に沈線が1条めぐり、体部に配置文が4単位施される。体部内面に沈線が1条めぐり、口径の約3分の1残存。	縄文LR	無	無	3.4	12.4
183	未掲載	Ⅰ	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、体部に配置文が5単位施される。	縄文LR	無	無	3.1	12.4
184	① -24p ② -65p	Ⅰ	口唇に沈線が1条めぐり、口縁部内面に沈線が1条めぐり、体部に配置文が4単位施される。	縄文LR	無	無	5.5	22.2
185	① -24p ② -65p	Ⅰ	口唇に沈線が1条めぐり、体部に配置文が3単位施される。底部内面に沈線が1条めぐり、	縄文LR	無	有	4.9	21.5
186	① -24p	Ⅰ	口唇に沈線が1条めぐり、体部に配置文が3単位施され、うち1単位は他と形が異なる。底部内面に段差がある。	縄文LR	無	無	4.0	16.9

明戸遺跡観察表（8）

番号	概 報告書の ページ数	器 形	特 徴	地 文	炭 化 物	赤 彩	器高 (cm)	器幅 (cm)
皿								
187	未掲載	I	口唇に沈線が1条めぐる。口縁部内面に沈線が1条めぐる。体部に配置文が4単位施される。底部内面に沈線が1条めぐる。口径の約2分の1残存。	縄文LR	無	有	5.6	〈26.0〉
188	未掲載	I	口唇に沈線が1条めぐる。体部に区画文が2単位施される。	縄文LR	無	無	4.7	18.6
189	②-126p	I	口唇に突起が5個配置され、突起間に沈線がめぐる。体部に区画文が3単位施される。底部内面に段差がある。	縄文LR	無	有	4.5	22.3
190	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が配置される（1個残存）。突起間に刺突がめぐる。口縁部内面に沈線が1条めぐる。体部に配置文が8単位施される。	縄文LR	無	無	5.9	25.0
191	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、大小の突起が配置される（14個残存）。体部に配置文が7単位施される。底部内面に沈線が1条めぐる。	縄文LR	無	無	5.8	22.6
192	未掲載	I	口唇に突起が3個配置され、沈線・刺突がめぐる。沈線は刺突に対応するように彫り込みを付加される。体部に配置文が6単位施される。内面に縄文が施された隆帯が1条めぐる。	縄文RL	無	無	7.3	29.0
193	②-126p	I	口唇に沈線・刺突がめぐる。沈線は刺突に対応するように彫り込みを付加される。体部に区画文が3単位施される。体部内面に沈線が1条めぐる。口径の約2分の1残存。	縄文RL	無	無	5.4	25.2
194	②-126p	I	口唇に突起が配置され（2個残存）、沈線・刺突がめぐる。沈線は刺突に対応するように彫り込みを付加される。底部内面に沈線が2条めぐる。	縄文LR	無	無	5.7	22.1
195	②-126p	I	内面・外面ともによく磨かれている。	無文	無	有	3.5	12.7
196	未掲載	II	口縁部内面に沈線が1条めぐる。体部に配置文が10単位施される。口径の約2分の1残存。	縄文LR	無	無	5.1	18.1
197	②-126p	III	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。体部に区画文が3単位施される。底部内面に段差がある。台部に渦巻状の文様が5単位施され、その直下に突起が5個配置、突起間に沈線がめぐる。	無文	無	無	〈9.5〉	17.5
198	未掲載	III	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。口縁部内面に沈線が1条がめぐる。体部に横に連続する文様が施される。底部内面に段差がある。台部に弧線による文様が5単位、三叉状の文様が5単位施される。三叉状の文様は2単位透かしになっている。	無文	無	有	10.0	18.7
199	未掲載	III	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。体部に配置文が3単位施される。底部内面に段差がある。口径の約2分の1残存。	縄文LR	無	無	7.1	12.4
200	未掲載	III	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。文様帯が2段ある。口縁部が屈曲している。	無文	無	有	(5.3)	〈20.9〉
201	未掲載	III	底部内面に段差がある。	無文	無	無	5.3	11.0
壺								
202	未掲載	I	頸部と体部の境に沈線がめぐり突起が1個配置される。	縄文LR	無	無	(39.0)	32.3
203	未掲載	I	口唇に突起が配置される（2個残存）。頸部と体部の境に段差があり、突起が1個配置される。	縄文LR	無	無	29.6	23.7
204	未掲載	I	頸部と体部の境に段差がある。	無文	無	無	(16.0)	15.2
205	②-124p	I	口唇に2個1組の突起が1個配置される。口縁部内面に沈線が1条めぐる。	無文	無	無	12.3	12.1
206	②-124p	I	口縁に2個1組の突起が1個配置される。口縁部内面に沈線が1条めぐる。底部に四脚がつく。	無文	無	無	10.2	9.6
207	②-124p	II	口唇に突起が1個配置される。	無文	無	無	10.8	9.2
208	①-22p		口唇に沈線が1条めぐる。頸部と体部の境に沈線が1条めぐる。	縄文LR	無	無	9.8	11.1
209	②-124p	I	口縁部内面に沈線が1条めぐる。頸部と体部の境に段差がある。	無文	無	無	9.7	10.3
210	①-22p	II	口唇に沈線が1条めぐる。頸部と体部の境に隆帯が1条めぐり、突起が4個配置される。突起間に短沈線がめぐる。	無文	無	有	11.5	12.8
211	①-22p	II	頸部と体部の境に隆帯が1条めぐり、突起が4個配置される。突起間に沈線がめぐる。底部に沈線が丸く施される。	無文	無	無	8.7	8.6
212	未掲載	II	体部に配置文が5単位施される。底部近くに沈線が1条めぐる。	無文	無	無	(8.5)	9.4
213	①-22p	II	頸部と体部の境に沈線がめぐり、突起が1個配置される。	無文	無	有	(7.8)	9.2

明戸遺跡観察表（9）

番号	概 報 報告書の ページ数	器 形	特 徴	地 文	炭 化 物	赤 彩	器高 (cm)	器幅 (cm)
壺								
214	① -22p	II	体部と頸部の境に沈線がめぐる。外面がよく磨かれている。	無文	無	有	(10.3)	11.3
215	① -22p		頸部と体部の境に沈線が1条めぐる。	無文	無	無	(7.0)	6.8
216	① -22p	II	頸部と体部の境に沈線が2条めぐる。底部に沈線が丸く施される。	無文	無	無	7.5	7.5
	② -65p							
217	② -65p	II	頸部と体部の境に沈線が1条めぐる。	無文	無	無	〈7.6〉	9.1
218	① -22p	II	口径の半分に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が5個配置される。底部と体部の境に沈線がめぐる。	無文	無	有	11.0	13.3
219	② -124p	II	頸部と体部の境に隆帯が1条めぐり、突起が1個配置される。丸底。	無文	無	有	〈7.8〉	9.8
220	① -22p	III	口唇に突起が5個配置される。頸部直下に刺突がめぐる。底部近くに沈線が1条めぐる。	縦縄文 RL	有	無	11.9	10.3
	② -64p							
221	② -124p	III	口唇に突起が8個配置され、突起間に短沈線がめぐる。口縁部内面に沈線が1条めぐる。底部近くに沈線が1条めぐる。	無文	無	無	14.7	15.7
222	未掲載	III	口唇に突起が配置される（2個残存）。体部に区画文が2単位残存する。	縄文LR	無	無	(5.6)	－
223	① -22p	III	口唇に大型の突起が1個、突起が2個配置される。口縁部内面に沈線が1条めぐる。肩部に楕円形の文様が5単位、体部に横に連続する文様が6単位施される。底部近くに沈線が2条めぐる。	縄文LR	無	無	11.5	10.6
	② -64p							
224	② -124p	IV	口縁部内面に沈線が1条めぐる。	縦縄文RL	無	無	14.8	13.8
225	② -124p	IV	口縁部内面に沈線が1条めぐる。	縦縄文RL	無	無	13.8	13.0
226	未掲載	IV	口縁部内面に沈線が1条めぐる。頸部に沈線が1条めぐる。	縦縄文RL	無	無	13.4	12.9
227	未掲載	IV	頸部と体部の境に突起が1個配置される。体部下半にアスファルトによる補修痕がある。	縄文LR	無	無	18.0	19.0
228	② -124p	IV	頸部と体部の境に段差がある。	縄文LR	無	無	17.5	14.7
229	① -22p	IV	頸部と体部の境が明瞭でない。	縄文RL	無	無	10.9	9.5
	② -65p							
230	② -124p	IV	口唇に小さな突起を両脇に持つ大型の突起が配置される。突起間に沈線がめぐる。頸部と体部の境に突起が1個配置され、沈線が2条めぐる。	縄文RL	無	無	11.8	10.7
231	未掲載	IV	頸部と体部の境に突起が1個配置される。	縄文LR	無	無	(10.4)	12.0
232	未掲載	IV	頸部と体部の境に段差がある。	縄文RL	無	無	(8.0)	11.9
233	未掲載	IV	頸部と体部の境に段差がある。	無文	無	無	8.4	9.1
234	② -125p	IV	頸部と体部の境に段差がある。	無文	無	無	9.1	9.5
235	① -22p	IV	口唇に突起が2個配置される。頸部と体部の境に段差がある。	縄文LR	無	無	16.0	13.0
	② -64p							
236	① -22p	V	頸部と体部の境に隆帯が1条めぐり、突起が1個配置される。底部にコブ状の突起が4個配置される。	無文	無	無	13.6	11.4
	② -65p							
237	未掲載	V	頸部と体部の境の沈線・刺突がめぐる。体部に配置文が2単位残存する。口径の約3分の2残存。	縄文LR	無	無	10.8	8.0
238	② -126p	V	口唇に小さな突起を両脇に持つ大型の突起が配置される。文様帯が2段あり、上段・下段ともに配置文が2単位施される。	無文	無	無	〈19.2〉	12.7
239	未掲載	V	口唇に突起が1個配置される。頸部と体部の境に段差がある。	無文	無	無	(11.5)	－
240	未掲載	II	頸部と体部の境に突起が1個配置される。底部にコブ状の四脚がつく。脚部は内面から押し出されて形成される。	無文	無	無	(9.8)	〈19.3〉
241	未掲載	II	底部に段差がある。外面がよく磨かれている。	無文	無	無	(10.5)	23.6
242	② -125p	VI	口唇に沈線が1条めぐる。体部に配置文が4単位施される。外面の剥離が目立つ。	無文	無	有	12.0	13.8
243	未掲載	VI	口唇に沈線が1条めぐる。外面がよく磨かれる。	無文	無	有	8.0	10.6
244	① -21p	VI	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。頸部と体部の境に突起が1個配置される。体部に配置文が4単位施される。	無文	無	有	17.7	25.3

明戸遺跡観察表 (10)

番号	概 報 報告書の ページ数	器 形	特 徴	地 文	炭 化 物	赤 彩	器高 (cm)	器幅 (cm)
注口								
245	未掲載	I	体部上半に配置文が4単位施される。肩部に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が2個配置される。注口部の周囲に突起が4個配置される。体部下半に横に連続する文様が施される。	縄文LR	無	無	〈9.0〉	〈16.0〉
246	② -126p	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が3個配置される。体部上半に配置文が3単位施される。肩部に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が2個配置される。注口部の周囲に突起が4個配置される。体部下半に横に連続する文様が施される。	縄文LR	無	無	9.3	16.5
247	未掲載	I	体部上半に配置文が1単位残存する。肩部に装飾的な彫り込みがめぐり、突起（1個残存）が配置される。注口部の上下に突起が2個配置される。体部下半に横に連続する文様が施される。	縄文LR	無	無	(7.6)	14.6
248	② -126p	I	体部上半に配置文が5単位施される。肩部に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が2個配置される。注口部の周囲に突起が4個配置される。体部下半に横に連続する文様が施される。	縄文LR	無	無	(7.3)	15.3
249	未掲載	I	口唇に突起が配置される（1個残存）。体部上半に配置文が3単位施される。肩部に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が2個配置される。注口部の上下に突起が2個配置される。体部下半に横に連続する文様が施される。	無文	無	無	5.7	8.9
250	未掲載	I	肩部に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が配置される（1個残存）。注口部の周囲に突起が4個配置される。体部下半に横に連続する文様が施される。	縄文LR	無	無	(10.4)	22.0
251	未掲載	I	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、刺突が施される。口縁部内面に沈線が1条めぐる。体部上半に配置文が2単位残存する。肩部に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が配置される（3個残存）。突起間に刺突がめぐる。体部下半に横に連続する文様が施される。	縄文LR	無	無	11.0	19.0
252	② -126p	II	口唇に突起が4個配置され、突起間に沈線・刺突がめぐる。口縁部内面に沈線が1条めぐる。体部上半に配置文が4単位施される。肩部に装飾的な彫り込みと刺突がめぐり、突起が7個配置される。注口部の左右に突起が2個配置される。体部下半に横に連続する文様が施される。	縄文RL	無	無	10.9	16.9
253	② -126p	III	文様は、粘土が貼り付けられているために不明瞭であるが、配置文が2単位の可能性がある。注口部の周囲に突起が3個配置される。体部に突起が2個配置される。	縄文LR	無	有	8.6	11.7
254	② -126p	III	口唇に小さな突起を両脇に持つ大型の突起が配置される。口縁部の隆帯上に突起が6個配置され、刻み目がめぐる。注口部の周囲に突起が4個配置される。体部に突起が2個配置され、区画文が4単位施される。体部下半にアスファルトによる補修痕がある。	縄文RL	無	無	9.1	10.4
香炉								
255	① -25p		頂部に装飾的な突起が施される。体部上半は突起・刻み目を伴う隆帯があり、その間に透かし彫りの文様が施される。肩部に装飾的な彫り込みがめぐる。体部下半に配置文が3単位施される。	無文	無	無	〈12.9〉	13.8
256	未掲載		体部上半は突起・刻み目を伴う隆帯があり、その間に透かし彫りの文様が施される。肩部に装飾的な彫り込みがめぐる。体部下半に配置文が2単位施される。	無文	無	無	〈12.4〉	17.3
大型壺（『日本原始美術1』）								
257			口唇に3個1組の突起が4個配置される。頸部に隆帯が2条めぐり、大型の突起が4個、突起が8個配置される。体部に配置文が3単位施される。縄文原体の太さが体部上半・下半で異なる。	縄文LR	無	無	44.1	36.8

明戸遺跡観察表（11）

Ⅱ．青森県外ヶ浜町宇鉄遺跡出土の 亀ヶ岡式土器と石刀について

山田敏子・藤沼邦彦

Ⅱ. 青森県外ヶ浜町宇鉄遺跡出土の亀ヶ岡式土器と石刀について

山田敏子・藤沼邦彦

○ はじめに

ここでは外ヶ浜町大山ふるさと資料館に保管されている宇鉄遺跡出土資料のうち、北海道との関連を考える上で重要と思われる土器と石刀について、実測図で学術資料化し、紹介しようとするものである。主要な文様については、その構成・単位、描く順序などを分かりやすくするために、拓本展開図・展開模式図などを作成した。東北大学蔵の石刀は、すでに実測図が公表されているが、新たな観点から実測図と拓本図を作成したものである。

○ 宇鉄遺跡の位置、環境

宇鉄遺跡は、青森県東津軽郡外ヶ浜町字三厩（旧三厩村大字宇鉄字下平・上ノ平）にある縄文時代晩期から弥生時代中期にかけての広大な遺跡である。この地は、津軽半島の北端にあたり、最北端の龍飛崎から南東にわずか6kmしか離れていない。周辺はほとんどが山地で、平坦部は海岸に沿ったわずかな部分にしか見られない。宇鉄遺跡は、こうした津軽海峡に臨む標高約20メートルのやや平坦な海岸段丘上に立地し、遺跡に立つと、晴れた日には対岸の北海道渡島半島を遠望できる。

宇鉄遺跡では、これまで工事による遺物の出土がしばしばあり、また慶応義塾大学・三厩村教育委員会・青森県立郷土館などによる発掘調査なども行われている。しかし、学校建設や付近の道路工事などにより、地形が大きく改変されているので、地図上からそれぞれの遺物出土地・発掘調査区的位置などを確認するのは困難である。ともかく現在の三厩中学校付近一帯が宇鉄遺跡であり、学校に隣接する畑地には、広く土器片が散布している。

○ 宇鉄遺跡の調査史

明治34年発行の『日本石器時代人民遺物発見地名表（第三版）』に、若林勝邦の報告として、「陸奥国 東津軽郡三厩村大字宇鉄 石斧」の記事がみえるが、大字宇鉄には、縄文時代の遺跡が10ヶ所あり（『青森県遺跡地図（平成10年度版）』）、現在の宇鉄遺跡に限定する訳にはいかない。

①喜田貞吉が見た宇鉄遺跡の出土品

明確な宇鉄遺跡に関する最古の記録は、喜田貞吉の「大正乙丑宇鉄遊記抄」（喜田1930）である。これは、喜田が大正乙丑（14）年に、三厩村宇鉄地方を調査旅行した時の見聞録で、宇鉄遺跡の出土品に関する興味深いエピソードが書かれているので、『三厩村誌』（種市1962）も参考にして、以下に簡条書き的にまとめてみよう。(1)大正12年頃、海に面した高台に宇鉄小学校を建設するときに多数の石器時代の遺物が出土し、神官北山重胤によって収集された（種市1962）。これが現在の宇鉄遺跡である。(2)収集された遺物は、蝦夷研究を目的に宇鉄を訪れた東北大学の喜田貞吉の注意するところとなった（種市1962）。遺物は亀ヶ岡式土器や石器が多い。そのなかに「真に天下の珍と云ってよい逸品である」完全な内反りの石刀が一本あった（喜田1930）。(3)これらの遺物の主要なものは、喜田貞吉を介して、三厩村村長から東北大学に寄贈された。(4)大学から三厩村村長に対し、大学総長の感謝状と寄贈された遺物の写真が贈呈された（喜田1930）。この感謝状と遺物の写真は、長く宇鉄小学校に保管されていたが（葛西1996には、感謝状の内容・遺物の写真が掲載されている）、その後、三厩村中央公民館に移り、現在は外ヶ浜町大山ふるさと資料館に収蔵されている。なお、東北大学に寄贈された資料は、東北大学文学部考古学研究室の陳列館で見ることができる（東北大学文学部1982）。(5)喜田貞吉の「大正乙丑宇鉄遊記抄」によって、宇鉄遺跡は学界に広く知られるようになった（種市1962）。

また、第2次世界大戦後まもない昭和24年に行われた宇鉄小学校の増築の際にも、遺跡の一部が破壊され、多数の土器が出土したという（種市1962）。

②慶応義塾大学考古学研究室の発掘調査（担当、藤田亮策・清水潤三）

昭和30年に宇鉄中学校が増築されたため、宇鉄遺跡の主要部が破壊され、多数の遺物が出土した。

慶応義塾大学の清水は、校舎増築に伴う工事完了後に、削平をまぬがれた校庭北側の部分に、長さ10メートル×幅4メートルのトレンチを設定し、4日間発掘調査した。そして黒土層から完形品をふくむ晩期の遺物の集中地点を発見し、多数の土器（完形品15点・復元可能なもの20点を含む）・石器・土製品を採集した。清水によると「丹漆塗りの壺、台付鉢や注口、皿形には優れた雲形文様で飾られた精巧なものも見られるが、全般的に見ると、著しく粗製であり、整形も粗雑、焼成も不良のものが多いのを特色とすることが出来る」という（種市1962）。また、「土器は大洞BC、同C1式を主とし、大洞B、同A式系統の土器はほとんど認められなかった（ただし地点を別にして大洞A式系統の遺物も出土する）。また完形土器はトレンチ内に3又は4個の集団をなしていた。亀ヶ岡式遺跡ではこのような現象が一般的であるが、その理由は十分明らかにされていない。今回の調査によって、それが一種の宗教的な祭壇の如きものの跡ではないかと推定されるにいたった」との記載もある（清水1959）。

③青森県立郷土館の発掘調査

青森県立郷土館が、青森県の弥生文化の研究と資料収集のために、4次（昭和50～52年、昭和62年）にわたって調査を行ったもので、すでに報告書が刊行されている（青森県立郷土館1979・1989）。主な遺構は、弥生時代前・中期の土坑墓11基・甕棺墓4基で、内部から副葬品として土器（カップ形土器・壺など）、装身具（細形管玉・勾玉）、石鏃などが出土した。これらは北東北における弥生時代の墓制を明らかにする資料として国の重要文化財の指定を受けた。また遺物包含層からも多数の弥生時代の土器が出土した。

④工事に伴う三厩村教育委員会による発掘調査

1回目は昭和57年に行われた。村道建設工事に伴うものである。遺構は発見されなかったが、縄文時代中期末～後期初頭の遺物を中心に、晩期の大洞C2式と大洞A式が出土した（三厩村教育委員会1983）。この報告書の内容は簡便なものである。

2回目は平成5・6年に行われた。統廃合による三厩中学校の校舎や野球場などの工事に伴うもので、発掘地点はA・B・Cの三地点である。A区は、縄文時代後期の竪穴住居跡6軒・土坑3基などが検出され、後期の土器が多数出土した。晩期の土器はごく少数である（葛西1994）。B区では、縄文時代晩期の竪穴住居跡2軒・竪穴遺構1基・土坑21基・埋設土器2基・集石遺構6基・焼土遺構6基・遺物密集ブロック5ヶ所などが発見された。遺跡の堆積層を基本層位で分けると、大洞C1式から大洞A'式まで層位的に上下関係で出土するという。また、各遺物密集ブロック間にも型式の違いが見られる部分もあるという（葛西1996）。しかし、各型式のモデルが優先されているため、層位単位あるいはブロック単位の土器群の内容の吟味が不十分のように思われる（葛西1996）。C区では、縄文時代中期の捨て場1ヶ所、晩期の土器埋設遺構などが検出された。土器は中期のものが多く、次いで晩期の大洞C2式や後期の土器が出土した（葛西1995）。

⑤青森短期大学による発掘調査

工事に伴うB地区の発掘調査における成果を補完するために行ったものである。報告者によると、出土した土器はダンボール2個分あり、「これらの土器は、大洞C1式～A'式に相当し、各型式が最も下位のⅡj層から最も上位のⅡab層にかけて部分的な重なりを見せながら連続的に変遷することを確認した」という（児玉・相馬2004）。しかし、それを証明するためには、層位ごとに各型式がどのくらいの割合で含まれているかを数字で示す必要がある。

○ 紹介資料について (第95～111図)

ここで紹介する遺物は、すべて縄文時代晩期の資料で、出土の経緯や材質によって三大別される。

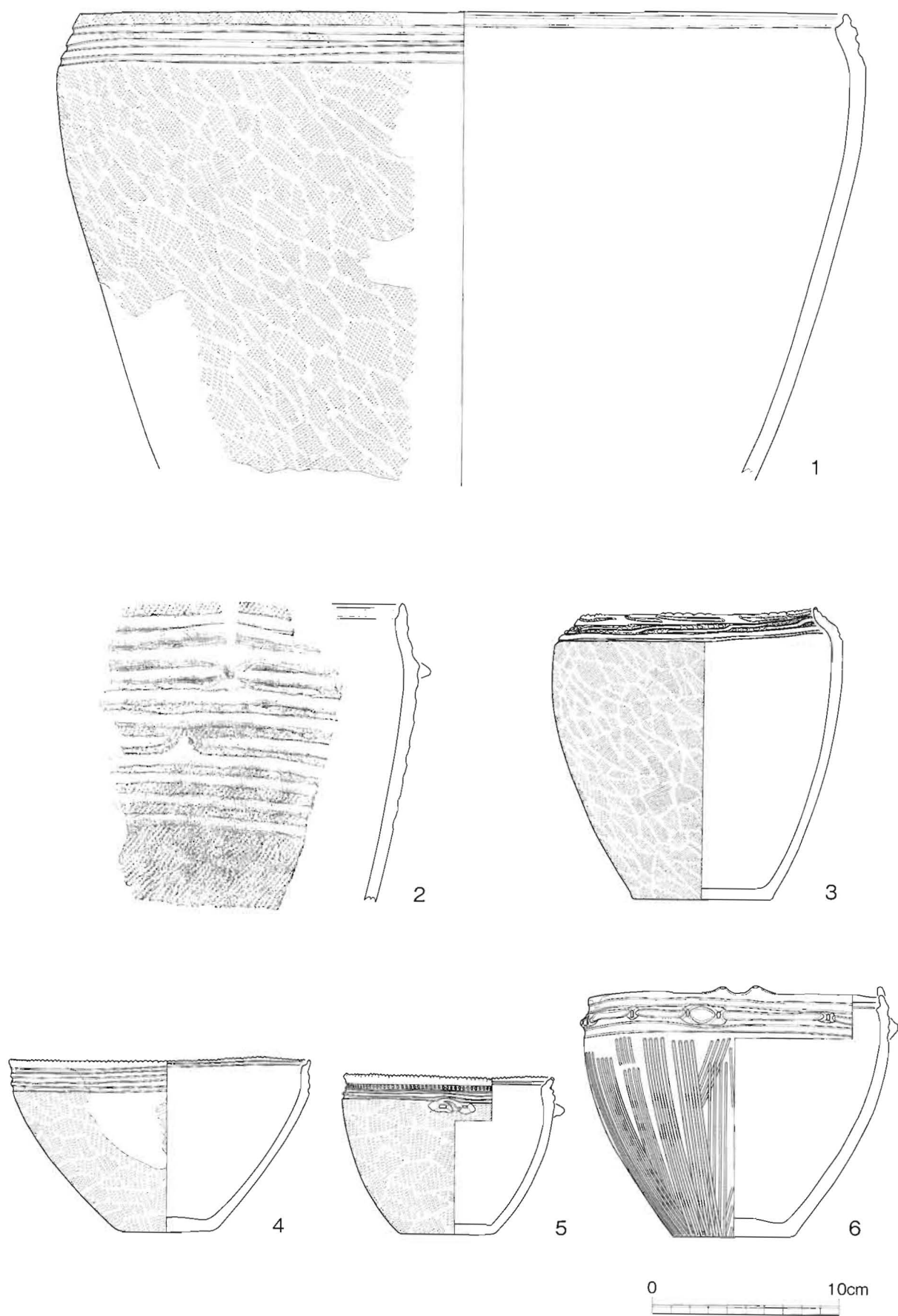
① (図1～33) は、昭和24年の宇鉄小学校や昭和30年の宇鉄中学校の校舎増改築工事で出土といわれる土器群である。長く三厩村立宇鉄中学校や三厩村中央公民館で保管され、一部は展示されていた。簡単な記述が『三厩村誌』に見られ、『宇鉄Ⅲ遺跡発掘調査報告書』にも小さな写真が載っているが、実測図などは未発表であった (一部は、福田正宏の論文に実測図が掲載されている)。現在は外ヶ浜町大山ふるさと資料館に収蔵されている。なるべく晩期中・後葉のものを選んだが、前葉のものも若干含めた。

② (図36～49) は、平成5・6年に三厩村教育委員会によって発掘調査され、すでに報告書が刊行された土器群である。報告書では、文様の展開図が示されていないので、あらたに拓本をとり、文様展開図の模式図などを紹介した。実測図は報告書のものを転載した。

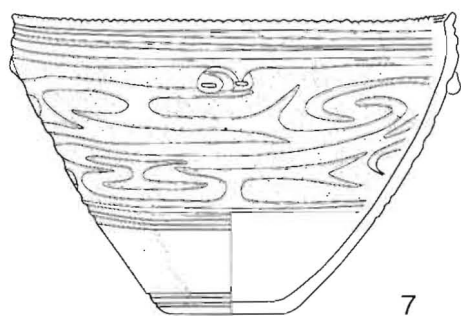
③ (図34・35・50) は石刀である。二つは宇鉄中学校で保管していたもの (図34・35)、もう一つは大正12年に出土し、喜田貞吉を介して東北大学に寄贈されたもの (図50) である。いずれも大洞C2式から大洞A式にかけてのものと推定される。晩期の内反石刀の形態は、中国大陸の青銅刀子の影響とされるが、むしろ仙台湾で中期後葉に成立した内反りの骨刀の系譜に繋がるものと考えた方がよい。(図50) の柄頭には二つの小円を中心に入組三叉文が表現される。また、見逃されることが多いが、棟の先端に沈線による小さな文様が、柄頭の側面にVの形が施されている。

主要文献

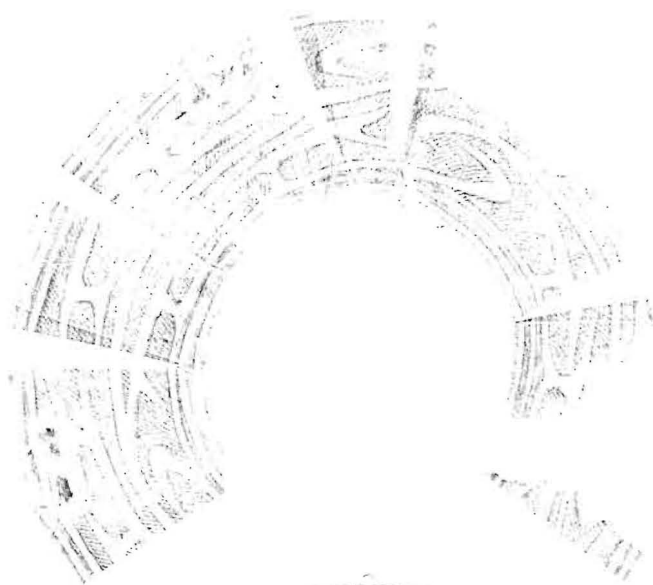
- 1926年、喜田貞吉「奥羽地方のアイヌ族の大陸交通はすでに先秦時代にあるか」民族1-2
- 1930年、喜田貞吉「大正乙丑宇鉄遊記抄」東北文化研究2-5
- 1959年、清水潤三「青森県東津軽郡宇鉄遺跡」日本考古学年報8、日本考古学協会
- 1962年、種市悌三編『三厩村誌』
- 1965年、芹沢長介「周辺文化との関連」『日本の考古学Ⅱ－縄文時代』、河出書房
- 1978年、藤村東男「青森県宇鉄遺跡出土土器の補修孔について」萌木13
- 1979年、青森県立郷土館『宇鉄Ⅱ遺跡発掘調査報告書』青森県立郷土館調査報告書6
- 1982年、東北大学文学部考古学研究室『東北大学文学部考古学資料図録』、東北大学文学部
- 1983年、三厩村教育委員会『宇鉄Ⅲ遺跡発掘調査報告書』
- 1989年、青森県立郷土館『三厩村宇鉄遺跡発掘調査報告書(Ⅱ)－弥生甕棺墓の第4次調査－』青森県立郷土館調査報告書25
- 1990年、青森県埋蔵文化財調査センター『北の誇り・亀ヶ岡文化 縄文時代晩期編』図説「ふるさと青森の歴史」シリーズ③、青森県文化財保護協会
- 1994年、葛西勲編『宇鉄遺跡発掘調査報告書1993』、青森県三厩村教育委員会
- 1995年、葛西勲編『宇鉄遺跡発掘調査報告書1994』、青森県三厩村教育委員会
- 1995年、野村崇「石剣・石刀」『縄文文化の研究9』、雄山閣出版
- 1996年、葛西勲編『宇鉄遺跡発掘調査報告書』、青森県三厩村教育委員会
- 1996年、福田正宏「聖山式土器再考のための諸問題－宇鉄遺跡出土土器の紹介をかねて－」
- 2004年、児玉大成・相馬俊也「宇鉄遺跡における縄文晩期中葉～末葉の土器－平成11年度宇鉄遺跡発掘調査報告書(1)－」研究紀要7、青森大学考古学研究所
- 2006年、藤沼邦彦・小川忠博『ミニ特別展「亀ヶ岡文化の世界」の図録』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告3、弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター



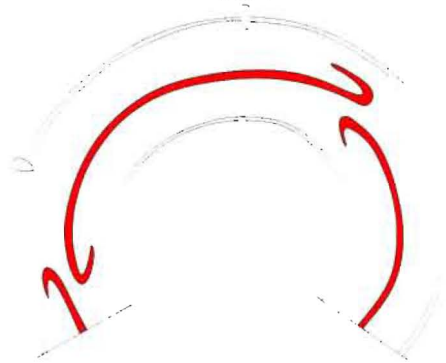
第95図 宇鉄遺跡 深鉢（1・2）・鉢（3～6）



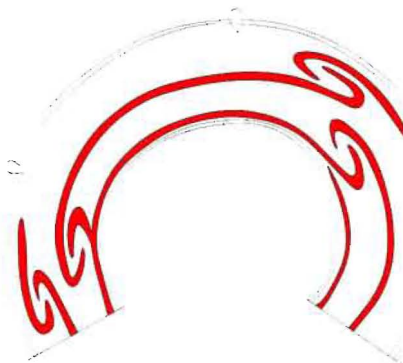
7



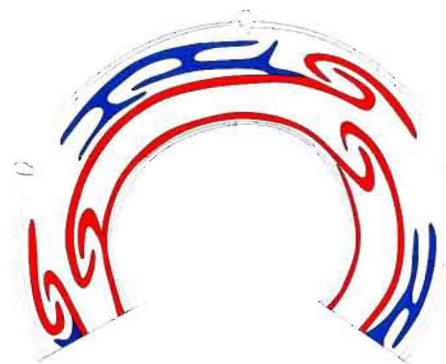
突起



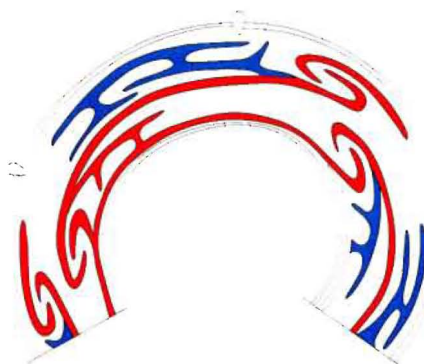
①逆横S字文を2単位配置する。



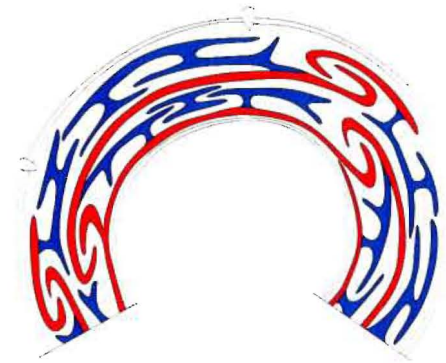
②横「し」文をかみ合わせる。



③配置文の上に充填文をうめる。



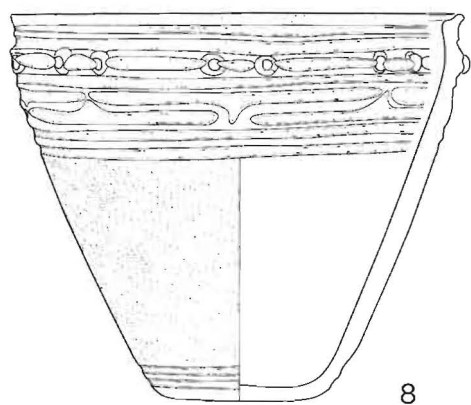
④配置文の下に充填文をうめる。



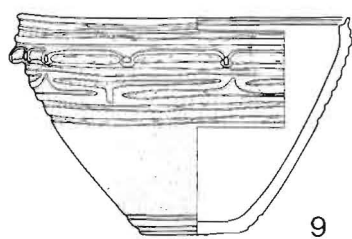
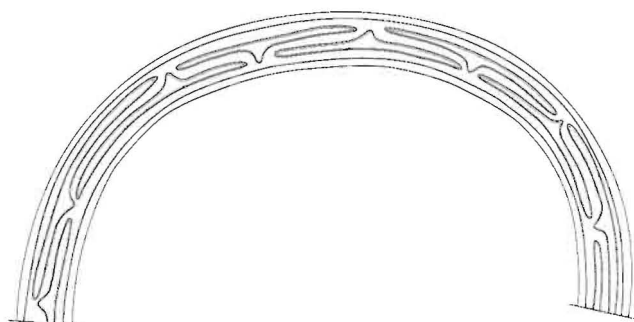
⑤さらに充填文をうめる。

0 10cm

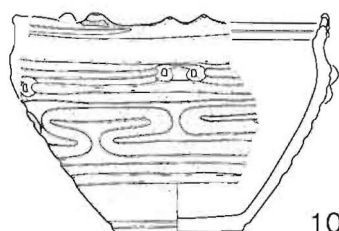
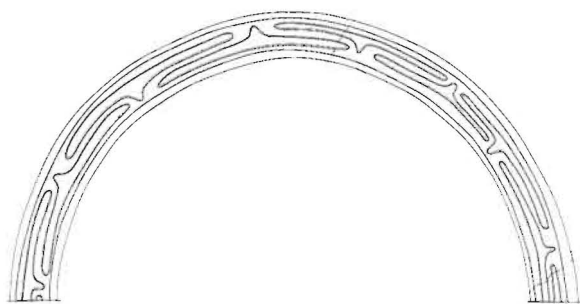
第 96 図 宇鉄遺跡 鉢 (7)



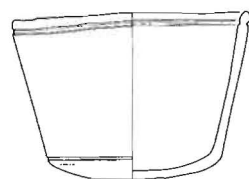
8



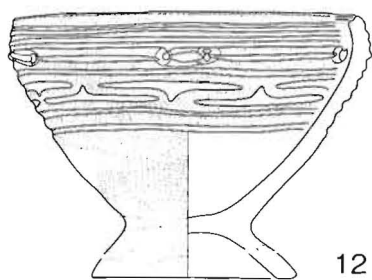
9



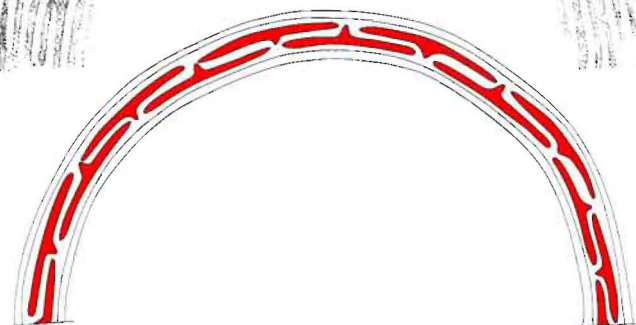
10



11



12

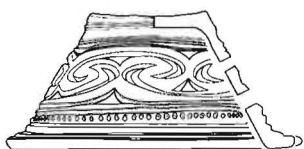
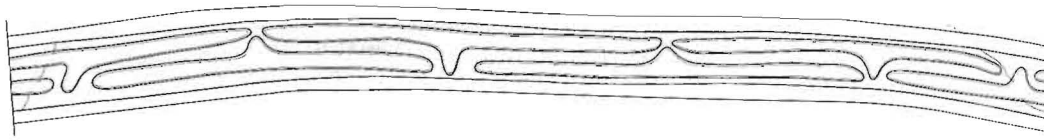


0 10cm

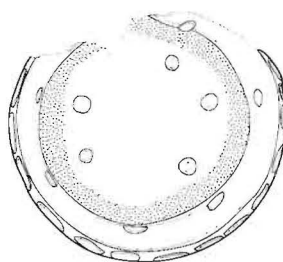
第 97 図 宇鉄遺跡 鉢 (8～12)



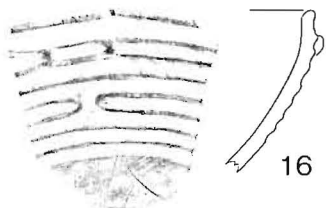
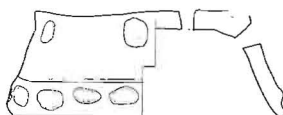
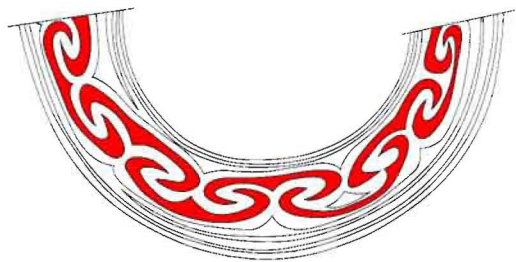
13



14



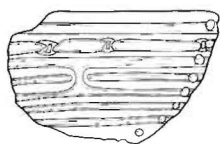
15



16



17



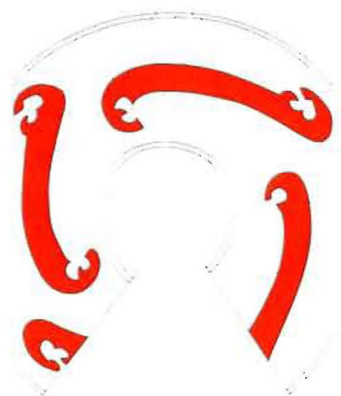
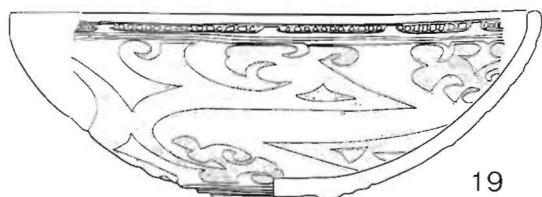
18



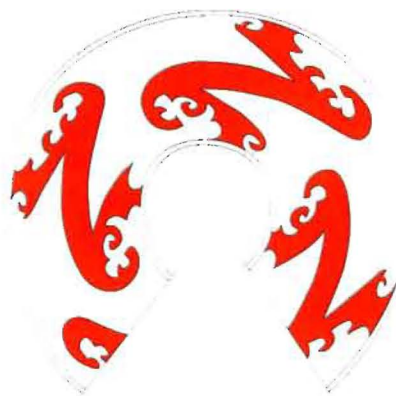
補修孔と推定される

0 10cm

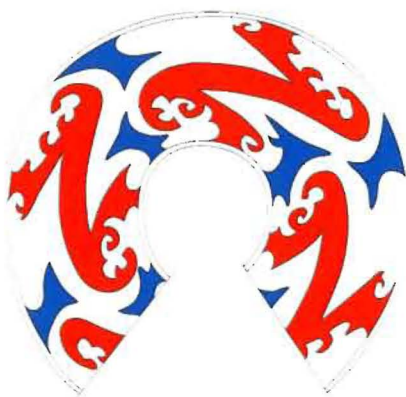
第98図 宇鉄遺跡 鉢 (13 ~18)



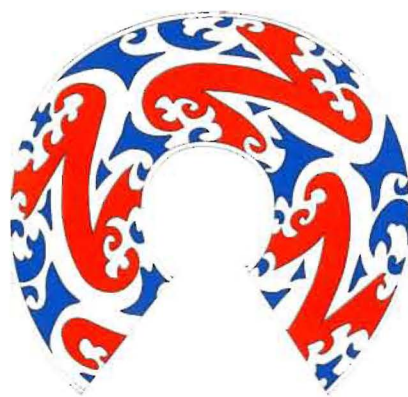
①配置文を3単位配置する。



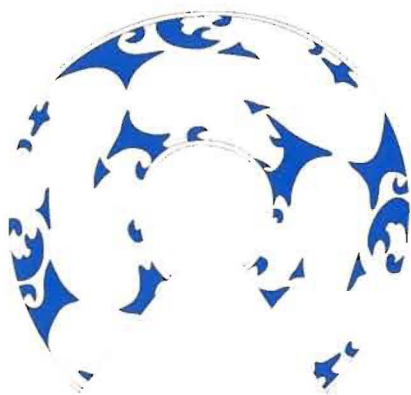
②配置文に付加的要素を加え、
変化に富む区画文とする。



③区画文間に充填文をうめる。



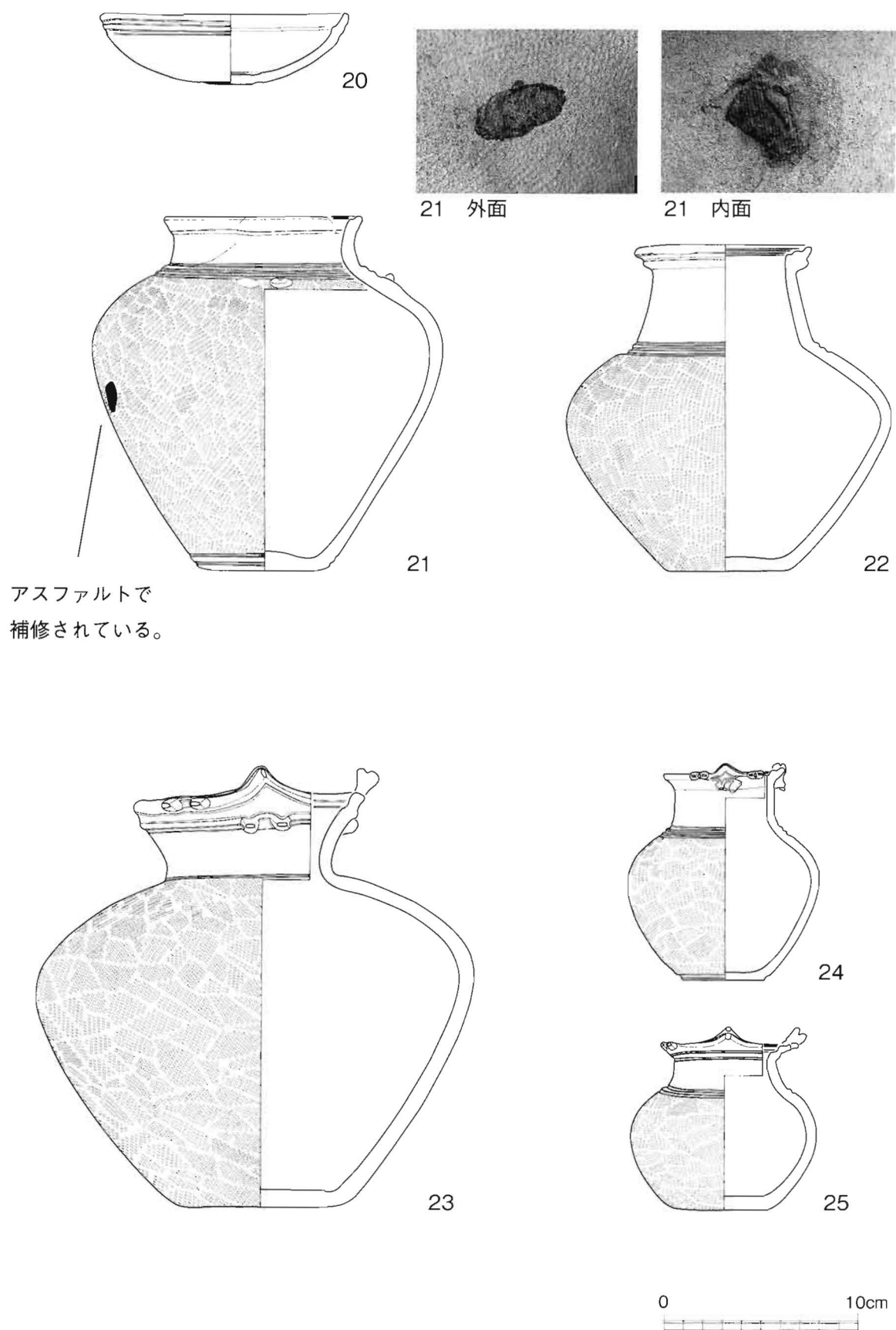
④さらに細かな充填文をうめ、
雲形文を完成させる。



⑤充填文のみを抜き出したもの。
大きな充填文は規則的に配置されて
いることが分かる。

0 10cm

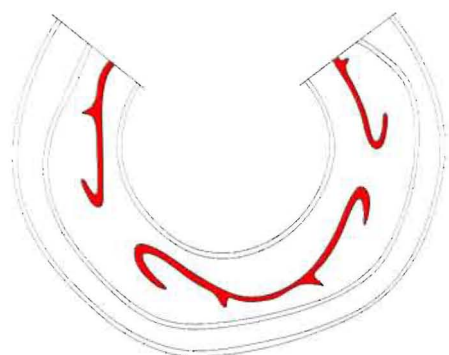
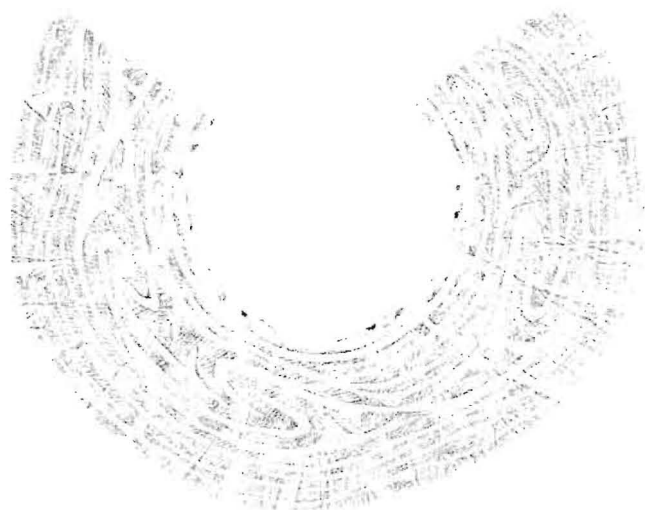
第 99 図 宇鉄遺跡 浅鉢 (19)



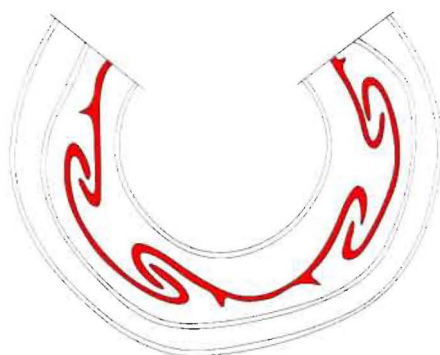
第 100 図 宇鉄遺跡 浅鉢(20)・壺(21～25)



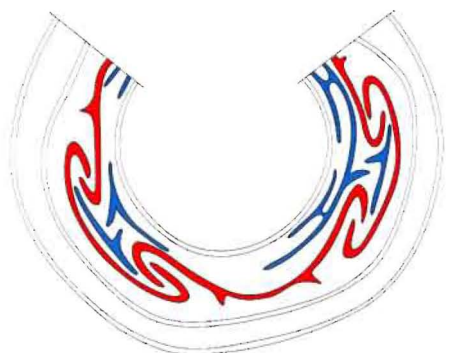
26



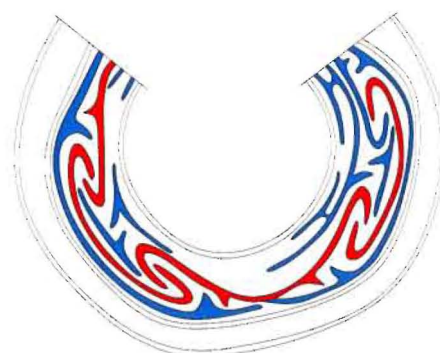
①横C字文を2単位配置する。



②横C字文をかみ合わせる。



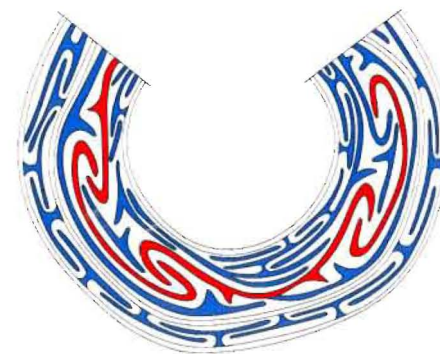
③配置文間に三叉文をうめる。



④配置文の下に充填文をうめる。



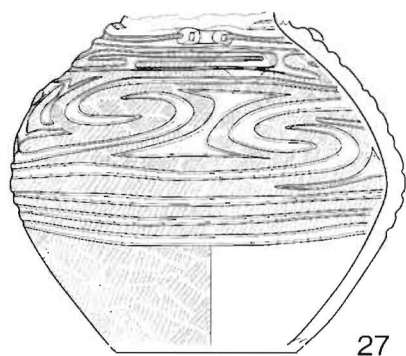
⑤配置文の上に充填文をうめる。



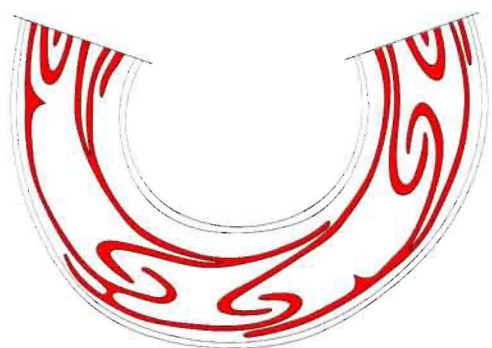
⑥さらに工字文をうめる。

0 10cm

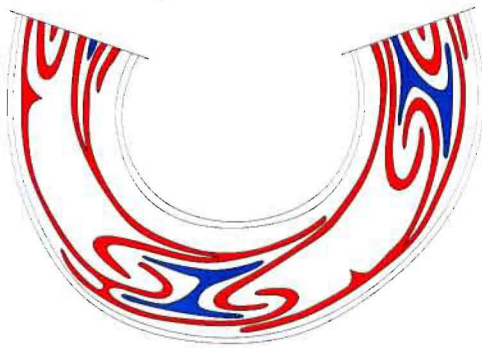
第 101 図 宇鉄遺跡 壺 (26)



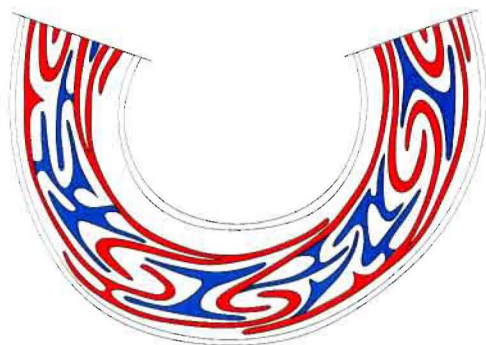
27



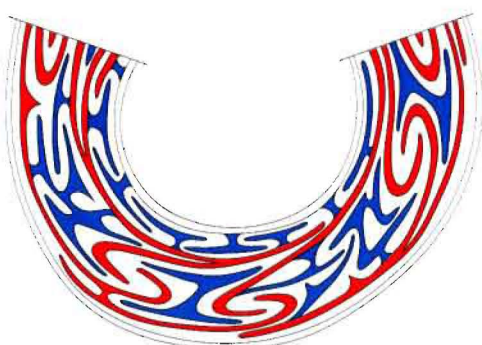
①横「し」文の配置文を配置する。



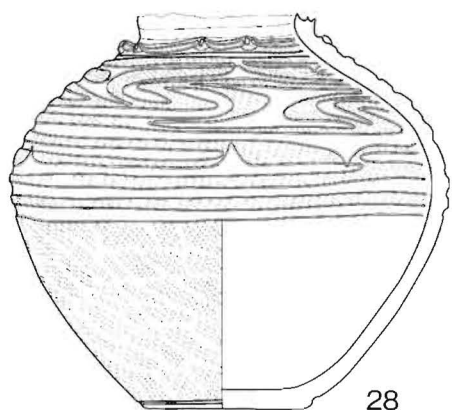
②配置文間に工字状の文様をうめる。



③配置文間に充填文をうめる。



④配置文の上に充填文をうめる。

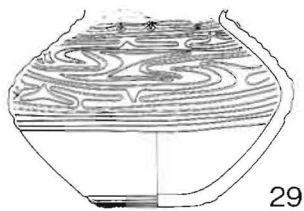


28

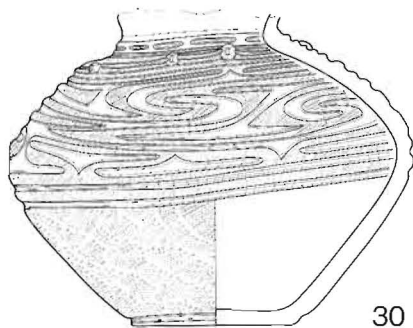


0 10cm

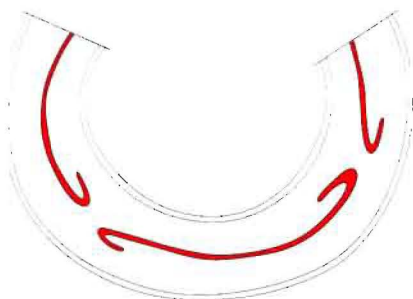
第 102 図 宇鉄遺跡 壺 (27・28)



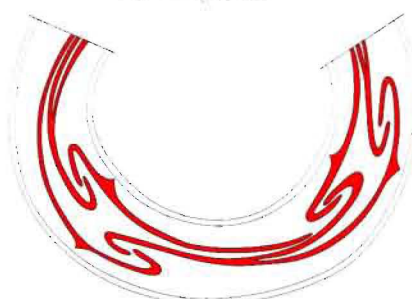
29



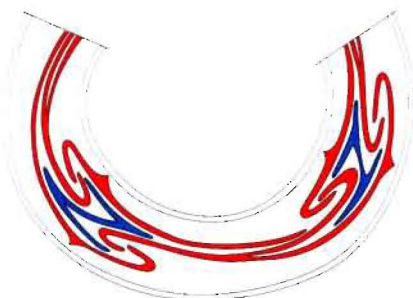
30



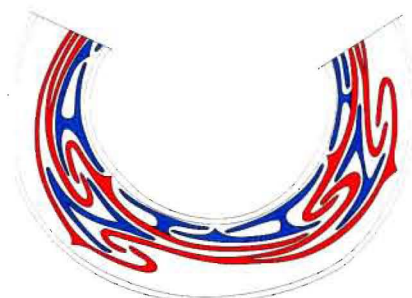
①逆横S字文を2単位配置する。



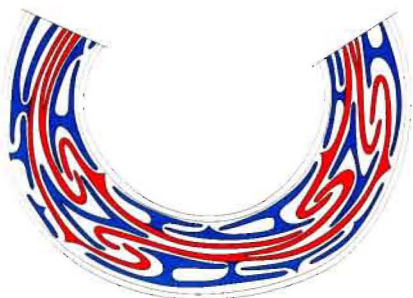
②配置文に横「し」文を加える。



③配置文間に工字状の文様をうめる。



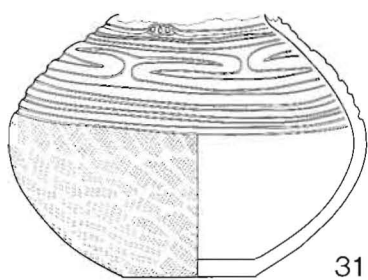
④配置文の上に充填文をうめる。



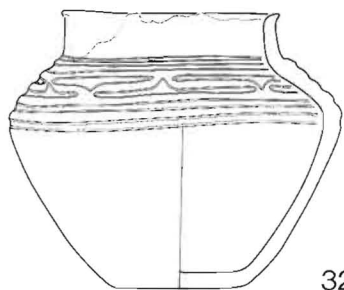
⑤配置文の下に充填文をうめる。

0 10cm

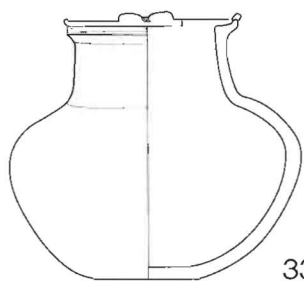
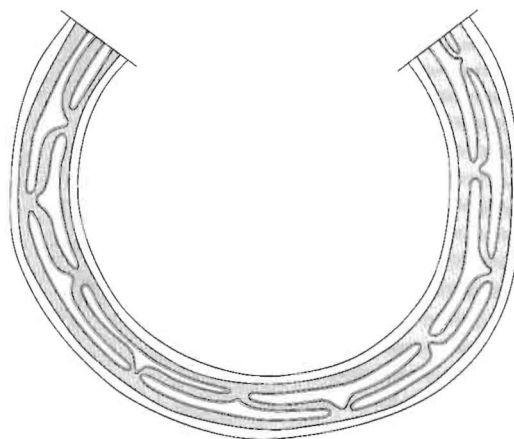
第 103 図 宇鉄遺跡 壺 (29・30)



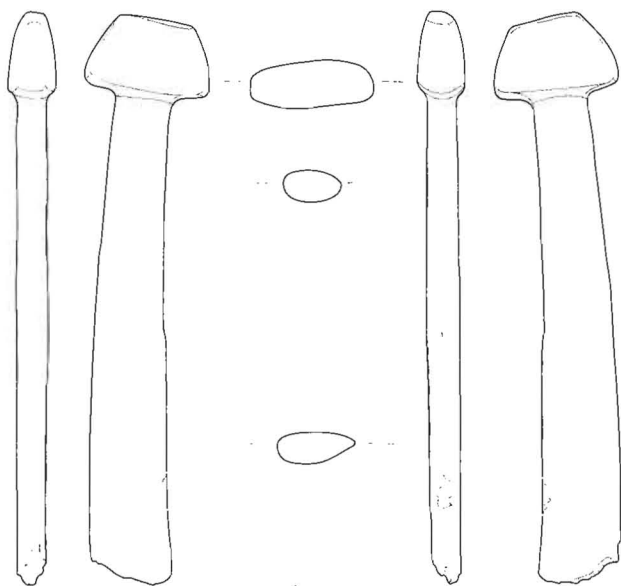
31



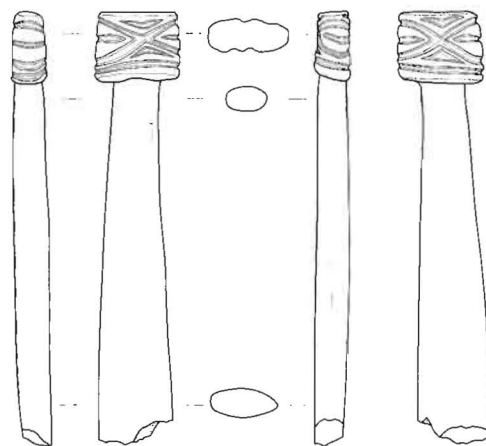
32



33



34



35

0 10cm

第104図 宇鉄遺跡 壺 (31~33) ・石刀 (34・35)



(36、37の実測図は葛西1996を利用。拓本、展開図は新たに作成。)

第105図 宇鉄遺跡 鉢 (36) ・浅鉢 (37)



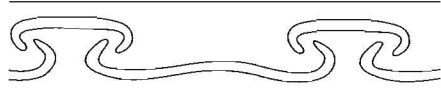
38

a



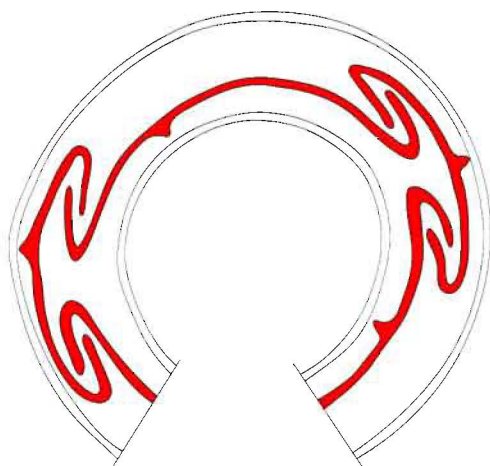
横C字文を配置する。

b

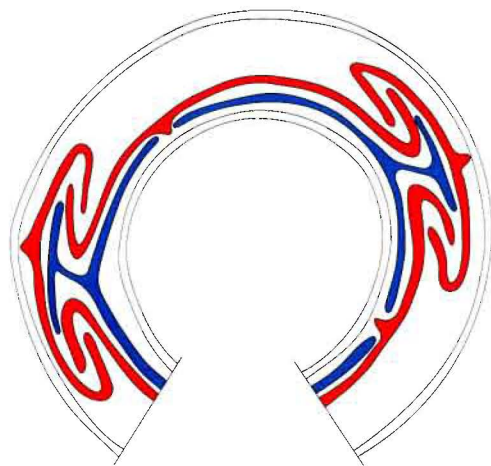


横C字文をかみ合わせせる。

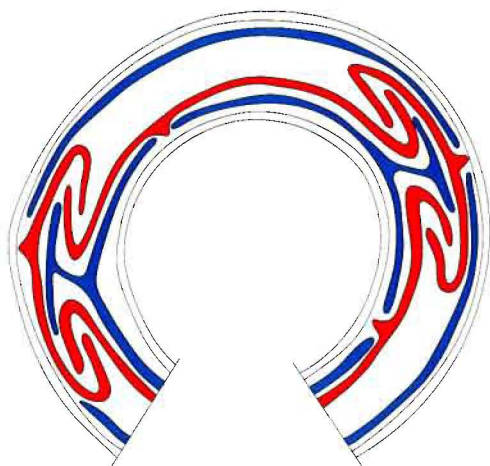
a、bの工程を経て、配置文が完成する。



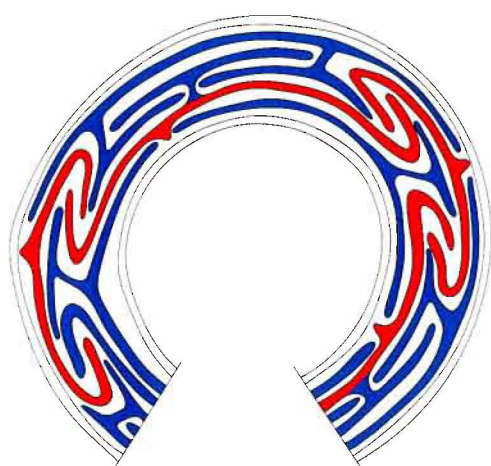
①横C字文を配置する。



②配置文の間に工字状の文様をうめる。



③横C字文に対応する沈線を施す。

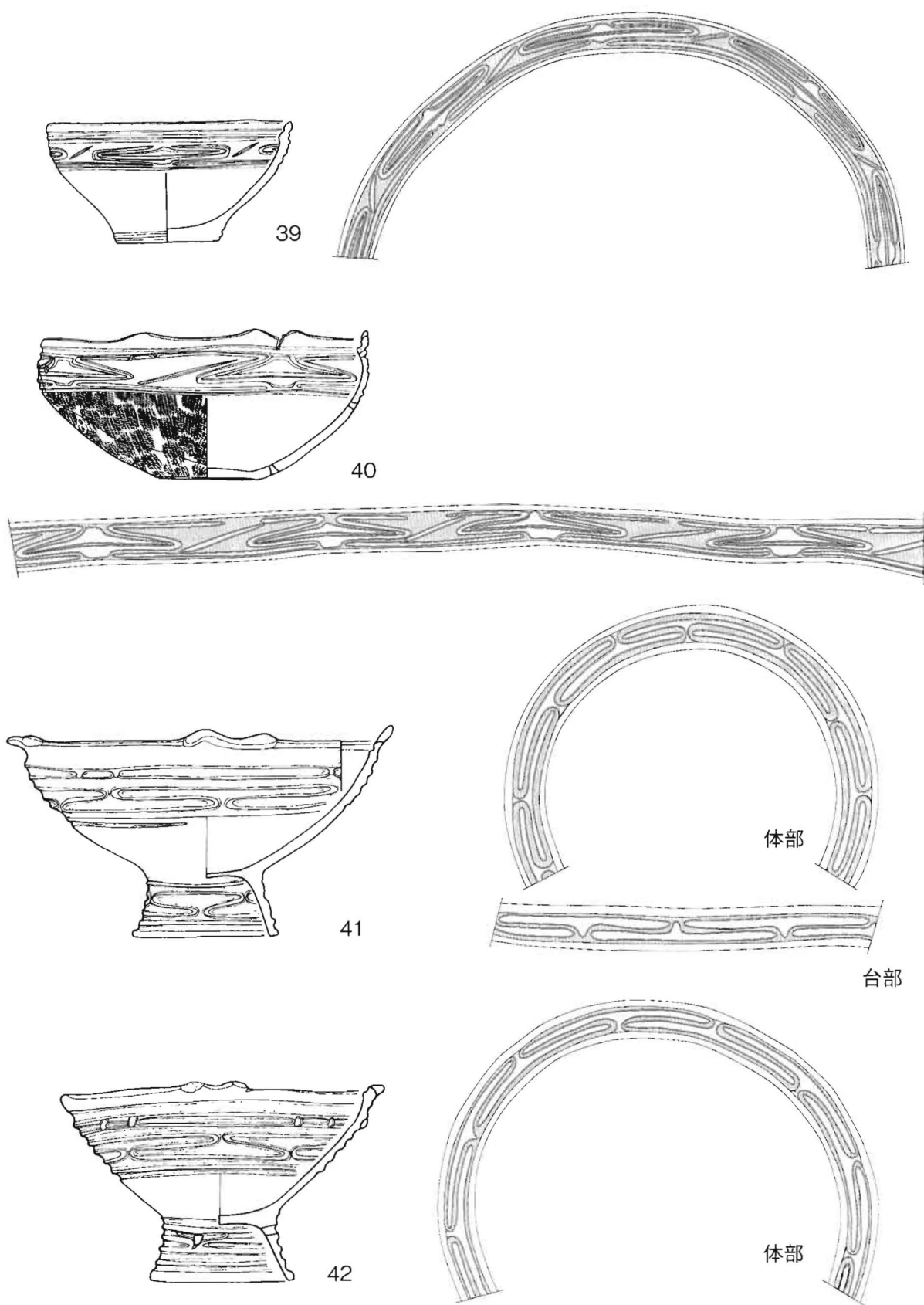


④充填文をうめる。

(38の実測図は葛西1996を利用。拓本、展開図は新たに作成。)

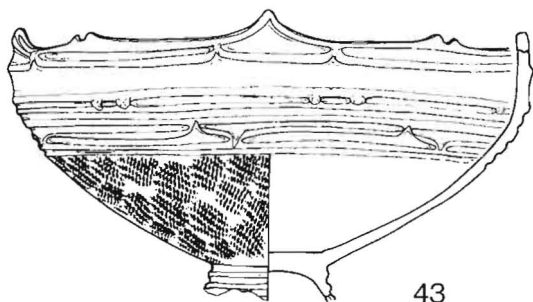


第106図 宇鉄遺跡 浅鉢 (38)

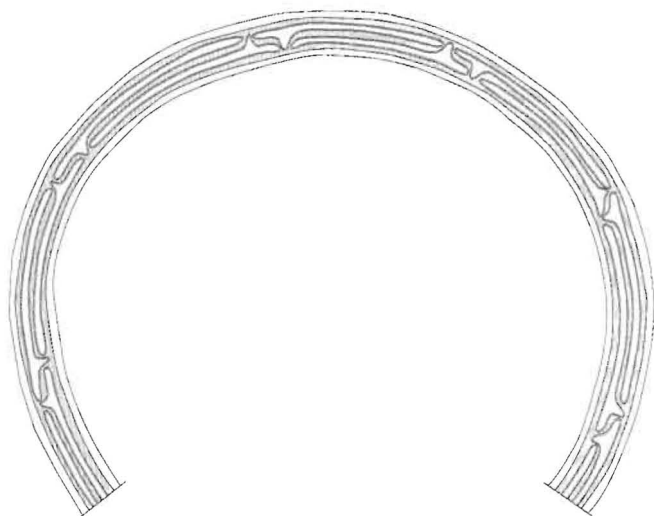


(39～42の実測図は葛西1996を利用。展開図は新たに作成。)

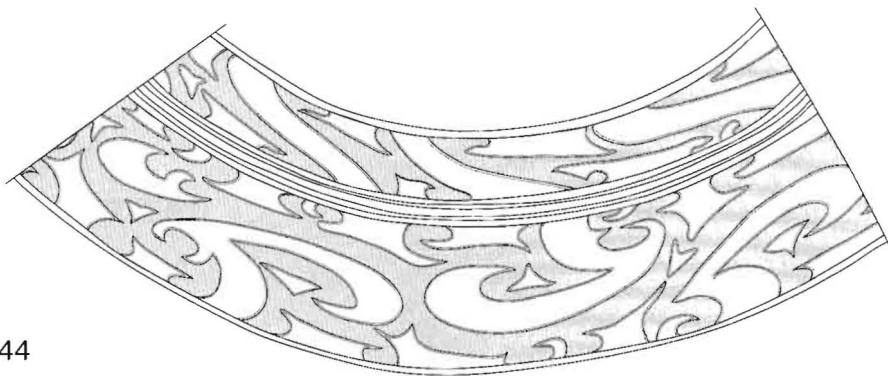
第107図 宇鉄遺跡 浅鉢 (39～42)



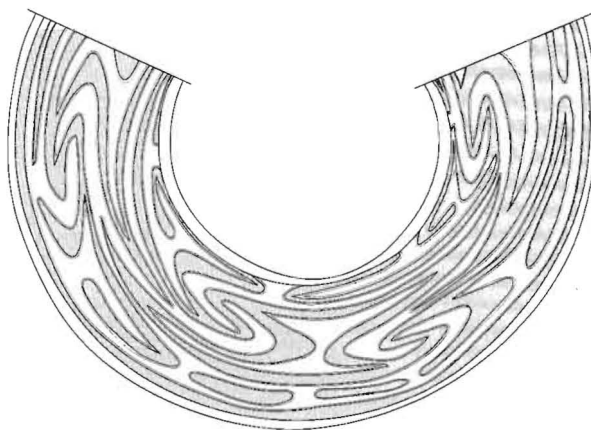
43



44



45



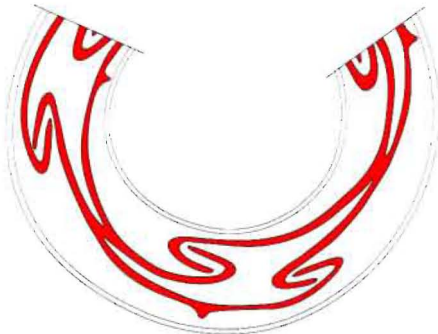
(43~45の実測図は葛西1996を利用。展開図は新たに作成。)



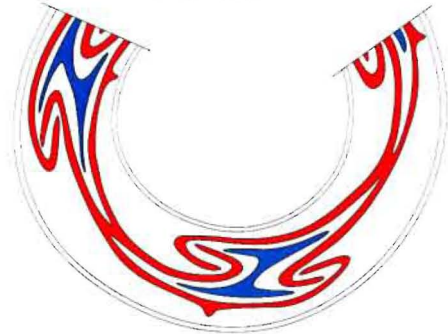
第108図 宇鉄遺跡 浅鉢(43)・壺(44・45)



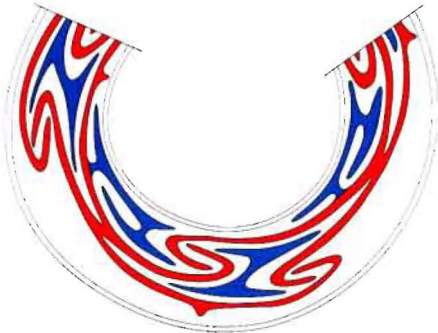
46



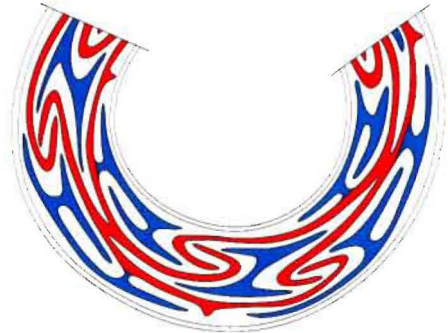
①横「し」文を付加した逆横S字文を配置する。



②配置文間に工字状の文様をうめる。



③配置文の上に充填文をうめる。



④配置文の下に充填文をうめる。



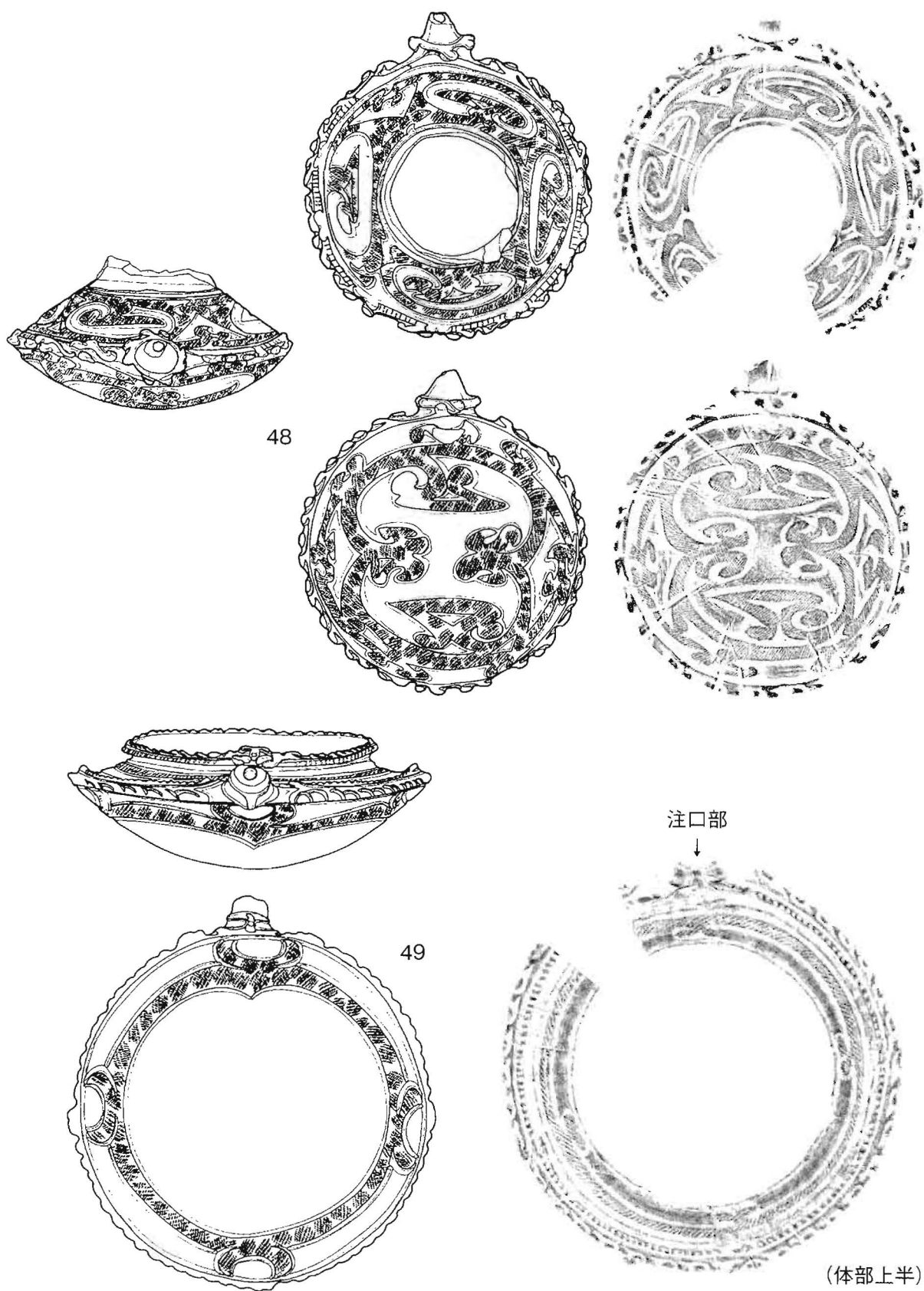
47



(46、47の実測図は葛西1996を利用。拓本、展開図は新たに作成。)

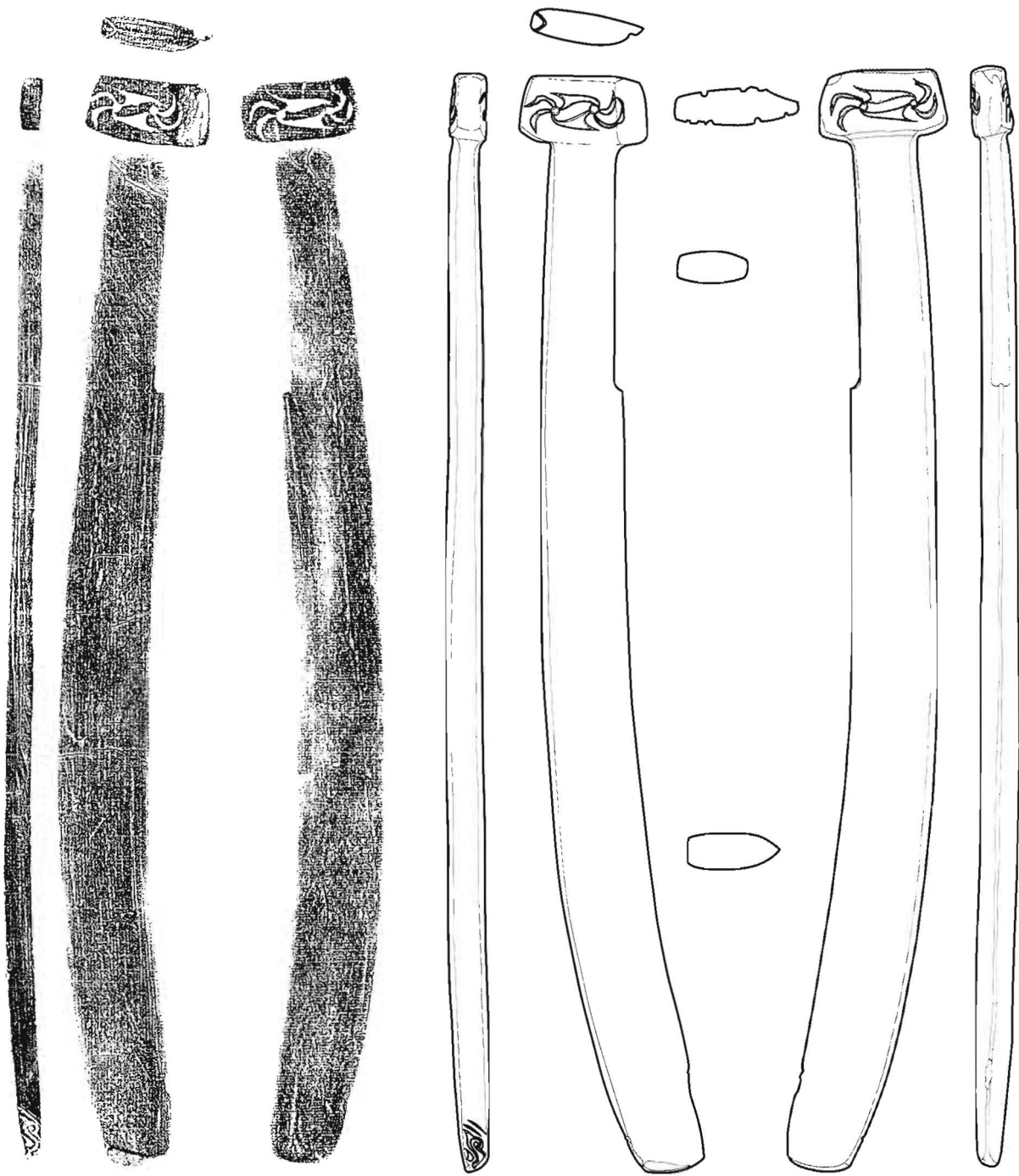
0 10cm

第109図 宇鉄遺跡 壺 (46・47)



(48、49の実測図は葛西1996を利用。拓本は新たに作成。)

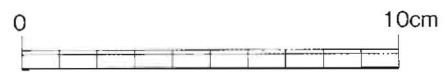
第110図 宇鉄遺跡 注口 (48・49)



50



拡大したもの (縮尺不同)



第111図 宇鉄遺跡 石刀 (50)

土器

番号	器種	特 徴	地 文	器高 (cm)	器幅 (cm)
1	深鉢	口縁部に沈線が3条、内面に1条めぐる。	縄文 L R	(25.4)	〈43.9〉
2	深鉢	口縁部に沈線がめぐる。頸部と体部の境に眼鏡状の浮文、体部に工字文が施される。	縄文 L R	—	—
3	鉢	口唇に部分的に刻み目がつき、口縁部に羊歯状文が施される。	縄文 L R	16.0	16.8
4	鉢	口唇に刻み目めぐる。口縁部に沈線が3条、内面に1条めぐる。	縄文 R L	9.6	〈9.7〉
5	鉢	口唇に刻み目めぐる。口縁部に沈線と刺突がめぐり、その直下に突起が1個配置される。	縄文 R L	8.7	11.5
6	鉢	口唇に2個一対の突起が4個配置される。口縁部に沈線がめぐり、大小の突起が交互に配置される。口縁部内面に沈線が1条めぐる。	条痕	13.6	17.2
7	鉢	口唇に刻み目めぐる。口縁部に沈線が3条めぐり、突起が1個配置される。体部に沈刻による配置文を描き、充填文を加えて連続的な入組文様を完成させる。底部近くに沈線が2条めぐる。	縄文 L R	12.1	〈18.0〉
8	鉢	口唇に沈線が1条、口縁部に2条めぐり、突起が配置される（5個残存）。体部に工字文（8単位）がめぐる。底部近くに沈線が2条めぐる。	縄文 L R	15.7	18.5
9	鉢	口縁部に沈線がめぐり、突起が5個配置される。口縁内面に沈線が1条めぐる。体部に工字文（8単位）がめぐり、底部近くに沈線が2条めぐる。	縄文 L R	8.9	〈13.6〉
10	鉢	口唇に2個一対の突起が配置される（2個残存）。口縁内面に沈線が1条めぐる。頸部に沈線がめぐり、そこに突起が配置される。体部に工字文が施され、底部近くに沈線が1条めぐる。	縄文 L R	8.8	〈13.0〉
11	鉢	無文である。口縁部、口縁内面、底部近くに沈線が1条ずつめぐる。底部に沈線が丸く施される。	無	6.8	9.6
12	鉢	口縁部に沈線がめぐり、突起が5個配置される。口縁内面に沈線が1条めぐる。体部に工字文（12単位）がめぐる。	縄文 R L	(9.8)	14.7
13	鉢	口唇に沈線が1条めぐる。口縁部に沈線がめぐり、突起が5個配置される。体部上半に工字文（6単位）がめぐる。	縄文 L R	(7.6)	12.5
14	鉢	台付鉢の台部の破片。台部中央部にC字状の文様と三又状の透かし孔が施される。その直下に列点がめぐる。底部近くに突起が1個配置される。	無	—	—
15	鉢	台付鉢の台部の破片。台部下部に列点がめぐる。補修孔と思われる穿孔が11個みられる。	無	—	—
16	鉢	体部に工字文が施される。内面・外面に赤彩がみられる。台付と思われる。	無	—	—
17	鉢	体部に工字文が施される。内面・外面に赤彩がみられる。破片の右端に補修孔と思われる穿孔が上下に9個並ぶ。台付と思われる。	無	—	—
18	鉢	口縁部に沈線がめぐり、突起が配置される（3個残存）。体部に工字文が施される。台付と思われる。	縄文 L R	—	—
19	浅鉢	口縁部が内湾する。体部に装飾的な区画文を3単位配置し、さらに充填文を加え雲形文を完成させる。	縄文 L R	7.4	〈21.4〉
20	浅鉢	無文である。口縁部に沈線が2条めぐり、底部に沈線が丸く施される。口縁部内面と底部内面に段が見られる。内面・外面に赤彩がみられる。	無	3.7	12.9
21	壺	肩部に沈線が3条めぐり、突起が1個配置される。体部中央部に破損孔があり、アスファルト状のもので充填されている。本来はここに円形に加工した土器片が補修のため貼り付けられたと考えられる。底部近くに沈線が2条めぐる。	縄文 L R	18.6	18.3
22	壺	肩部に沈線が3条めぐる。体部に黒漆が施される。	縄文 R L	16.9	16.8
23	壺	小さな突起を両脇にもつ大型の突起が口唇に配置される。その直下や反対側にも突起が配置される。口縁内面に沈線が1条めぐる。	縄文 L R	23.0	22.8
24	壺	両脇と直下に小さな突起をもつ大きな突起が口唇に配置される。底部近くに沈線が1条めぐる。	縄文 R L	11.3	10.0
25	壺	口唇に沈線が1条めぐり、大小の突起が3個配置される。口縁部に沈線が2条、内面に1条めぐる。	縄文 R L	9.6	9.7
26	壺	口縁部に突起が3個、頸部に4個配置される。体部に沈刻による配置文を描き、充填文を加えて連続的な入組文様を完成させる。	縄文 L R	〈16.1〉	15.8
27	壺	口頸部・底部欠損。頸部直下に突起が配置される（3個残存）。体部に沈刻による配置文を描き、充填文を加えて連続的な入組文様を完成させる。	縄文 L R	(13.4)	15.9

() は残存、〈 〉 は復元の数値である。

宇鉄遺跡 観察表（1）

番号	器種	特 徴	地 文	器高 (cm)	器幅 (cm)
28	壺	口頸部欠損。頸部直下に2個一対の突起が4個配置される。体部に沈刻による配置文を描き、充填文を加えて連続的な入組文様を完成させる。底部近くに沈線が1条めぐる。	縄文L R	(16.0)	17.7
29	壺	口頸部欠損。頸部直下に2個一対の突起が配置される（2個残存）。体部に沈刻による配置文を描き、充填文を加えて連続的な入組文様を完成させる。底部近くに沈線が2条めぐる。赤彩は外面全体、内面頸部付近にまでみられる。	無	(7.9)	11.1
30	壺	口頸部欠損。頸部直下に2個一対の突起が4個配置される。体部に沈刻による配置文を描き、充填文を加えて連続的な入組文様を完成させる。底部近くに沈線が2条めぐる。	縄文L R	(12.7)	16.2
31	壺	口頸部欠損。頸部直下に突起が配置され（1個残存）、体部上半に工字文がめぐる。	縄文L R	(10.6)	14.4
32	壺	肩部に工字文（10単位）がめぐる。磨滅が激しい。	無	11.1	13.4
33	壺	口唇に突起が1個配置される。無文で、赤彩が施される。赤彩は外面全体、内面頸部付近にまでみられる。	無	10.5	11.8
36	鉢	口縁部に沈線が3条めぐる。体部に渦巻状の文様が3単位施される。底部近くに沈線が3条めぐる。	縄文R L	10.1	15.5
37	浅鉢	体部に磨消による配置文を2単位配置し、充填文を加え雲形文を完成させる。	縄文L R	7.3	19.7
38	浅鉢	口縁部に沈線がめぐり、眼鏡状の浮文が8個配置される。体部に沈刻による配置文を描き、充填文を加えて連続的な入組文様を完成させる。	縄文R L	6.7	18.8
39	浅鉢	口縁部に変形工字文（4単位）がめぐる。底部近くに沈線が2条めぐる。	無	6.4	12.7
40	浅鉢	口唇に大小の突起が5個配置される。口縁部に変形工字文（4単位）がめぐる。体部下半に補修孔と思われる穿孔がみられる。	縄文L R	7.9	17.3
41	浅鉢	口唇に突起が4個、頸部と体部の境に眼鏡状の浮文が8個配置される。体部に工字文（8単位）、台部に工字文（4単位）がめぐる。内面・外面に赤彩がみられる。	無	10.9	20.3
42	浅鉢	口唇に突起が4個、頸部と台部の境に眼鏡状の浮文が8個配置される。体部に工字文（8単位）がめぐる。台部に工字文と透かし孔が施される。	無	10.6	17.0
43	浅鉢	口唇に大小の突起が交互に配置される。頸部と体部の境に眼鏡状の浮文が10個配置される。体部に工字文（12単位）がめぐる。	縄文R L	(11.8)	21.2
44	壺	口唇に突起が3個、頸部直下に4個配置される。体部の上段には区画文が3単位、下段には配置文が3単位配置され、それぞれに充填文を加え連続的な文様を構成する。	無	15.2	10.6
45	壺	口唇に突起が配置される。体部に沈刻による配置文を描き、充填文を加えて連続的な入組文様を完成させる。底部近くに沈線が2条めぐる。	縄文L R	8.5	10.6
46	壺	口唇に大小の突起が5個、頸部直下に突起が4個配置される。体部に沈刻による配置文を描き、充填文を加えて連続的な入組文様を完成させる。底部近くに沈線が1条めぐる。	縄文L R	16.1	16.5
47	壺	頸部直下に突起が5個配置される。体部に不規則な沈線文がめぐる。	縄文L R	10.6	12.0
48	注口	肩部に装飾的な彫り込みがめぐる。注口部周囲に突起が4個配置。体部上半に配置文が4単位、体部下半にC字状の文様が点対称に配置される。丸底。	縄文L R	(8.2)	15.2
49	注口	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、注口部の上の部分に突起が3個配置される。肩部に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が10個配置される。注口部周囲に突起が2個配置される。体部上半に配置文が4単位、体部下半に配置文が4単位施される。丸底。	縄文L R	7.1	19.1

石刀

番号	部位	特 徴	柄部の形成	柄部の形状	文様	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)
34	柄～身	やや内反り。柄頭と柄の境が明確に形成される。「1949. 5. 17」という注記がある。	断面差	台形	無	(23.1)	3.2	2.8
35	柄～身	やや内反り。柄頭と柄の境が明確に形成される。柄頭に弧線文や三角形文が施される。	断面差	長方形	有	(17.3)	2.7	1.2
50	完形	内反り。柄頭に2個の小円を中心に入組三又文が施されている。柄頭と柄の境、刃関が明確に形成されている。黒色でよく磨かれている。	刃関	長方形	有	33.5	2.8	11.0

（ ）は残存、〈 〉は復元の数値である。

宇鉄遺跡 観察表（2）

Ⅲ. 青森県階上町滝端遺跡・寺下遺跡 出土の亀ヶ岡式土器について

磯前和己・藤沼邦彦

Ⅲ．青森県階上町滝端遺跡・寺下遺跡出土の亀ヶ岡式土器について

磯前和己・藤沼邦彦

○ はじめに

弘前大学人文学部日本考古学ゼミナールでは、亀ヶ岡式土器の文様の研究を重要な課題として取り上げ、亀ヶ岡式土器の実測図・文様展開図の作成を行っている。ここでは、階上町民俗資料収集館が保管する滝端遺跡・寺下遺跡出土の土器を紹介する。この資料は、登切小学校の校長を勤めた柴田勝三氏が採集し、階上町教育委員会に寄贈したものの一部である。『階上村誌』（正部家1977）に簡略な図面が、『階上の遺跡』（村木2002）に一部の写真があるが、これを見て土器の文様構成・描く手順などを考察することはできないので、新たに実測図・拓本図・文様展開模式図などを作成した。

○ 滝端遺跡・寺下遺跡の位置

両遺跡が所在する青森県三戸郡階上町は、青森県の東南端に位置し、東は長い海岸線で太平洋に臨み、北と西は八戸市、南は岩手県の洋野町・軽米町に接している。洋野町との境に聳える階上岳（標高740m）の北麓に広がる標高110～150mほどの丘陵が、町の面積の大半を占めている。

①滝端遺跡は、階上町平内字滝端に所在し、町役場の南西7.5kmに位置する。階上岳から派生した段丘の広い平坦面（標高150～170m）に立地する縄文時代草創期・中期～晩期の大きな遺跡である。平成9・10年に、階上町教育委員会が工事に伴う事前の発掘調査を行い、縄文時代草創期の集石遺構1基・竪穴状遺構1基、後期から晩期にかけての竪穴住居跡15軒・土坑（土坑墓を含む）68基・埋設土器1基・焼土遺構1基を検出し、後期後葉から晩期中葉にかけての土器・土偶、岩版・石器などの遺物が大量に出土した。晩期の土坑から製塩土器と見られるほぼ完形品に近い土器1個が、また晩期の土坑墓から上顎の犬歯を抜歯した人骨が検出された（森2000）。

②寺下遺跡は、階上町赤保内字寺下に所在し、町役場の南東2.5kmに位置する。現在の海岸線から約4.5kmほど内陸部に入り込んだ地点にあり、標高約140～170mの平坦な丘陵上に立地する縄文時代後・晩期から弥生時代にかけての大きな遺跡で、いくつかの地点貝塚が散在する。平成16年に、階上町教育委員会が、林道拡幅工事に伴う発掘調査を行い、縄文時代後期末から晩期中葉にかけての竪穴住居跡11軒・土坑11基・捨て場（晩期中葉の貝層）が検出され、土器、石器、骨角漁具・鹿角製腰飾り、石製装身具（玉・勾玉など）などが大量に出土した（文化庁2005）。

○ 紹介する滝端遺跡と寺下遺跡の亀ヶ岡式土器

①滝端遺跡の亀ヶ岡式土器は16点である（図1～16）。大洞C1式の特徴をそなえたものが多い。しかし、菱形・渦巻文をもつ注口（図16）は大洞BC式に、雲形文の皿（図11）は大洞C2式に、工字文の鉢（図8）は大洞A式に相当するものであろう。

②寺下遺跡の亀ヶ岡式土器は1点である（図17）。丸底に近い浅鉢で、体部の文様帯には、区画文と充填文によって構成された連続文様（雲形文）が描かれている。大洞C1式であろう。

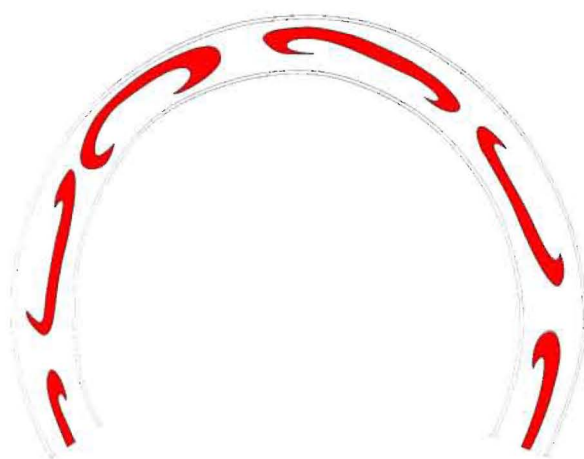
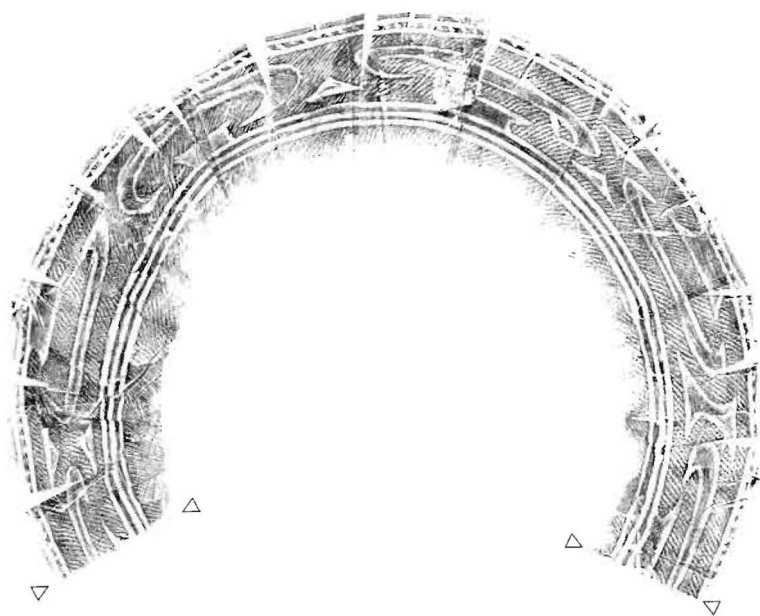
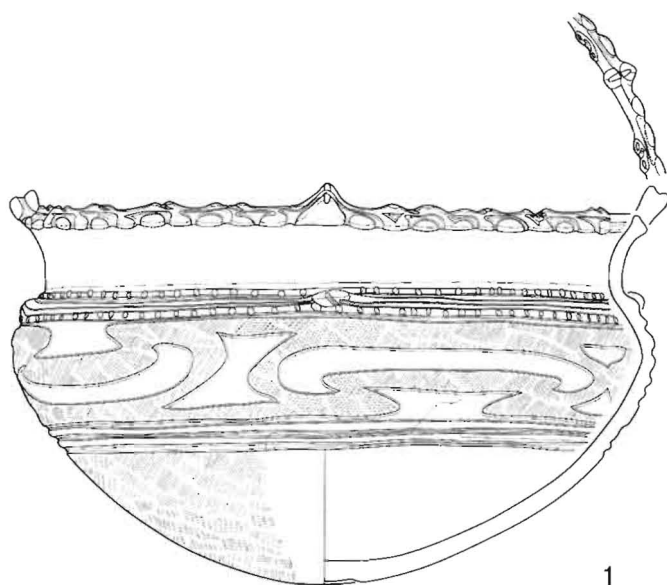
主要な文献

○1977年、正部家『階上村誌』、階上町教育委員会

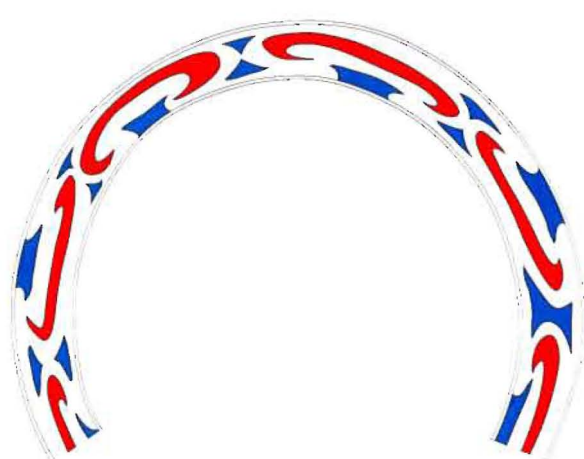
○2000年、森 淳『滝端遺跡発掘調査報告書－県営南の郷中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－』、階上町教育委員会

○2002年、村木 淳『階上の遺跡』、階上町教育委員会

○2005年、文化庁『発掘された日本列島2005・新発見考古速報』、朝日新聞社



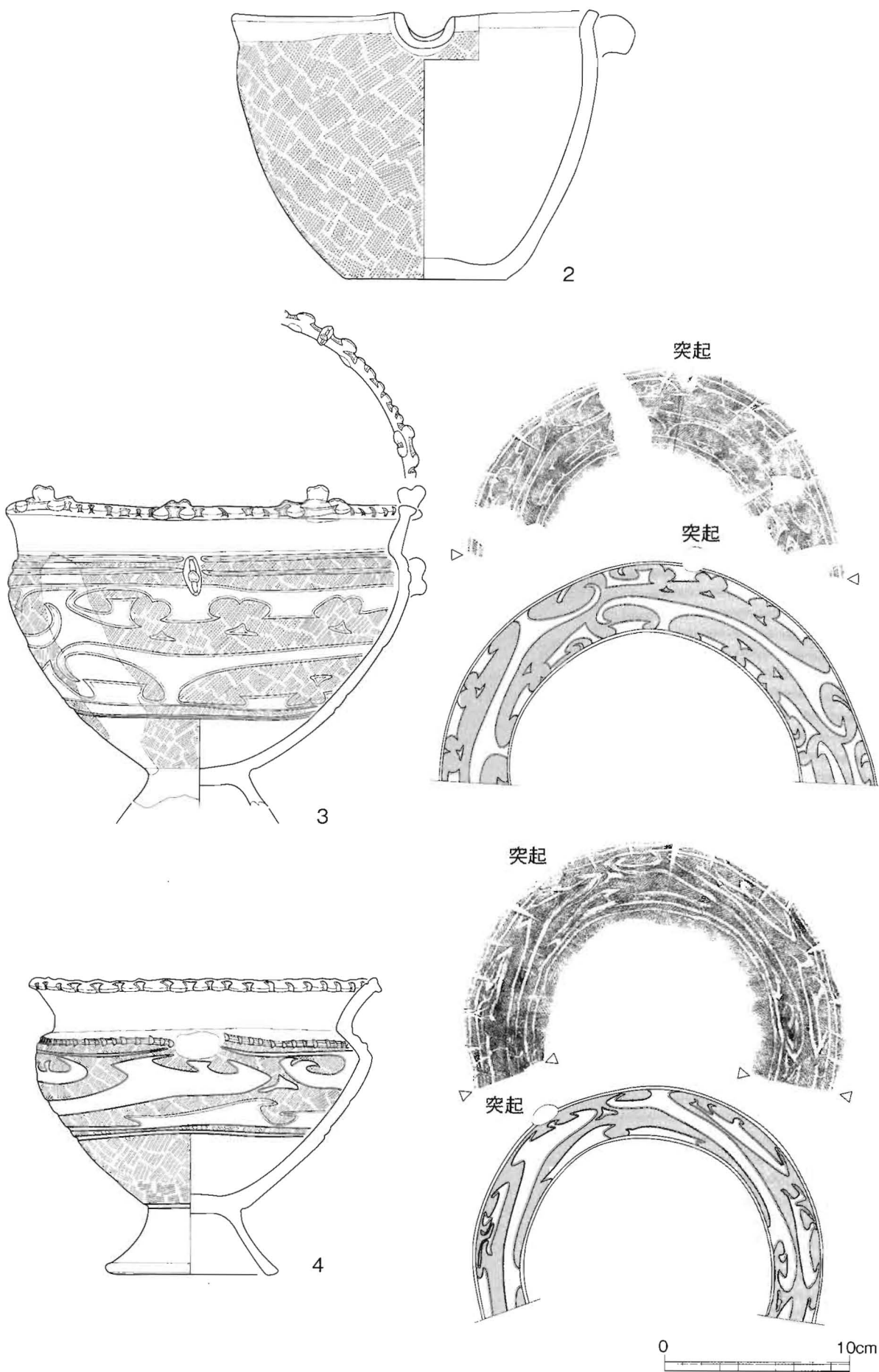
①配置文を5単位施す。



②充填文をうめる。

0 10cm

第 112 図 滝端遺跡 鉢 (1)



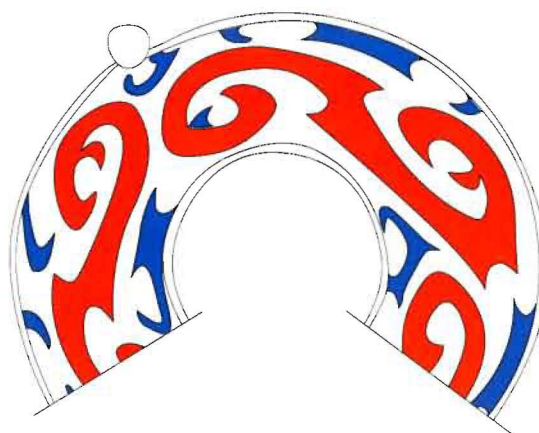
第 113 図 滝端遺跡 鉢 (2~4)



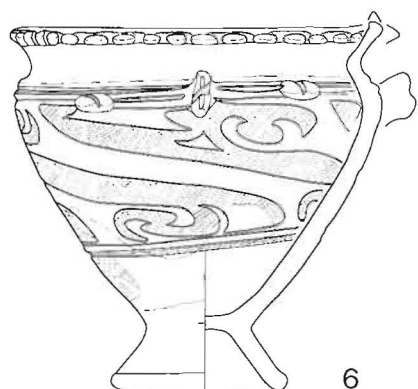
5



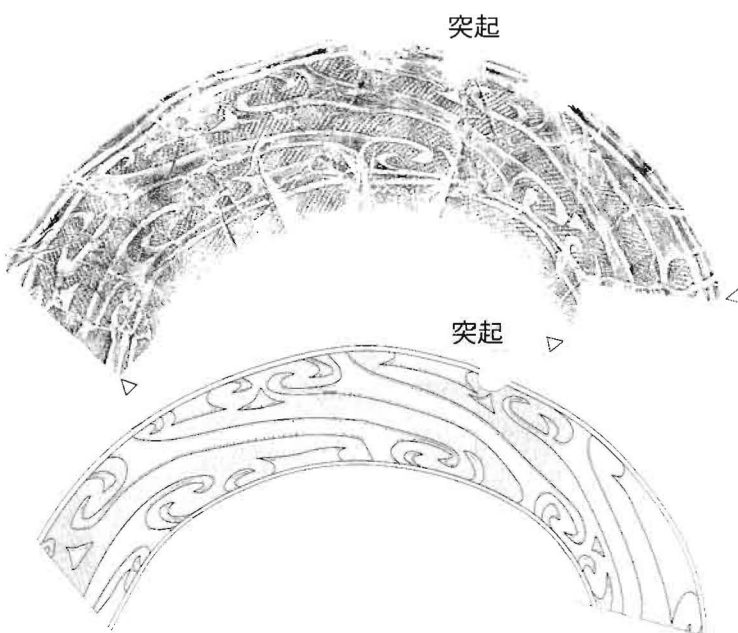
①配置文を2単位施す。



②充填文をうめる。

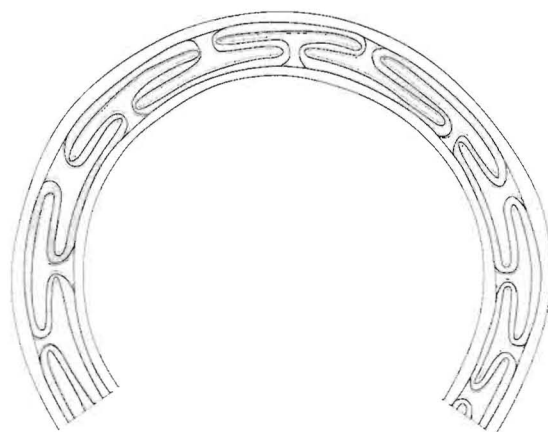
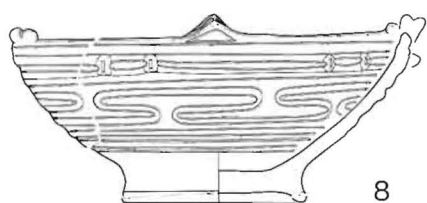
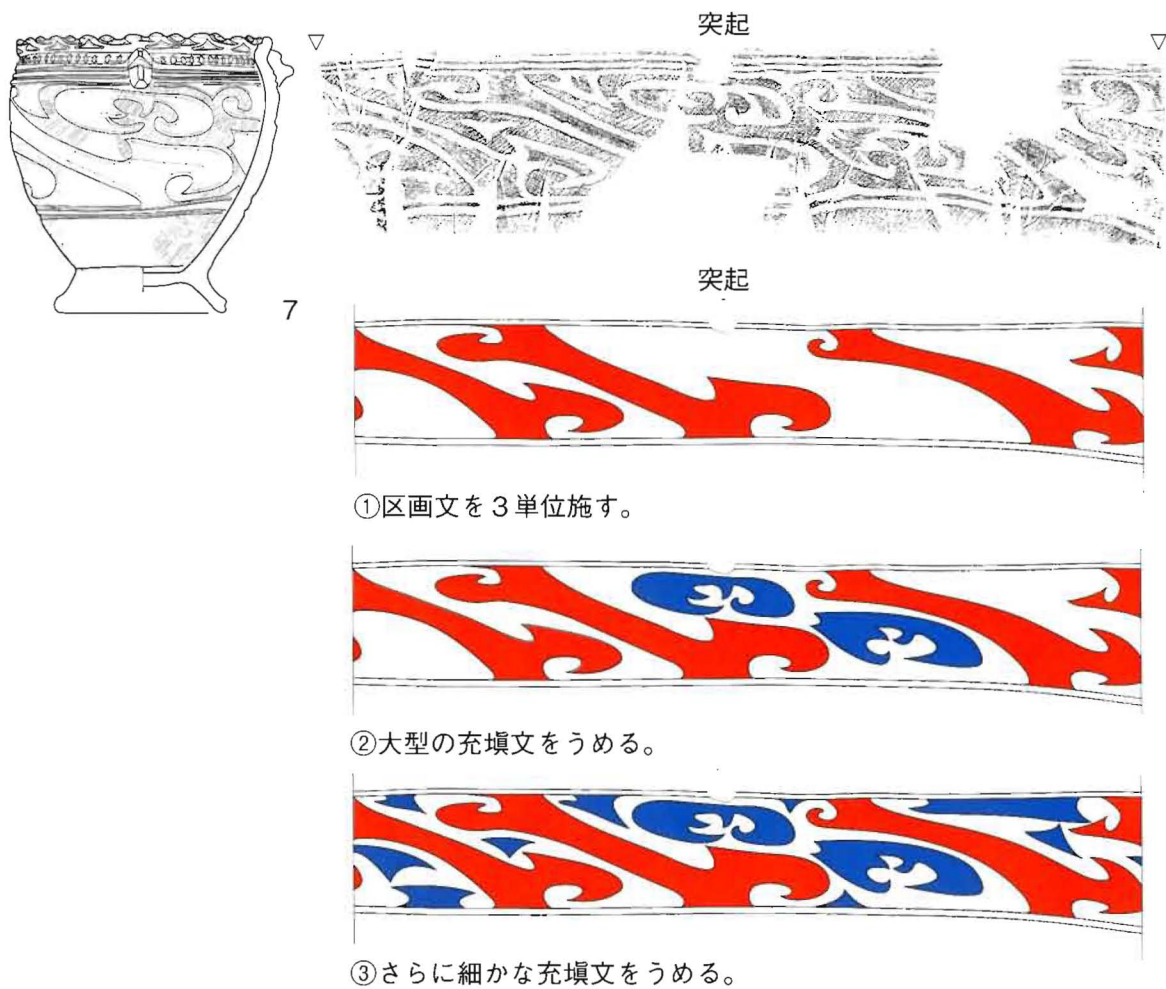


6



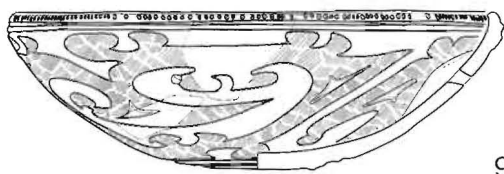
0 10cm

第114図 滝端遺跡 鉢（5・6）

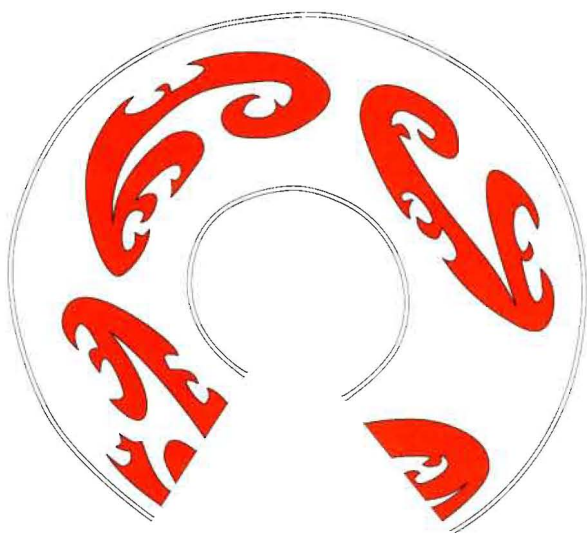


0 10cm

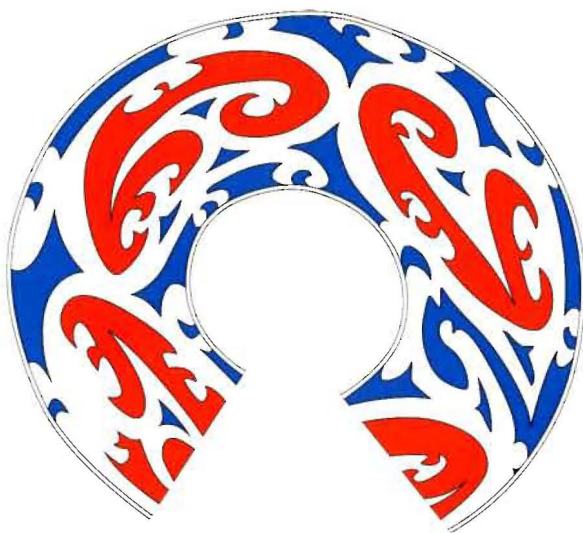
第115図 滝端遺跡 鉢(7・8)



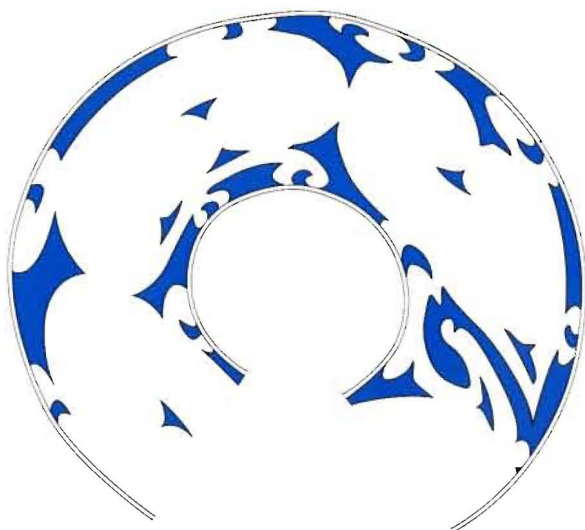
9



①配置文を3単位施す。



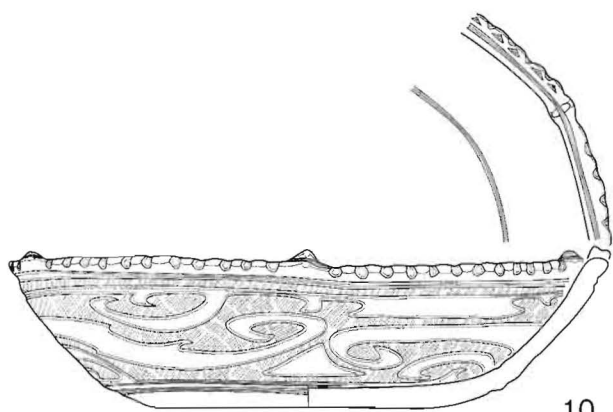
②充填文をうめる。



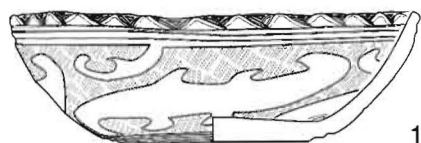
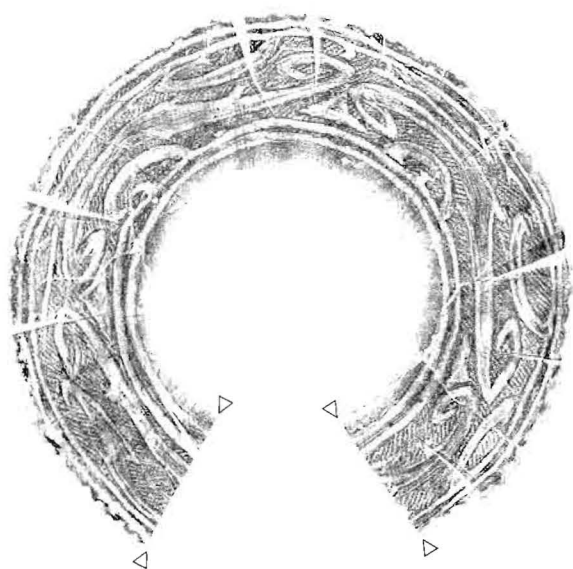
③充填文のみを抜き出したもの。



第116図 滝端遺跡 浅鉢（9）



10

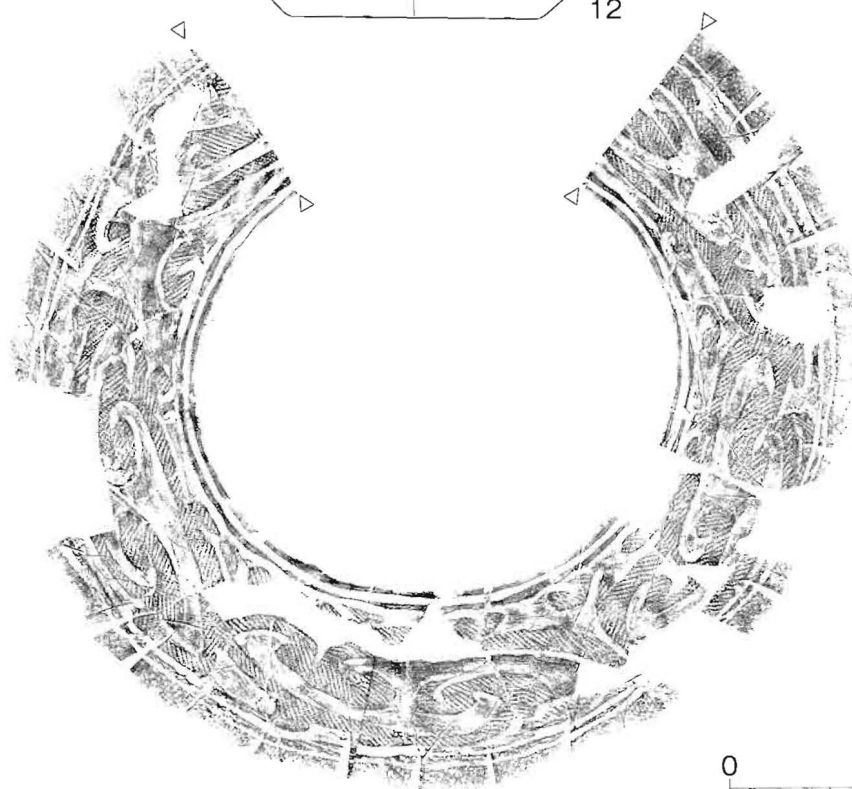
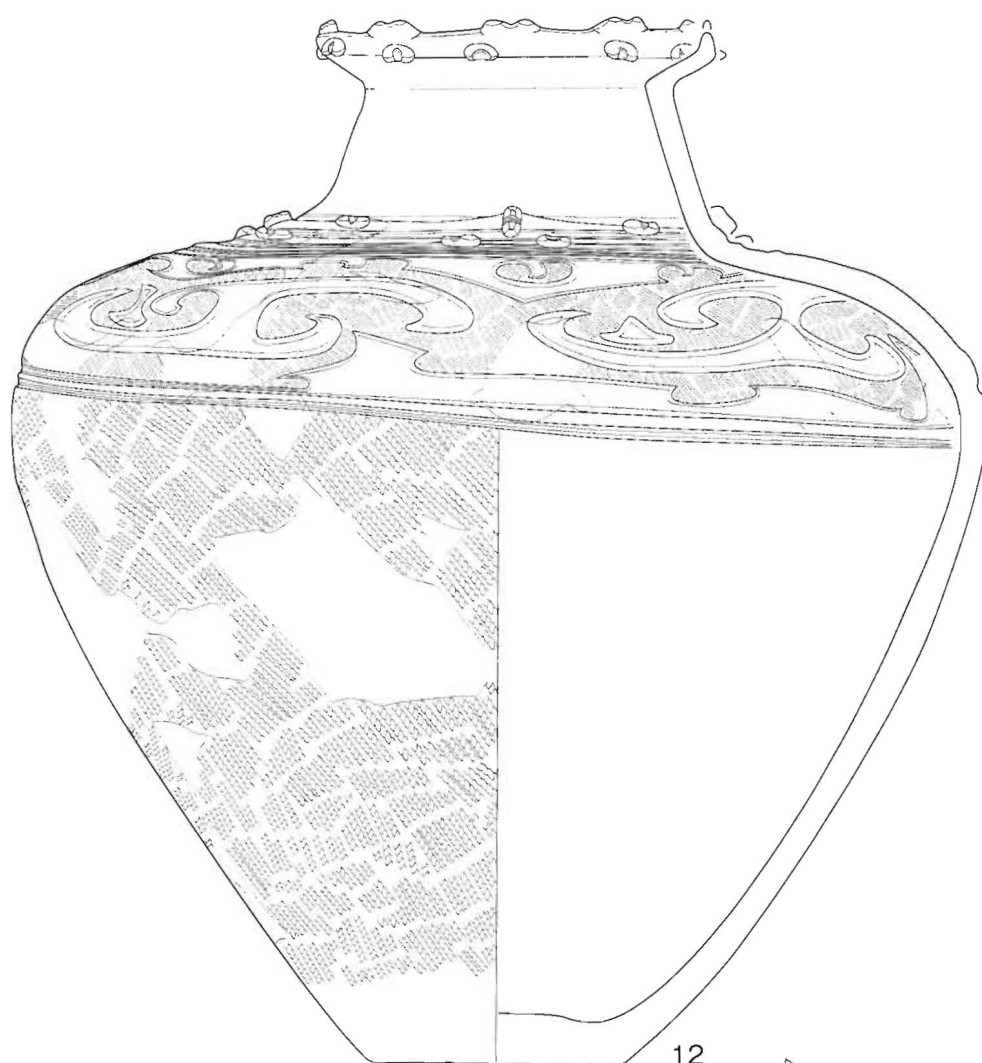


11



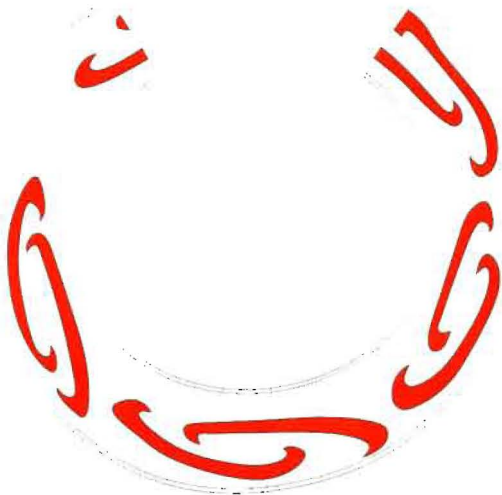
0 10cm

第 117 図 滝端遺跡 皿 (10・11)



0 10cm

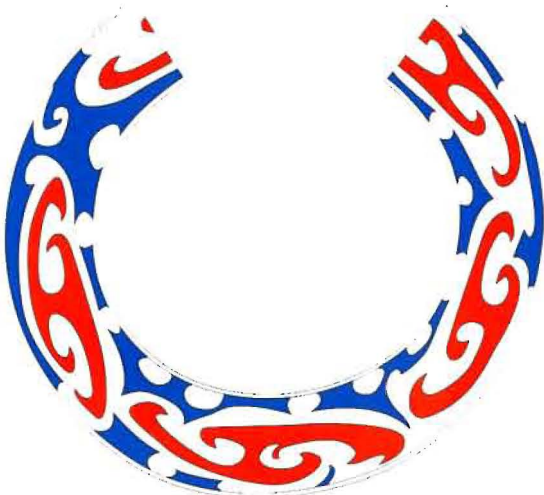
第 118 図 滝端遺跡 壺 (12)



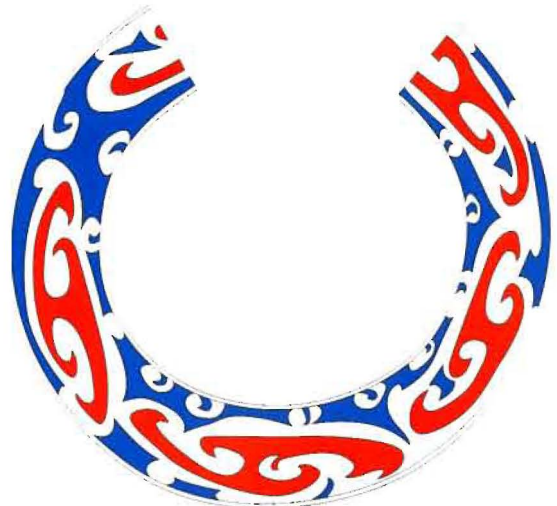
①横C字形の文様を点対称に配置する。



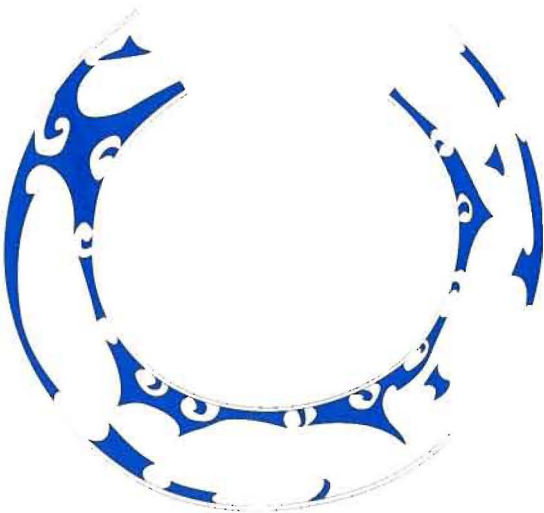
②付加的要素を加え、配置文が4単位完成する。



③充填文をうめる。



④さらに細かな充填文をうめる。



⑤充填文のみを抜き出したもの。

第 119 図 12 の文様の描き方

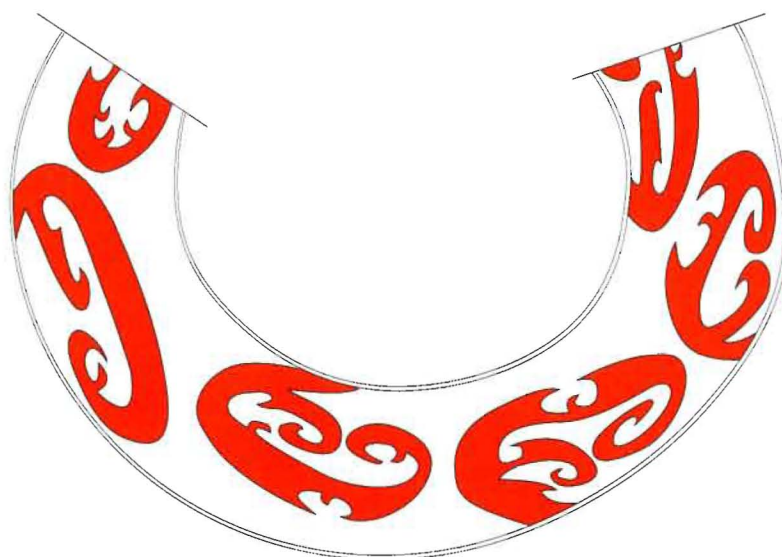


13



0 10cm

第 120 図 滝端遺跡 壺 (13)



①配置文を5単位施す。



②充填文をうめる。

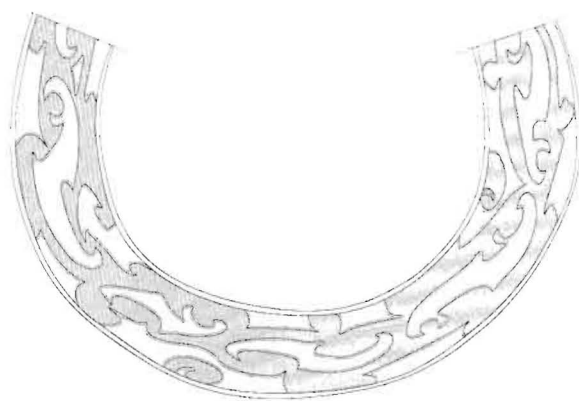
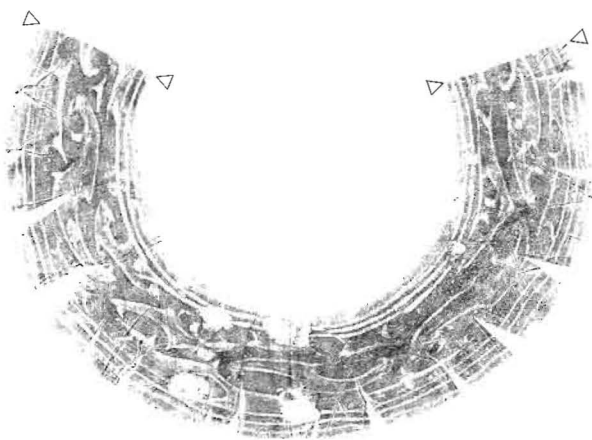


③充填文のみを抜き出したもの。
配置文が点対称に施されていることがわかる。

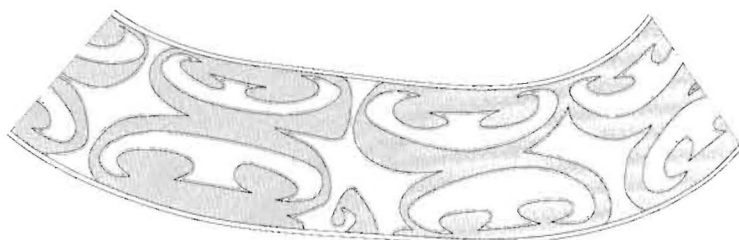
第 121 図 13 の文様の描き方



14

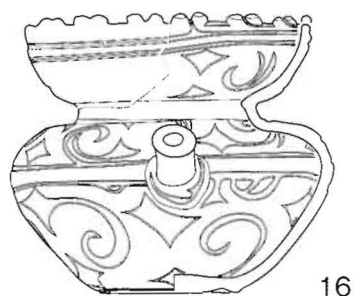


15



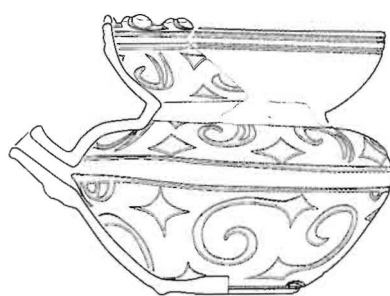
0 10cm

第 122 図 滝端遺跡 壺 (14・15)



正面

16

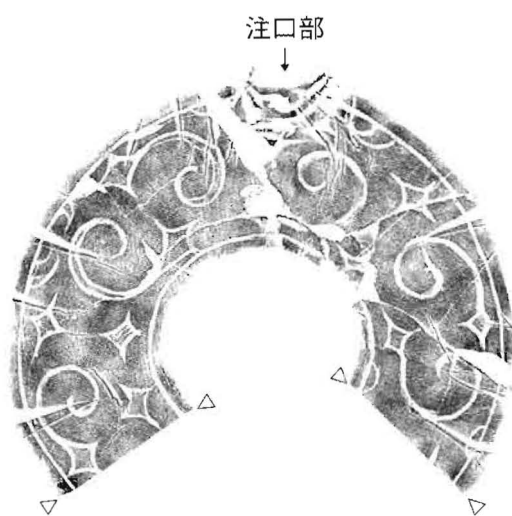


側面



↑
注口部

16 上半部



16 下半部



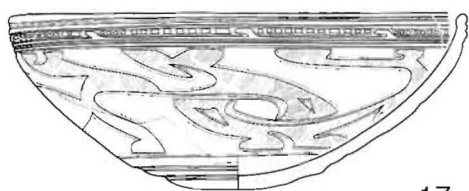
↑
注口部
16 上半部展開図



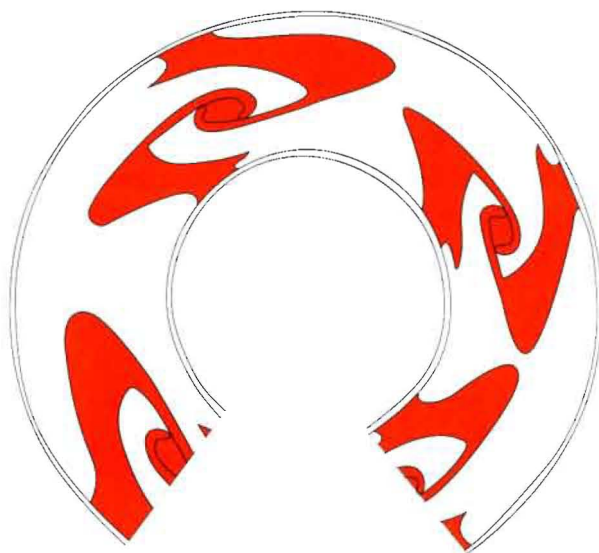
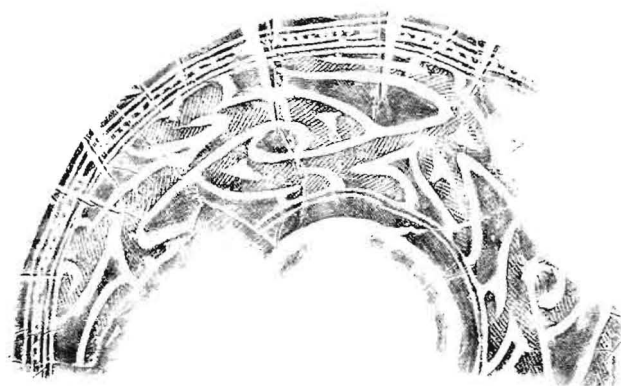
16 下半部展開図

0 10cm

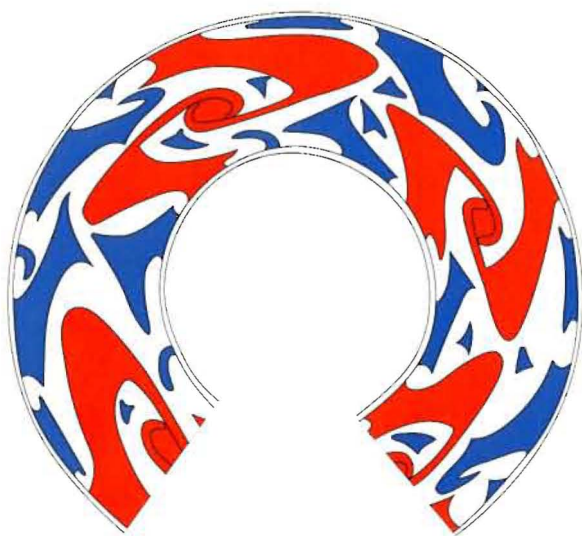
第 123 図 淹端遺跡 注口 (16)



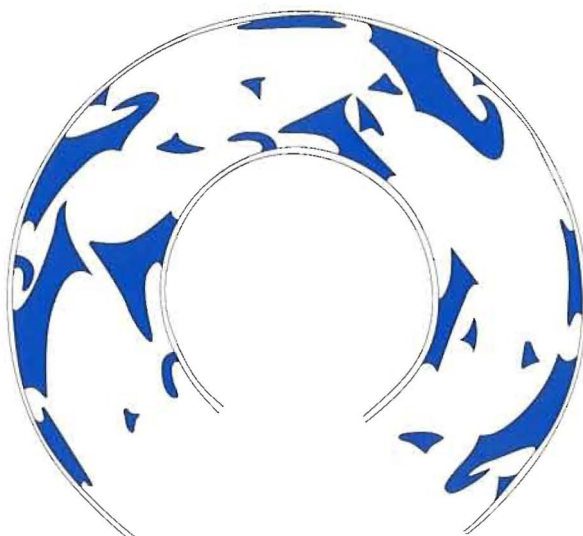
17



①弧線を点対称に組み合わせた区画文が
3単位施される。



②充填文をうめる。



③充填文のみを抜き出したもの。

0 10cm

第124図 寺下遺跡 浅鉢(17)

滝端遺跡

番号	器種	特 徴	地 文	器高	器幅
1	鉢	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が4個配置される。口縁部内面に沈線が1条めぐる。頸部と体部の境に突起が4個配置される。沈線間に刺突がめぐる。体部に磨消による配置文を5単位配置し、充填文を加え雲形文を完成させる。	縄文 L R	16.1	25.8
2	鉢	片口の鉢である。内面・外面に炭化物付着。	縄文 L R	14.7	20.0
3	鉢	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、大型の突起が4個、突起が4個配置される。口縁部内面に沈線が1条めぐる。頸部と体部の境に突起が1個配置される。体部に磨消による区画文を2単位配置し、充填文を加え雲形文を完成させる。内面・外面に炭化物付着。	縄文 L R	(17.7)	22.3
4	鉢	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。頸部と体部の境に突起が1個配置されるが剥離している。沈線内に刺突がめぐる。体部に磨消による区画文を2単位配置し、充填文を加え雲形文を完成させる。内面・外面に炭化物付着。	縄文 L R	16.1	19.2
5	鉢	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が8個配置される。口縁部内面に沈線が1条めぐる。頸部と体部の境に大型の突起が1個、突起が5個配置される。沈線内に刺突がめぐる。体部に磨消による配置文を2単位配置し、充填文を加え雲形文を完成させる。体部と台部の境の沈線内に刺突がめぐる。台部に突起が9個配置される。内面・外面に炭化物付着。	縄文 L R	12.9	14.0
6	鉢	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が配置される（2個残存）。頸部と体部の境に大型の突起が1個、突起が2個配置される。体部に磨消による区画文を3単位配置し、充填文を加え雲形文を完成させる。内面・外面に炭化物付着。	縄文 L R	15.3	15.0
7	鉢	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。口縁部に三叉状の文様が施され、その直下の沈線内に刺突がめぐる。口縁部内面に沈線が1条めぐる。頸部と体部の境に突起が1個配置される。体部に磨消による区画文を3単位配置し、充填文を加え雲形文を完成させる。内面に炭化物付着。	縄文 L R	11.2	10.7
8	鉢	口唇に突起が配置される（2個残存）。口縁部内面に沈線が1条。体部に突起が配置され（2個残存）、工字文が12単位施される。口唇に漆が付着。	無文	(7.3)	〈16.1〉
9	浅鉢	口唇に刺突がめぐる。体部に磨消による配置文を3単位配置し、充填文を加え雲形文を完成させる。補修孔が1箇所残存。内面がよく磨かれる。丸底。	縄文 L R	6.3	19.2
10	皿	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が5個配置される。体部に磨消による配置文を3単位配置し、充填文を加え雲形文を完成させる。内面の底部近くに沈線が1条めぐる。	縄文 L R	6.3	24.2
11	皿	口唇に装飾的な彫り込みがめぐる。体部に磨消による配置文を4単位配置し、充填文を加え雲形文を完成させる。	縄文 L R	5.1	16.5
12	壺	口唇に突起が配置され（7個残存）、その直下に突起が9個配置される。頸部と体部の境に隆帯が2条めぐる。上段の隆帯に大型の突起が5個、突起が5個配置される。下段の隆帯に突起が10個配置される。体部に磨消による配置文を4単位配置し、充填文を加え雲形文を完成させる。縄文原体は体部上半と下半で大きさが異なる。	縄文 R L	42.0	39.0
13	壺	頸部と体部の境に刺突がめぐる。体部に磨消による配置文を5単位配置し、充填文を加え雲形文を完成させる。縄文原体は体部上半と下半で大きさが異なる。	縄文 L R	(29.2)	33.4
14	壺	頸部と体部の境に沈線が4条あり、2・3条目は突起間の短沈線である。1条目から3条目にかけて突起が4個、1条目と2条目の間に突起が4個配置される。体部に磨消による配置文を5単位配置し、充填文を加え雲形文を完成させる。内面・外面が赤彩される。	無文	19.0	20.2
15	壺	口唇に突起が2個、大型の突起が1個配置されるが剥離している。体部に磨消による配置文を6単位配置し、充填文を加え雲形文を完成させる。丸底。	縄文 L R	16.8	15.0
16	注口	口唇に突起が配置される（3個残存）。口縁部に配置文が4単位残存。体部上半に配置文が8単位、体部下半に配置文が6単位施される。外面全体・口縁部内面がよく磨かれ、光沢をもつ。	無文	11.1	13.0

寺下遺跡

番号	器種	特 徴	地 文	器高	器幅
17	浅鉢	口縁部に沈線と刺突による装飾が施される（5組残存）。体部に磨消による区画文が3単位配置され、充填文を加え雲形文を完成させる。内面がよく磨かれる。丸底。	縄文 L R	7.1	18.6

（ ）は残存、〈 〉は復元の数値である。

滝端遺跡・寺下遺跡 観察表

IV. 東北地方各地の亀ヶ岡文化の 遺物について

秋山真吾・藤沼邦彦

Ⅳ．東北地方各地の亀ヶ岡文化の遺物について

秋山真吾・藤沼邦彦

○ はじめに

弘前大学人文学部日本考古学ゼミナールでは、亀ヶ岡式土器の文様の研究を重要な課題のひとつとして取り上げ、亀ヶ岡式土器の実測図・文様展開図の作成を行っている。そのため、機会あるたび各地で出土している亀ヶ岡式土器などの実測図を作成しているが、遺跡ごとにまとまっていない資料も含まれている。ここでは、そうした個別的な遺物についての実測図を紹介するもので、10遺跡・19点の遺物がある。ただし、④弘前市湯ノ沢遺跡と⑤鯔ヶ沢町大曲Ⅲ号遺跡の出土品は、亀ヶ岡文化のものではなく、弥生土器である。

以下、遺跡ごとに紹介していく。

○ 資料の紹介

①青森県上北郡東北町千曳遺跡出土の台付鉢・壺について（第125・126図）

青森県上北郡野辺地町にある野辺地町立歴史民俗資料館で展示されている資料である。野辺地町長者久保遺跡の発見者として名高い角鹿扇三氏が、千曳遺跡で採集し、同資料館に寄贈したものである（駒井知弘氏教示）。台付鉢（図1）は大洞C1～C2式、壺（図2）は大洞C2～A式頃（いわゆる聖山式に相当）のものである。

②青森県上北郡野辺地町陣場川原遺跡出土の注口について（第127図）

野辺地町立歴史民俗資料館で展示されている資料である。野辺地町在住の瀬川滋氏が、陣場川原遺跡で採集し、同資料館に寄贈したものである（駒井知弘氏教示）。この注口（図3）は大洞C2式に相当するものと思われる。なお、陣場川原遺跡は、昭和56年度に青森県埋蔵文化財調査センターによって発掘調査され、縄文時代後期の土器を中心に、前期から晩期までの遺物が出土したが、量は全体的に少なかった（青森県埋蔵文化財調査センター1983）。

③青森県弘前市薬師遺跡（薬師Ⅰ号・Ⅱ号）出土の浅鉢・壺・注口について（第128～131図）

弘前市教育委員会で保管する資料である。昭和33・35年に、弘前市教育委員会（担当、岩木山麓埋蔵文化財緊急調査特別委員会）が発掘調査した資料の一部であるが、報告書（村越1968）には実測図が掲載されていないので、実測図を作成したものである。浅鉢（図4・5）は大洞C1式に、壺（図6）は大洞C2式に、壺（図7）は大洞C1式？に、短頸壺（図8）と注口（図9）は大洞A式に相当するものと見られる。短頸壺（図8）の類例は、弘前市十腰内遺跡（杉山1928）・宮城県栗原市山王遺跡（藤沼・小川2006）などにみられるが、頸部に複数の小さな貫通孔がある点まで共通する。

④青森県弘前市湯ノ沢遺跡出土の鉢・浅鉢について（第132図）

弘前市教育委員会で保管する資料である。昭和33年に、弘前市教育委員会（担当、岩木山麓埋蔵文化財緊急調査特別委員会）が発掘調査した資料の一部である。報告書（村越1968）に実測図が掲載されているが、全体の文様を知るために、新たに実測図・展開拓本図を作成したものである。3点（図10～12）とも、変形工字文をもつ弥生土器（砂沢式）である。図11の2個一対の突起は、クマの頭部が向かい合った意匠である。

⑤青森県鯉ヶ沢町大曲Ⅲ号遺跡出土の壺について（第133図）

弘前市教育委員会で保管する資料である。昭和35年に、弘前市教育委員会（担当、岩木山麓埋蔵文化財緊急調査特別委員会）が発掘調査した資料の一部である。この壺（図13）は、報告書（村越1968）に実測図が掲載されているが、全体の文様を知るために、新たに実測図・文様展開図を作成したものである。変形工字文と刺突文で飾られたこの資料は、弥生土器（砂沢式）に相当する。

⑥青森県三戸町青鹿長根遺跡出土の壺について（第134図）

青森県立郷土館所蔵の風韻堂コレクションに含まれている壺である。青鹿長根遺跡は、馬淵川流域に分布する縄文時代晩期の遺跡で、出土品は青森県立郷土館のほか八戸市博物館・三戸町教育委員会・青森県立名久井農業高等学校などに所蔵されているが、青森県立郷土館によってその多くが資料化され報告されている（青森県立郷土館1997）。この壺は体部上半に丁寧な工字文が施文され、光沢もあり、全体に整った美しい壺となっている。大洞A式土器である。

⑦青森県青森市宮田遺跡出土の広口壺について（第135図）

青森県立郷土館所蔵の風韻堂コレクションに含まれている資料である（青森県立郷土館1997）。広口壺とすべきか、あるいは鉢に分類すべきか迷う形をしているが、あえて広口壺に分類した。宮田遺跡は、青森市矢田地区の台地上にある縄文時代後期・晩期の遺跡で、慶応義塾大学や青森市教育委員会によって発掘調査されている（清水1955、青森市教育委員会1985）。なお、この遺跡は、現在では長森遺跡と呼ばれている。この広口壺（図15）の体部上半の文様帯には、装飾的な配置文や充填文が配され、横に大きく展開する連続的な雲形文が構成されている。外面は赤漆が塗布されている。文様部の一部は後世の補修で復元されている。時期は大洞C1式である。

⑧秋田県北秋田市桂の沢遺跡出土の大型遮光器土偶について（第136～139図）

桂の沢遺跡は、北秋田市の森吉地区（根森田字桂の沢）にあり、阿仁川の支流である小又川の左岸に形成された標高約100mの平坦な河岸段丘上に立地する遺跡である。平成4年に、秋田市教育委員会（担当、秋田県埋蔵文化財センター）が工事に伴う発掘調査を実施し、縄文時代早期から晩期にいたる多数の遺構や遺物を発見した。晩期の遺構である捨て場からは、大洞B式から大洞C2式にかけての多数の遺物が出土したが、その中心を占めるのは大洞C1式土器という。すでに報告書（秋田県埋蔵文化財センター1994）が刊行されているが、土器については、拓本図はあるが実測図はなく、中途半端な内容となっている。ここで紹介しようとする遮光器土偶も、小さな写真はあるが、実測図は記載されていない。まだ、誰も実測図を作成したものはいないとのことであったので、亀ヶ岡文化研究センターのミニ特別展「森吉山麓の亀ヶ岡文化」に借用展示したのを機会に実測図を作成した。

この土偶は、晩期の捨て場から発見された。土偶の形態・文様から考えて、捨て場の遺物の中心を占める大洞C1式期のものである。その大きな特徴は、①遮光器土偶としても大型品であること。残存部の大きさは、高さ26.0cm×幅28.2cm×厚さ14.2cmである。もとの大きさを推定すると、おそらく高さは、40cmはあると思われる。②中空に作られていること。器壁は大きさの割に薄く、体部で0.6cmである。内面には、製作時の粘土紐の積み上げ痕が観察される（写真参照）。また、乳房の部分は、あらかじめ内部から押し出して形成しており、乳房を表現する位置が、粘土紐を積み上げる段階で、すでに設定されていたことを示す興味深い資料である（写真、実測図の断面図を参照）。③全身に赤彩が見られること。この土偶は全体的に磨滅しているが、赤彩がよく残っており、当時は全身が真赤であったことがよく分かる。

その他の特色として、(1)顔面はさらに粘土を貼り付けて、その上を沈線などで加工して表現して

いる、(2)目と目の間には人中を表現したと思われる縦の沈線がある、(3)口は小さく窪んでいるが、貫通していない、(4)口の下に突起状のものがみられる、(5)耳は粘土紐を渦巻き状に貼り付け、それを沈線で縁取りして表現されている、(6)頭頂部は欠損しているが、残存部から王冠状であったことが分かる、(7)磨かれた肩部には、突起をもつ2条の隆帯がめぐり、その形態は、大洞 C1式の壺の頸部装飾に共通する点がある、(8)体部の文様は、大洞 C1式土器の雲形文に共通する点が多い、(9)乳房や手首の表現は小型である、などを上げることができる。

⑨宮城県大崎市天王寺遺跡出土の徳利形壺について（第140図）

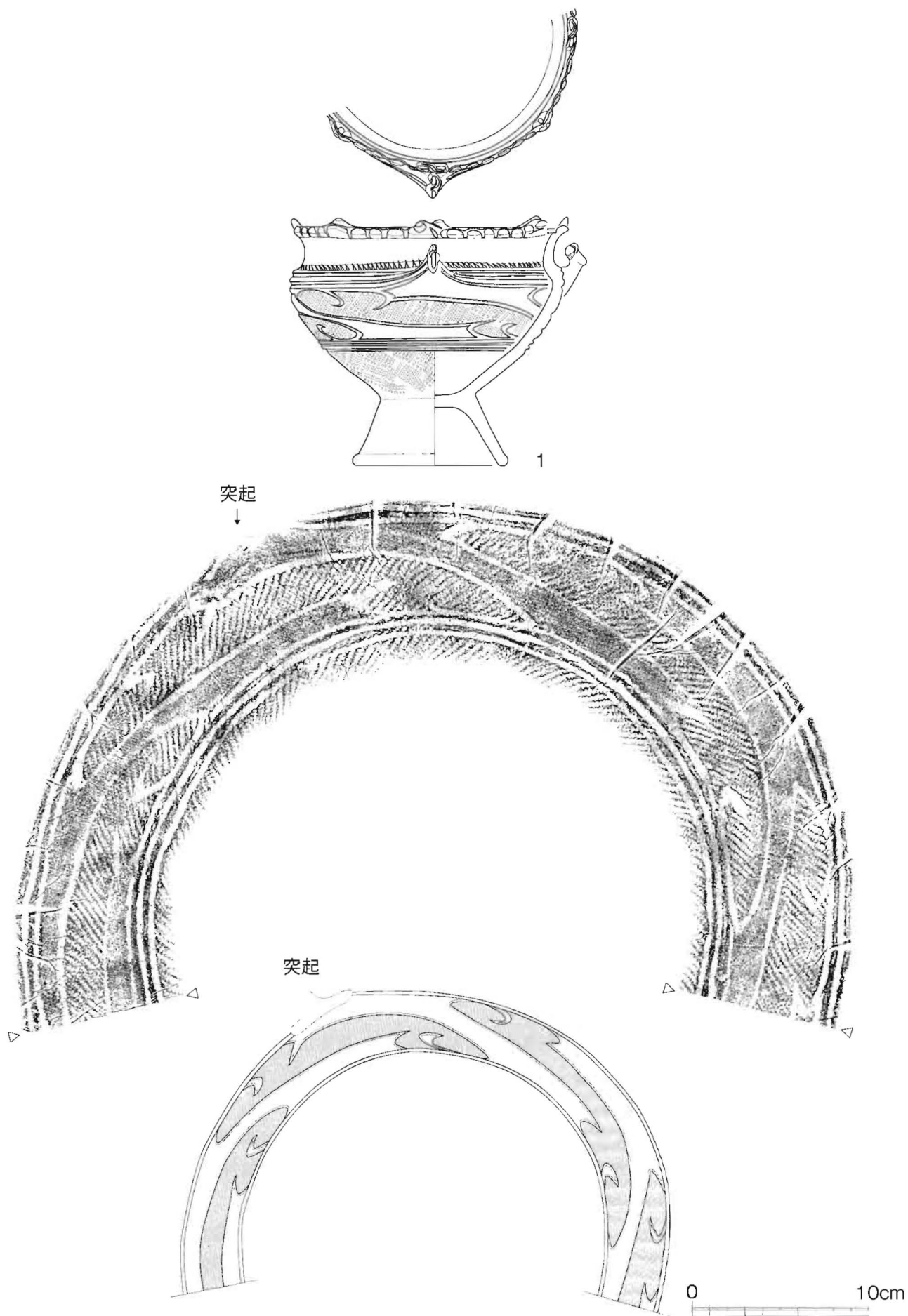
天王寺遺跡は、旧岩出山町上野目字上石田に所在し、広い段丘上に立地する縄文時代後・晩期の遺跡である。かつて圃場整備が行われた時に後期末から晩期中葉の土器などが多数出土した。とくに大洞 BC ～ C2式の土器が多く見られたようである。ここに紹介する土器も、個人がその時に採集したものの一部である。図17は、数少ない形の雲形文をもつ大洞 C1式の徳利形の壺である。図18は、一面に羊歯状文が施文された大洞 BC 式の徳利形の壺である。

⑩宮城県大崎市北小松・西岩田遺跡出土の脚付鉢について（第141図）

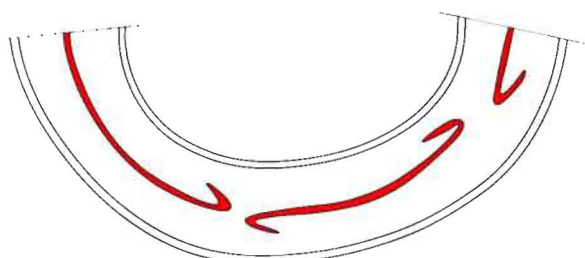
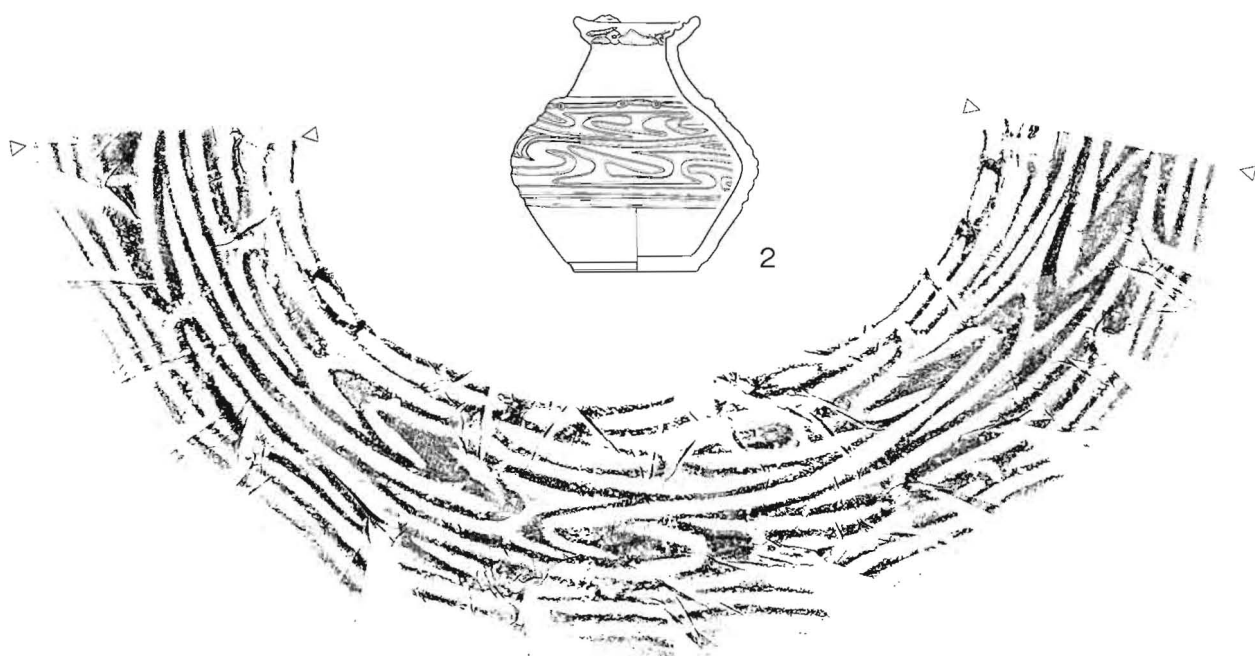
北小松・西岩田遺跡は、旧田尻町小松字屋敷浦に所在し、低い丘陵から沖積地にかけて立地する縄文時代晩期の遺跡である。沖積地の部分には遺物を含む泥炭層が発達し、水路などに多数の土器片が見られたことがある。獣骨もよく保存され、抜歯人骨も採集されている（興野1959）。ここに紹介する脚付鉢は個人によって採集され、補修された大型品である。口縁部と底部付近に平行線的な工字文がめぐり、底部には隆帯による十字状の文様が付される。脚は欠けた部分があるが、本来は4個あった。大洞 A式である。

各遺跡の主要な文献

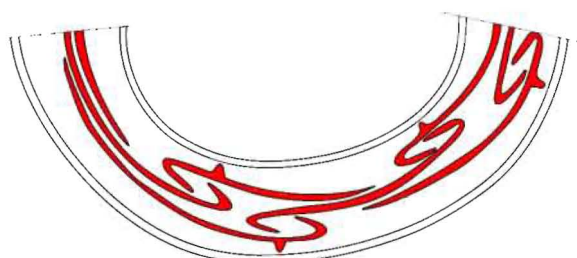
- 1928年、杉山寿栄男『日本原始工芸』、工芸美術研究会
- 1955年 a、清水潤三「青森県東津軽郡宮田遺跡」日本考古学年報3、日本考古学協会
- 1955年 b、清水潤三「青森県東津軽郡宮田遺跡」日本考古学年報4、日本考古学協会
- 1959年、興野義一「江合川流域の石器時代文化」仙台郷土研究19-3、仙台郷土研究会
- 1968年、村越 潔ほか『岩木山－岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』、岩木山刊行会
- 1970年、興野義一・遠藤智一「宮城県玉作郡岩出山町考古学遺跡」『岩出山町史』下
- 1983年、青森県埋蔵文化財調査センター『松原遺跡・陣場川原遺跡・槻ノ木遺跡 県営芋久保・馬門地区 一般農道整備予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書－』、青森県埋蔵文化財調査報告書77
- 1985年、塩谷隆正・山岸英夫『長森遺跡発掘調査報告書』青森市の文化財、青森市教育委員会
- 1990年、青森県埋蔵文化財調査センター『北の誇り・亀ヶ岡文化 縄文時代晩期編』、図説「ふるさと青森の歴史」シリーズ③、青森県文化財保護協会
- 1994年、秋田県埋蔵文化財センター『桂の沢遺跡発掘調査報告書－小滝阿仁前田停車場線地方道改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査－』秋田県埋蔵文化財調査報告書247
- 1996年、青森県立郷土館『縄文の玉手箱－風韻堂コレクション図録』
- 1997年、青森県立郷土館『馬淵川流域の遺跡調査報告書』、青森県立郷土館調査報告書40
- 1998年、宮城県教育委員会『宮城県遺跡地図』、宮城県文化財調査報告書176
- 2006年、藤沼邦彦・小川忠博『ミニ特別展「亀ヶ岡文化の世界」の図録』、弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告3、弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター



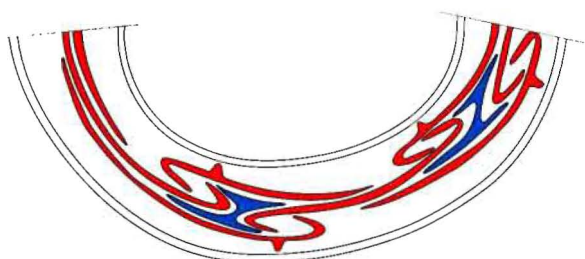
第 125 図 千曳遺跡 鉢 (1)



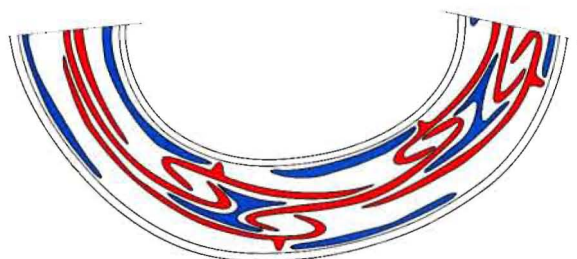
①横 S 字形の配置文を 2 単位配置する。



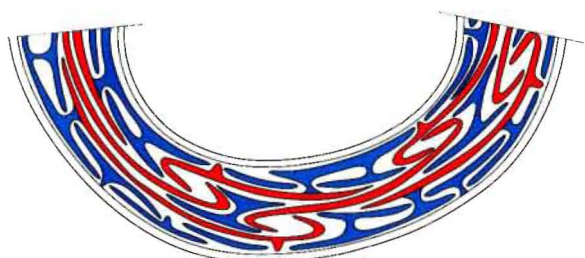
②横 S 字形にかみ合う文様を配置する。



③配置文間に工の字文をうめる。



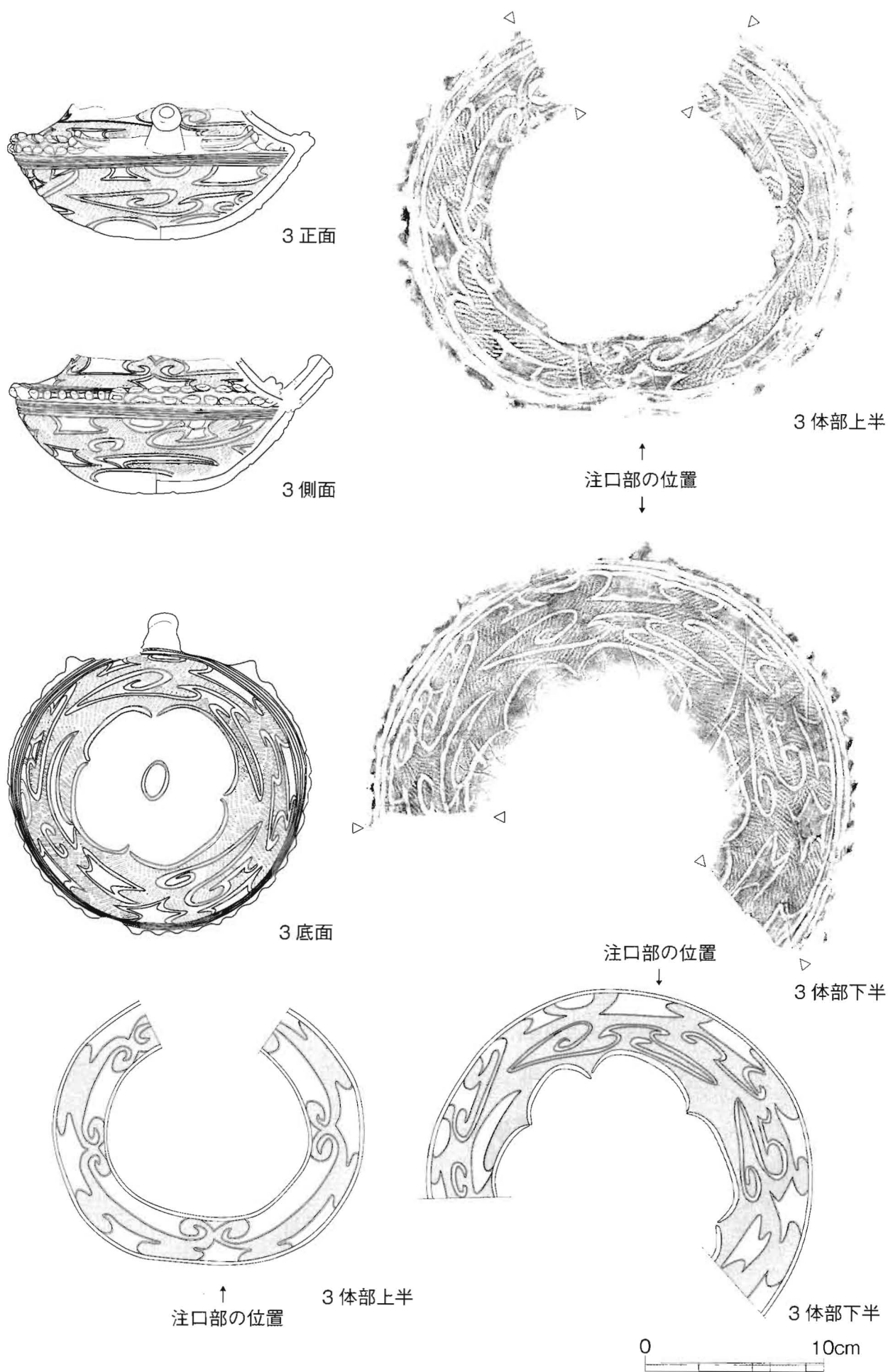
④隙間に沈線を施す。



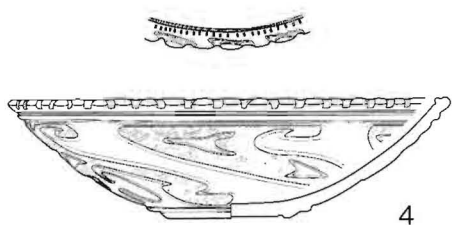
⑤┐字文・沈線をうめる。

0 10cm

第 126 図 千曳遺跡 壺 (2)



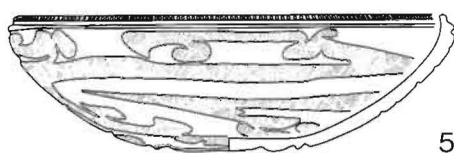
第 127 図 陣場川原遺跡 注口 (3)



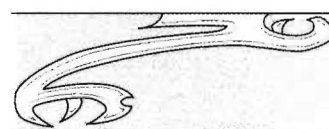
4



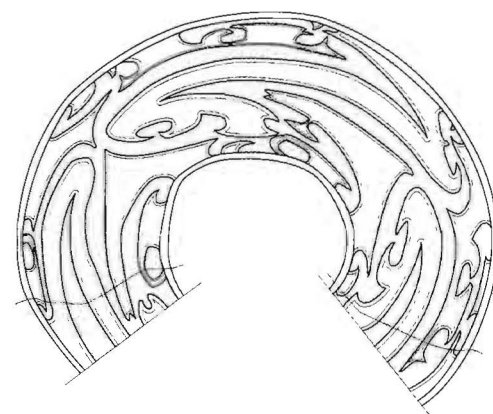
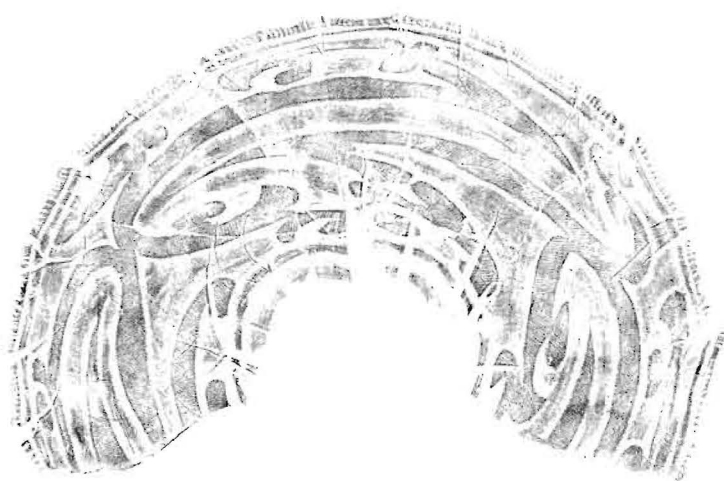
区画文が4単位施される。



5

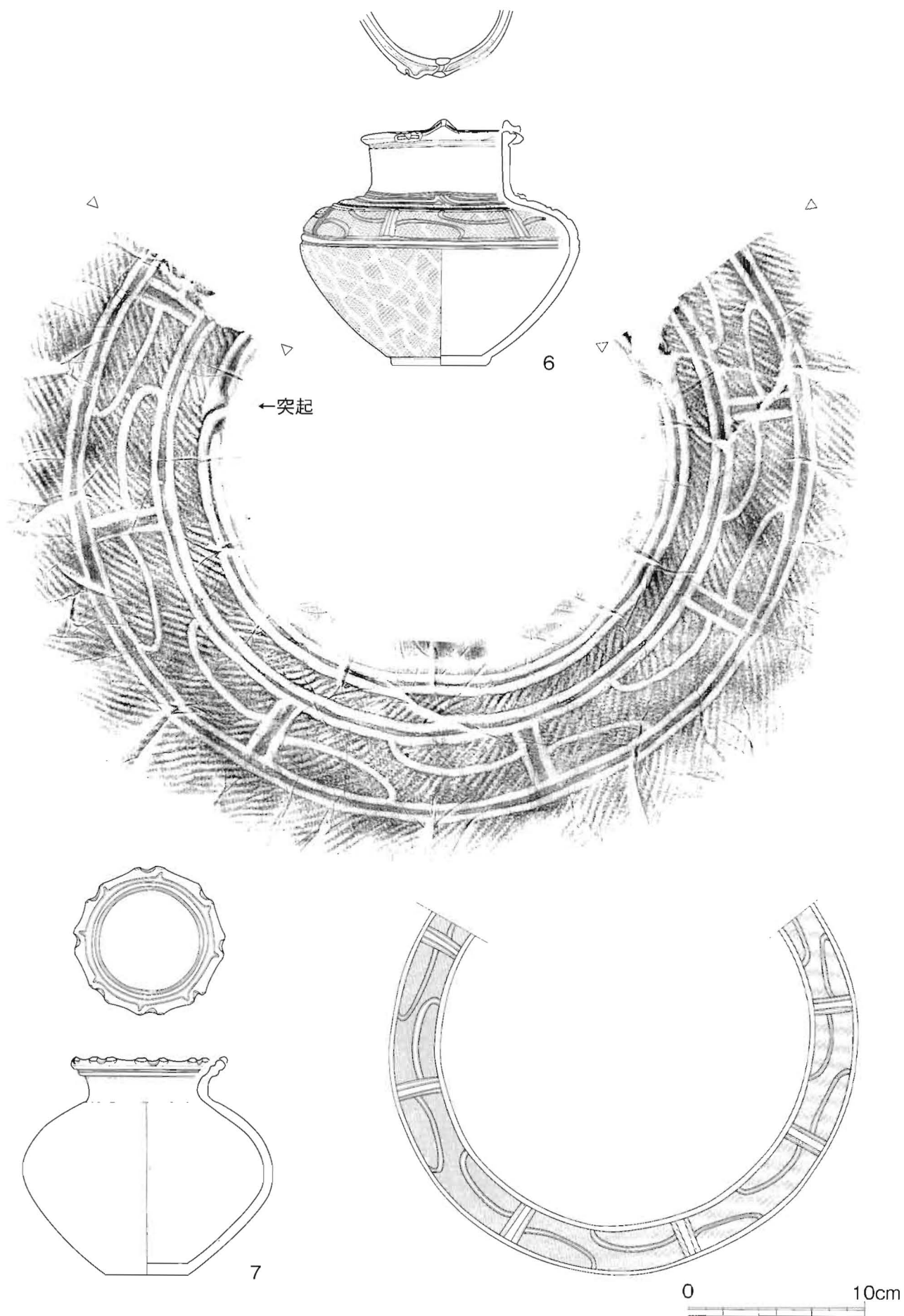


配置文が2単位施される。

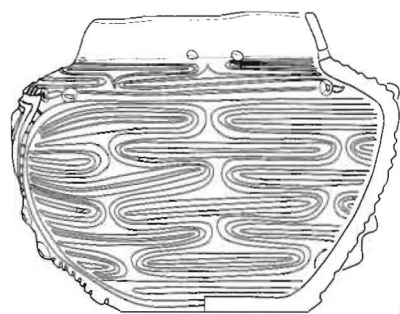


0 10cm

第128図 薬師遺跡 浅鉢（4・5）



第 129 図 薬師遺跡 壺 (6・7)



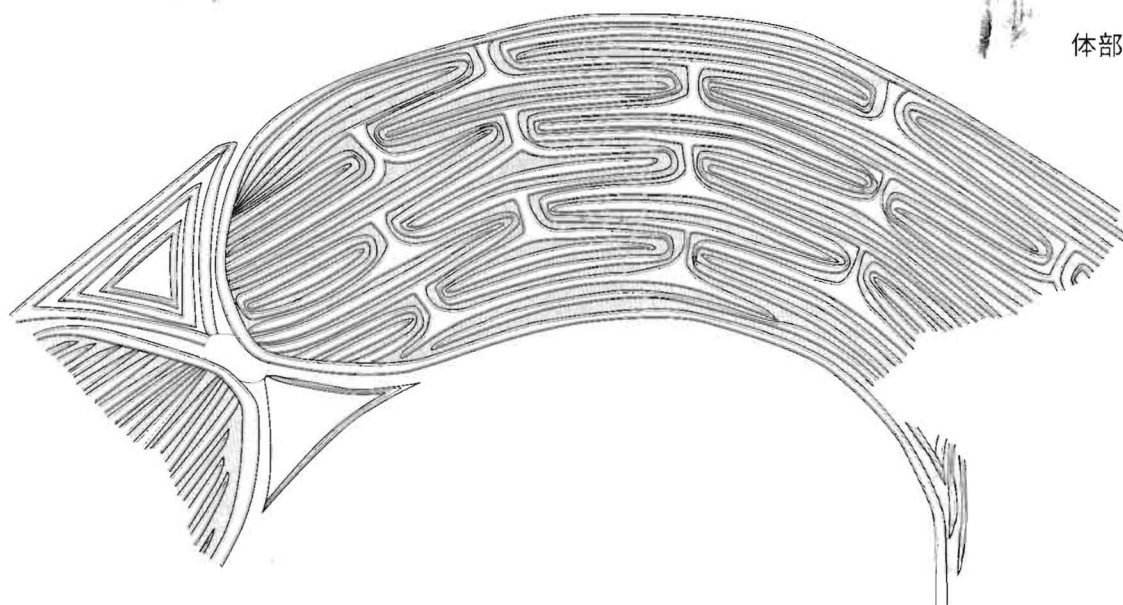
8



肩部の文様



体部の文様



0 10cm

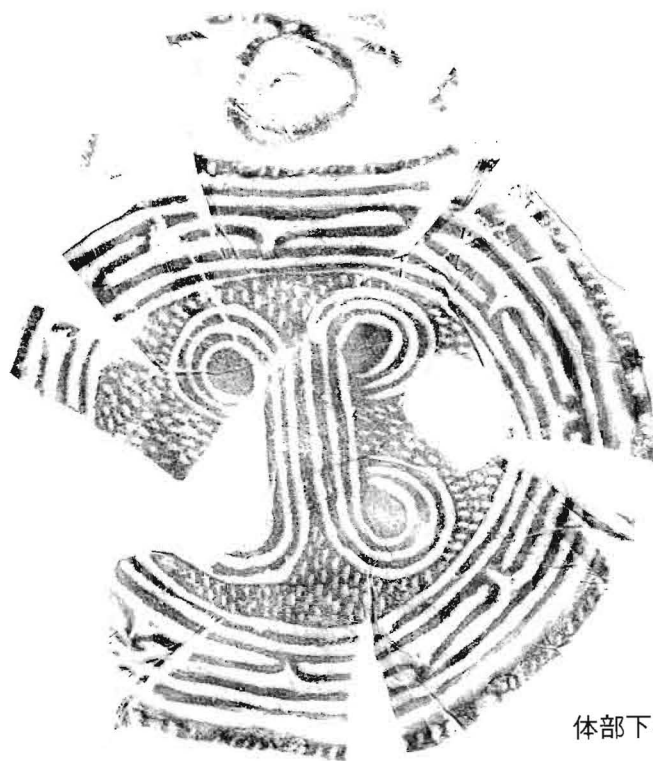
第 130 図 薬師遺跡 壺 (8)



体部下半の文様



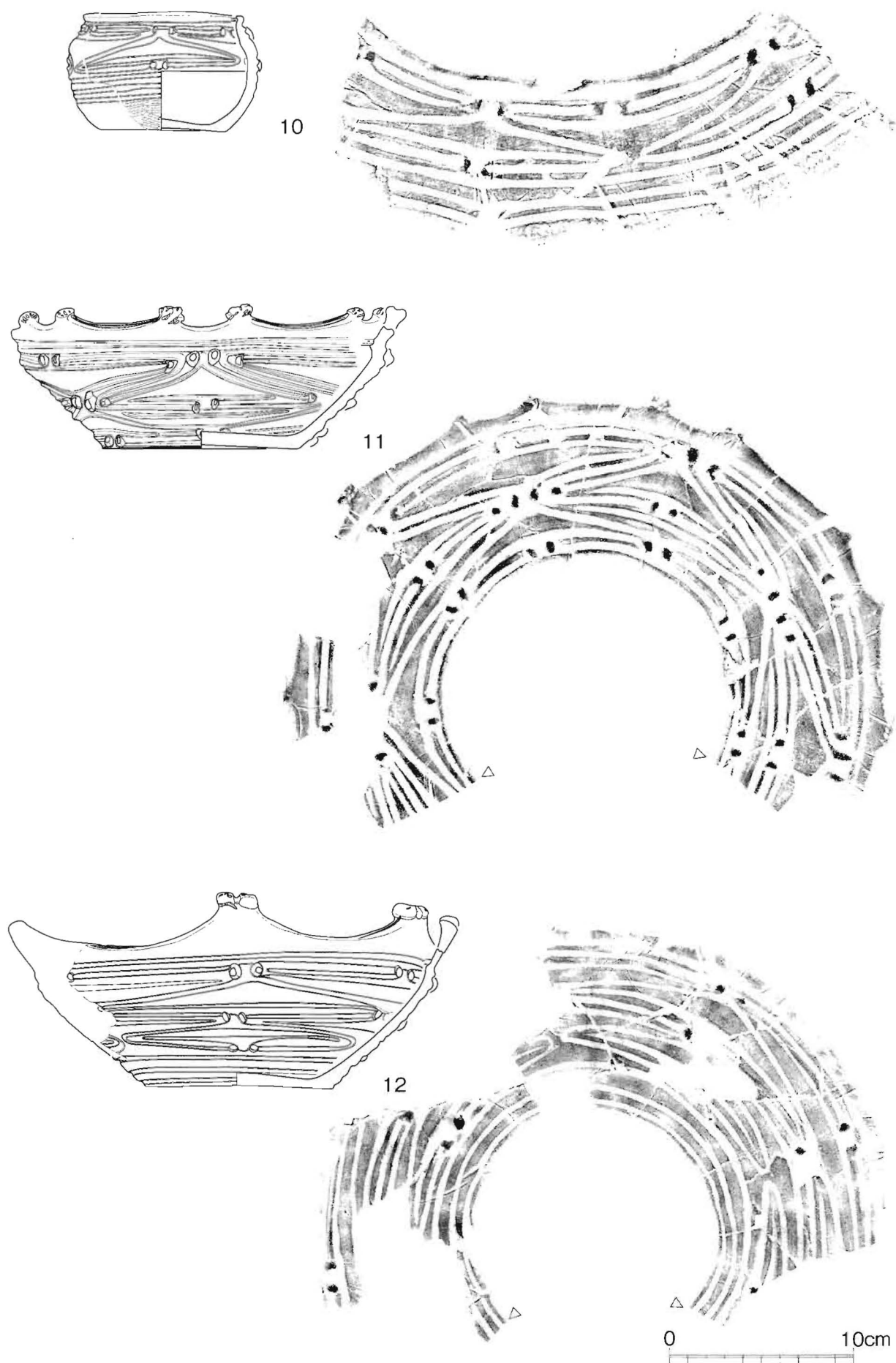
肩部の文様



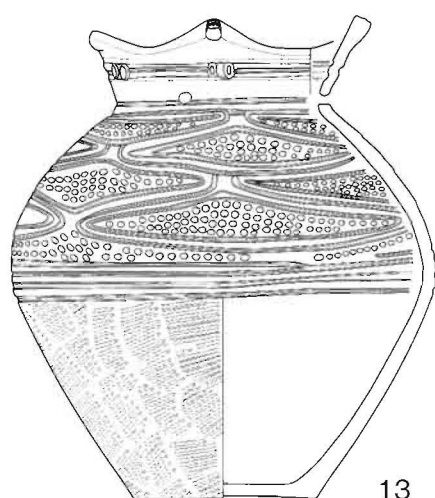
体部下半と底部の文様



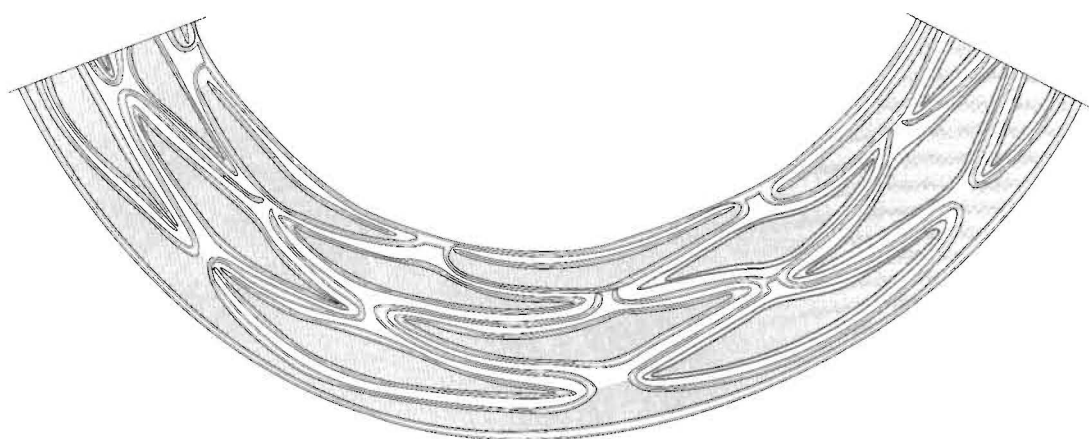
第 131 図 薬師遺跡 注口（9）



第 132 図 湯ノ沢遺跡 鉢 (10)・浅鉢 (11・12)

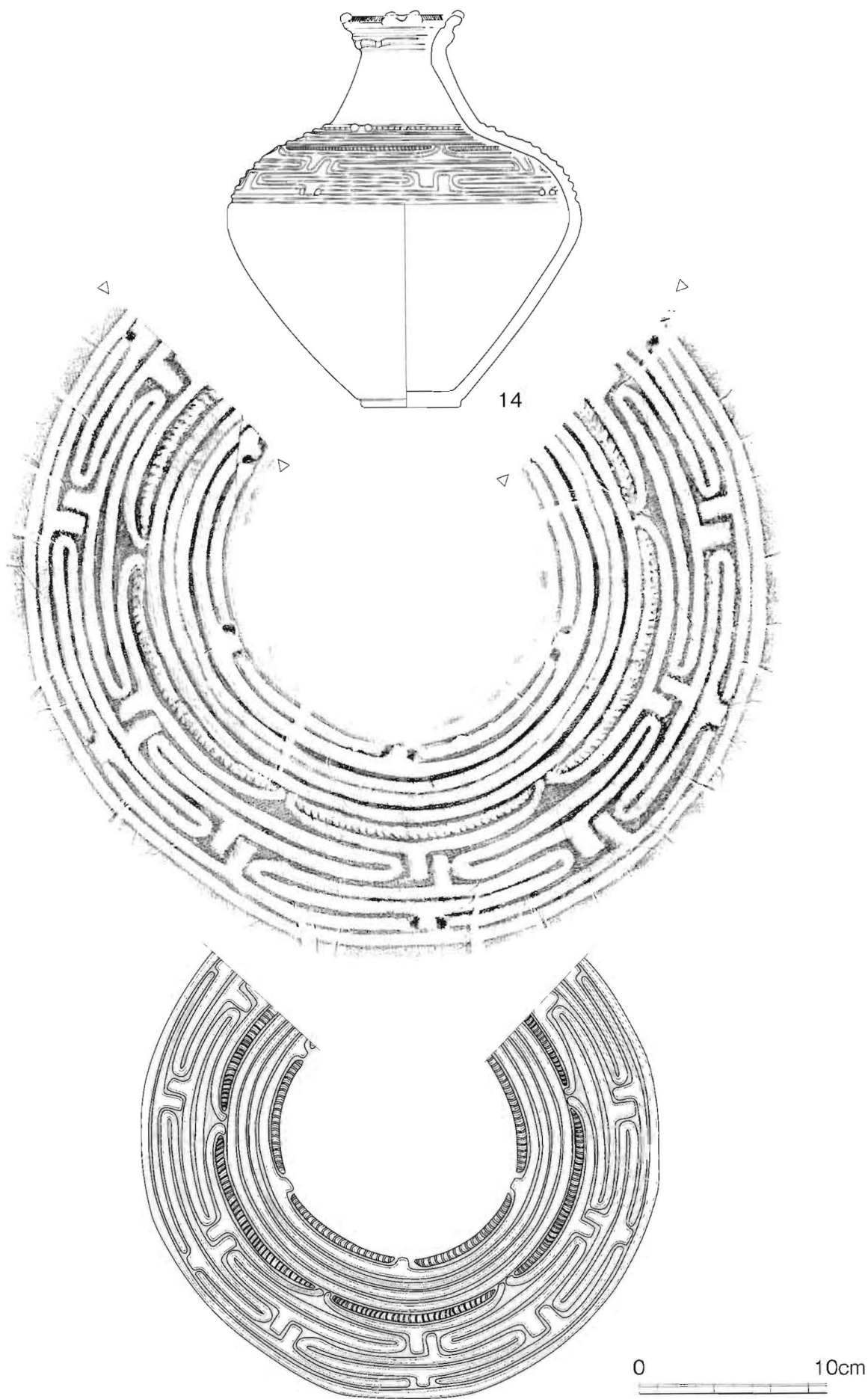


13

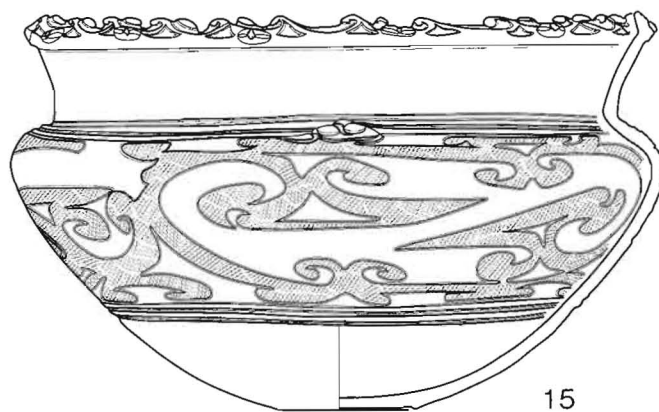


0 10cm

第 133 図 大曲Ⅲ号遺跡 壺 (13)

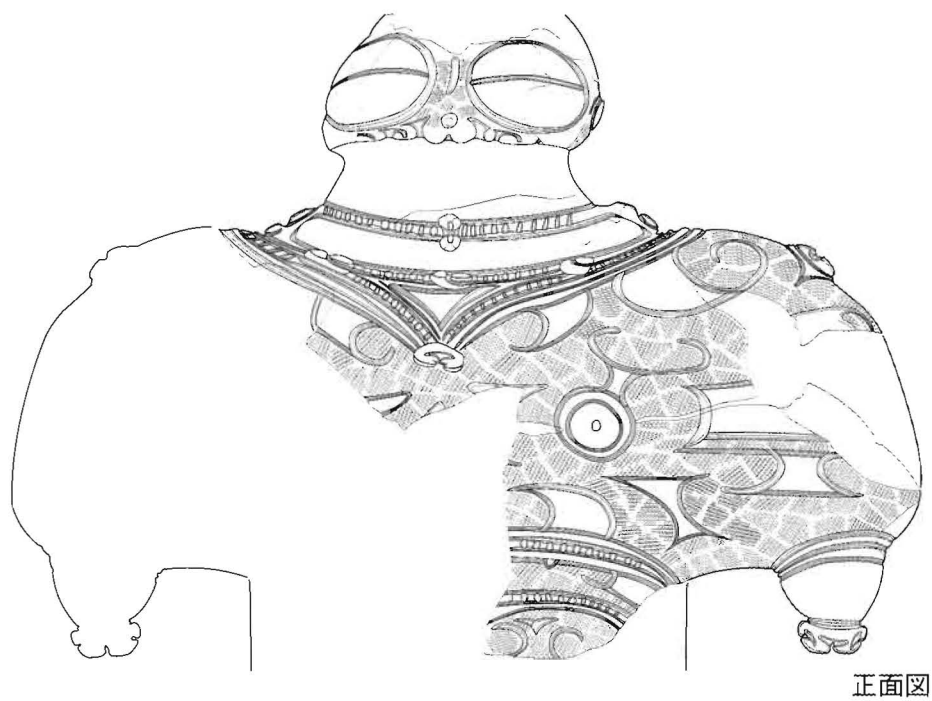


第 134 図 青鹿長根遺跡 壺 (14)

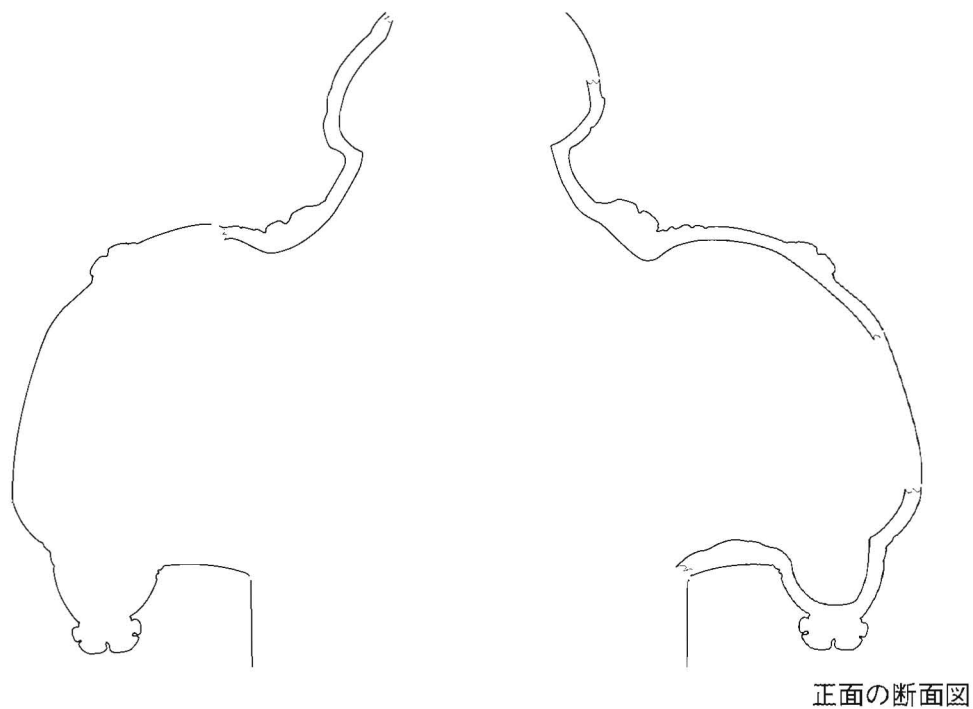


0 10cm

第 135 図 宮田遺跡 壺 (15)

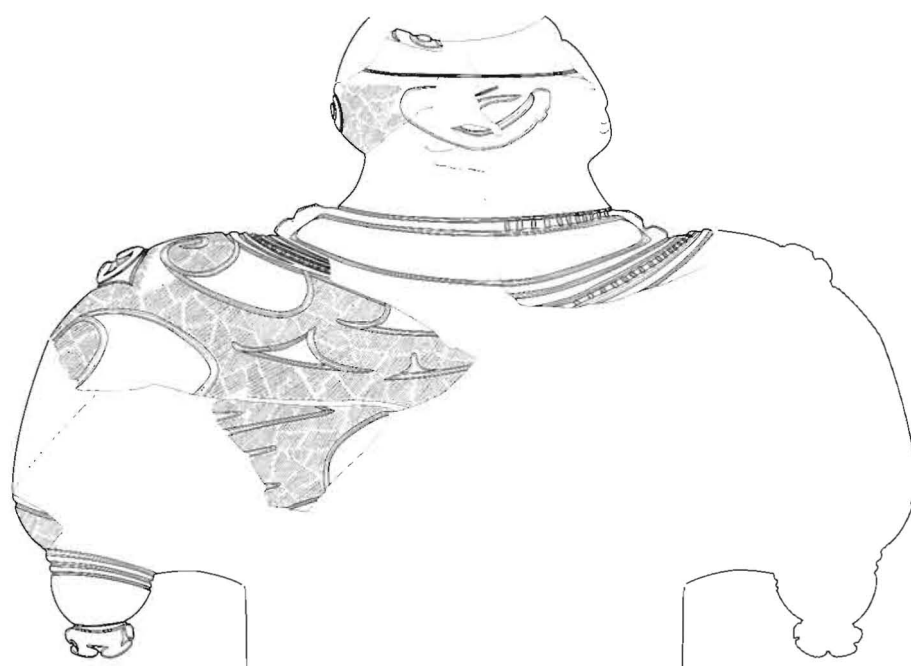


目は復元的に表現した（写真参照）。



0 10cm

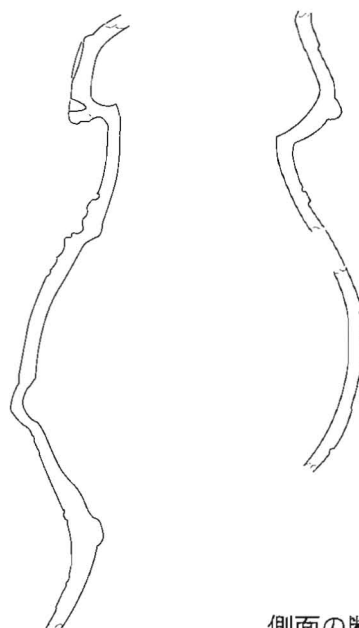
第136図 桂の沢遺跡 大型遮光器土偶（16）



背面図



側面図



側面の断面図

目は復元的に表現した（写真参照）。

0 10cm

第137図 桂の沢遺跡 大型遮光器土偶（16）



正面



背面

第138図 桂の沢遺跡 大型遮光器土偶（16）



内面

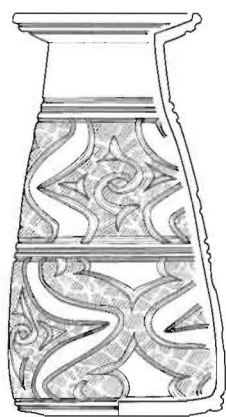


側面

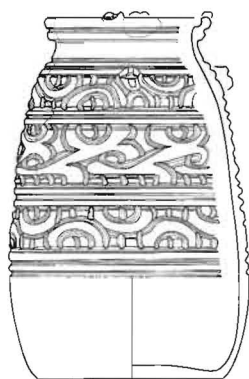
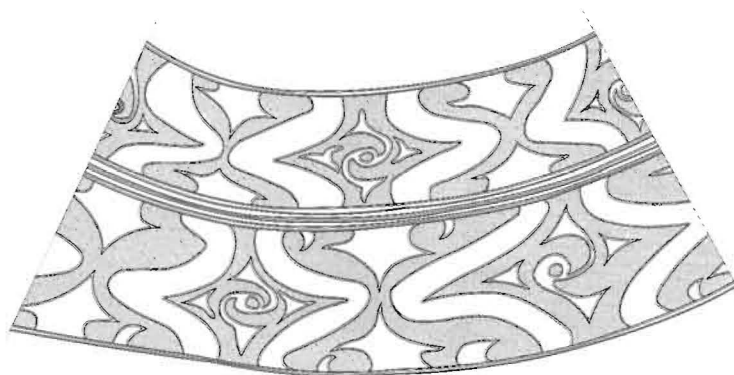


乳房の部分を内側から凹ませている。

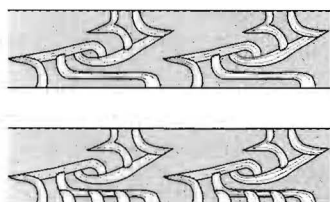
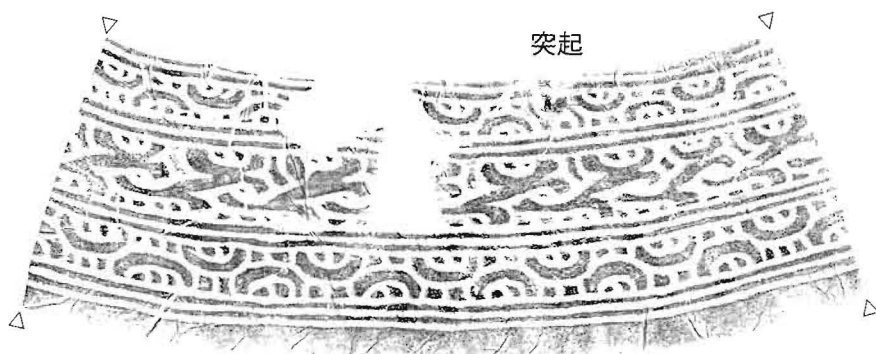
第139図 桂の沢遺跡 大型遮光器土偶 (16)



17



18



①

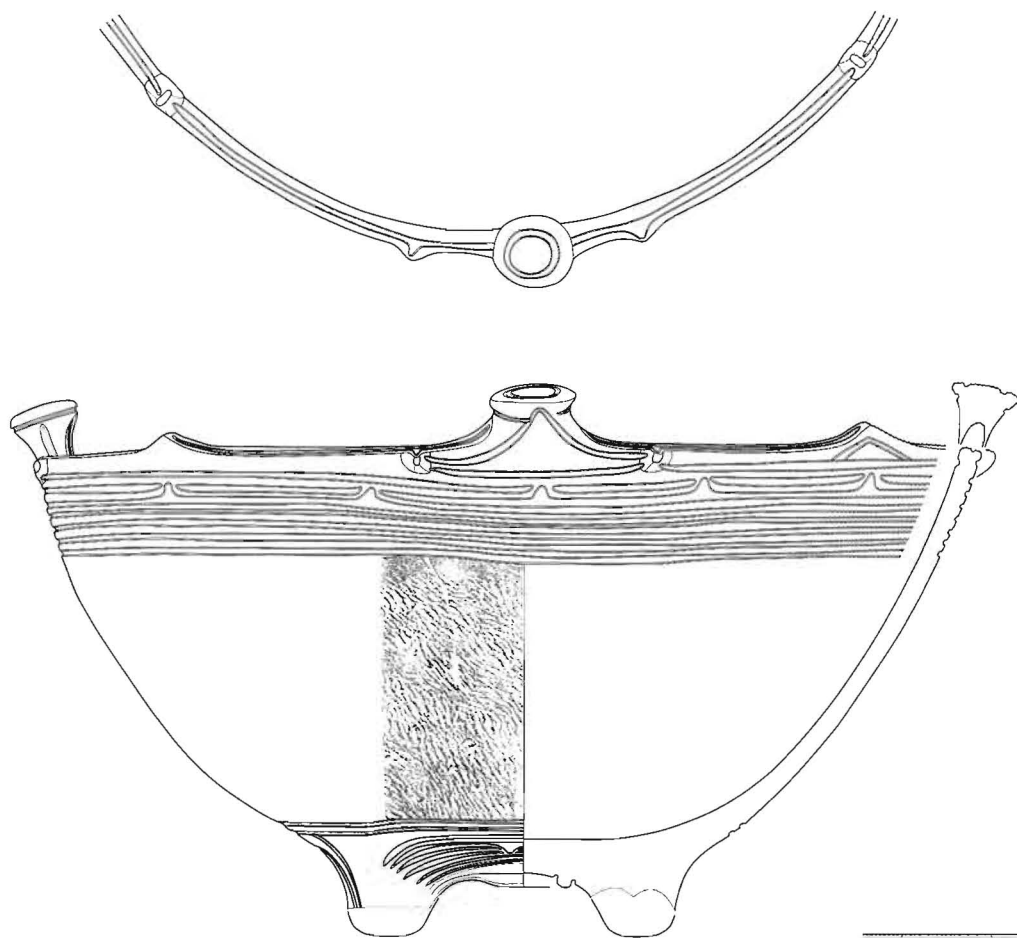
②

弧線を組み合わせ、
点対称の文様が生まれる。
その後に短い沈線を施す。

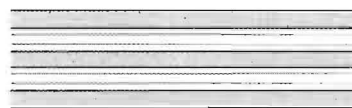
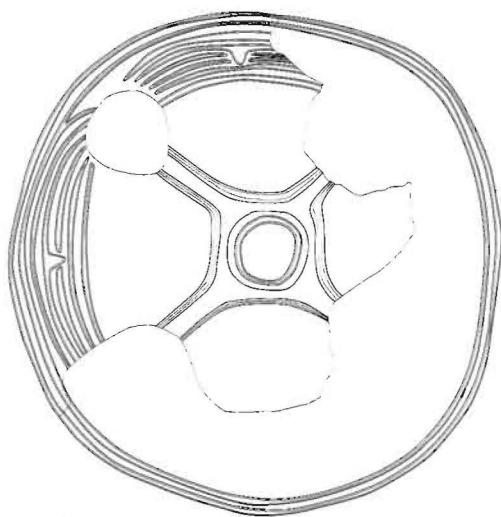


0 10cm

第 140 図 天王寺遺跡 壺 (17・18)



19



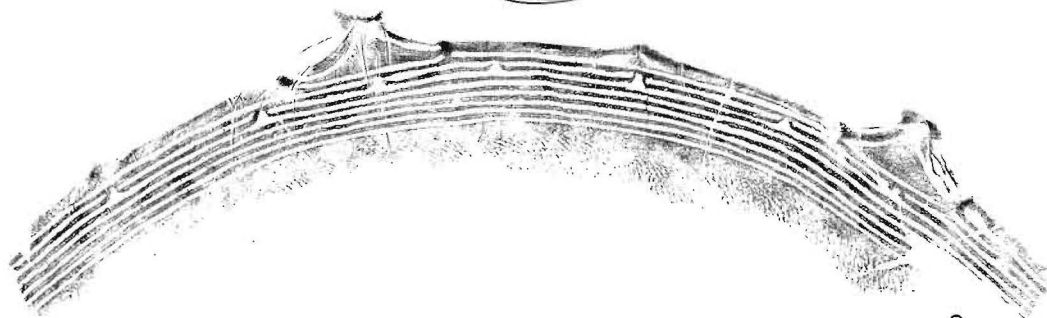
①平行沈線を施す。



②沈線間に隆帯部をつくる。



③短沈線を加えて工字状の文様が完成する。



0 10cm

第 141 図 北小松・西岩田遺跡 鉢 (19)

亀ヶ岡式土器

番号	遺跡名	器種	特 徴	地 文	器高	器幅
1	千曳	鉢	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、突起が8個配置される。頸部と体部の境には刺突がめぐり、大型の突起が1個配置される。体部に磨消による区画文を3単位配置し、充填文を加え雲形文を完成させる。内面・外面に炭化物が付着。	縄文 LR	14.2	15.7
2	千曳	壺	口唇に装飾があるが、破損しているためわかりにくい。口縁部内面に沈線が2条めぐり、体部に沈刻による配置文を描き、充填文を加えて連続的な入組文様を完成させる。底部近くに沈線が1条めぐり。	無文	10.4	9.9
3	陣場川原	注口	体部上半に配置文が4単位施される。肩部には装飾的な彫り込みがめぐり、突起が配置される。体部下半にはそれぞれ形の異なる配置文が施される。	縄文 LR	(7.9)	17.4
4	薬師	浅鉢	口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、体部に装飾的な区画文を4単位施し、さらに充填文を加えて雲形文を完成させる。内面はよく磨かれる。内面・外面に部分的に赤彩がみられる。	縄文 LR	4.8	17.8
5	薬師	浅鉢	口縁部外面に刺突がめぐり、体部に装飾的な配置文を2単位施し、さらに充填文を加えて雲形文を完成させる。内面がよく磨かれる。	縄文 LR	5.5	18.0
6	薬師	壺	口唇に大型の突起が1個、小型の突起が2個配置される。突起間には沈線がめぐり、2条の平行沈線で文様帯を縦に区画し、間に弧線が加えられる。底部近くに段差があり、その部分が磨かれる。	縄文 LR	14.1	16.0
7	薬師	壺	無文で全体が赤彩されている。口唇に突起が8個配置される。	無文	12.5	14.3
8	薬師	壺	短頸の壺である。頸部に2個一對の穿孔が4箇所。肩部は工字文が施される。体部はX字状の隆帯で区切られ、その間に工字文が施される。外面は赤彩がみられる。	無文	12.1	15.6
9	薬師	注口	口唇に突起が4個配置され、刻目がめぐり、口縁部直下の沈線間に刺突がめぐり、体部上半に配置文が4単位施される。肩部に突起が配置され、刻目がめぐり、注口部は剥離している。体部下半には工字文が施される。底部にはC字状の文様・刺突文が施される。	縄文 LR	6.4	(10.5)
10	湯ノ沢	鉢	弥生土器。変形工字文が施される。縄文は体部下半にのみ施される。内面・外面共によく磨かれる。	縄文 LR	6.6	10.7
11	湯ノ沢	浅鉢	弥生土器。変形工字文が施される。突起に熊の頭部を表現している。内面・外面共によく磨かれる。	無文	7.9	21.8
12	湯ノ沢	浅鉢	弥生土器。変形工字文が施される。口縁部に突起が6個配置される。内面・外面共によく磨かれる。	無文	10.6	24.7
13	大曲Ⅲ号	壺	弥生土器。口唇に突起が6個配置される。頸部には穿孔が2箇所ある。体部に変形工字文が施される。文様帯内には刺突が施される。	縄文 LR	19.3	17.1
14	青鹿長根	壺	口唇に突起が4個配置され、刻目がめぐり、頸部直下の沈線内、体部の沈線内には刺突が施される。体部には工字文が4単位施される。全体が黒色でよく磨かれている。	無文	21.3	19.0
15	宮田	壺	広口の壺である。口唇に装飾的な彫り込みがめぐり、肩部に突起が1個配置される。体部に装飾的な配置文を4単位施し、さらに充填文を加えて雲形文を完成させる。外面全体に赤彩がみられる。後世に修復した部分がある。	縄文 LR	16.0	26.2
17	天王寺	壺	体部に文様帯が2段あり、上段・下段ともにほぼ同じ文様で、区画文が4単位ずつ施される。弧線が点対称に組み合う文様は上段と下段で交互に施される。破損している口唇や頸部直下には突起が配置される可能性がある。	縄文 LR	16.2	8.7
18	天王寺	壺	口唇に2個一對の突起が1箇所に配置される。体部と頸部の境に突起が1個配置される。体部に羊歯状文が3段施され、上段は12単位、中段は8単位、下段は14単位である。	無文	14.8	9.6
19	北小松・西岩田	鉢	口唇に大型の突起が4個、山形突起が4個配置される。突起間には沈線がめぐり、口縁部と底部近くに平行線の工字文がめぐり、底部には四脚が付き、十字状の隆帯が施される。	無節 R 然り戻し	(21.3)	37.9

遮光器土偶

番号	遺跡名	特 徴	高さ	幅	厚さ
16	桂の沢	本文156頁を参照。	(26.0)	(28.2)	(14.2)

() は残存の数値である。

東北地方各地の亀ヶ岡文化の遺物 観察表

亀ヶ岡文化遺物実測図集（3）

（弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告5）

2007年3月31日発行

編集 藤沼邦彦・秋山真吾

発行 弘前大学人文学部日本考古学研究室

（弘前大学人文学部附属 亀ヶ岡文化研究センター）

〒036-8560 青森県弘前市文京町1番

電話 0172-36-2111（代表）

印刷 川口印刷工業㈱ 青森営業所

〒030-0802 青森市本町4-9-15 2階

TEL 017-721-6520